明治三十五年五月五日發行
毎月一回五日發行

明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

女學世界

第二巻第六號

口繪



女學世界第貳卷第六號目次

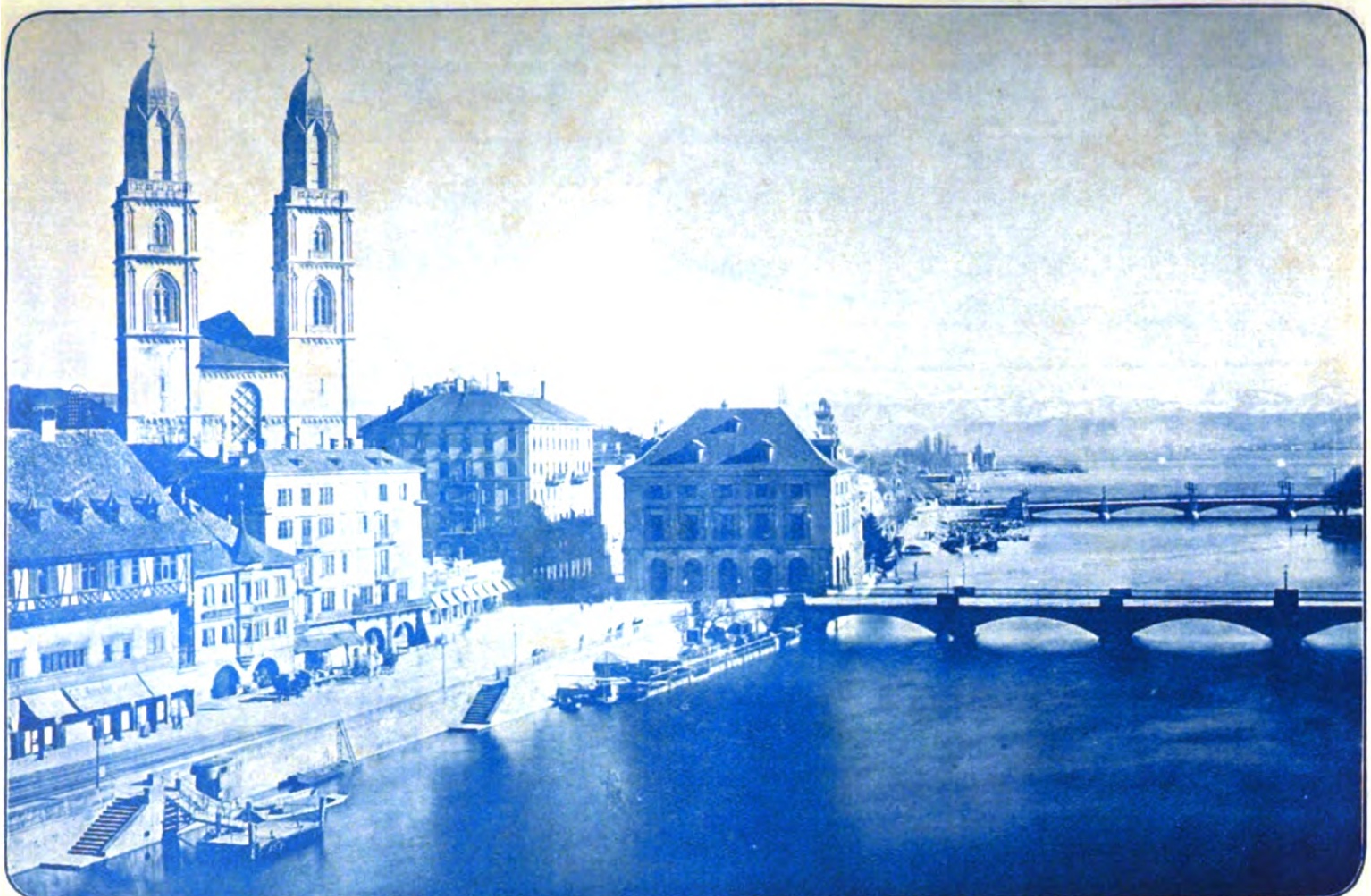
綠陰讀書



（武内桂舟氏筆）

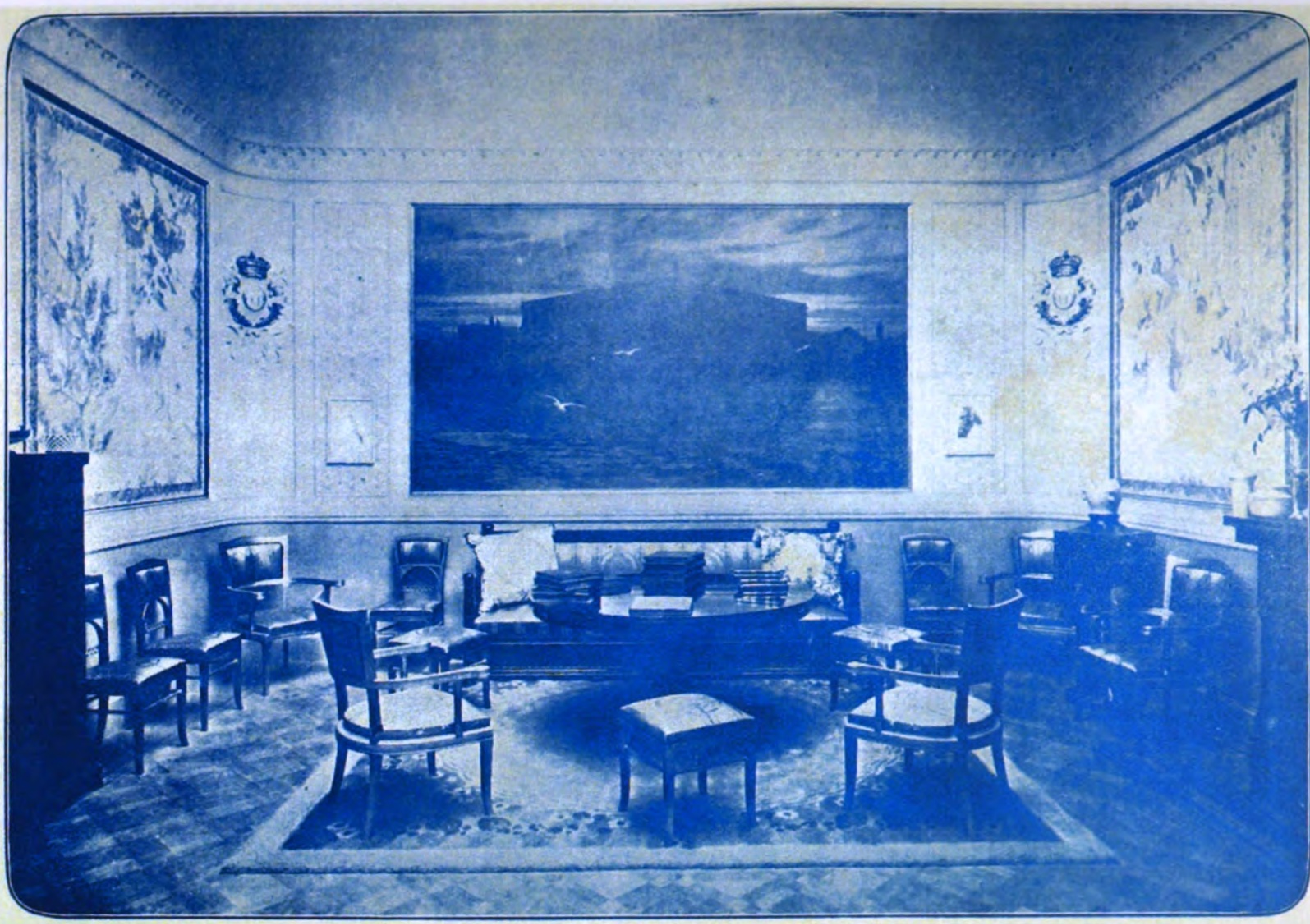
小川一眞製

泰西風景



瑞西國ツウリッヒ湖畔大教會よりアルペン山を望む

泰西貴族の客室



名流小照



男爵夫人千家俊子

文學博士井上圓了先生述

甫水論集

全壹册洋裝
菊版紙數四百五十餘頁
正價五十錢
郵稅八錢

自身ら哲學を研究し學校を興して青年を教育し東洋哲學の研究を唱導し佛教に新研究の道を開き我國宗教の改革を主張せしものは博士井上圓了氏にあらずや世間氏を稱するに哲學の開山を以てす豈に怪しむに足らんや而して博士著述外の論文は世に公にせられしを其數實に千百に垂々とす編者其內に付て數十編を撰み博士の承諾を得て玆に論集を上梓せり

目次

(甲ノ一)

（甲の二）

衛生新書

女醫者

極彩色美麗なる口繪あり賣價金卅錢郵税六錢密封小包料八錢百里外十六錢本書は人身衛生及疾病に關する諸問題を網羅し其原因症候及簡易療法等を明示したる良書にして冊中前後の兩篇に分ち前篇に於ては人身病理後篇に於ては生殖機能に關する樞要なる諸問題を凡て問答躰に親切に説明したる事五百有餘問に及べり如何が衛生上有益にして身躰の機能を促進するかを試みよ

東京市京橋區新肴町十四番地

發行所 晴光館

筆戰之良友

秀才文壇

●誌面大改良

●逐號材料豐富

第二卷第五號

五月十日發行

定價

●毎月十日發兌●紙數大判百頁一冊金拾錢●六冊前金五十十錢●十二冊前金壹圓八錢●外に郵送料一冊壹錢●郵券代用壹割增

賣捌東京堂其他各地書籍雜誌店

東京小石川區指ヶ谷町百三十三

文光堂發行

文武堂藏版

大町桂月君序 西村眞治君著

作文良材 美辭寶典

袖珍金字入 洋裝美製本 價三拾五錢 郵税六錢

思想中に充實するも文章拙劣にして之を外に發展すると能はざる者あり、而して文章を巧にせんと欲せば美麗なる辭句を求めざる可からず、本書は即ちその要求に應じて編纂されたる者、景色人事器具動植物等、宇宙間の萬象に關する美辭佳句を、以て麗然たる一大冊子を成す、殊に毎篇必ず項を分ち詩歌文章何れの材料にも適するやう編輯せられたれは、世の青年、文に志ある者、一本を購ひ座右に置け。

發兌元 東京本町 博文館

○奏効確實 器械不要 簡易複寫インキ

蒟蒻版寒天版及び其他の印類又は器械藥品等を要せず此のインキ一品にて簡便迅速座上立どころに同一の文書(印)書數十百枚を印刷し得べし○即ち此インキを以て書したる原稿より直接他の白紙へ字痕を透徹する者にして一枚の原稿より凡七八十枚宛を寫し一瓶のインキにて原稿百數十枚を作り複寫壹萬餘枚を得るものなり(使用法説明書を附す)

●本品は既に諸官衙及郡區町村役場等の御用品たり

●定價 二オンス 竪装鑵入 送料共 金四拾錢 爲替神田郵便電信局郵券壹割增●

發賣元 神田區末廣町三十八番地 中村屋商店

(甲の三)

米國ジョン、エルストッダード氏新著全世界寫眞帖着荷廣告 （甲ノ四）

全世界名所寫眞帖

大版全六十四枚
寸法竪壹尺壹寸横九寸
小包料百里以内八錢以上拾六錢
郵券代用一割増
爲替は内本町局の事

第一回着荷披露の爲め**特別減價金壹圓九拾錢**　はがきにて御注文相成れば引替小包にて送品す

著者ストッダー氏夙に好んで異邦の遊をなし歐米の通邑大都は勿論遠く極東各地に至るまで足跡殆んど世界に遍く而して其過る處の山容水態見る所の風俗建築輙ち捉へて寫眞鏡裡の者となしぬ頃日其内に就き偉觀最驚くべきもの六十四種を描き鏤版世に公にす本編之なり即●世界の歡樂窩たる佛國巴里の光景を始め●有名なる埃及の金字塔●獨逸ハンブルク港●サワラ大砂漠の結隊驀營●アラスカ氷山●アゼンスの神殿●露國莫斯科の城砦●英國議事堂●伊國ミランの大伽藍●米國の大公園●布哇の王宮●濠洲土人●印度の村落●支那廣東の五百羅漢堂●米國の大瀑布●露國聖波得の冬宮●伊國フロレンスの光景●巴里の凱旋門●同大演技場●大平洋鐵道●亞米利加の婦女●日本の東京●同アイヌ種族等計六十四枚孰も氏が堪能の絶技に成る實寫眞なれば緻密殆ど蟻の這ふ迄をも掃して洩さず且一々英和兩文の詳細說明あれば名所舊蹟寧ろ親く其地を踏むよりも明細、宜なり其一度世に出るや忽ち空前の喝采を博し世界の大評判たり今や幸に着荷發賣す世界的聞見に乏き本邦人たる者是ッ非一看座なから世界を周遊目睹せよ

直輸入東洋一手發賣元
大坂市内本町松屋町南入
中川商店

中學教科全書

中學教育研究會編

定價 一冊十二錢六冊六十五錢十二冊一圓廿錢廿四冊二圓二十錢郵稅一冊二錢宛
▲袖珍美本紙質精良印刷鮮明紙數百六十頁内外にて前金

第一編　問答躰日本歷史　既成
第二編　問答躰日本歷史　既成
第三編　問答躰日本地理　既成
第四編　問答躰西洋歷史　既成
第五編　問答躰教授之管理　既成
第六編　問答躰教育學　既成
第七編　問答躰東洋歷史　既成
第八編　問答躰物理學
第九編　問答躰化學
第十編　問答躰動物學
第十一編　問答躰植物學
第十二編　問答躰生理學
第十三編　問答躰西洋地理
第十四編　問答躰日本文法
第十五編　問答躰英文法
第十六編　問答躰國文釋義
第十七編　問答躰漢文釋義
第十八編　問答躰算術
第十九編　問答躰代數
第二十編　問答躰幾何
第廿一編　問答躰地文
第廿二編　問答躰天文
第廿三編　問答躰鑛物及地質
第廿四編　問答躰法制及經濟

發行所
東京麹町區弓町
松邑三松堂

受驗問答叢書

目次

武田櫻桃四郎君編

新撰世界地理問答

（第三編近刊）

此書は諸官私立學校受驗者の便利を計りて編纂したるものなるも編者は又受驗者ならざる少年が地理研究の一資料たらしめんが爲め一貫すれは又一部の地理書たるに適する樣編みたり十九世紀末に於ける地理上區劃の變遷は此書の主眼にして統計其他凡て最近の調書に依れり受驗者ならざる人も試みに一本を購ふて之を机上に供へ給らは益する此亦極めて多らん

全壹冊洋裝袖珍
紙數　三百餘頁
正價　金貳拾錢
郵稅　金四錢

第壹編　新撰日本地理問答（既刊）

第貳編　新撰日本歷史問答（既刊）

目次

●正價一冊廿錢　●六冊一圓十錢　●十二冊二圓十錢　●二十四冊四圓　●郵稅一冊四錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館



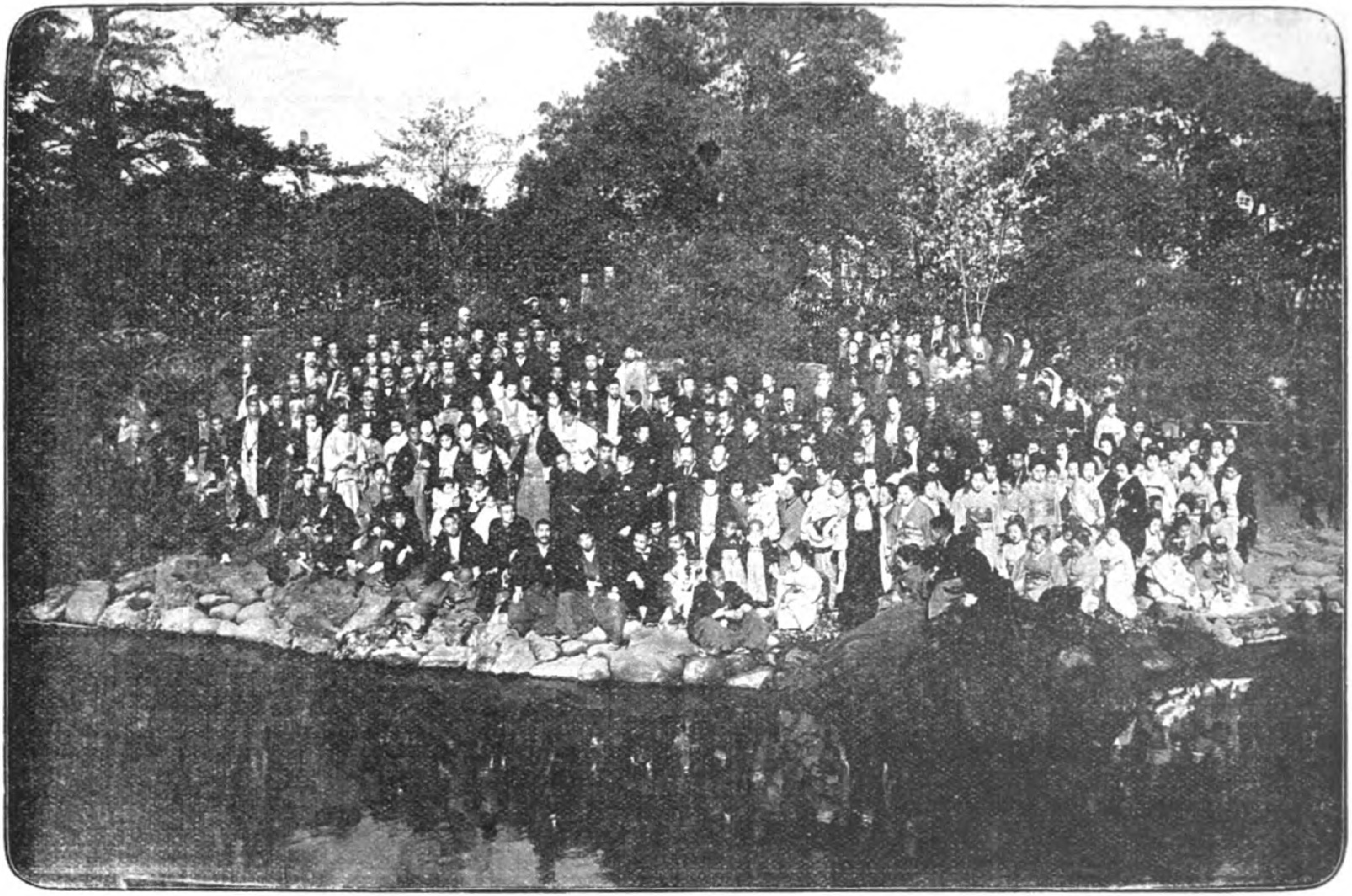
（雜錄欄參照）

東京女學館卒業生並に職員　（高等科の部）

花下の少女



（山本昇雲氏筆）



（文苑欄参照）

竹柏會春季大會

春曉渡頭



（上原古年氏筆）



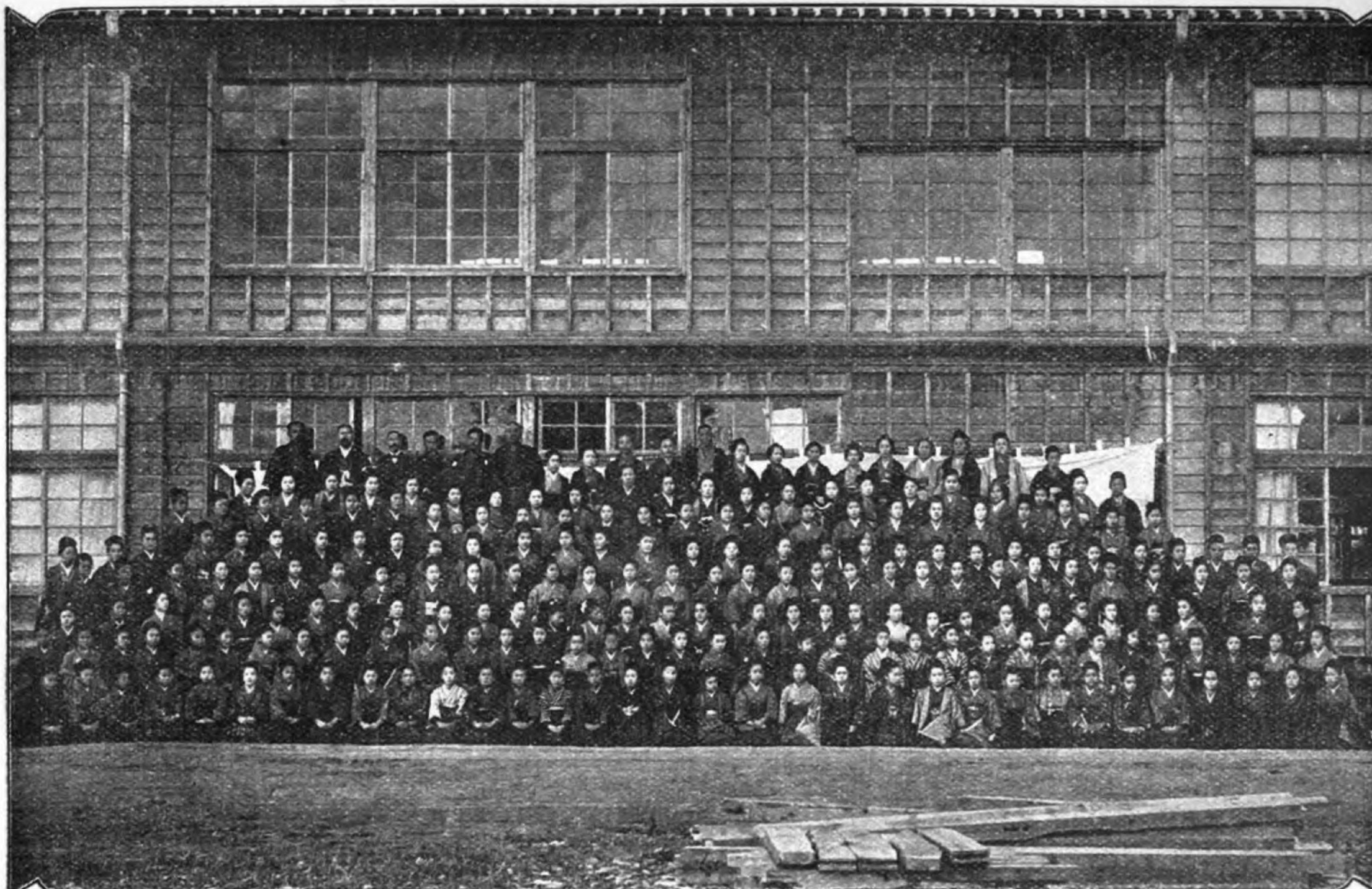
共立女子職業學校職員及卒業生

遊毬女少



（庄田耕峰氏筆）

松山松操會員



暹羅下流社會の婦人



馬尼剌の處女



臺灣卑南社邑長の娘



（乙ノ一）

農學士東條秀介君校閲　東京農學園主江原春夢君著（近刊）

果樹草花 盆栽庭造 園藝全書

全壹冊

園藝の進歩は是れ社會の進歩なり花卉や盆栽や造庭や其最高尚にして巧なるの時は社會の嗜好も高尚にして複雜に赴けるの時なり蔬菜や果實や鮮にして美なるもの丶食卓に上るの時は蓋し衛生的智識の發達したるを證するに足らん今や文運日に旺にして人智年に進み社會次第に高尚の域に達せんとせり園藝の事玆に於てか世人の大に注目する所となりたり蓋し園藝は無邪氣にして娛樂の業たり又一方に於ては比較的[illegible]利益多くして愉快なる事業の最たり本書は東條學士精細の校閲にして江原氏實驗上の要話なるを以て趣味と利益の大なるといふを待たざるなり園藝者必らず一讀せさるべからず

洋裝菊判紙數三百餘頁
寫眞銅版及七遍刷菓木花樹
圖十二面挿
正價　郵稅　未定

發兌元　東京　博文館

京都府警察部本通譯稻垣襄之助君
京都鹽小路警察署通譯藤川東太郎君　合著（近刊）

警官必携 實用警察會話

全壹冊

洋裝袖珍上製紙數三百餘頁
正價郵稅未定
特に警察官吏には特別割引をなす

●附錄警察英語書翰文例幷ニ警察用法例要語集

現今内外人間の交際關係日々に益々多きを加へ從て職を司法行政の警察に奉する人々は英佛獨何れかの國語に通せざる可らず然るに坊間需くる所の會話書多くは此用に適せず著者玆に見る所あり簡繁相節して此編を公にせらる前編廿八章後編十二章附錄二十章精細順序を逐ひ平易初學に便す

發兌元　東京　博文館

各宗本山名所圖會

（全部廿四冊洋裝菊判石版畫表紙寫眞銅版石版木版密畫挿入）

石倉翠葉君著

本派本願寺名所圖繪

（五月中旬發行）

全一冊洋裝菊判
寫眞版石版木版
各種密畫挿入
正價郵稅未定

著者一度各宗本山名所圖會の編纂を企つるや各本山何れも該擧を讃せられ或は資料の供給を熱心し或は數千部の買上けを豫約せらるゝなど大に囑望せられつゝあるが就中是れが第一編として眞宗本派の本山たる西本願寺名所圖會を發刊せんと欲し著者一度これが資料採集と實地探査の爲め全本山へ出張したる際の如きは本山擧つて之を讃同せられ史料の供給と材料の詮索に盡力せられ從つて著者亦深く考ふる所あり滯在數十日大は本山創建の沿革より小は庭前一松の傳說に至る迄微細苟もせず全歷史と實地に參照し文は極めて通俗に振假名を付して編述し且境內の建築物寶物古文書室內の裝飾庭園等に至る迄皆之を精巧緻密なる寫眞銅版及石版木版とし殆んど二百餘種を挿入したれば史家の好參考書たるは勿論吾信徒百萬の同胞が座右欠くべからざるの珍寶にして又本書を措き決して他に斯る良書はあらざるなり

續刊

第二編 東本願寺名所圖會
第三編 佛光寺名所圖會
第四編 善光寺名所圖會
第五編 身延山名所圖會
第六編 高野山名所圖會
第七編 成田山名所圖會
第八編 妙心寺名所圖會
第九編 智積院名所圖會
第十編 比叡山名所圖會

（以下續出印刷の都合により各編或は變更す）

發兌元 東京日本橋本町 博文館

(乙ノ三)

續帝國文庫

（全部五十冊毎月一回發兌）

博文館編輯局校訂

續 京傳三馬 傑作集

（第四拾編近刊）

全一冊洋装
上製金文字入
正價六拾錢
郵稅拾六錢

江戸作家中の巨擘として輕妙の筆婉麗の文加ふるに嶄新特絶の想を以てし一世を傾倒せる者一を京傳といひ一を三馬といふ本書は二家の傑編佳作を集めたるもの獨り小説として其巧妙の推すべきのみならず當時風俗の寫眞として觀るに足るべき草双紙洒落本人情本の各編或は泣くべく或は喜ぶべく或は噴飯絶倒すべし

博文館編輯局校訂

釋迦八相倭文庫

（第四拾壹編上卷出版發賣）

全二冊洋装
上製金文字入
一冊金六拾錢
郵稅金拾六錢

現實を天竺の皇室に則り趣旨を佛教の經文に假り進んでは因果應報の理を明にし退ては善惡邪正の果を示し能く五戒を諷し巧みに六慾を戒め變幻の文簡明の辭不知不識の間世俗を教導訓諭するもの是れ釋迦八相倭文庫の梗概とす校訂者本編の題辭に序して云ふ世に宗教を説く者多し然れども這を通俗簡明にして婦女童蒙を益する極めて罕なり何ぞや他なし其事理頗る解し難きにあり否解し難きに非ずして説の深遠高大なる能く感得する理想の解し難きにあり云々と若夫れ吾人の言を疑はゞ明窓淨机の邊繙讀一番せば思ひ半に過きん原作は萬亭服部應賀が一代の絶作實に近來無比の雄編なり

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（乙の四）

(乙の六)

少年史譚。

全部拾貳册洋装
大判美本 毎月一回發行 毎編讀切一册
密畫數個挿入
定價 金拾五錢 六册前金八拾七錢 拾貳册前金壹圓四拾錢 郵税壹册四錢

傳紀は人生の嚮導者なり、慰藉者なり、譬へは雪中に印せられたる足跡の如し、後人之に據りて進むを得べし、人を鼓舞して、勇往せしめ、又人を慰藉して艱苦の中にも失望せざらしむ、書を讀み志を立てむ者、座右常に傳紀なかるべからず。されど傳紀も描き方に由りては、毫も眞面目に躍動せざることあり唯新らしく觀察を以てすれは、數百年前の古人の傳にも、豈新世紀の餘師なからむや。此史譚の著者に、見識筆力共に優れたる當代の撰、而して平生私淑せる古人を擇び、滿腔の同情を寄せて、以て描寫せられたるもの、血あり、涙あり、古英雄の面目紙表に躍動す、實に傳紀中の好傳紀也。

第四編 鎭西八郎

國府犀東君著
武内桂舟君畫

- 第一編 既刊 **平相國** 文學博士高山樗牛君著 小堀鞆音君畫
- 第二編 既刊 **鬼吉川** 文學士大町桂月君著 水野年方君畫
- 第三編 既刊 **旭將軍** 文學士中内蝶二君著 筒井年峯君畫
- 第五編 **俠僧文覺** 文學博士高山樗牛君著 鈴木華村君畫
- 第六編 **北條時宗** 國府犀東君著 邨田丹陵君畫
- 第七編 **小楠公** 文學士大町桂月君著 梶田半古君畫

- 第八編 **眞田幸村** 文學士中内蝶二君著 尾形月耕君畫
- 第九編 **上杉謙信** 國府犀東君著 武内桂舟君畫
- 第十編 **俠商利兵衛** 文學士大町桂月君著 富岡永洗君畫
- 第十一編 **北條早雲** 文學士中内蝶二君著 小林永興君畫
- 第十二編 **常盤御前** 文學士大町桂月君著 **靜御前** 國府犀東君著 **奴小萬** 文學士中内蝶二君著 小林永興君畫

發兌元 東京日本橋本町三 **博文館** ◉ 大賣捌 東京神田表神保町 **東京堂**

（乙ノ七）

種類豊富 (博) 價格低廉

洋紙類販賣

其他和洋活版石版インキ、クロースボール類

王子製紙會社
仝氣田工塲
仝中部工塲
四日市製紙會社
富士製紙會社
梅津磯野製紙會社
東肥製紙會社
阿部製紙所
千壽製紙會社
神戸製紙所
有恒社
東京板紙會社
大阪製紙會社
其他各會社
製紙販賣

舶來洋紙直輸入發賣元

英米獨墺其他各製造元より直輸入販賣せり

和製洋紙は王子製紙會社千壽製紙會社有恒社阿部製紙所を始とし内地各製紙會社と特約を結び本社同様御取引上の御相談仕候紙巾厚薄等御隨意に抄造すべし

學校用商學紙名刺の種類より印刷新聞輪轉機卷取紙等に至る迄何種類を問はず準備し置き品質を精選し價格を低廉に販賣す

定期刊行品に御使用の品は同一種類を多數貯藏準備せり

獨乙製洋半紙は小店の率先輸入に係るものにして紙質純白頗る堅緻にして價格の低廉なるは他に比類なし其他各種洋半紙澤山準備せり

地方出荷方の迅速なる弊店の長所に御座候如何なる多數の注文にても直に取揃へ出荷すべし

府下の配達は馬車手車數十臺を備置き候に付是亦迅速に御用申すべし

一枚の小間紙にても多少に拘らず御注文に應じ諸事懇切篤實を旨とし販賣仕候間陸續御注文御引立を請ふ

東京神田區錦町壹丁目
合資會社 博進社洋紙店
（電話本局特千六百〇三番 本局二千四百十番）

大阪東區大手通二丁目
合資會社 博進社支店
（電話特東四百四十五番）

御取引之御便利を謀り電信暗號明細表調製有之候間御入用の御方は御一報次第御郵送可仕候

（乙ノ八）

冬の夜にうつりはなかへ寒さまさり候へ
皆様方御揃遊し益々御機
嫌よくいらせられ候めてたく
そんし参らせ候さて私事も
一同かはりなく相くらし

中納言法印御下向被成候
まゝ為御陣見舞
御尋ニ一寸伺候

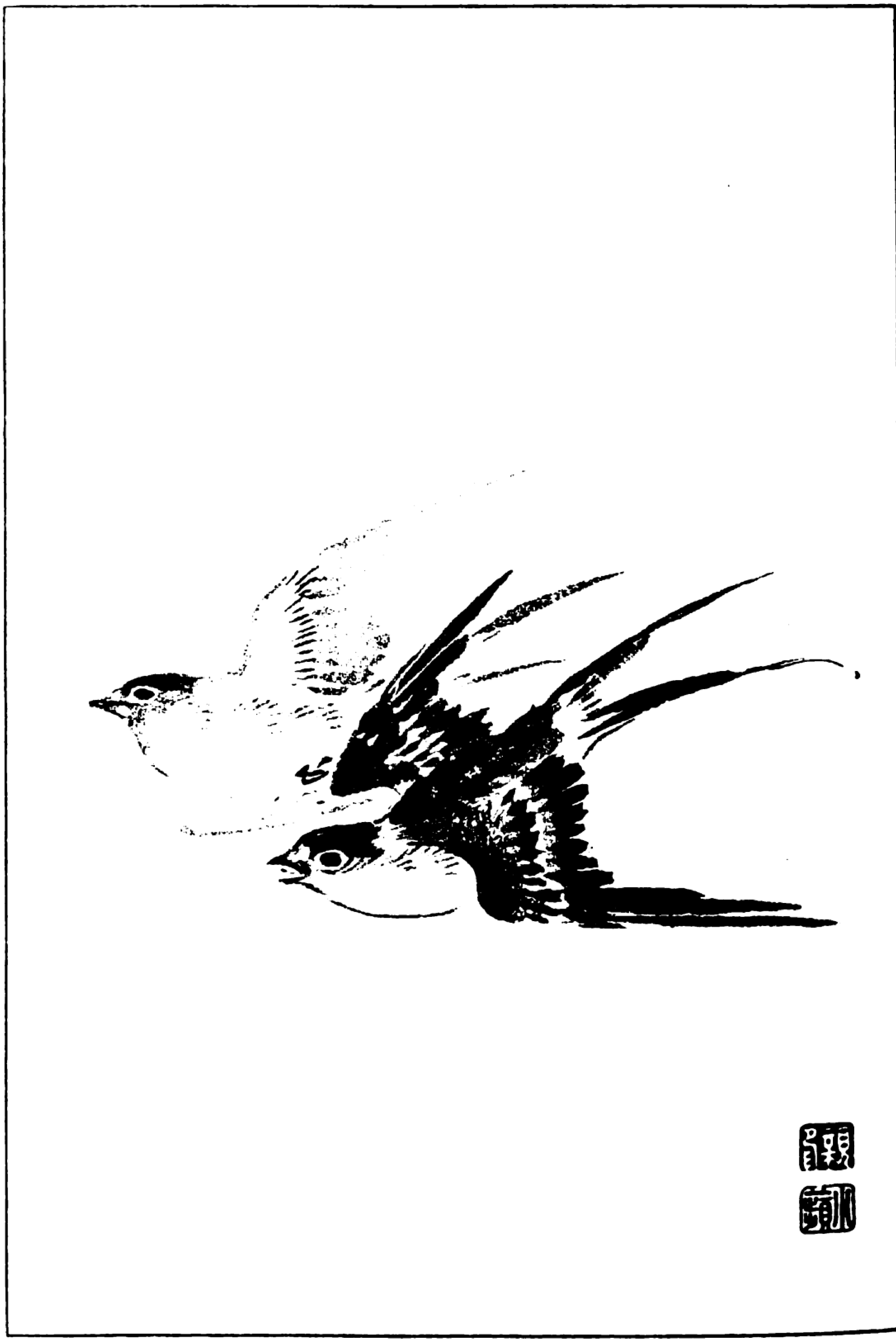
坂正臣先生筆

もゝちとり
さへつる春は
あらたまに

一のまつはしきぬかり
あをやはならまち残かた
楼れゝのりするつまあまたゝかり
なまめかし残ゝまてしれ志
袖にかるゝにほひのみや
くもゐたかきれしく

坂正臣先生筆

雙燕



野口小蘋女史筆

躑躅

野口小蘋女史筆



萱艸



野口小蘋女史筆

瀧

野口小蘋女史筆



（丙の二）

英語教科用書増刷出來廣告

女子英學塾藏版

Famous Stories

RETOLD BY

JAMES BALDWIN.

ADAPTED BY

H. SAKURAI,

(訂正三版發賣)

當時英米の學校にては學生に授くるにリーダーを以てすることを廢し之に代ふるに古人の逸話名家の小品文並に歷史等の類を編述したるものを以てす此書の如きは即ち其一にして目下米國各地の學校に於て一般に採用せらる今之を移して我邦初等英學生の用に適せしめんが爲幾多の訂正を施して出版す其特色とする處は

一古今の英雄哲人名婦の逸話四十餘編を綴りたるものなれば學生に與ふに多大の興味を以てする事

一主として單音字を用ゐ固有名詞等には發音譜を施したれば第二リーダー程度の敎科書に最も適したる事

一文章は米國知名の敎育家ジェームスベルドウィン氏が精練の筆に成り實用英語を學ぶに適切なる事

等の諸點に在りて、學習院、華族女學校、外國語學校、女子高等師範學校、女子語學校、帝國敎育會英語講習會、其他各種學校の敎科書に採用せられたり。

正價金參拾五錢

郵便稅四錢

English Stories

SELECTED BY

MISS UME TSUDA.

明治三十四年六月十九日

文部省檢定濟

(訂正三版發賣)

此書は津田梅子女史が多年教授上の實驗に基き實用英語の主旨により歐米大家の作に成れる小話數篇を撰び出て難句の字句には一々脚註を加へたるものなり殊に印刷紙質は共に文部省規定に準じて鮮明良好なれば尋常中學高等女學校等にて第四リーダーを程度とする學年一期間の譯讀會話等の敎科書となすに適し學生をして歐米の俗語を知らしむるに甚だ便なり本書既に日本女子大學校、華族女學校、女子高等師範學校、明治女學校、女子語學校等其他男女數十學校の敎授書として採用せられたり

正價金參拾五錢

郵便稅四錢

(東京文武堂發兌)

發兌元 東京日本橋區本町 博文館 ・ 東京神田表神保町 東京堂

(丙の三)

新刊豫告

法學士 富塚致馬君編

土地法令大全

全壹冊洋裝
紙數五百頁
正價 未定
郵税

[illegible]月に應じて採錄彙集せる物にして其數三百有余上は本州より下は北海道臺灣沖縄諸島に至る迄苟も土地に關する現行の法令は收めて遺す所なく且排列序次整然として索引自在に携帶至便なり故に法典家は之に由て捜索の勞を省き携帶の便を得へし一般人は各自主義の所在を暗知するの利あるべく共に座右の寶典として必らず一本を備ふるの要あるべし

既刊類書

博文館編輯局校訂
● 増訂十二版 現行日本法令大全
全壹冊脊皮總クロース金文字入
正價四圓五十錢 小包送一貫目

博文館編輯局校訂
● 改正増補 帝國六法全書
全壹冊洋裝總クロース金文字入
正價九十錢 郵税十四錢

堤一馬君編纂
● 現行罰則大全
全壹冊洋裝總クロース金文字入
正價二圓 小包送料百匁

博文館編輯局編
● 現行警察法典
全壹冊洋裝總クロース金文字入
正價四十錢 郵税六錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

少年工藝文庫

毎月一回發行毎編寫眞
西洋木版數十面挿入

石井研堂君著

定價
一冊十五錢六冊前金八拾五錢十二冊前金一圓六十錢郵税一冊金四錢御注文着金次第送本す

第一編 水道の巻

本書は都市膨脹の父母なる『水道』の河湖水又は雨水が人工にて水晶の浄水となるより文明的都市に噴上して衛生防火の二大効を致す迄の實際と學理を内外古今の例に照し數十の繪畫を加へて解説せしものなれば請ふ一讀して現今の物理工業の大奇觀を窺ひ給へかし殊に四頁八圖の口繪は皆是れ臥遊娯神の好材料

全一冊洋装菊判
定價金十五錢
郵税金四錢

第二編 瓦斯の巻

ガス、ガス、コールガスは燈火となり割烹暖爐諸工場の火力となり更に文明世界の薪炭なる本書此新燃料を中心として上は石炭の根原より下はコータールの精製迄を解説し少年致富の指南車家庭の良朋友たらんことを期せり

全一冊洋装菊判
定價金十五錢
郵税金四錢

續刊目次

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(丙の六)

文藝倶樂部四月増刊

京都と奈良

口繪（精巧密畫極彩色木版二頁大及寫眞銅版風景風俗美人數十葉挿入

日本は世界に於ける大公園にして其公園中の公園とも稱すべき京都と奈良は今や京洛諸文士の精緻なる觀察と絢爛なる文章とに依て紹介されたり加ふるに關西旅行の栞なる一編を卷尾に添へ各地方の旅客をして漫遊探勝の資に便ならしむ而して其装飾に至りては歌川國松氏が意匠になれる美麗なる表紙及挿畫と彼の優美の新風景と艶麗の京美人の寫眞を以てし讀者をして開卷先つ神飛魂消せしむるものあり之を外にしては旅中車中の侶伴となるべく之を内にしては春夜燈下の好友となるべし發行近きにあり大方の購讀を待つ

定價金貳拾五錢
郵税金貳錢五厘

博文館發兌

書中の細目

大日本女學會

新學期を開き會員を募集す

（四の八）

◎本會は女子教育の普及發達を圖らんが爲に女子必須の諸學科を掲げたる女學の講義録を發行し小學卒業後進みて女學校に入學し難き女子達に家庭の門を出でずして高等女學校の課程を講習せしむるを目的とす

◎本會は小松大宮妃殿下を總裁に戴き有栖川宮小松若宮華頂宮梨本宮各妃殿下を始め奉り教育に熱心なる貴婦人方百餘名の贊成を受く

◎本會は華族女學校女子高等師範學校日本女子大學校等の諸教授其他博士學士等諸名家に講義を囑托し其講義の平易懇到にして有益なるとは本會創立以來數萬人の講習者が經驗したる所なり

◎本會は一般女子素養の程度に應じ講義録を高等簡易兩種に分つ其簡易なる講義録は尋常小學卒業者にも解し得らるべし

◎本會高等科は束脩四拾錢月謝四拾錢簡易科は束脩貳拾錢月謝貳拾錢とす束脩月謝の送付あれば假入會を許し直に講義録を送るべし

◎當學期は昨年十一月より開始し目下講義録第四卷まで發行せり何時入會ありても初卷より送付すべき準備あり高等簡易兩科共滿二箇年にて終了す

◎詳細なる會則希望者には端書にて請求あり次第進呈すべし

東京市麹町區下二番町三十七番地

大日本女學會

女學世界

第貳巻　第六號

明治三十五年五月五日發行

紀元二千五百六十二年　西暦一千九百〇二年（壬寅）

論説

婦人の健康（下）

警察醫長
醫學士　山根正次

一躰どうしたらば日本婦人の體力を良くして、健康にすることが出來るかと云へば先づ、今日の惡習慣を取除くと云ふことが第一の急務で御座ります、そうして其惡習慣と云ふと何事であるかと申すと。

第一が服装　第二が食物　第三が運動

（第一）の服装に就いては弊害の最大なるものであります、それはすべての服装の工合は身躰發育上の生理を妨げる樣に出來て居ります、即ち衣服が非常に長くて手足の運動を支えることと帶が廣く且つ重ひ爲めに肺臟及び胃腑などの作用を妨げることと紐の數が多くて身躰の束縛を受けて居ることが甚しい爲めに、身躰幹部の筋肉の働作を妨げること、その爲めに全身の運動を殆ど休止せしめて居るのであります、此の如き弊は速に改めなければなりませぬ、所が是に困難の事は一般の婦人は從來の習慣からして是の弊を改めることが出來ぬ、婦人のみならず、教育智識ある男子までが此の惡習を却で日本婦人特有の美であるから之を改めるは考

へ物だなど、云ふか如き說を唱へる人がありますから、益々改まらなくなります。なる程婦人の健康と云ふものがどの位人生に必要なものであるか、どれ程國力に影響するものであるか、如何許り自分の幸福に關係があるものか、一切知らない、只婦人は活きた美術品だ人間の翫弄物だ綺麗でさへあればそれで好いと云ふ樣な考への人は、現在の弊を改めることが出來ますまい、斯う云ふ連中に向つて眞面目に躰育の効能などを說ひた所が駄目に違ひない、丸て婦人と云ふものを、社會の成立上國家の存立上の一大要素であると認めて居るよりも寧ろ社會の装飾と心得て居る、私は斯う云ふ人に、私の申すことを無理に聽けとは申さないのでありますが。併し日本の婦人が日本と云ふ國名の下に立ちて、世界萬國に對する、否對して耻しからぬ地位を保たねばならぬと云ふ考へのある方々は、兎に角私の說に就て一通り研究しなければなるまいと思います。

私は此の如く躰育を重ずるものでありまして、少くとも婦人が服装の美容と云ふことは健康あつての上の事であらうと考へます、病氣になつても夭死をしても美容を專一にするが婦人の本分であるとはどうしても信じませぬ、いくら美人でも病氣では仕方がない、まして衣服の扮装を美にする爲めに病氣を求めるを顧みないと云ふことは日本以外の世界にはない事、恐らく感心の出來ぬ道理であらうと思います、それて私はこの婦人の衣服に就て種々考案して從來の弊を除いた一種の服装を考へ出して自分の娘達に着せて用ひて居ります、それから昨年來だん／＼世人の同意を得まして此の服装に倣ふものがありまするから、先頃この改良服の利害効用裁縫の方法及び一般婦人服の弊害のある理由を詳しく書き記して改良服圖說と名づけて出版致しましたから私の衣服改良に關する詳細の意見を承知せんとせらるゝ人は同書を一讀ありたいと思いますそう

すれば私の衣服改良を唱へる眞意が分りませうして同時に今日は區々たる裝飾などに重きを置いて改良を躊躇すべき時期でない事がよく合點が參りませう。

(第二は)食物の事であります、一體、日本人は肉食を好まぬ習慣がありますが殊に婦人方では肉類を食ふことを嫌ふ人が多ひので御座ります是れが爲めに一般に身體の營養が乏しいのであります西洋の婦人よりも概して貧血性である隨つて精神が悒鬱になつてどうも不活潑になる傾きがあります昔から女の食物としては蒟蒻、芋、章魚、南瓜、と云ふ樣な物が一般の婦人の好物として數へてある何れも滋養力の欠乏したもの許りそれからもう一つはお茶漬けであります、斯う云ふ風でありますから、實際身體の營養を好くすることは出來ません、是は眞に憂ふべきことであります、そうして平生無病の時は兎も角も、一朝病氣に罹つて身體の大に衰へた場合になると之を回復するにはどうしても蒟蒻やお茶漬ではいけません、少くとも牛乳とか、鷄卵とかスープとか云ふ滋養物を食はなければならんが平生嫌ひの人は中々是れが食べられない、仕方がないから其儘にして置けば遂に衰弱して死んで仕舞ふ、私は醫者であつて度々斯樣の場合に出逢ひて大に困まつた經驗があります。此の習慣はどうか改良して幼年の時から肉食を勉めて平生身體の發育を良くして置くのみでなく、病氣の時でも滋養物をよく喫べられる樣にして、療治の爲し易い事にして置かなければなりません。それから今一つは食物の調理法、即ちお料理の事であります、是れが誠に大切の事で、殊に婦人の最も心得て置かなければならん事です、日本では昔からお料理の事を賤しんで居る風がある、上流社會ではお料理と云ふものは喫べることを知つて拵らへることは更に知らぬ人が多い、お料理を喫べる許りで拵らへることを知らないからどう云ふお料理が身體の爲めになるかまた消化

の障害になるかゝわからない爲めに、營養を損することが多いのでありますそれで平生からお料理の事をよく心得て置いて一切の食物を味ひもよく養分も多い樣に品物から吟味をして殊に消化し易い樣にお料理をすることを覺えて置かなければなりません料理の仕方が好ければ自から食事が多く進むもので御座ります食物と云ふものは身體の血液を造くる材料であるから毎日毎日休みなく食べなければならぬ年中休みなく喫べるものであるから、其料理方の善惡に依りて消化の良不良を生ずる、且つ年中ては養分を吸收する分量に大變の相違があります殊に子供などのある人は食事には一層氣を注けなければなりません。

それから食物は之れを喫べる時間を正しく定めて置かなければなりません東京の人などは殆ど時間の定めなく勝手次第にいろんな物を喫べますがあれは甚だ能くない其爲めに食物を消化する器械を傷めて胃病だの腸病だのと云ふ樣な病氣に罹るのであります食物は一定時間に一定の量を用ゆるの外は妄りに用ひてはいけない、之れを猥りにすると病氣になるものであるから、此事は家庭の世話をやく婦人の最も注意しなければならぬことです、食事の始末は下女に委せて料理の事などは知らない方が品格の好い人の樣に考へて居る者があると云ふことてすが是等は甚しい心得違てす自分の血液を拵らへる材料が何であるか知らないで濟まして居る樣ては衛生上不注意千萬の次第でありますから、此の如き習慣は向後全く一變して食物料理の事はよく自分に世話する事になされたいと思ひます。

(第三)運動を好まぬことと是れが日本婦人弊習の一つ、尤も我國の婦人でも田舍の人は中々よく働きますが都會の人はさうでない殊に上流社會の婦人になると昔から足弱者と申して丸て運動の出來ぬものとなつて居ります、人の身躰は動かせないでぢつとして居れば血液の循環が惡しくなる食物が進まなくなる氣が結ぼ

れて陰氣になるだん〳〵病氣に近寄ることになります、出るにも入るにも車に乘る坐敷に居つてもなるたけ動かないて婢女の手を借ることを婦人として貴いものゝ樣に心得て居る人がありまするが是が甚しい間違ひである自分の躰軀を自分で充分に働かせることが出來ぬ樣の人は寧ろ片輪者であります、芝居や花見の場所などに偶々往くにも自由に身動きの出來ぬ樣な婦人が東京には大分あります、私は是の風を見て甚だ慨嘆します、斯樣の人は身躰が不健康であるから迚も滿足の仕事は出來ません、私は此の如き習慣を止めて婦人は從來の家内閑居籠城主義を廢して適當の運動をすることに進歩して參りたいと思ひます、先づ每日朝夕の暇には相當の運動をする食後なども一寸二三十分位は散歩する或は休日などには海邊とか原野とか又は山中とか云ふ樣な空氣の淸淨な方角に出掛けてそこらを歩いて見る樣な事をする習慣を進めたいと考へます、そう致せは自然に呼吸が盛になつて食物などもよく消化して自から營養も盛んになる身躰が健康になるので御座ります、それで此の運動をするには身躰が身輕でなくてはいけませんいろ〳〵の衣服を着て身躰を重くしては迚も充分に運動が出來ません、それ故まづ身輕の衣服を着て身躰の運動のし易い樣にして、そしてよく運動をする樣にしなければなりません、私は先に改良服のことを申しましたのは矢張りこの爲めであります、現在の婦人服では到底充分なる運動を致すことは出來ません運動が出來なければどうも身躰の健康を充分に進めて往くことが出來ませんからで御座ります。私は此の如く身躰の健康になる方法を申しましたが之れを實際に用ゆることは婦人方の勇氣と思慮とにあります文明國の婦人として西洋各國に負けない學術技藝智識才能充分に發達したものとなつて、そうして人生の幸福を一身に受け國の威力を世界に伸張致さうと思はるゝ婦人方は何卒私が申しました言葉をよく御考へになりまして古來の惡習慣を速に御改良にならむことをお願い申すのであります。

（完）

家庭

花看半開

棚橋絢子

凡ての人が花を見に行くには半開では中々滿足しない、まだ早いとて人の出も惡いが、滿開の時は人もそれ〲出て美しき樣を遠くから雲とも見立て、雪とも見立て、書き立てたり賞したりするであらうと思ふ、少し心ある人は〻であらうが普通一般は滿開を喜んでお酒を飮むにしたところが行つて充分に飮んで花の滿開を見たと云へばこれ程愉快はないと思ふて行くてありませう、吾々も行くには半開の時は何か物足らぬやうな氣持がして充分開き、人も澤山出た時にはこれは立派なと思ふて見るが、それを古人が「花ハ看ニ半開一酒ハ飮ニ微醉一此中大ニ有ニ佳趣一」と言はれたのは誠に味ひのある事てありまして、實際書物でも見て古人の意味合を考へて見ますと實に其の通りてあると私共は考へるてあります、何ぜかと申しますに滿開の時に至ると好いは好いけれども其の心持と云ふものがモウ一雨降れば此花が散るであらう、風でも吹けば散るてあろうと餘程憂ひを含んで居る傾向があります、けれども半開てあるとこれが一杯に咲いたら結構であらう、眞に好からうとか、一雨降ればこれが滿開するてあらうと云ふ樣な樂みを充分含んで居るです、然るに人間の事と云ふものは現在見た時に滿足しても後とに憂ひを含んで居る事は全くの好い事てなからう、現在それ程充分でなくても此後大變樂みがあると云ふは大變心持に於て愉快であらうと思はれる、それて本當に愉快を感じやうと思ふならば控へ目と云ふ事が肝腎であります、花が爛熳と咲き、お酒も充分醉を盡くすに至つては最早惡境になつて居るのであらう、故に世の中の人が充分の事を履んで行かうと思ふならば之を思うて自分から一番控へ目にして居つたならば大層憂ひと云ふ事を免かるゝであらう、子供の時から能く敎育をして立派な人物にしやうとするは、花ならば根に培つて肥料をやつて花の蕾を充分持たすやうにすると同じ事ですが、人間ならば半開の時に人の見所のあるやうに育てゝ置い

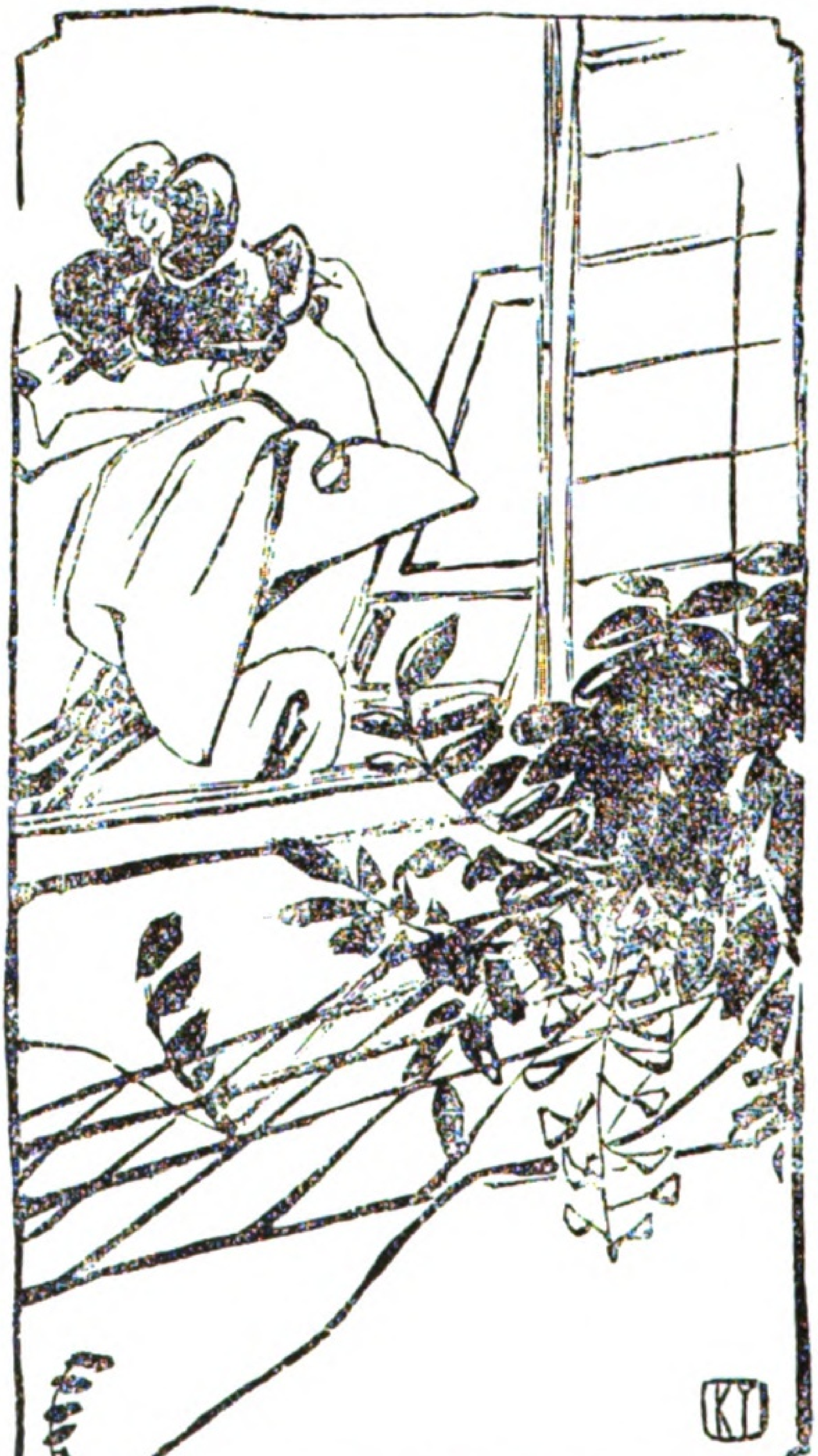
て滿開の時に至り最早老人の方に赴く下地てあるから注意をして其花を永く持たせるやうにせねばならぬ天地自然の花と云ふものは風や雨を避ける理屈に行きませぬ、けれども人間と云ふものは豫防は出來る故、年を取つて死ぬときは命數であるから、それは仕方はないが、不養生をしたり、充分の愉快を取りてそれが爲めに老衰に至つて困難に及ぶやうな事がないやうに、前から自分の心持で防ぎをつけ、早く德を取越して年を取つて困難に陷つたら、早くそれが爲めに死なねばならぬやうな事がないやうに成るべく注意すれば自分の持分だけの幸福を盡くし、命數も自分の命數よりも伸ぶる事が出來るのであります、陰隲錄などにある通り陰德を積めば陽報ありてありまして壽命と云ふものは心持次第て多少伸ぶる事は出來る、死なぬ事は出來ぬが五年なり三年なり此の世の中に永く生きて居る事が出來られます、又困難も若い時に克く凌いて置けば年を取つて安樂に行かるゝは自然の道理であるから、それを平常心懸けて行く事が眞に肝要てあります。



此頃私は愛敬女學校で子供に家事を教授して居りますが 其中に種々科目はありますけれども、其中で此頃一つ能く話して置きました事は、家事經濟と云ふことの本は一身一代

の經濟に任りといふやうな事でありました、それはドウいふことかと云ふに、身躰の經濟が一番先きに立つて行かねば家事の經濟は立たぬ、即ち一家の經濟とか衣服の經濟とか云ふやうな事になるとモウ末である、自分の身躰の經濟と云ふものを第一にせねばならぬと申す意味です、世の中の人は金錢の事とか、目に見ゆる經濟を經濟々々と云ふが、自分の身躰に取りて肝腎な經濟を一向心懸けないやうである、これは私が毎々言つて居りますからさう喋々言ふべき事ではないが、言ふて居ても行はれぬからシッコク言はねばならぬやうな次第である、其處で學校の生徒は子供の事であるから特に注意をして置きました、人の一代と云ふものは十圓の金とか、二十圓の金を使ふと同樣なものであつて、此人は十年生きるとか、三十年生きるとか、命數は天から極められて居て、幸福も亦天から極められて居るものである、けれども十圓の金も使ひやうで長持ちもし又忽ち無くすることも出來ると同じして、自分の心持次第で伸び縮みが出來るものである、さうして見ればドウしても若い時は身躰も丈夫であるから、充分勉强も爲し身躰にも注意して、十圓の金をば成るだけ伸ばして使ふやうに命數福分を延ばして行く樣にすれば三年持つものは五年持つと云ふ事に立至りまして、不自由せねばならぬ事も不自由無しに行く樣になります私は實際自分の身躰で經驗して見、且又世間の人に氣を附けて見るに大抵これに外づれないと思ふ、一寸衣類にしたところが、朝晩には麁末な着物を着て(破れたと云ふ程ではなくても麁末なものを着て)働けば氣つかひなく働くことも出來るが、美い着物を着て居れば着物を厭ふ爲め充分の働きが出來ぬ、然らば着物が惡くなる事と仕事が不充分であると云ふ事と、後と前さの經濟が餘程の違ひとなる、惡い着物ならば(着物を厭はぬから働き宜い)汚れても搆はぬからドウいふ事もサッサと仕やうと云ふ事になる、けれども着物が奇麗であれば華族さんとか少し毛色の違ふた人はイザ知らず、大抵の者ならば汚れるのを厭ふ、其の爲めに仕事も後れ勝ちになる、それを一代の中に積れば着物と仕事

て大變な損であるから、年を取つて存外美い着物も着られず、又働かねばならぬ樣になる、果して自分の福分が極まつて居るとすればそれだけが屹度受け得らるるに過ぎざる事故、惡いことを先きにすれば善い事が後に殘る勘定となるのであります、然らば年を取つて働かないで美い物を着て甘い物を食べて行かるゝ樣に工夫するが肝腎である、私自分の身躰で考へて見ても極く子供の時はそんなに困難な家に生れたでもありませぬけれども、御一新の時には極く困難をしまして、其の爲め衣類なども賣却して、不斷の木綿着物を一二枚と餘所に行く着物一枚とを殘して後とは下から上まで木綿にして働きました、其時は若い時であるから美しき着物は好いとは思ふたけれども自分から賣る位であるから羨ましいとも思はず、困窮した時はこれ位な事をせねば安氣でなく、又身を落せばそれに連れて萬事が經濟となる故に本當の働きも出來ると思ふて働きましたから、極く貧乏の時も貧乏が苦にならないで働かれました、お蔭で年を取つてからは「若い時に賣つた位であるから無くとも不足には思はないが、拵へて呉れと言はないでも誰か拵へて呉れるから」是れといふ不足もなく衣服を備へ、食物も別に欲しいとは



思はねども随分珍らしい物が其處此處から到來して食べる位になり（然らば身上が宜いものかと云ふと身上の宜い事はないが、それ相應に）今の所では身分不相應に何不自由なしに暮らします、それと云ふものは彼の若い時に聊か經濟をして伸ばして置いた報ひかと思ひます、若い時には彼の人は立派な人であつたと思ふのが年を取つてから旦那様は立派であつても子供が惡いとか、種々な差障りが出來て心配の絶え間がないとか、不足な事が出來たとか云ふのが世間には比々として見受けられますが、それは皆早く德を取越したのだと思ひます、それであるから私はドうしても人は自分の一身一代の經濟を能く立てなければならぬと存じます、（後になつて難儀せぬから宜い事と思ふ）若い時はドウでもなるけれども年を取つてからはエライ仕事をすれば骨が折れる、樂しく居てさへ充分には樂と思はぬ位である、さうなつてからエライ仕事せねばならぬと云ふ時は甚だ困難を感ずるに相違がない、私は只今はお蔭で心配もしないで宜い様になりましたから、餘程難有いと思はなければならぬ筈ですが、宜い方は左程に思はぬものでありまして、始終難有い難有いと思ひませぬから、それが其の反對であつたならば格別に困難を感ずるであらうと思はれます、其處で此間も生徒に若い時の難儀は若い時に樂をしたならば末に難儀が來る、其の難儀は今の難有さよりは感じが強いと思つて之を忍び、兎角十分はこぼるゝ故控へ目にして樂みを殘すが宜いと言ふて置きました、丁度これが最前から言ふ花看半開と云ふ所でありまして、後に充分に花の咲くを待つ心持と同じことて、後に樂を得る工夫てあります、若き人が美い着物を着て惜しげなく贅澤するは充分な花の盛りと同様其の心には何時までも斯ういふものと思ふて居やうが、存外裏が來て忽ち花の散る如く、年を取つて困難な場合が來ると云ふ様な事があるからドウか皆盛んにならうと云ふ時に一つ控へて身をつめ或は慈善を施し自然と德を伸ばして盛の成るべく後に來る様にして置いたならば、何れ遲いか早いか其の時期の來ぬと云ふことはないから、老後に樂をす

る樣になりませう、子供を育てるにも其の意味合で育つれば子供も自然慣習となり知らず識らず徳を積み成長の後大に益する事であります。

經濟と云ふものも今日金錢とか物品とか見えた所では誰しもやりますけれども見えぬ所の經濟に心を附けるものは眞に少いものです全體人と云ふものは大方は名目の爲めにする事が多いものでありますが、名目の爲めにする事は自分の身に付くものではない、名目の爲めでなくする事が却て自分の身に報つて來るものです、それをすれば椽の下の金箔と思ふ人が多いが、決してさうではない一番實果を得る事と思ふ、道德々々と口には言ふけれども道德が腐敗して來て、利慾が盛になると目に見えぬ道德を守る樣な馬鹿氣た事をするより實際の利益のあるやうにせねば損であると云つて皆其方に走るが人情ですけれども、田を走るも畔を走るも同し事であつて、道德を離れて無理に利益を取らうとしても利益の逃げる時には逃げられるから、それよりは老子流儀の取らんと欲すれば先づ之を與へよ(一體言へば道德心は遠大の慾があると云つても、又大慾は小慾に似たりと云ふやうなもので、名が美くて慾が深いと言つても宜い)道德家は報を求めてする



のではないが、詰まり人に貴ばれて好い結果を得らるるから、道德を守る方が詰まり目に見えぬ經濟をする樣なもので得が多い樣であります、餘り慾を深くすれば人も亦其上々々と來て困難に陷る事もあり、人を倒して己れのみ宜き事を得やうとすれば人も默つて居らないで張合つて來る、それを突倒して行かねばならぬ樣になつて實に骨の折れたことになる、道德はさういふ事はない、向うに敵をとらぬから人に怨まるゝこともなく自然に身を立てゝ行く事であるから此程都合のよきことはないと思はれる、世の中に道德が廢たり腐敗して來ると云ふは兎角目に見ゆるものを取つて見えぬものを捨てる故であると思ふ、古人が花は半開が面白いと言つて半開の目にあかぬ所を賞せられたのである、眞に味ひの有る事と思ふ、ドウぞ世間の人に此の目に見えぬ樂みを含める味を知り成程道德主義でやつた方が宜いと云ふ事を本當に感じて貰ふたならば結構此上ないと思ひますけれども、兎角陳腐とか舊習とか云つてやりて がないから、私は最早此上は自分一人でも其の主義を執つて行きたいと思ふて居るのです、蓋し進んで取ると云ふ方面に種々の策略を廻らせば人目に立つ樣な事が出來るし、愼んで後と先きを考へてする仕事は因循で役に立たぬ樣に思はれるから兎角世に通りが惡いが私はさうでない、仕事は少し後れもしやうが失敗がないから兎と龜との譬の如く案外早からうと思ふ。（次號完結）

生活金針

成女學校講師　嘉悅孝子

私はいつも多くの人に聞くのです。一家の主婦として、女子につきて男子のかた〴〵の御希望なさるのは何であるかと。すると中には夫の翻譯の助の出來るやうなのとか、手紙の代筆の出來るのをとか、或は著述の助をするやうなのとか、色々の御注文もありますが、かやうな特別な御注文はしばらく措き、其輿論とも見るべきのは、妻君が怒つた顏を爲ないで、いつも健康な愉快そ

うな顏をして居て、暮しの不平を唱へないで、經濟が上手で、うまい物をたべさせて與れるのであるといふにあるやうです、此位の事であつたら、何も少しも六ケ敷事でもなく、必らずしも年俸幾千圓とか、歳入幾萬圓などいふ富家を俟たないでも、世帶と云ふ事に少しく志のある人であつたら、蓬の垣根柞の宿てゝも出來ませう、夫に世の婦人は何故それをなさらないのでせうか、男子に滿足を與へる事が出來ないのでせうか、それがやはり、爲ないからで、中には隨分やつて居る人もあつて、僅かの俸給でこれだけの家族を支持するのは、つらいのです、と歎くかたもよく聞くのです、かやうな人達の苦心談も澤山聞きまして後の豫算表なども、それらによりて拵えました位で、家計の上には大に意を注いで居る人も多いのに拘はらず、私どもの理想の家庭と仰ぐやうな、和氣の滿ち〳〵たる家庭の多からぬは何故でせうか、しかもそれが蓬の垣根、柞の宿でゝも出來得べき筈のものであるのに、これはつまり女子に自治の心自活の勇氣が乏しいからではありますまいか、前のつらいを歎く人、又よく苦心して居る人で今一歩進んで、これを樂しむと云ふ勇氣があつたら慥かに男子の滿足も得られやうと思はれます、自分の運命は自分て作り、自分の地位は自分で得るの覺悟があつたら夫の得る俸給若くは收入は拾圓でも實にありがたいのです、五圓でもそうです、まして五十圓、百圓、三百圓の家計を宰る夫人がたは、その多いだけそれだけ、おのれの身を勞し、且つ精を練るべきではありますまいか。

そこで其精勵を尤も多く要するのは一家の經濟、則ち世帶の心得でせう。經濟の實があがらねば國家の事業も、出來ない樣に、一家の經濟が擧がらねば子女も充分な敎育が出來ず、折角蓄へたる夫の抱負も社會に充分翼をのばす事が、出來ないといふやうな事もありませう、或は夫人の力を借りて、事を爲すやうな意氣地のない男子ではしかたがない、など仰せらるゝ人もありますが、私は決してそうではない夫人の力に大に與つて力あるもので、夫人の力を要せぬやうな偉人であつても之に對するに、尚ほ夫人の力を加えたら、それこそ、

所謂虎に翼で捲土重來の觀であらうと思はれますし、又夫人の力を要するやうな人であつたらなほのこと身に入る金錢は薄くても、夫人の手腕によつて家計も易く、僅かづゝでも玆に餘裕が生じひま／＼には上野の山に隅田堤に自然に得らるゝ月花を樂しみ心ゆたかに此日を送ると共に二年三年五年の末には必らず家計も豐かになつて、萬民富むの有樣にもなるであらふかと思ひますから、その世帶の心得として先づ玆に二十圓で一家四人の家庭豫算表を拵えて見ました。猶ほ次には五十圓、次は百圓、三百圓と順を追ふて拵えて見ませう。

まづけふの一家四人とは、夫婦に子供二人で、長は男子八才で尋常小學校にあるもの、末は四才の女で、二葉幼稚園の様な慈善的幼稚園へ御厄介になつて居るのです夫は毎日腰辨當で役所に通ひますからつまり晝間は妻一人で留守居をするのです。そこで家人は僅かに四人であれば家人の被服の調製修繕は夜業て澤山ですから晝間は手内職に他人の衣服を仕立るのです。

そして此位の薄給者であるので、滋養にミルクなどは與へる餘裕がありませんから、幸ひ庭の五坪ばかりあるのを利用して牡一羽と牝二羽との鷄を飼ふのです。又勝手口に少しの空地がありますから、毎朝汁の實に必要だけの野菜を植うるのです、是け啻に家計を助けるばかりでなく子供のためには植物學の實地研究となるつもりです。

偖てそこで此家庭の收入は夫の月給と妻の内職賃とを加へてまづからうなるのです。

収入の部

一金二十圓　本月分俸給
一金四圓　仕立物代

此内仕立代は年末などは拾五圓以上は慥かにあるのですが、年中通してそうは行かないのですから平均を四圓とするので、これは子女の教育費にあて殘りはみな貯金として、教育費その他醫藥費など他日の準備にいたしおくのです。

外に紙屑代、古新聞代、などが少くとも一ヶ月に十錢

はあります、しかしこれなどは小遣の中に入るゝと何になつたとも知れず、なくなりますから、これは別に備へた貯金箱に入れ置き、集まつた丈けづゝ慈善的幼稚園の寄附金にいたすのです、そしてこれて、いさゝかながら、かねて願ふ慈善業の義務の僅かなる一部を果す事が出來て、大に心嬉しいのです。それて支出は。

金十七圓七十八錢　となるのです。

内譯

一金三圓	良人小遣
一金五圓	家賃
一金二圓五十錢	本月分米代
一金一圓	麥代
一金五十錢	薪代
一金二十八錢	味噌一〆目
一金四十五錢	炭一俵(十釜)
一金十一錢五厘	コークス(一俵の四分一)
一金六錢	炭團
一金二十八錢	無烟炭
一金十錢	番茶半斤
一金十錢	鰹節一本
一金五十二錢五厘	醤油(山サ一升五合代)
一金十七錢	白砂糖(二百五十目)
一金三十二錢	國民新聞代
一金二十五錢	石油
一金三圓	日々惣菜料
一金三錢	だし昆布
一金十錢	はきよせ(これは鷄の食料)

〆十七圓七十八錢

て殘金二圓二十二錢は直に貯金してしまうのてす。

かやうに豫算表が出來て見ますと、良人の小遣三圓は少々少いかも知れません烟草でものむ人てあつたら、それにも不足する位でせう、しかしこれで しばらく辛抱して貰ふのです。

家賃の五圓もあまりにむさくるしき感が起りますが、しかしこれなども、決して外見をはる必要もありませ

んから、只健康上に害のなき丈けの家を撰んだのです、

飯に麥を用ゐますのは、脚氣の豫防と同時に家人の健康を保たん爲てす、

薪は小さく割らないのを買ひ自宅で割るのです。味噌は五錢とか三錢とか買ふのは實に不經濟ですから五百目宛買ふのてす、(五百目十四錢)、

土釜は火鉢には多く炭團を用ひますからさう入りませんが煮物にわづか宛要するのと來客のために供ふるのです。

コークスは煮物をなすに炭と共に用ふるのでこれは一俵四十五錢のものであつたら四ヶ月は慥かにあります

炭團は平常の火鉢用

無烟炭は三日目に一回づゝ、風呂をたてるのです。

茶は番茶を焙じて用ゐます

鰹節とだし昆布は煮物汁物には是非用のあるのですから鰹節は龜ぶしを四五人で申合せて五百目宛買ふのです(五百目一圓八十錢位で)

醬油は品のよきものがよいのです

砂糖は三盆が得用です。これも五百目宛買ふのです三十四錢位で、すると二ヶ月はあります。

そこて日々の食物はどんなものが食されるかといふとこんな物が出來るのです、これならば隨分うまく食されませう。

次に試に日々の献立を書いて見ませう。(一週間分)

	朝	晝	夕
一日	味噌汁　香の物	玉子燒　昆布のつくだ煮　香の物	豆腐のあんかけ　香の物
二日	一日に同じ	のり卷ずし	つま折鰈のさんし　よ燒　香の物
三日	同じ	しのだまき（此日は日曜て花も盛り故のり卷すしの辨當て飛鳥山に手り歸りは擂草汽車代は臨時費として貯金より）	竹の子木の芽あへ
四日	同じ		椀鰯のつみ入　よめ菜　よめ菜のまたし

五日　同じ　竹の子甘煮　なめし田樂
六日　同じ　さやゑんどうのてんぷ貫　ポークカツレツ
七日　同じ　つくね魚煮　ながし玉子

こういたしますと隨分御馳走が出來ませう。けれど野菜は番町などては買はぬのてす。毎夕散歩をかねて、四谷大横町まて行てそこて買ふのてす、お葉の香の物など畑から取り來て直に漬けるのは堅いので、切りとりて一日、日にあて漬け込むのが宜しいそうですから、今日のうれ殘りを夕刻安價く買つて來て漬けるなどは實に兩得です。野菜の價は番町と四谷では一割は慥かに違ふのです。そこて一日の實費を計りますと、朝の汁は味噌もあり汁の實も自園のものですから香の物だけでこれは實費五厘といたします。晝の辨當の玉子も家畜の生みたるものです、昆布のつくだ煮は、だしをとりたる昆布を製したもので、こゝも香の物だけ五厘ですむのです。夕の豆腐は二つで三錢、葱が一錢香の物が五厘とすれば、一日は五錢五厘で實費がすみ四錢十厘の剰餘が出來ました。

三日は朝は一日と同じく五厘ですみ、晝は淺草のりの貰ひもの丶あつたのを使ひましたから、かんぴようの鮓一錢、お酢の五厘もあると、それて出來。夕は二錢の鰺四尾て八錢、晝と夕の香の物が一錢で、此日は十一錢の實費で隨分の御馳走てす。

以下もこんなものです。

婦人の風俗改良

塚本はま子

明治十八年の秋といふに、おのれ始めてある學校にいらはやとて、東京に出てたりしが、その頃こゝに珍らしき、束髮といふもの行はれそめ、學校などにたづさはる若き婦人の、やう〳〵試みはじむるに至りぬ。やんごとなき御方々の間には、洋裝すら、珍らしからざりしは

となれば、もとより束髪も行はれたりし事、疑ひもあらざれども、かくなみ〳〵の者のみづから試みたるはこの年を始めとす。その束ねかたは、ありし島田、銀杏がへし、その他の女髷を結ぶやうに、油髪附など用ふる事なく、またびん、たぼを分くる事なく、根のやゝ低き所にて、一と束ねにくゝり、その先を三つにわけて編むこと、支那人の辮髪の如くし、これをぐる〳〵と巻きて、周りより、金屬製のヘーヤピンにて留むるなり。されば前より打ちみたる時は、前髪も出でず、鬢もふくれず、その髷さへ根の低ければ全く見えず、古、男のしたりし、總髪か、そぎ尼の額つきにも似て、いふべきやうなく、ことに飾りといふものは、少しも施すことを知らざれば、いと淋しげに颯々しく、幅廣き帯を結び、衣幾枚か引き重ねて、裾ながに着などしたらんものは、頭の方のみ小さく、見すぼらしく、雀の姿に似て、まことに和合わしくて、醜くかりき。されば人々束髪に結ぶ者は、容姿よき人に限れりとも、美くしき衣服着る時ならでいとも、甚しきは束髪にしたる人の、風呂敷包かゝへたるは、見苦しとまでいひあひて、いかばかりその貴族的にして、又女學者の招牌となるべきものゝやう、考へられしかば、今日より量り難きまでなりしかば、はやり氣ならぬ人は、その際のものも、猶束髪するを躊躇したりしほどなりしが、僅かに十六七年を隔つる今日となりては、たとへ幾多の改良と、装飾とは加へられたりとはいへ、たゞ容姿を顧りみる暇なき、學生のともがらのみならで、望まば鏡臺の前に、數時間をも費し得べき、あらゆる階級の婦人間に、老若貴賤を問はず行はれ、髪結ふ人を待てる爲、訪問の時刻をはづし、髪の亂れをる爲來客を謝絶するの、不交際なる夫人も少く、結髪にかゝづらひて、登校時限におくるゝ、令嬢も減り、自然毛髪の清潔行はれて、夏時悪臭に鼻を掩ふの憂も稀になり、玳瑁の櫛、珊瑚の根掛、銀の平打、金脚のかんざしなどいふ、装飾品も不用となり、僅にリボンと留針とにて用を辨ずるに止まり、便利衛生、經濟の點いづれも滿足せざることなきに至りぬ。まことや流行は、便利と經濟とに利益あるもの、最終の勝利を占むとかや、そが目的の

ひとつなる、美を完全にすといへる點には、目慣れぬためか様たらぬ心地せらるゝにもかゝはらず、世は歐化主義とやらんの反動にて、舞踏はすたれ、洋裝は稀になり、女流の雜誌は倒れ、女學校すら往々戸を閉づる運に遇ふも、束髪流行の勢のみは、日に月に進みて、はては前かけたすきをはなさぬ、水し女工女の類にさへ、用ひらるゝに至り、かのはじめに氣にかけたりし、容姿の醜きなど、ためらはんやうもなく、包物抱へたるはいふも更なり木綿着物きたるなどいとはんやは。かくてひと年とたち、ふたとせを過ぎし、都大路の異人の貰ひ子、ラシヤメン女と、罵る聲もやうやうに聞こえずなり、曾ては歸省せる女學生の束髪を見て、牛の何とやら、嘲りし、田舎漢も、束髪せる妹を伴て、その輕便を村人に誇るまでとなり行きて、今は束髪全盛の兆を見ん日も、遠からじとぞ思はるゝ。



かゝる有樣にて、束髪は行はれそめ、一二百年來、我國婦人の頭髪を支配せる不便なる壓制は取除かるべき勢となりて、在りし昔の質素にして便利に、清潔なる、狀態に近づきぬ、まことに悦ぶべきことゝいふべし。さて束髪につぎて行はるべき婦人風俗の改良は、衣服の外出に不便にして、手の活動おもふにまかせぬ點に向ふべき事、いはずして明かならん。明治廿七八年の頃、一時不振を歎きし女學の形勢、復た面を興して、高等女學校をはじめ、各種の女學校、やうやう盛になり、通學する少女の數、いと多くなり増されるが上、卅年卅一年の頃に至りては、女生徒の運動に心を留むる教育者も多くいで來、そが研究にとて、海外に女教師をさへ派出する形勢なれば、運動に不便なる服裝の批難、日に増し聲を高めたるに、同じ頃より、學校教師幼稚園の保姆の外、婦人の職業やうやう多くなりて、愈々

婦女の外出する機會も男子のごとく、家外に執務する者も多くなり行きければ、ひとしほ衣服改良の氣運を早め、卅一年の春の頃より華族女學校以外に婦人の袴用ひらるゝに至り頓に流行の勢となりて卅三年には女學生といひ女敎師といふものそを用ひぬは珍らしき心地せらるゝまでとなりぬ。袴の用ひられしにつぎては草履靴のよく行はれて齒下駄木履のやゝ好まれぬ風興りぬ。袴の流行は往年の束髪に比しては幾層倍もその勢はけしく其傳播も速かなりき。流行後僅か二三年にしてあらゆる都會の女學校を風靡し小學校幼稚園亦これを用ひざるは稀なるを見片田舍の地にも高等小學の女生徒裁縫專修科の婦人など袴を着くるを珍しとせざる傾をさへ生じぬ。されどかく速かに衣服改良の一階段なる袴の用ひられしも全く萬人一致の賛成によりてなれるものにはあらず、はしめは女子敎育者の中にすら、經濟上の點より、袴、新調の費用を願うて、父兄の思はく如何と躊躇し、さらぬだに、人の目につくべき、十六七歳の女學生が、普通には人の用ひぬ袴をつけなば、ひとしほ人目につくべきを憂へ、又は日本服中、最大の飾なる帶を廢するの、美術上惜しきを歎き、年寄れる人は、運動のあまりに活潑となり易き服裝となりたらば、女德をや損せんとの、あらぬ心配さへ加はりて、幾度か學校の中に、敎員會議開かれて後、袴は奬勵すべからず、たゞ生徒のするがまゝにまかせよとまで、定まれるもありしときけど、必要にせまられたる結果にや、不便を厭ふ人情にや、人の目に立つをもいとはす、美術的とやらんの、帶すつるをも悲しまで、ひたすらに父母に袴とゝのへ給ひてよと、すがる愛らしき令孃の手をば、流石に心づよき經濟家の父君も、拂ひ給ふことはなくてか、腰の周りのいと淋しくて、色の調和よき、帶しめたらんには、勝らずと、あまたゝび打ちながめ給へる美術家の母君も、わが娘のみには、似合てんとの慾目もありてか、一人まし二人ふえ、全級揃ひ、全校を擧げ、地質こそ、唐縮緬毛繻子、カシミヤと異れ、色は海老色を主とし、紫も稀にまちりて、女學生の世は皆袴と定まりぬ。われは世には、法令もて禁ぜられし跣にも、いかめ

しき人の目、盗みてはなりつべく、登るまじくぞおきてらるゝ、土手には登るあさましき人のありとも、女學生といはるゝ人のかぎりは誰れ定めしとにはあらねど、この流行の、袴着じと願ふもの、あるまじうぞ見えたる。

かゝる有樣なれば人によりては、袴の利益も便利もさとらず、風俗上の美しき點すらも心にとめず、只流行物なるが故に用ひたしと、願ふ者も出て來て、袴着たるまゝ、す足に下駄はけるも、袴のひも、胸高にきびしくしめて、却りて循環を妨ぐるも珍らしからねど、風俗の遷り變はる時代には、多少の弊害もあるべきは、何れの世とてのがるべきにもあらず、たゞ害の大なるを去りて、その小なるにうつり、利の小なるをすてゝ、その大なるにうつるを目的とだにせば、よき變遷といふべきなり。しかも歴世の女裝は、その流行、大かたいやしき巷に發し、卑くなまめかしきが常なるを、この袴のみは、他の識は知らず、この批難のみは、あるまじく、しかも打ち見たる所も、なまめかしからず、ありしならず、凛々しげにも、活潑氣にも、見ゆること、情弱世の流行とは全く異れるがごとし、されどなほ、古き習慣を法則の如く考へ、これを棄つるを法規をみだし、習俗を破る賊となす輩は、廣き帶を結ぶは、容儀を整へ、禮式に適ふ、唯一の道なりとして、細き帶をしめ、袴を着くるは、そを亂だすものとするもあれど、女の袴の昔より用ひられしはいふまでもなく、女帶のかく廣くなり來たれるもまことに近世のことにて、春臺が「獨語」にも「婦女の帶は金襴を美麗の限とし、黒地に梅松櫻を織り付けて、是れを鉢の木の帶と名付けて、珍重しけり、廣さ僅に鯨尺の二寸ばかり、紙を心として綿などいるゝ事なし」といひ「嬉遊笑覽」に引け



る女鏡の詞に「帶の廣きもせばきも時のはやりに從ふ、廣くすればばし(華美)に見えて鄙しきものなり、又ちいさすぐれば、腰もとあしく、およそ二寸五分たるべし」とあり、その外嬉遊笑覽に擧げたる色々の說を見れば、何れも昔は女帶の幅狹く、二重まはして、わきの方に片ひざ折りに結びて、垂らしたるもあり、突込帶とて先きを結ばず、折り込めるも珍らしからず、總て昔は自然にまかせて、手勝手よきよう、前にて結びたりし事、普通なりしも、幅のやうやう廣くなるまゝに、前に結びては邪魔となり、少しわきによせて結び、後にはまうしろに結ぶに至れるならん、組帶又なごや帶といへる、打ひもの平たく太きを、男の用ひて伊達としたりしが、女子も少きは用ゐたるにや、岩佐又兵衛が繪けりといふ、美人畫には、これをしめたるも見ゆ。何さま近頃のごとく、帶を衣服中第一の飾とすることはなかりしが如し。されど遊女藝人のたぐゐは、その頃より一歩づゝ進みて、常にやゝ廣き帶を用ひたるにや、廣きにすぐればはじに見ゆと女鏡にいへる事前にあげたるが如し。享保より下りて、天保の初年に至りても、六寸の帶は素人の用ふるものゝうち、最も幅廣きものにて、八寸九寸の帶は遊女の飾帶として、用ふるほかあらざりしこと、今は九寸あまりの丸帶ならでは紋附の上にしめて、高貴の人の前に出でられぬやうなりしこそ、まことにあやしともあやし。かの島田の宿の遊女が結ひそめたりしといふ島田まげ、近くは吉原の遊女勝山のしたりといふ勝山(異說あれども今いふ丸まげにおなじ)が、禮儀にかなへる髮の結ひぶりとなれるにも似て、太宰の春臺が、「風俗のうつり變る事、目前に歷々然たり、その中に昔と今と寒暑のごとくかはれるさへ、あやしとみるに、冠を履にはき、履を冠にきるやうなる事あるこそ不思議なれ」といへるも思ひ出でらる。されば今、細き帶を用ひ、女袴をつけたりとて、あながち古に反ける突飛の所業ともいはれまじ。

さて都市には、女の袴珍らしき時代過ぎ去りぬ。袴着たる婦人に遇へりとて、振り返へるものは少くなりぬ。かくて歩むごとに、露はれし醜るしき姿はかくれぬ、幅

廣く重き帶は取り去られ、馬背のごとく脊負ひあげたる帶揚は不用となりぬ、重き裾、幾枚かを重ねて、蹴返へす苦しみもあらねば、歩行の自由を得たる事いふべくもあらず、腰帶も緊しくしむべき必要なく、前をかたく合はすべき苦心もいらず、その氣樂なる事たとへんにものなし。とそかの風の吹きあるゝ日に、右手に包物をかゝへながら、洋傘をかざし、左手に辨當箱さげつゝ、褄の風にぶき返へされぬ用心する、憐れなる妙齡婦人の樣子に比ぶれば、これのみにても一生の中に、五年十年の壽命は延びつべくぞ見らるゝ。それさへあるに、さしも婦人が苦心せる腰部を細やかによそほふ事もいつしか廢りて、女敎師、女學生等の今迄は必要を感じつゝ、なほ用ひざりし、婦人股引もやう〳〵に流行し、椅子にかけて下半身の冷ゆる辛さも忘れられ、循環もの づからよくなりて、婦人に普通の病氣も減り行き、長襦



袢、長胴着、下着、上着の裾なほしにのみ苦勞せる人々は著しく閑なるを覺え、冬は膝のすれたる衣弱りたる裾を氣にかけ、夏は新柄の帶地に憂身をやつす令孃の數少なうなりて、袴新調に、不服氣なりし父親の機嫌もなほり、みづから進みて、白き足袋を、黑き靴下に、高き木履と低き靴に、あらためさせ給ふも多しときく、まことに婦人服、改良の、第一步は成功せりといふべし。

さて袴の流行につぎて、起るべき婦人風俗の改良は袖ならん、古の風俗の必ずよしといふにはあらねど、袖も元祿時代の繪卷物にみる如く、振袖なりとも、一尺七八寸を出でず、貞享の末頃よりやゝ永くなりたりといひて、二尺より二尺三四寸に至れるに過ぎず。とめ袖は長しとて、一尺二三寸より長からず、しかも袖口の下より鍋づるの丸みにも似たる形にそぎて、少しも活きの自由を害せざりしが、近き

頃に至りては、少女は木綿着物すら一尺七八寸の袖を普通とし、振袖ならぬも、一尺九寸より二尺に至ること珍しからず。四五歳なるは袖のたけ、地に引くを普通とし、縮緬の如き重き地質のものにて、仕立たる衣二つ三つ重ねたらんには、袖の重みのみにて、運動も自由ならず、見るもいと〻氣の毒なれど、母親は却て可愛らしと賞め、美くしと誇る、まことに沙汰の限りといふべし。山根醫學士の研究に因れば、日本人のなで肩となり、肺その他大切なる内臓機關の容積をちゞめ、活動を妨ぐるは、その原因、幼兒骨格の强固とならざる内より、長き袖の衣服を幾枚もまとはせ、その袖の重は、常に兩腕を下に垂れしむる傾をつくり、知らず識らずの間に、肩の發育を害するによると、まことにさることもあるべし。然しながらこはもとより、直接の原因にて、間接には袖の重きため、總て幼兒の活潑なる運動妨げられ、自然の發育を害すること、數ふるとも及ばし。そもおのが身の美しく見えんが爲に、多少の苦痛を感ずることとをもいとはぬ人が、外飾の爲にとて、不便、不自由、不衞生の服裝をなすは、さてありぬべし、子の貴さを知らぬ母親が、おのが慰みの爲に、おのが誇りの爲に、外飾の念もなく、修容の心もなき幼兒に、袖重く裾厚き衣服幾枚もまとはせ、たゞさへ運動を妨げられて、つらきが上そこに行かば、裾やけがれん、これをもたば袖やひかんと、裾袂の汚れをいとひて、意のまゝに遊ぶをもゆるさざる事、まことに不慈の極といふべし。されば晴着の改良は後の事とし、まづ第一着に男女に限らず、幼兒の常着を筒袖とすべし。男の兒の筒袖は近年都鄙ともに珍らしからずなり來たり、女の兒も亦この頃に至りて著くしその流行を見る事、喜ぶべき現象といふべし。中年以上の者の筒袖に至りては、自慣れぬ爲、異樣の感なきにしもあらねど、こも亦一時の事にして、かの束髪の始めて行はれし頃の、それよりも醜からず、今二三年にして普く行はるゝに至らば、袖にかはるべき適當の飾も出て來ぬべく、殊に學校に通ふものが、机に袂のかゝる憂もなく、躰操にたすきの必要を見ず、習字、圖畫、裁縫割烹の如き手藝はいふまでもなく、理化學の實驗、樂器

の練習、何一つ便利ならざるはあるまじ。通學の途次人の目を引くを厭はゞ、上に羽織を用ふるも、破布をきるもそは撰む所にあらじ。家内の仕事、また袖の邪魔ならざるもの少なく、室内の掃除、食物の調理、何れも筒袖をまつものゝみ。

誰れかいふ、我國の婦人は、習慣、習俗を墨守するに偏し、改良進歩に吝なりと、嗚呼まことに然らん、三十年以前の婦人は然らん。然れども明治の昭代に生れあひ、明治の教育を受けたるもの、かの束髪に成功し、袴に成功したる婦人は、決して舊習を墨守すその譏は受けまじ。必ずや婦人服改良の第二歩なる、袖を短うする事も成し遂げてはやまざるべきか、暫く記して世の風潮をうかゞはんのみ。



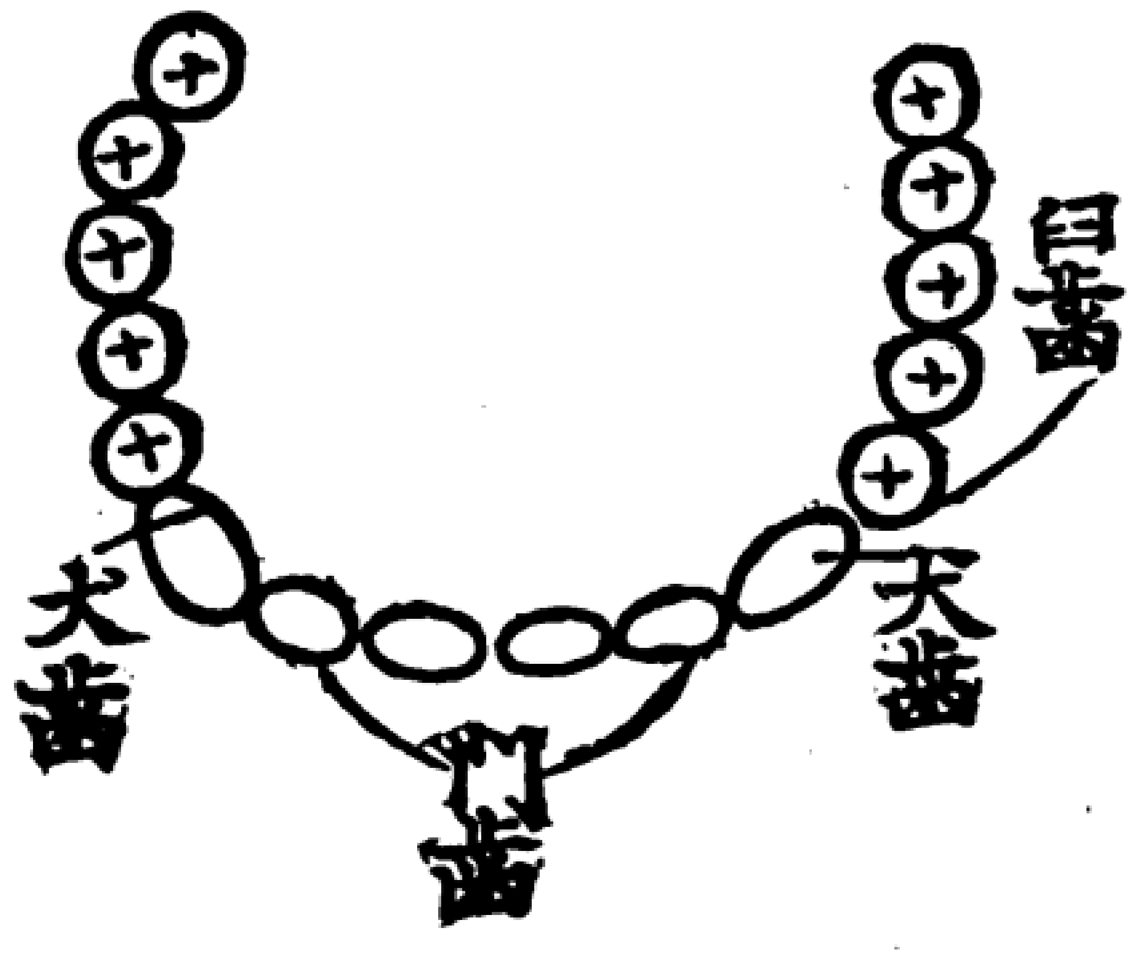
素人看護法

淑徳女學校 講師醫學士　佐藤恒久

運動機關の話

人の身體の中の一番上の部分に在る所の骨を頭蓋骨と云つて、腦髓を圍ちて居る所の骨でありますが、是は一の骨で成立つて居るのではなくして、多くの骨が集つて頭蓋を爲して居るのであります。其骨の形は先づ瓦の樣でありまして平たく一方に反つて圓みを持つて居るのでありますからして、何枚も其等が一所に集ると、空虚の玉の樣なものになります。其内に腦髓が在るのです。此數の多い所の骨の繋ぎ工合は、關節とは少しく異ひまして、縫合といふので在ります。勿論關節も縫合も、二箇以上の骨の接合した塲合に出來るものではあるけれども、關節の方は、前申して

通り、骨と骨とを繋ぎ合して、自由に動けるやうに出來て居り、縫合の方は、同じく骨と骨とを繋ぎ合しては居るが、兩方の骨の接觸して居る所が恰も鋸の歯の樣に爲て居て互に嚙み合つて、動かないやうに出來て居るのです。然うして幼兒の内は其頭蓋骨の縫合が出來上がるまでには、所々に隙間があります。例へば、赤兒の前頭には隙間があつて、脉が搏つて居る、（其を窓門或は百合と申します）が、其赤兒が段々成長するに從つて何時となく其隙間が無くなつて仕舞ひます。其外頭蓋の下部には大小幾何も孔があります。即ち大は脊骨の方に連續する所に一ツありて脊髓が通て居ります其外に血管の通ふて居る孔もあり、神經のもあります。又頭蓋の左右には耳の機關を藏する骨室があります。其から顔の骨は頭蓋の前の下の方に繋ぎ合つて居て、頭蓋骨と堅く着いて居て、動かないやうになつて居り、尤も下顎だけは關節で結び着いて居て、是は自由に動けるやうになつて居ります。是は口を開いて見るとよく分ります。然うして顔の骨の中には所々凹むだ所があります。其所には眼が、在つて視感を司り、鼻が在つて嗅感を司り、口が在つて味感を司りて居ります。而して口の中には上下の顎に歯が生えて居て、大小の差はありますが、其數は上下合せて三十二枚あります。今口の中から見た所を畫きますと、上圖の如く門歯と云ふのが左右二對あり、其次に少しく幅の廣い太い歯が左右に一對ある、之を犬歯と云ひます。其から次は臼歯が左右に五枚宛あるので、上下合せて三十二枚となります。



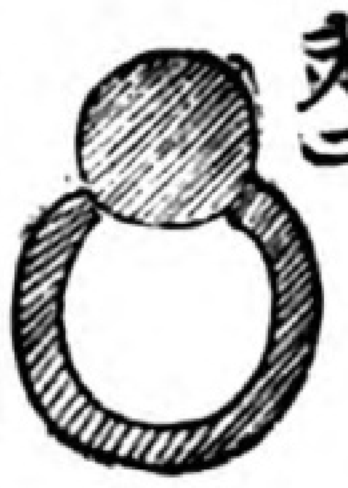
顔の骨の事は先つ此位の事にして置きませう。脊骨と云ふものは、頭蓋骨の下の方から脊部を眞直に柱の樣になつて、臀部に達して居る骨であつて、是と頭蓋骨と其から頭蓋骨と脊骨との關係を申述べませう。脊骨と

し頸を左右に傾けるのは此關節が司るのではなくつて、脊骨の作用です。然うして脊骨と云ふものは一箇の骨では勿論ありません、幾何も小い骨が合して成つて

第一 側面ヨリ見タル形

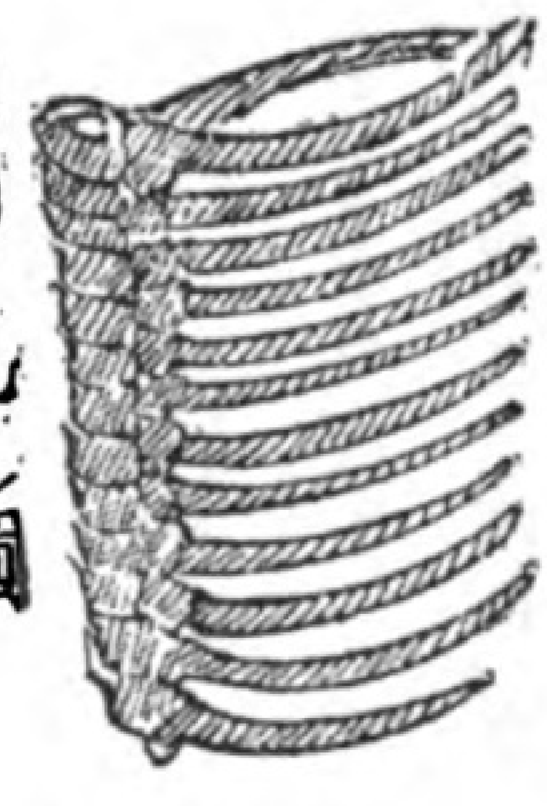


第二 上ヨリ見タル形

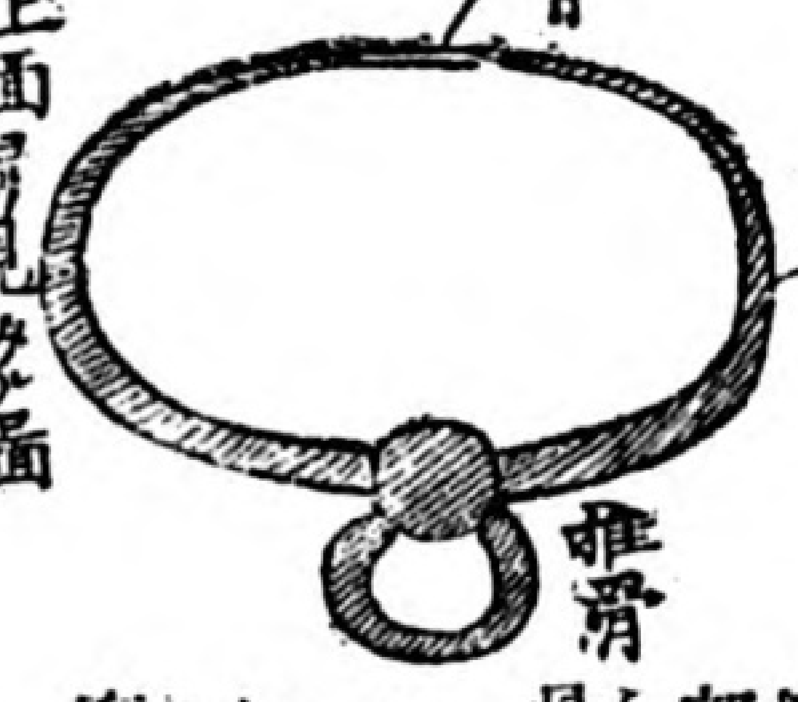


居るのでありまして、其を今一々分離して見ると、上圖の如き格構で、其中央が孔になつて居て、恰も寶石入の指環の樣な形のものでありまして其物が澤山重り合ふと、一の脊骨と成るので、其孔の中には脊髓が入つて居ります。而して此指環の樣な形をして居る骨を椎骨と云ひ、此の椎骨が幾何も重つて柱の樣な形に居つて居るのを椎柱と云ふ。此椎骨が幾何も重つて居る其一々の關係は關節に成つて居るからして、其椎骨が一々屈曲する事が出來、從つて後へも前へも自在に運動する事が出來ます。若し是が壹箇の柱の樣なものであつたならば、決して動く事は出來なかつたのでありませう、けれども小骨が集つて關節作用に成つて居るからして、什麽でもなるのであります。其で此椎骨と云ふものは幾何あるかと云ふに、先づ頭蓋骨の下から勘定して、即ち脊骨の一番上部の七箇を頸椎と云ふ、今頸を前に屈して脊の最上部を觸つて見ると一番高く突出して居る骨があります、是が即ち上から七箇目の頸推です。其次には胸推が十二箇ある。此十二箇の胸椎には例の如く其指環の樣

側面ヨリ見タル圖



上面ヨリ見タル圖



な骨の横面から長い骨が左右に十二箇宛着いて居る、之を肋骨と云ふ。其肋骨は躰の前面に曲つて居て、其處で胸骨と云ふ胸の中央の堅長い骨に集つて居るのでありますが、其中で一番下部の左右二箇宛の肋骨の端は胸骨まで來ずして、途中にぶらついて居りますが、兎に角此脊骨から肋骨が出て胸骨と合して胸廓と云ふものを造ります。お若い方は御存知無いけれども、昔

の人は越後の國の人は肋の骨が一本足らないと申しました。甚麽事は無い筈であるのに、何故然う云ふたかと云ふと、彼の角兵衛獅子と云ふものは越後の方から出て來るのであまりに躰が柔軟して居るから、然う云つたものでありませうが、越後の人だからつて、肋骨の一箇足りない譯はありません、何人でも十二對揃つて居るのであります。其から胸椎の下には腰椎と云つて五箇あります。是は頸椎の同様で肋骨の様なものを出しては居りません。其て先づ椎骨は總て〻二十四箇在る事が分ります。此腰椎の下には薦骨と云ふものがあります。是は一の幅の廣い大な骨でありまして、椎骨とは全く様子の異つたもので、大な三角形をして居ります。此薦骨の下部で、薦骨よりもずつと大な骨が左右に一對在つて、腰部を圍繞いて居る、其を髖骨と云ふ。此の左右の髖骨と薦骨が即ち三箇集つて、骨盤を爲して居ります。

其から上肢になります。上肢即ち臂の骨は、一番上即ち肩から肘迄の間を上膊骨と云つて、一番太い骨である。其から肘の下部には二本細い骨がありまして、内側の方を尺骨、外側の方を撓骨と云ふ。(臂の内外側を定めるには掌を前に向けていふ)其下部には小な骨が八箇固つて居ります、之を總稱して手根骨と云ふ。其から先の所で、丁度指の股の所に、堅く高くなつて居る所があります。其所までの間の所に掌骨と云ふて五箇あります。其先は指骨と云ふのが十四箇あります。即ち拇指だけは骨が二箇より無いから十四個になるのであります。是は隨分一寸した所でありますが、骨の數は澤山に成つて居りますから、其丈運動が充分に出來る譯であります。前申した通り、上膊骨は肩の所で軀幹に附着して居りますが、其附着工合は、胸廓の後の上の方に肩胛骨即ち俗に貝殼骨と云ふ骨が附て居り此骨に關節があつて上膊骨が結び着けられて居ります。又肩胛骨の前の方に鎖骨があつて肩胛骨と胸骨とを結び着けて居ります。

其から下肢は什麽云ふ風に軀幹に着いて居るかと云ふと、骨盤の髖骨の外側に左右二の關節があつて、其作用

に依つて、躰に結び付られて居るのであります。其下肢の一番上の部分が大腿骨、其下部で内側の太い骨を脛骨と云ひ、外側の骨を腓骨と云ふ。此大腿骨と脛腓兩骨との間の前の方に平らに圓い皿の様な骨がありまして、之を膝蓋骨と云ふ。然うして腓骨と脛骨との下部に足根骨が七個あり、其次に蹠骨が五個、其次には趾骨が十四個あります。是も矢張手の指と同様で、踇趾は骨が二個よりありませんから、丁度十四個ある譯です。以上申述べました如く、人躰は二百十五個の骨から成立つて居て、其等の骨は皆關節と縫合に依つて連絡して居るのであります。

女子運動法

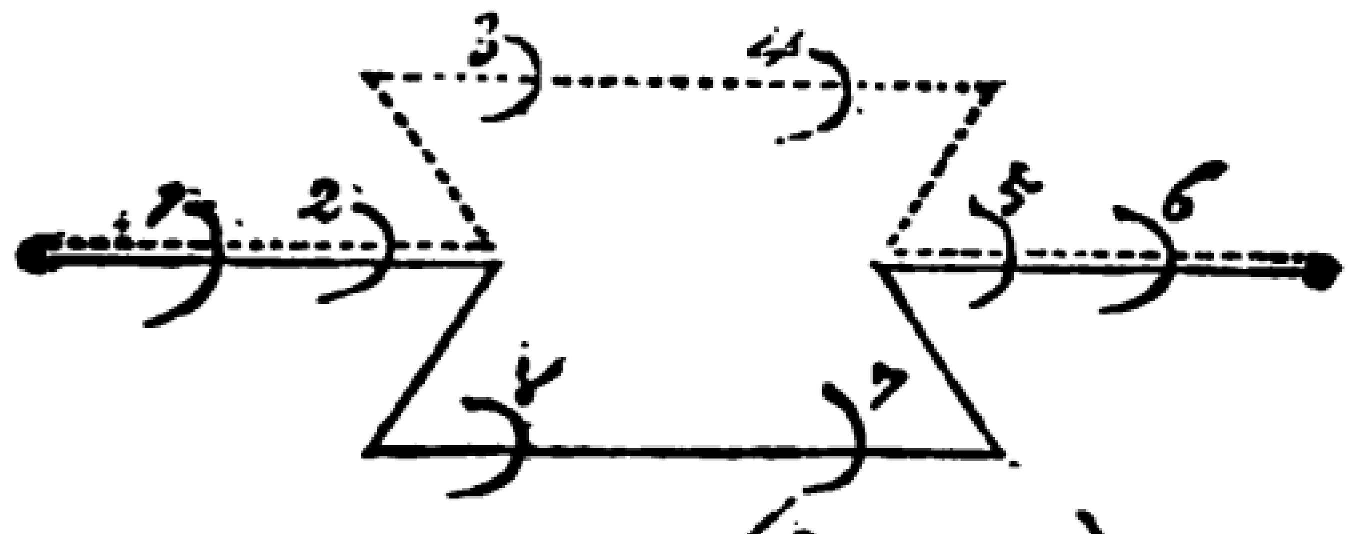
西川政憲

クロッケー

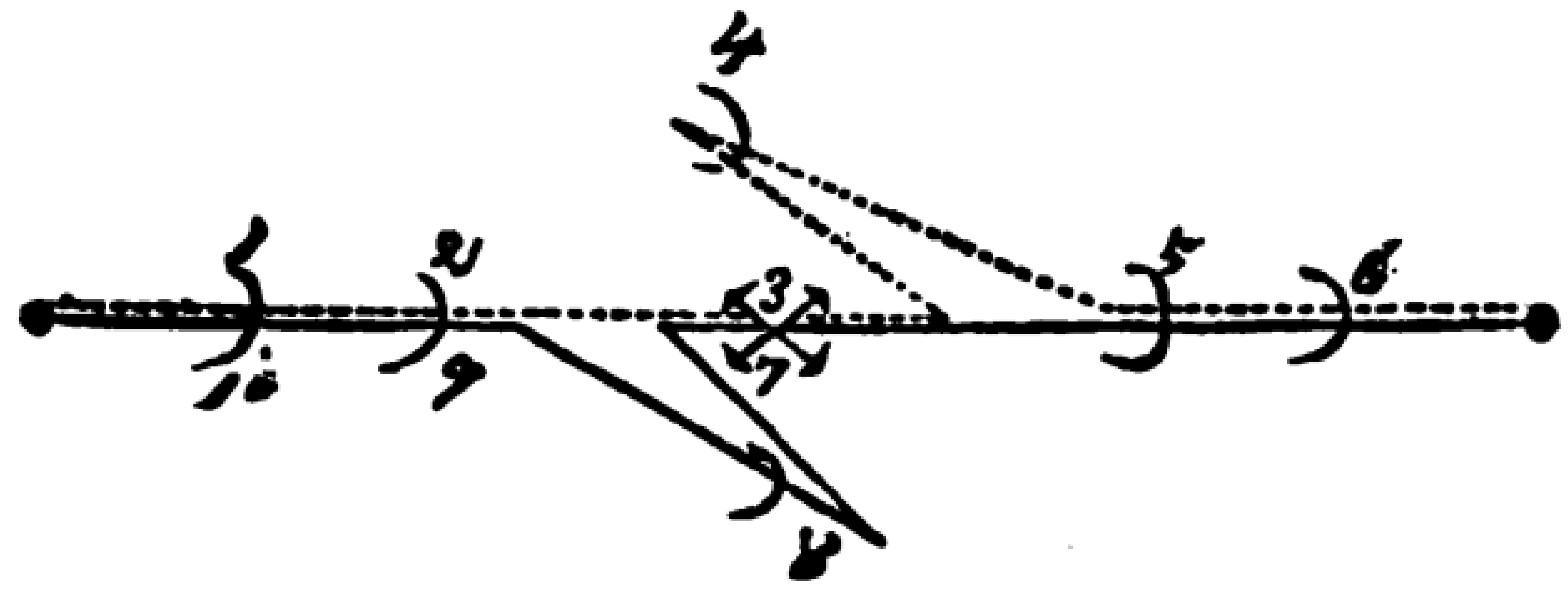
クロッケーと云ふ運動は共同的運動で老幼を問はず靜粛に出來る遊戯で此の運動には決して寸毫の危險もないです。其人員は四人か六人か八人か幾人でも偶數でさへあれば宜いのです、而して其人數が源平兩組に分れて各組共同して勝敗を爭ふのです、各組の全員が其目的を達せなければ勝とはなりませぬ、其内の一人か二人は早く目的を達しても他の者が目的を達しなければ勝と云ふ譯に參りませぬ、其れ故全員は協力一致互に輔け合つて行かなければなりませぬので全く共同的の運動で自分斗り都合が宜ければ人は何でも宜いと云ふ個人的の者ではありませぬ、此の邊から老へて見ますと家庭躰育法としては最も有益なる運動法であります。

（一）「コート」の構造

「コート」と云ますのは運動をする場所です、此の場所は廣くも狹くも場所の都合で差支ないのですが出來得れば廣いに越した事はありませぬ、土地は成る可く平らで小石の無い所で芝生ても原ても宜いのです、此の平らの場所に鐵輪を以て關門を造るのです、其關門の造り方も種々ありますが通例圖の如き者です併し此の



(コート)

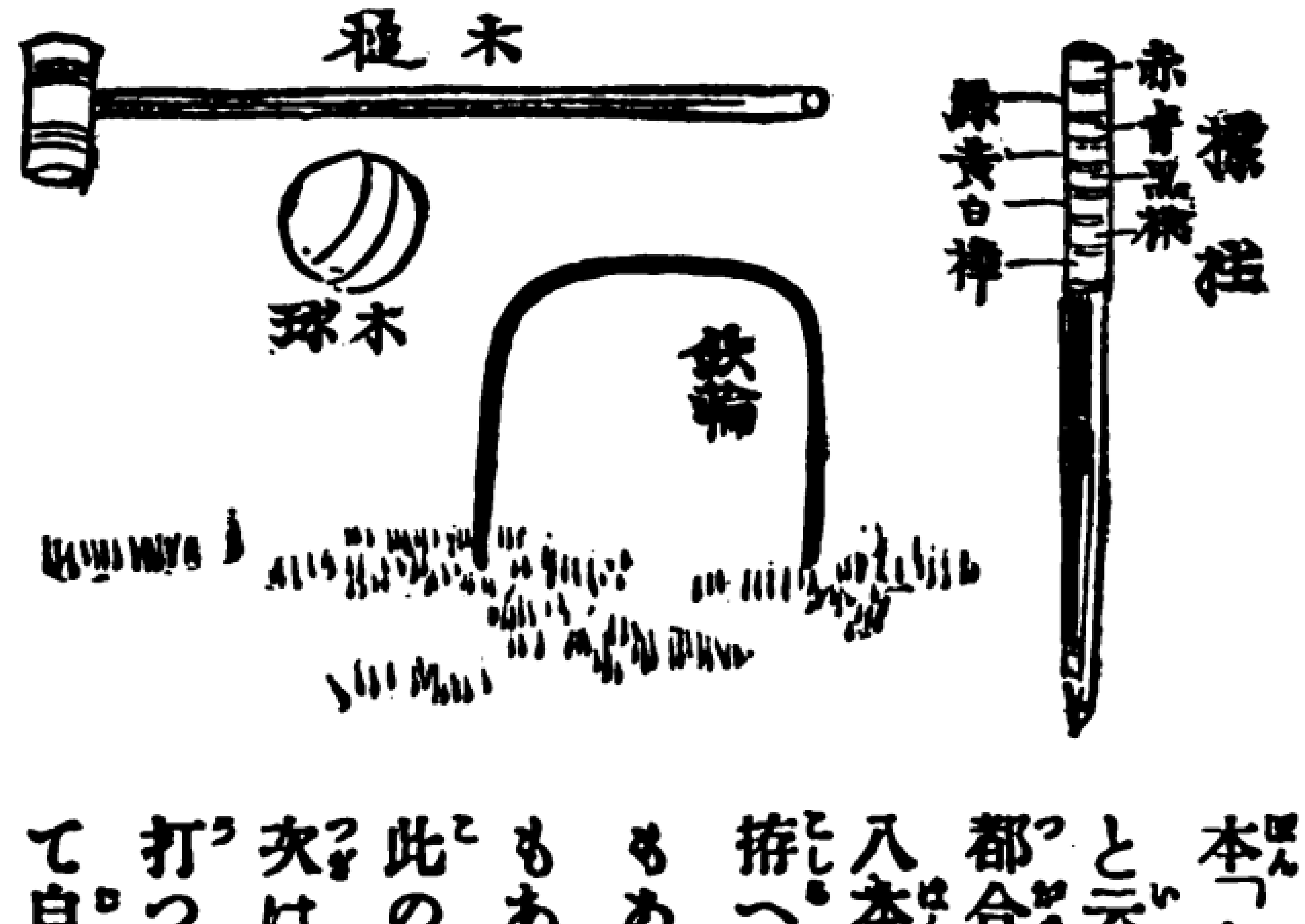


配置は約束に因て如何様に配置しても少しも差支はないです別に一定の規則と云ふものはありません、圖中にある點線は始め行く時に通行する道で實線は歸りに通行する道です、其順序は第一關門から第二關門第二より第三第四と番號の順序に通つて歸て來るのです、場所の設備は是れ丈けの事です

(二)　運動用器具

此の運動に用ふる器具は尤も單簡な者で標柱二本、之は「スターチングペック」と云つて演習を始める所に一

(三〇)



本「ターチングペック」と云つて到着點に一本都合二本、其から鐵輪八本之れは「コート」の拵へ様で六本にする事もあり又拾本にする事もあるです、次は木球此の球を轉がすのです次は木槌此の槌で球を打つのです、票と云つて自分の球の越さんとする關門に掛けて今度は此の門を越すのであると云ふ票に掛けて置くのですか大抵是れは用いないです

「ペック」(標柱)の長さは二尺か二尺五寸位で大さは直經一寸位の者で此の頭の方に段々刻んである此の所に赤青黄等の色を付けてある此の色の順に球を打つのです。

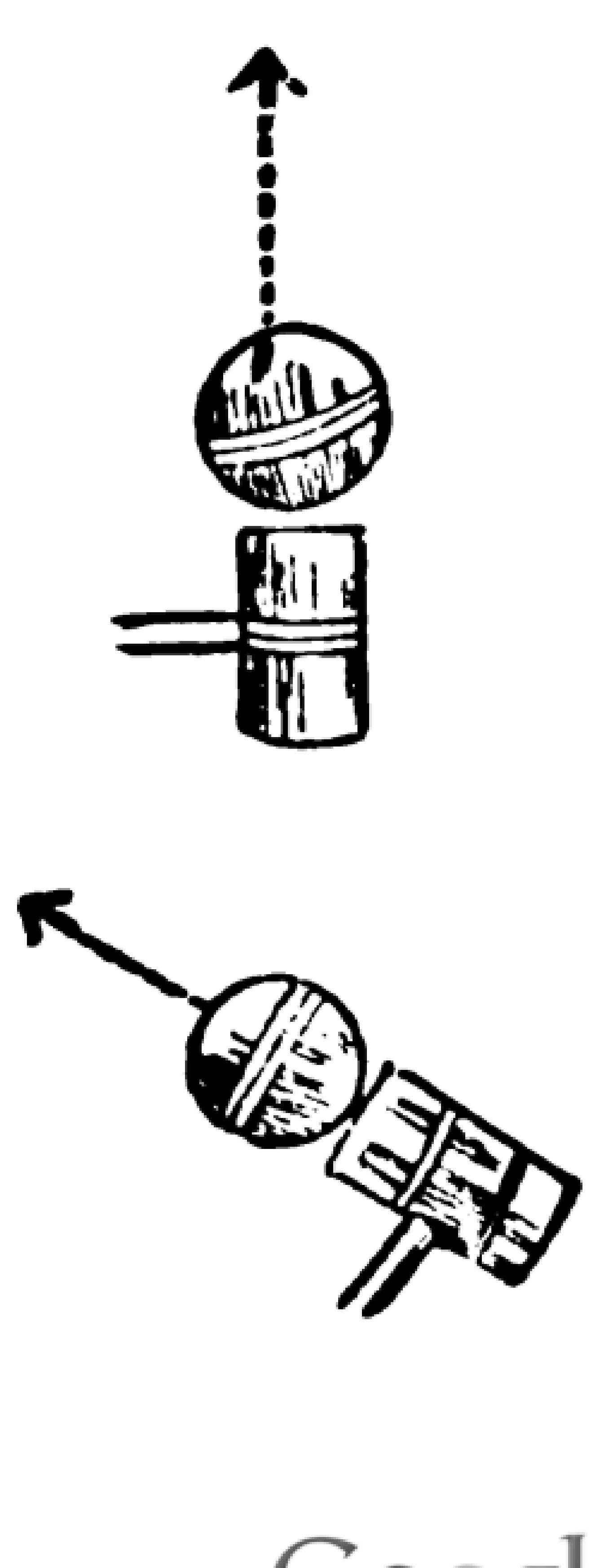
鐵輪は剛い針金を山形に曲げあるのですが其形は隨意です只門になつて居れば其れて宜いのです、木球は直經三寸か三寸五分位の大さて中央に筋を入れて其筋の中に赤なり黃なり青なりの色を付ける此の色は標柱に付けてある色を一個に一色づゝ付けてあるので一番の者は赤色の球を持ち二番は綠色の球を持つと云ふ樣に銘々一個づゝを持つて居るのです

木槌の形ちは種々あります大皷形になつて居るのもあれば棍の大きくなつて居るのもあるてずが兎も角も槌になつて居れば宜いてす其大さと長さは其人の身長に依るものてす、余り長いと扱いに困り又余り短いと腰を屈めなければなりませぬから其人に應じて適度なのを用ふるのてす通例は三尺から三尺五寸位てず。

票は武力でも何でも宜いてす二つに折つて一寸と鐵輪に掛ける樣になつて居れば宜いてず其色は球と同じ色を付けるのてす

（三） 準備演習

此の運動では槌を以て球を打ち思ふ所に轉がすのか六ヶ敷のて是れを熟練する必要があるのてす球を遠くに轉すのと近く轉がすのは槌の力の大小に困るものですが、斜めに轉がすのと直線に轉すのとは多少の熟練を要します、元來球は圓形で槌の面は平面てすから余程調子が能くないと思ふ樣に球が轉がりませぬ、準備として「コート」てない所で自由自在に球を打つて見れば自然と要領を見出すことが出來ますが、球を打つに付ては槌を持つて居る手元が一番肝要てす此の手元が狂ふと球は意外の所に行くものです、故に槌を持つには兩手を近く持ち兩肘で極めて槌は此の肘を基點とせる振動の力に依つて球を打つ樣にせないと狙は定まつても槌が意の如くなりませぬ、球の轉がる原則とも云ふのは球に觸れた槌の面と直角に轉がるのです此の原則を應用して斜



あなり眞直なり思ふ所に轉がすのです、少し稽古すれば容易に出來るのです球が自由に轉る樣になると今度は「コート」を拵へて遣つて見るのです。

（四）方法

「コート」が出來上つたら「スターチングペツク」から自分の持つて居る槌の柄の長さ丈け離れて球を置き第一門に向つて打つ首尾能く此の門を通り越せば再び第二門に向つて打つのです一度球を打つた時は必ず一門は越さなければならぬ若し越す事が出來ない時は休止して次番の者に讓る次の者も同じ方法を持つて球を打ち順次皆の者が打ち終つたら更らに一番の者が打つのです、若し一度打つた球が一時に第一第二等の二門を越した時は其人は更に二回球を打つ事が出來るのです、斯の如く順次に關門の番號を逐つて順路を通過し最後の關門を通過したならば其所にある「ターチングペツク」へ球を當て更に歸路に就き順次關門を經て始めの第一に歸つた時「スターチングペツク」へ球を當てれば此人は遊戲の目的を遂したのです、此の樣にして先着を爭ふのが此の運動の方法です

（五）ゲーム

勝負の方法は三人か四人づヽの兩組に分れて各組の全員が互に先着を爭ふのですが餘り人數が多いと混雜しますし又餘り少數であると興味が薄いです全員八名で四名づヽ兩方に分れた位いが適當な人數です。其所で遊戲をする人は豫め組を分けて「スターチングペツグ」を中に狹んで兩側に並んで居る、何方が先に始めるかは約束で極めて置いて始めに遣る方が奇數番號で一番三番五番七番是れは「スターチングペツク」の方より番號を付ける、敵の方は偶數番號で二番四番六番八番是れも同じ方から番號を付ける、番號が定まれば一番の者より始める其方法は準備運動の時と仝じ事です番號の順に敵味方交互に始めて互に先を爭ふのです。

斯の如くに互に進んで行く時に敵の球に近寄つたならば其球に自分の珠を當てるのです若し當つたならば其人は自分の球と敵の球とを密接して置て自分の球を踏み付けて槌を以て自分の球を打つのです、すると此の

反動で敵の球は遠くに打ち飛ばされるです此の打ち飛すのは敵の不利益の方向に成る可く遠く打ち飛ばすのです、即ち敵の進行を妨害して味方の利益を圖るのです。

段々進行して多くの關門を通過し最終の關門も越して「スターチングペック」の所に歸り之れに當さへすれば上りになるのですが其れを當てずに「ロウペル」となるのです「ロウペル」と云ふのは漂泊者とも浪人とも云ふので何處でも行けるのです又元の所へ歸らうと思へば順番さへ來れば何時でも歸れるので只「ペック」に一度當さへすれば宜いのですから此の邊に漂泊して居る、すると敵の球が進行して歸て來て其球の近所に來ると其順番の時に此の球に當てるです當ると前の方法で極めて遠くへ之を打飛ばし次に來れば又打飛ばして「ペツグ」に近寄せない樣にするのです、又味方の方に後れて居る者があれば此の球の所に行つて當てゝ此の球を利益の方に導びくのです、故に「ロウペル」は一方に敵を妨害し一方に味方に加勢をするので極めて有力な位地に居る者です。

先きに歸つたからとて「ペツグ」に當てゝ競爭場裡を退いては後で味方が如何なる不利益の位地に落ても如何ともする事が出來ないですから今一歩と云ふ所を殘して競爭場裡に留まつて萬一の場合には應援に出掛けるのが必要です、又此所まで來ない時でも途中で味方の球に近寄つた時其球が不利の位置に居たならば之れに當てゝ利益の位置に打ち遣る樣にし敵の球ならば遠くへ打ち飛す樣に始終味方は相援け敵の進行を妨害する事は常に心掛けて居なければならぬ。

斯の如くにして味方の者が大抵「ペツグ」に近付いて是れならば敵の妨害を受ける事もなく大丈夫であると思ふ時に一時に「ペツグ」に當てゝ勝利を占めるのですが實際此の戰畧と云ふものは實地に當つて見なければ豫め一定の法則を定めて置く譯には行かぬものです、所謂千變萬化神出鬼沒の妙は實地百錬の功を積まなければ得られない者です。

(六) 注意

球を打つときに槌を以て球を押すことは禁制です必ず槌を振つて球を打つのです。

味方なり敵なりの球を打ち飛ばすのは第一門を通り越してからです始めから一門も越さない内は之を打ち飛ばす其は出來ませぬ。

球を打つて門を越す時に鐵輪の眞下に球が來る事がある此の時は鐵輪の頂上から垂線を下し其垂線が球の中央より前にあれば門を越した者とするのです。

自分の球が二つの球に當る事がある此の時は何方の球を打ち飛ばすかは全く其人の適宜です、二個の球に當つたからと云つて二個とも打ち飛す事は出來ない矢張り一個丈け打飛すのです。

球に當てた時若し其球を打ち飛さい時は其人は今一回自分の球を打つことが出來るです、當てた球が味方ので打ち遣つた所で利益でもない反て不利益になる樣な時は人のを打つことを止めて自分のを進行させるのです。

自分の球が如何なる所に行くとも球の働きに任せて決して手足の力を調へて之を止めたり進ませたりすることは出來ないです。（完）

食事の作法（下）

禮法講習會師範
實踐女學校講師　田島秀子

前回には本膳二の膳、吸物燒物等の御話をしましたが是より一汁五菜の食ひ樣及ひ客の心得を申しませう、客の心得食ひ方は一汁三菜に同じ但し引落しの物を食ふには飯汁の替りを受け本膳の物を食ひたる後にすべし又引落しの物の蓋は足打臺の下に入れおくすべて引落しの物は右手に取り上げ左に持ちかへ箸を取りて食ひ又箸をおきて右手にて引落しの上におくまた重引にて中酒の時取肴を進めなば吸物椀の蓋を取りて之れに受けてよし食ひ終らば元の如く吸物椀に蓋をなすさうして飯汁を替へるのは始め飯汁を二三度食したる時に替へる事、次は▲二汁五菜　本膳を持ち來り給仕の人禮をなす時に前と同じ又本膳の物を食ひ飯汁の替りを受

て前の樣に食し後二の膳の物の蓋を取り二の膳を下におき汁椀を右手にて取り左に移し例の如く食し下におき飯を食ひ箸をおく飯椀をその次におく最後は飯にて箸を止め椀を下におき、先づ二の膳の方より蓋をなし次に本膳の汁椀及ひ壺などに蓋をなす、然し汁椀の蓋は食ひたる後一々蓋をなしてもよし、凡て客となる者は膳に向ひては飯椀の蓋より取始むる事その外は皆前にお話したる通り、又食事中は能く靜かにし左右を見る事などのなき樣、食品の中若し自分の好まぬ物あらば蓋を取りたるまゝ何氣なく箸を附けぬがよし、されと皆主人の心を盡して調理したる物故成るべく之れを食するがよろし食事中は舌音、齒音などせぬ樣に能く注意しなければ失禮で御座います。若し客が貴人なる時は主人自ら本膳を持ち出でゝ進め又本膳を引く前には貴人に限らず主人主婦は座をはなれ客に向ひ麁末不行届なりし事をのべて禮を致します酒の時に主人より客に向ひ盃を乞はるゝ時は紙にて盃を拭ひ盃臺なき時は懷紙の疊たる上に盃をのせて出すがよし此外未だ種々の事あれどさしたる必要なきは略し、次に

▲棚飾の事を少し計御心得までに御話いたしませう霞棚又は違ひ棚とも云ふ之れには巻物のたぐひを軸盆にのせ兩手にて持出て次に料紙硯箱のたぐひを前の如く持ち出で中の棚におき次に盆石又は相當の置物等持出て下の棚にいづれも正しくゆがまぬ樣におくかりにも同質同形の重ならぬ樣に心がくべし又盆石の代りに文臺、硯箱を以てし巻物の代りには書帖を用ひ中の棚には置物のたぐひを飾る事もあり次は送別の盃事を申しませう客、主人座につきたる後熨斗、鮑三方を出す之れは前に御話したる通り次に吸物を出だし酌人二人双びて出で一人は盃の三方と正しくなせば長柄の銚子を持つ之れを本酌といふ今一人は提子乃ちひさげを右手に持ち左手を前の樣に持ち（新年の祝盃の時と同じ）次の間の中央に座し提子を下に口を向うにしておき控へ居る本酌はすぐ上客の前に至り前の如く銚子三方を下におき酒一獻を進む此時又取肴を進めてもよし本酌はすぐ立ちて次の間の閾の内に座す提子の人（之れを

加へ酌の人と云ふ）立ちて本酌の人と向ひ合ひ銚子の中へ提子より酒を加へ後本酌は立ちて客の前に進む加への人は元の座になをる本酌は上客へ又一獻すゝめ順こに進め終らは又前の如くして加へ後最初に加への人退き次に本酌の人退く又同時にてもよし吸物は給仕人出てゝ引くその時一同禮をなず旅立又は里出の時に右の手續に致しますが今は皆何に限らず同じ樣て御座います此次は吉凶事の禮をお話いたしませう。

季節惣菜の志をり

石井泰次郎

春の惣菜の取合せの二三をわぐれば左の如し

煮物　むき蛤　四半豆腐　木のめ　　汁　つみ入　水菜

煮物　苞はんぺん　ちりめん鉄　わらび　　汁　干大根　若布

煮物　燒とうふ　しひたけ　干ぜんまい　　汁　干大根　よめ菜

汁　いてう大根　みつ葉　　平皿　さん木こんにやく　唐がらしみそ

○むき蛤の拵へやうは　蛤のむき身をさつと洗ひてつゆに仕立て用ひるのである

○四半豆腐の拵へやう　豆腐を切るのに、眞二に切つた形狀にするのである

○いてう大根の拵へやう　大根を四ッ切にした形狀をすぐにも、いてう大根といふので、又直の二方を、庖丁でえぐつてつくる事もある

○さんぎこんにやくの拵へやう　こんにやくを、算木の形にきつて用ふるのである

田樂のつくり方○はんぺん○てんぐわく○木のめみそ

はんぺんを田樂豆腐の大きさに切て、青き田樂を燒につから串にさして、やいて、すこしこげめのついた時に、木のめみそを、刷毛でぬつて、すこしあつためて、田樂箱に入て出すのである

○豆腐○てんくわく○木のめみそ

豆腐を、かためにつくりて、切方して、水氣をきるやう朳、青串にさして並べて燒くこの作り方は普通故唯熱

練次第であるが是をつゝむ所の木のめみその搾へかたは

○並みそ(あまきもの)三十匁○砂糖十二匁○みりん四匁○

水三匁の割合

第一に味噌を擂盆ですつて、馬尾篩でこしそれを鍋に入て、砂糖とみりんと水と合せて、温き火でといつて、これを木杓子で能くねつて、味をこゝろみ田樂へぬりよいくらゐにしてぬる

土筆汁の搾へかた

味噌は三州岡崎みそでつくる、味噌を、水にひたすほどにつけて、すこしごいて、味噌のひらくほどに木杓子でくづして、堅魚をけづりて、味噌十四匁に、五匁水四合ぐらゐとし、鍋に入て煮込む

みそつけておく時間十分間　にこむ時間は十分間

つくしゆてゝのち、下煮が二分間

さてつくしは、はかまときさやをとりて、よい所のみをつみて、熱湯へ入てゆてる次に味噌汁を煮込んだのを、馬尾篩で、別の鍋へこしこむ　こしこむ仕方が、此汁の名稱となつて昔から煮こし汁といつて居る)

次に土筆を別の鍋へ、右の汁を少しわけた中へ入て二分間煮る次に煮た土筆を、椀に數をして入れ、上から汁を金杓子で入れて出す順序なり、之は土筆の季節の汁の一品である

其汁の中へ、すこし粉山椒をふりいる、其こしらへ方は山椒のみの皮を、ほうろくて煎て刻んてこまかにして用ゐる、

○りんご羹の搾へかた林檎の能いのを皮を剝いて、輪切にして、熱湯の中へ入て、さつとゆて取出して、湯を切りて馬尾篩にて、うらへのせて木杓子でおし粉にして、夫に砂糖みりんをまぜて鍋に入てねる ○りんご五ツ○さたう百二十匁○みかん水少々

右のわり合にてねり上つた時に、白角天の溶かしたのをつぎてかたむる其白角天のとかしかたは○白角天二本半○水五合

白角天をさつとあらひ、水の中につけておき暫くして取わげて、庖丁てこまかに小口切にして水にわはせて

煮る時間は五分ほどて、皆とけたらば、右のねつたりんどの中へ、鍋の上へ馬尾篩をかけておいて、其中へ入てりんごへまぜて、又ねりつめるので時間は○りんごねる十五分○白角天入て五分
うすき箱の中へ流しこむ

日用輕便料理

春江女史

▲あへ物

一鳥拌　何鳥にても宜しけれどまづ野鴨の類最宜し永く湯煮してよく擂り裏漉して味噌に混ぜ、野菜類を拌るなり。

二白拌　豆腐へ白味噌を混ぜ、擂りて裏漉して胡蘿蔔、蓮など拌る

三黒拌　これは昆布を燒きて粉末になし味噌に混せて擂りて裏漉して野菜に拌る

四青拌　菠れん草杯の青菜を湯煮し白味噌に混ぜ擂り裏漉して拌る

五黄拌　これは蛋黄を湯煮し白味噌に混ぜ擂り裏漉して野菜其外のものをあへる

六赤拌　これは鹽梅を砂糖と白味噌に混せ擂り裏漉して拌る

七肝拌　鱈の肝など最宜し、他に鳥の肝又は鮑魚腸杯にても宜し、肝を煮て味噌に混ぜ擂り裏漉して拌る

この外胡桃拌、胡麻拌、罌粟拌、蓼拌、薑拌、木の芽(山椒)拌、芥拌等孰れも其品を味噌に混せ擂り裏漉して拌るなり。

▲魚飯の拵方

鯛、比目魚、鰹の類を三まいにおろし皮と骨類をよく去り擂盆にて能く擂りゆがきて水嚢にてこし、偖飯は常の如く焚きよくむれたるとき右の魚を揉みほぐし飯に交せ合すなり扨て此飯を客に供するとき汁其他膳部の仕立方取合あり、先づ手塩皿にはかくや漬、薑漬杯を盛り○猪口は春菊の浸し物（或は菠うれん草にてもよしのて上に胡桃を揉みかくる○平は丸むき蘿蔔のめんをとり餡みそこくせう、上に千山椒をおく○茶碗はわ

んかけ豆腐摺山葵を蓋の上におく汁は生清汁にて煮汁を入れず○加薬には二色おろし葱の微塵、海苔揉み等皿様の器に入れ添ふるべし但四季によりて仕立方種々ありと知るべし

▲鯉三品料理

鯉水つくり　これは子のなき鯉をきわめて薄く刺身に造り、汲みたての水に鹽を少し入れ二三度も洗ひ水氣を絞り身のちゞむほどにして煎り酒又は芥子酢をかけて出す

鯉こくせう　此の拵らへやうは鯉の生たるを俎にあげ頭を切り鱗の間より筒切にし胃袋の苦膽を潰れぬよう取り出し、其餘は卵も膓も一切筒切にし扨て上等の赤味噌を擂盆にて摺り鍋に移し、右の鯉を入れまた頭を割り、尾を切り、鱗とも一同入れて二三時間程煮るべし客に進むるに其儘温めて椀に盛り出すべし

鯉膾　これは子持鯉なれば子は別にとり出し酒に浸し置き身をざつと湯煮して細く造り煎り酒を温め、これにてあへ、山葵澤山或は薑にてもよし入れ酢を少しかけ器に盛りたるとき子を交ぜるなり。

▲鰻の料理法

通例の鰻を熱灰へ差入れ三分間許にして之を取揚げ能く灰を拂ひ丸く巻き厚紙或に布にて之を包み尚冷へざる内之を砧やうの臺に載せ能く叩き、細く剖き、皿に盛り食鹽或は醤油を少し注ぎ其上に熱湯を注ぎ食す尤も之を燒くには丸く巻き紙に包み水にて濕し熱灰に差込みて前の如くするも可なり亦、

同煮方　煮物に用うるは初め頭と身とを取離し暫時水に浸し置き、頭を身に巻き込み、竹の皮にて二三ヶ所縛り、味淋醤油砂糖等にて味よく煮つけ、食するには之を小口より輪切にすべし、見た所もよし味も亦甚だよきものなり。

日々の献立

東京女學館　岡田さち子

此の處に示せる表は現今我國中等社會の生活の程度を標準として概裁せしものにして其家族を七人と假定し一人分を一ヶ月凡ソ六圓を定め其内より米代として先づ二圓を引き去り殘り四圓を七人分合すれば二十八圓となる之を一週間に割りあつれば凡ソ七圓弱にわたる即ち左の如し

週日＼三食	朝	晝	夕
月	味噌汁（豆腐） 煮豆	魴鮄のやき魚 うの花	あさりのつゆ きんぴら牛蒡
火	汁（さといも） 淺草のり	牛肉 おはのひたし	煮[illegible]烏賊のうまに めざし
水	汁（わかめ） てんぶ	精進あげ あさつきぬた	燒玉子 ひしきの煮つけ
木	汁（ねぎ） からしなす	むつの煮魚 うつらまめ	[illegible]のつゆ 燒牛片
金	汁（かぶ） たゝみいわし	鮭 湯豆腐	しちう やつがしら煮つけ
土	汁（大根） つくだに	かながしら燒魚 薩摩芋につけ	豕こんにやくごぼうのよせ煮 [illegible]きりぼし
日	汁（志ゞめ） 生玉子	かきのふらひ いり豆腐	ちくはみ つばのつゆ 迷りのにつけ

一號

摘要	金額 円	
味噌汁一週間代		150
ふらひ		400
牛肉二斤及ねぎの代		620
うづら豆		100
葱二本		100
玉子十四個の代		350
かつぶし一本		250
煮豆		070
海苔一帖		070
たゝみいわし		140
うの花		080
燒魚		315
ちくはのつゆ		100
茶		050
にんじん		070
煮魚		350
鮭		175
豆腐十丁		200
かながしら		215
薩摩芋		050
次號へ繰越	4	285

二號

摘要	金額 円	
前號より繰越高	4	285
豕一斤 こんにやく ごぼう		380
煮姑いか		250
きんぴらごぼう		060
めさし十把		060
鰹		180
ひじき		020
はんぺん		210
しちう		350
やつがしら		090
あさり		050
ぬた		100
からしなす		100
切干一袋		010
ちくは ほうれんそ		120
大根一本		010
こまつな		020
てんぷ		090
合計	6	385

此表に示す合計六圓三十八錢五厘を七人に平分すれば一人前費用は一週間にて九十一錢二厘一毛となる

家庭時言

文學士　大町桂月

離婚

今に離婚の絶えざることそなげかはしけれ。その中には、妻が夫を見限りて去るあり、夫が妻に愛想つかして去るあり。されど、若き夫婦は、きはめて仲よきに邪見なる姑が、無理に生木をさきて、破鏡の嘆をいだかしむるためし少なからず。悲惨なる哉。

概して人は色情衰ふれば、心冷かになるもの也。愛嬌もなくなれば、同情もなくなるもの也。姑も若き時は、鬼も十八、番茶も出花、顔のうるはしきにつれて心もうるはしく、多少の嬌羞もありしなるべけれど、取る年波に、慾は皺と共に深くなりぬ。息子に好き嫁をと必死になるも、愛よりも、寧ろ慾の分子多し。それも息子が自から求むるならば、ともかくも、息子は年盛り、勉強盛り、まだ妻帯する氣なしと本心より辭めど、母は察せず、年の盛りを獨身者にして置けば、つひ惡友に誘はれて、結句一家の不經濟、早く妻をもたして置けば、息子の身のしまりがつきて、我も安心とて、强ひて妻をもたせられたる息子こそ、よい迷惑なれ。さてその妻、器量もよし、教育もあれば、若き男の氣に入らぬ筈なし。されど、色衰へて、慾のみ深くなれる老母の眼には、器量も、學問も、猫に小判なり。五十年を家庭の中にすごし、貧乏世帶をふりまはして、中産以下の身分となしたる所謂やりての賢夫人、義理に目をつぶり、不人情を忍び、物見遊山は云ふも更なり、身のかざり、お化粧もよそに、たゞ家の爲めと、朝は早く起き、夜はおそく寢て、骨身も惜しまず立ち働き、世間よりは善く言はれずとも、一家繁昌する次第なれば、似たもの夫婦、こゝが古人の所謂國亂れては良相を思ひ、家貧にしては、賢妻を思ふの本文、亭主もその働にめんじて、惡い顔はせず、我こそは細君として此上もなきもの、細君たるものは、斯くなくてはかなはずと、五十年來の自惚は、釋迦出でて、婦人の道は、さうしたばかりのものでもなしと、說

敬するとも、到底之をうちけすべくもあらず。かゝる細君の良人となれるものは、概してお人よし、五十年を細君の尻に敷かれて、とんと頭があがらず。嗚天下の、何事も細君まかせ、細君一人が切りまはす家庭かゝる老母の眼より見れば、十七八にて高等女學校を卒業したるものが氣に入らぬは、もとより當然の事也。普通學の知識は、直接に家庭の生活には役立たず、ひと通り世上の通理を解するも、香の物の漬け方を知らず、一家の經濟上にも拔け目多かるべし。このやうなぐずな嫁にては仕方なし、折角しあげたる家産をつぶすは必然の事と、慾より迎へて、慾より追ひ出す、洵に殺風景なる次第哉。老主人が口を出さむとすれば、あなたは知らぬ事とはねつけ、當人の息子が不服をとなふれば、お前の爲めを思うて、する事也。それ程に、他人の妻が可愛うて、腹をいためた母が可愛うないか。男ののろいにも程がある。よし〳〵その決心ならば、いつまでも腐れ女のそばにへばりついて、でれつけよ。この母は、死ぬるぞと、をどかしらしからぬ刄物三昧、いや〳〵はなして、死なしてと、泣き叫ばれては、仕末がつかず、むざんや二世も三世もと思ひ、思はれしも、覺めて果敢なき一夜の夢一池の春水、風波たゞならず、はなれともなき一雙の鴛鴦、長へに相へだたりて、夢ならでは、また逢ふ由もなし。おき忘れし油くさき櫛も妻のかたみと、むねにいだいて泣くもあはれ也。

嗚呼、擇ぶときに、賢不肖はわかるべき筈なるに、わが慾の爲めに、他の娘の清淨の身をきずものにして顧みず、嫁をもらふことを、品物を買ふと一般に心得るこそなげかはしけれ。

婦人の用語

婦人の用語は、成るべく上品なるを要す。例へば、便所といふ代りに、「憚り」と云ひ、「叔母さむ」と云ひ、「匂ひ坐敷」と云ふが如し。又子宮病と云はずして、血の道と云ふが如し。今日人にほめられなどする時は「おごりませう」と云ひ、「おごりません」と云ふと、男女ともに、きまり文句也。おごるとは、他に御馳走することにて、語源の基づく處、上品ならず。かゝる言葉は、貴婦人には

似合はしからざる也。

なべて、貴婦人の用語は、上品なる代りに、禮義的に流れて、躍動せず。藝者、酌婦などの用語は、下品なれども、よく躍動し、人を刺激するもの多し。いづれかと云へば、上品なるがよけれど、あまり儀式ばかりては、旨味なし。醇化して、且つ躍動するを要す。而して如何なる語が上品なるか、下品なるか、躍動するか、躍動せざるかは、一々之を示すに由なし。たゞ意を此に致して、用語の改良を圖るべき也。

裁縫と料理

中等以下の家婦としては、よしや琴はひけずとも、花はたてられずとも、裁縫と料理との心得はありたきもの也。衣食住の三者は、生活に缺ぐべからざるものなるが、裁縫は衣に伴へるもの、料理は食に必要なるもの、一家の妻たるものは、何事はさて置き、この二事には長ぜざるべからず。

裁縫の事は、仕立屋のあるあれど、仕立屋にやるにしても、ひと通り裁縫の心得なくてはかなはず。富豪の家ならば、お針を二人も三人もおくをうべけれど、中等以下にては、財政之を許さず、家内すくなけれど、着物は他へ出してもよきも、人數多くなりては、さうは行きとゞかず、良人にも、子供にも、ぼろをきせるは、家婦の耻辱ぞかし。

料理も、豪家ならば、料理人を置くを得べけれども、それも中産以下の家にては許されぬ事也。一寸考ふれは、よき肴だに買はゞ、料理はどうでもよきが如くなれど、人に味覺ある以上は、さう無造作にも行かぬもの也うまく料理して、うまく喰はせるとは、健康上にも必要なる事にて、一家を面白くする上には、ことさら缺ぐべからざる事也。

大酒家の妻

大酒家の妻こそ氣の毒なれ。酒量小にして、一合ものめば、猿のやうな顔になり、爪のさきまで赤くなる人はいかに酒を好むも、身躰の害にならず、始末もつきやすけれども、所謂のんだくれに至りては、飲めば飲むほど酒がうまくなり、何となく面白くなり、また元氣になり

平生おとなしき人も、わらくなり、口數も多くなり、怒り、叱り、氣焔を吐き、不平を言ひ、終には暴ばれ出す。からだにさはる、もうこれ切りて、おつもりになされよと、とむれば、却つて飲みたくなり、小言を言へば、なほさけ自暴飲をなすが、上戸の常也。

元來酒はくせ物也。諫めても、とても、とてもとまるものに非ず。世上飲を解せざる婦人、たゞ口やかましく言ひて、良人の飲酒をとめ、もしくは節せしめむとす。誤れる哉。

酒を節せしめむとせば、酒よりも、更に面白き物をつくらざるべからず。謠曲にてもよし、碁にてもよし、その他何物にても、良人の好むものを求め出して、いざ之より例の事せさせ給へ、酒はまたいくらもあれど、婉曲に言ひ出せば、のんだくれも、惡い顔はせず、他の面白き事の方に、心ひかれて、酒は自からひかへ目になるべし。直諫は拙の拙なるもの也。諷諫もなほ拙也。諫めずして諫むる、これ諫の最も巧なるもの也。

端午の節供

五月五日を端午といひ、又端五ともいふ、端は初の義、午は五の通音にて初の五日といふことなり、別名を重午、端陽、蒲節、解粽節竹葛節又懸艾令節などいひて俗に菖蒲の節句といふ、古へは朝廷にて節會を行はせられ、幕府時代には諸侯登城して粽を献上し端午の祝儀を申し貴賤共に粽を食ひ、菖蒲酒を飲む例なりしが維新の後五節を廢せられてより、其の御事無くなりしも、民間にては矢張り昔の紀念を留めて、鯉の吹流しを立て武者人形を飾りてこの日を祝し居れり。

昔し朝廷にてはこの日群臣も菖蒲の鬘を懸け參內し、酒及藥玉を賜ふ。藥玉を五色の絲もて臂に懸くれば惡鬼を拂ふと云へり。こは推古天皇の御代より始まりし御事なりといへり。

この日 武器を飾る事も、古くより行はれたる事にて、始めは、近衞、兵衞、衞門の諸府にて、甲冑を門前に立列ねたるより起りたるものなりとぞ。

降つて　德川幕府の頃に至り、將軍家に世子誕生ありし節其初節句には諸大名より菖蒲兜を献ずる例なりしかば幕府にてはこれを設けの假屋の壇に飾り、白地に葵の紋の旗、白紅の吹流し等を建て、其の傍らに槍、長刀、弓矢等の武具飾りたり、されば民間にても、其風に傚ひ、男兒ある家には、戸外に幟を建て、冑人形、武器等をも飾りたり。

始めは　幟も紙のを用ゐ、兜人形も、厚き紙に人形を彫り附け、薄き板もて兜の形とし、馬も菰にて造り、武器も竹又は木を削りて造りたるものなりしが、元祿の頃より一般に美を競ふの風を生じたるより、兜と人形とを別々として、今の如き武者人形の立派なるものとなりて、これを床に飾ることゝなり、また幟も別に小さきものを、造り、幟枠を設けてこれに鎗、馬印絹鯉などをも並べ建て、いづれも見事に座敷へ飾り附ける事となり、之れをば座敷幟と稱し、戸外に立つるものを外幟と稱するに至れり。

斯くて　外幟も追々紙を用うるもの少くなり、贅澤なるは縮緬製のものもあれど多くは眞岡木綿の二巾物或ひは三巾物とし、之れに家々の定紋、又は神功皇后、金時、義經、清正、鐘馗抔の武者を畫きたるもの多かりしが、近年都下に於ては、鯉の吹流し大に流行し、外幟は、地方に限れるが如き姿となりたり。

鯉の吹流し　は何時の頃より始まりしや詳かならざれど思ふに五六十年以來のものなるべく、これを用ゆるの意は、龍に化すといふ龍門の鯉の譬より、武士の間に出世魚とて、貴ばれしに出でたること勿論なり。

家庭の衛生

（肺病豫防の說）（二）

或る大醫の報告に依れば、獨乙國肺病療養所から全癒して退所した九十九人の中、七十二人は全く健康者と同じく健全となり、中十五人は再發したとある、又亞米利加アスヘユル療養所の退所者四百五十七人の中、六十七人は全く健全にして、七十人は比較的健全に、二百五十八人は快方に向ひ、殘り六十二人は死亡したとあ

る、偖右の統計は立派な學者が責任を帶びて報告したものであるから、聊かも疑ひを容れる廉はない、右の如く肺病はモハヤ不治の病ではないのであるから、從來間違つた考を持つて居た人は早速改めて知らない者にも聞かして夫れ〴〵治療豫防の方法を講じ他の病氣の如く十分醫師に信頼すべきである

○○○○○

肺勞とは何ぞ　肺勞とは何であるか、概括していへば肺に於ける一の慢性の病で、結核菌の浸入に依りて起るものである、此結核菌といふものは肉眼に見えない樣な小さな有機躰で、大概肺勞に罹つた者の肺には幾百萬の黴菌が居る、そうして之が段々化膿等に依つて肺の實質を崩して仕舞ふのである、肺病の起る初めは中々病者には分らないが、その兆候として記すべきは咳嗽、咯痰、發熱(殊に日暮に躰温の上るもの)、呼吸困難、胸痛、食欲不振、咯血、羸瘦などである、此等の兆候が見えて少し變だと思つたら直ぐ良醫に就きて療治を托さねはならない

扨て其の細菌は如何して人躰に入るか、肺勞患者がまだ床に就くほど甚だしくならない中は日々通常人の樣に立働いて、而かも絶へず無數の結核菌を排出して居る、その排出するのはドンナ鹽梅であるかといへば、先づ肺勞患者が所構はず痰を吐く、そうしてそれが乾燥すれば風の爲めに塵埃と共に空氣中に飛散するのである、まだそれ計りではなく、話をする時に乾咳をしたり、唾液を飛ばしたりする事がある、此中にはいふまでもなく細菌が交つて居る、コーいふ風に肺勞患者は始終その細菌を撒ちらして居るので、それを他人が呼吸と共に躰内に送り込んで仕舞ふ、されど身躰が極健全で無病な者はその細菌を受けても何ともない、健康者の鼻粘液、血液及胃液は疑もなく細菌を殺す力を持つて居るから侵入した細菌は自然に死滅して了ふけれども若し平素虚弱の人であるか且つ病氣でもして居る人ならば、侵入した細菌は直に繁殖するのである。

▲豫防の方法　此問題は最も肝腎で最も世人が注意しなければならない條りである、先づ第一に健康者の豫防に就ては患者に注意して貰はなければならぬ、實は

患者の注意か最も肝腎なのである、即ち患者は其細菌も飛散しない様に努めるのである、前にもいふ通り細菌は痰、唾咳などに依りて排出されるのであるから之を注意しなければならぬ、第一の方法として前にもいつた通り肺病の細菌は咯痰から空氣中に飛散するものであるから患者はマヅ痰壺以外に一切何處でも痰を吐いてはならぬと決めねばならぬ、次ぎは始終ハンケチを用意して咳をする時嚏をする時には必す口、鼻をハンケチて抑へて唾汁の飛ばない様にせねばならぬ、さうして一躰細菌は前にいふ如く痰の乾燥によりて飛散するのであるから、之に付ても能く注意して痰壺の中には始終水を湛へるか、或は鋸屑の様な物を濕して置く様にせねばならぬ、又ハンケチは常に濕して置かねばならぬ、されども直乾くものであるから油紙又は油を布きたる布の嚢中に之を入れて乾かぬ様にせねばならないさて此痰壺ハンケチの類も毎日之れに消毒をして清潔にせねばならぬ、その清潔の方法も之を其儘遺棄る様ては何にもならない、何故かといへば之が其處で乾燥して病毒が空氣中に飛散するからてある、だからその水は火に懸けて煮沸して後で棄てなければならぬ、又鋸屑等は燒き棄るのが一番善い、又ハンケチは使用後石鹼水に浸して半時間計り之を煮沸すれば、後は他の物と一所に洗つても仔細ない、以上が患者の注意すべき事てあるが周圍の人は甚だ豫防の仕様に困るけれ共話をする時はマヅ一メートル（日本の三尺三寸）以上離れて居れば唾は飛んで來ない、それだから患者と同衾接吻等は大に禁物である、而し右の様に細菌を防ぐよりは細菌を飛散せしめぬ様にするのが肝腎てあるから從て患者の注意が最も必要である、けれ共患者が以上に書いた様な注意の箇條を行はない時はドーするか、之には誠に困るッてす、一應は忠告してそれても應じなければ仕方がない一切健康者は患者と交際しない、呼かけられても振り向きもしない様に疎遠にするの外はないのである。（つゞく）

史傳

伊勢（本朝名媛事蹟）

文學士　尾上柴舟

「難波潟短かき葦のふしの間も逢はて此のよを過してよとや」。しばしの間といはずして節の間といひ、而して、これに序するに葦を以てし、難波潟を以てし、更に、この世に懸くるに、此節間を以てし、而して、意義の温籍と、姿態の優麗とを併せ得たるなど、脩辭に巧なるものにあらずんば、求めて至る能はざるところあるにあらずや。これ、有名なる百人一首に出て、蜑婦樵豎、猶、吟誦して忘れざるものなり。然れども、世人、此歌を知りて、其人を知らず。平安朝、初期の女歌人伊勢に關しては殆んど云ふところなきが如し。

平安朝の初期、尤も、歌に名あるものは、いはゆる六歌仙の一人なる小野小町なり。「花の色はうつりにけりな徒に我身よにふるながめせしまに」、「わびぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらば去なむとぞおもふ」の類優艶纖弱の中、無限の憂愁を包めるが如きは、確かに、女歌人の先達たるの價値あるを見るなり。然れども、伊勢の才氣奔放、事につけ、折に觸れ、縱横詠出したるもの、或は、小町に過ぐるものあるに似たり。定家卿の上手の歌として、此二人を併稱し、無名草子記者の、小町を評して、「女のうたは、かやうにこそ、と覺えて、涙ぐましくこそ、」といひ、又、伊勢を稱して、「伊勢の御息所ばかりの人は、いかでか、昔も今も侍らむ、」といへる、實に其當を得たるものといはざるべからず。

伊勢は、藤原眞夏の四代の孫、藤原繼蔭の女、繼蔭伊勢の守たり。故に、世人、其女を稱して亦伊勢といへるなり。幼にして、すでに、才名あり、長じて、尤も、詠歌に巧なり。花晨月夕、佳作あらざるなし。宇多天皇の中宮七條宮温子に仕ふ。藤原時平の弟忠平、歌を贈りて之を挑みていふ。

伊勢のうみにあそぶ蜑ともなりにしか
　浪かきわけてみるめかつかむ

伊勢之を肯せず、答へていふ、

朧げのあまやはかつぐ伊勢の海の
　浪たかきうらにおふるみるめは

父母も、また甚だ、伊勢を愛したりしかば、當時の輕薄なる若公達に通じて其生涯を錯らむことを怕れ、嚴に、之を監守せり。然れども、伊勢は其情にほだされて、遂に、忠平に許せり。父母、之を視て、宿緣の爲すところとなし、敢て、之を制止せず、たゞ、戒むるに、少年の徒、身を托するに足らざるを以てせり。

伊勢と、忠平との交情は、淺からざりしが、傍人の口を憚かりて、忠平は來去常ならざりき。伊勢之を愛ひて、歌ひていふ、

なき名ぞと人にはいひて止なまし
　心のとはゞいかゞこたへむ

忠平聞て、大に、之を憐み、いよ〳〵、其情を密にせらる。然れども、平安朝は、畢竟門地の世なり、勢力の世なり。力を宮庭の間に伸べ、威を都門の中に張るは、たゞ、門地と、勢力とにあるのみ、當時、身を儒門に起して、絶世の才、深遠の學、名望一時に高く、顯榮一家に集りしものは、菅原道眞なり。年少氣鋭の輩、姻緣して、富貴を計らむとするは、其當さに然るべきところなり。忠平、もと、華冑の出、居ながらにして、朱紫をとるを得べし。然れども、猶權門に結びて、志を成さむとせり。故に、一伊勢守の女を棄てゝ、大臣の女婿となれり。父母、伊勢にむかひていふ、果して、我言の如し、と、伊勢、慚愧して出づるところを知らず。忠平、書をおくりて、分疏す。伊勢肯ぜず、

あすか川ふちせにかはる心とは
　みな上下のひともいふめり

といひ、更に

厭はるゝ身をうれはしみいつしかと
　あすか川をもたのむべらなり

忠平答へていふ

あすか川せきて止むる物ならば

ふち瀬になると何かいはせむ

忠平、稍陳ぶるところありと、いへども、伊勢は更に、承引せざりき。忠平、乃ち伊勢の五條の家に來る。時まさに秋、霜葉甚だ美なり。忠平其一葉をとりて題していふ。

人すまずあれたる宿を來て見れば
今ぞ木の葉はにしき織りける

伊勢、憂愁の中にあり。然れどももとこれ風流の人、故に直ちに答へて曰く、

涙さへ時雨にそひてふる里は
紅葉の色も濃さまさりけり

かくの如き事ありきといへども、伊勢は忠平の再び來らざるを察し、父繼蔭の、任に大和に在るに赴きて慰むるところあらむとし、忠平におくりていふ、

三輪の山いかに待ち見む年ふとも
尋ぬる人もあらじとおもへば、



これ「我庵は三輪の山本こひしくばとぶらひ來ませ杉立てる門」によれるなり。父の許にある三閲月、憂欝の情禁ずべからず。乃ち、國中の寺院を巡詣して、以て慰めむと欲し、まづ、龍門寺に賽す。寺後、飛瀑あり。直ちに、雲霄より下りて、鞺鞳雷の如し。傍に、仙人窟あり、青苔深く封して、松蘿堅く鎖せり。伊勢歷覽しておのづから涙の下るを覺えず。歸途、大に雪ふる下て坂本に到る、同行の人、皆瀑を詠せむ、といふ。伊勢、乃ち、

たちぬはぬ衣きし人もなきものを
山姫の布さらそらむと

と歌ふ。人々感歎して、また、これに次ぐものなし。此夜、途に宿る。伊勢、惆悵眠るあたはず。瀑布と、岩窟とを追懷して

見もはてずそこに消えなて限りなく
　厭ふうき世に身のかへりくる
と詠じ、終夜啼泣、双袖皆沾へり。歸て、家に至るに中宮の命ありて、召すこと急なり。繼蔭もまた、これを強ふ。伊勢、乃ち止むことを得ず、再たび、京に入る、路伏見を過りて
　名に立てゝふしみの里といふことは
　　紅葉を床にしけばなりけり
宮に入りて、仕ふること始めの如し。忠平、聞きて、之と會せむとす。伊勢應ぜず。兄時平も伊勢の才色双絶なるを知り、來て曰ふ、弟は輕薄兒なり、むしろ我に來れ、と、伊勢また應ぜず。伊勢の里亭、前栽の秋草、甚だ風趣あり。一日時平來りて、其薄を結びて去る。忠平後に之を見て、
　花すゝき我こそしたに頼みしが
　　穂に出てゝ人に結ばれにけり
と歎る。時平猶伊勢におくりていふ
ひたぶるに思ひなわびそふるさるゝ
　人のこゝろはそれぞよのつね
卿、猶、忠平を思ひて、惆悵たるの、世上、輕薄概ねかくの如し、といひ、暗に、我に來れの意を寓せるなり。伊勢返歌していふ。
　世の常の人の心をまだ見ねば
　　などか此度消ぬべきものを
我未だ、いはゆる、世間の常規のかくの如きを知らず、故を以て、悲痛す、といふなり。伊勢、宿直の夜、忠平、人をして、假初に下りよ、語らはむと、いはしむ。伊勢答ふるに「心をしばし慰めて」の古句を以てす。忠平乃ちいふ。
　鴇のまにはや慰めよいはのかみ
　　ふりにし床をうちはらふべく
伊勢直ちに答へて
　わたつみと荒れにし床を今さらに
　　はらはゞ袖のあわときえなむ
といふ。人々之を聞き眠を覺して歎稱せり。
時平忠平共にかくの如く迫れりといへとも、伊勢、再び

之に許さず。只、中宮の奉仕、甚だ、謹めり。宇多天皇、その賢を聞き、召して寵幸せさせたまへり。伊勢も、自から、よく、誘惑を避け、榮達を得たるを喜び、父母もまた、甚だ面目となせり。暫らくして孕むあり、行明親王を生む。これより、人稱して、伊勢の御といふ。御は尊稱なり。而して伊勢皇子を桂に置きて身は猶宮中に在り。一日雨ふる。遙かに、皇子を思慕し、悵然として悲む。皇后（中宮、時に皇后たり）歌を賜ひて曰はく、

月の中の桂の人をおもふとや
雨に涙のそひてふるらむ

伊勢答へまつりていふ、

ひさかたの中に生ひたる里なれば
光をのみぞたのむべらなる

皇子も、われも、たゞ、君が光を仰ぎ奉るのみ、といふなり。此年、天皇、位を敦仁親王に讓り、次て、宮を去りて、亭子院に出でまさむとす。伊勢もまた出でむとして、住み馴れし弘徽殿の壁に題していふ、

わかるれどあひも思はぬ百敷を
見ざらむことのなにか悲しき

云ふ、我が奉仕せる天皇、今宮を去りたまはむとす。此宮中、我と相思ふものあるなし。故に、今去らむとす、しかも、愛惜するところあらず。然れども、只一片眷戀の情、堪ふべからざるものあるは何ぞや、と。天皇、之を覽そなはして、其傍に書き添へたまひて曰く



身一つあらぬばかりをおしなべて
行きめぐりてもなどか見ざらむ

天皇は、朕一人にもあらず。次々の天皇に仕へ奉らば、しか名殘惜しき宮中も、また見るを得べからむ、何ぞ、

今を限りと、思ふべけむや、とのたまへるなり。已にして、宇多天皇は、昌泰二年に落髪して、仁和寺に入りたまへり。皇后も、伊勢も皆哀惜せり。皇后

人わたすことだになきを何しかも
　長柄の橋と身はふりぬらむ

伊勢答へまつりて、

ふるゝ身は涙の中に見ゆめれば
　長柄の橋にあやまたるらむ

かくの如く、互に慰問せしが、三年を經て、法皇、山ぶみより、歸りたまひて、故の宮に入りて、齋飯きこしめしたまへり。皇后

言の葉にたえせぬ露はおくらむや
　むかし覺ゆるまとゐしたれば

伊勢

海とのみまとゐの中はなりぬめり
　そながらあらぬ影の見ゆれば

これ、法皇の、出家の姿したまへればいへるなり。伊勢は、かく物寂しき宮中に在り。人世の浮沈常なきを歎ぜしが、その生み奉りし皇子も、入才にして、かくれさせたまへり。伊勢、晝夜慟哭、殆んど絶せんとす。翌年五月、曉天杜鵑の啼くを聞きて

死出の山こえて來つらむ時鳥
　こひしき人のうへ語らなむ

杜鵑を冥途の鳥といふ。其聲甚だ哀しければなり。曉天、殘月依稀たるの時、近く、此裂帛の聲を聞く、心膓割くが如し。伊勢の此歌、實に、其誠情を抉惕せしものといふべし。かくてある中、延喜七年は來りぬ。此年は、また、伊勢に不幸なる年なりき。何となれば、伊勢の尤も、信頼し奉りたる、もとの皇后温子、日頃の御病、革まりて、遂に、またかくれさせ給へればなり。伊勢の悲歎、思ふべし。後事果てゝ、宮人、皆退き去らぬとす。伊勢、乃ち、長歌一篇を賦して、その悲懐をのぶ。

冲つ浪　あれのみまさる　宮の中は　年經てすみし
伊勢の蜑も　舟流したる　心地して　よらむ方なく
悲しきに　涙のいろの　くれなゐは　われらが中
の時雨にて　秋の紅葉と　人々は　おのがちり〴〵

別れなば　たのむ蔭なく　なりはてゝ　とまるものとは　花すゝき　君なき庭に　群れ立ちて　空を招かば　はつ雁の　啼きわたりつゝ　よそにこそ見め。

初め、哀悼の情、甚だ切にして、而して、身の依るところなきを述べ、次に、互に、散去せば、たゞ、此宮をよそに見るのみならむ、といふ。格調、大に下れり、といへども、悲響哀音、今猶、耳に在るが如し。蓋し、古今集中、長歌の尤なるものなり。

かくの如くにして、伊勢は、法皇に離れ、皇子を失ひ、皇后に別れまつりぬ。世間、また、何人をか憑むべき、只、退て其五條の家に居り、愁懐を和歌に托するの外なかりしなり。されば、常に昔日の榮華を追想し、本相識れる人の、猶宮中に在るに、歌を寄せていふ、

山川の音にのみ聞く百敷を
みをはやながら見るよしもがな

みをはやながら、は、早くの身ながらなり。昔日の身ながらなり。而して身を、に寄するに、澪を以てしたるなり。此頃また、玄上の宰、月夜邸前を過ぎて、入らず、たゞ、消息をのみ通じたれば、いふ、

雲井にてあひかたらはぬ月たにも
わが宿過ぎてゆく時はなし



と、一意、宮中を思慕せざるはなし。時に、醍醐天皇、皇子の御袴着の料にとて、屏風をつくらせたまへり。諸歌人に勅して、其繪に題せしめ、小野道風をして之を書かしめたまふ。道風、順次、書き終て、女車の山櫻樹下を過ぐるの圖に至て、遂に歌なし。蓋し、天皇の忘れさせたまへるなり。天皇、乃ち、急に、藤原伊衡を召し、命ずるに、伊勢を訪ひて、直ちに其歌を獻ずべきを以てしたまふ。伊衡、五條の家に至るに、庭樹幽鬱、而して砂青く、苔厚く、白櫻一樹、獨り、春を占めた

り、寢殿の南面よりして上る。朽木形の几帳、高麗緣の疊、唐錦の茵、物として淸ならざるはなし。伊衡、乃ち勅を傳ふ、伊勢、時に、往時を追懷して、感慨轉た深かりしが、一たび殿上人の來るに驚き、更に、事の甚だ唐突なるに驚く。然れども、忽ち、歌を紫の薄樣に書し、また、同色の薄樣に裝束を包みて、伊衡におくれり。伊衡、歸て、之を獻ず。天皇とりてこれを覽たまふに、手蹟の妙なる、已に、道風の如し。歌にいふ。

　散りちらず聞かまほしきを故郷の
　　花みてかへる人も逢はなむ

句格優麗、着想淸新、聞くもの感歎せざるなく、伊勢の歌名、これによりて、いよ〳〵揚れり。然れども、畢竟、金錢の世なり。此のめでたき五條の家も遂に他人に委せざるべからざるに至れり。此時、伊勢詠じていふ。

　飛鳥川淵にもあらぬわが宿も
　　せにかはりゆくものにぞありける

せに、は、瀨に、と、錢、とを懸けたるなり。我宿は、飛鳥川の淵にもあらず。何ぞ、瀨に(錢に)變りゆくや、といふなり。後去て、何處に住みしか、を詳にせず。然れども、遂にまた、舊觀を復すべからざりしならむ。袋草子にいふ、能因、兼房の車に同乘して行く。二條東洞院に至て、俄に、下て步行すること數町、兼房訝りて、これを問ふ。能因いはく、伊勢の御の舊宅なり。前栽の結松今猶存ず、下らざるべけむや、と、これによりて、之を見れは、伊勢、また其邊に住せしならむか。然れども、其住處は、殆んど、問ふを要せず。この一話、確かに、此女歌人が、いかに、後世に尊崇せられしかを知れば足れり。

女の有名なるものを中務といふ。伊勢の敦慶親王に幸せられて、生みしところ、といふ。敦慶親王のこと、或は、宮に在るの前となし、或は、宮を出づるの後となす。中務また歌に、妙なり。「石のかみふるき都を來て見ればむかしかざしゝ花咲きにけり」「咲けば散りさかねばこひし山ざくら思ひたえせぬ花のうへかな」の如き、皆、世に傳稱せらるゝものなり。この人にして、この子ある、猶、紫式部に大貳三位あり。和泉式部に小式部ある

の類か。今、伊勢の傑作と認むべきもの、四五首を擧げ、
以て、此篇を終らむ。

題しらず

あひにあひて物思ふ頃の我袖に
やどる月さへぬるゝがほなる

夢にだにみゆとは見えし朝な〳〵
わがおもかげにはづる身なれば

夜ふけて時鳥一聲なき侍りしに

二聲と聞くとはなしにほとゝぎす
夜ふかく目をもさましつるかな

亭子院の御前に前栽うゑさせたまひてこれよめと仰せられければ

植ゑたてゝ君がしめゆふ花なれば
玉とみえてや露もおくらむ



夏の歌の中に

さ月來ばなきもふりなむ郭公
まだしきほどの聲をきかばや

歸雁をよめる

春霞たつを見すてゝゆく雁は
花なき里にすみやならへる

（終）

マダム、ド、スタエルの傳（上）

湘竹女史

世界に其名を轟かしゝ女文豪、マダム、ド、スタエルの跡訪らはんと、秋のもなかの麗かなる日、「ジユ子べ」湖遙に溯りて、遂に「コペー」河の水源近く棹しきぬ。臨めば河流の兩岸は、一面花のむしろ草の菌をもて掩はれ、仰げば「モンブラン」は雪を頂いて、高く、聳ゆ。實にや歐洲屈指の好景とは、かゝる處を云ふなるべし。余等船

を岸に繋いで、陸に上り、かの世界の女傑マダム、ド、スタエルの古き住家を訪へり。蔦のはひかゝれる門、高き塀、こゝかしこに咲き亂れたる花、この佛國風に作られたる二階屋、何れも昔の人を追想せしむる物なるが、中に入れば、先づ目にたちて見ゆるものは、いと長き廊下にかゝれる青き窓簾と、こゝかしこに列れる數多の半身像とにして、中にも美はしきは、ネッケル氏の肖像なりき。これに隣れるは、いと大なる書籍室にて、こゝには青色及白色の家具あり。この隣室ぞ、マダム、ド、スタエルが、嘗てマダム、ルカミールと坐を分ちて、女史が甚だ困難なる生涯に僅の慰愉を與へし、その美妙の好景を共に眺め、共に樂しみたる處にして、殘れる業務の卓子こそ、この女文豪の手なれし卓子なれ。この卓子の主ぞ、嘗てマコーレーが當時の最大女傑と稱し、バイロンが「こは空前絶後の婦人にして、其事業は他婦女等全力を併すとも到底企て及ぶべからざるものなり。只惜む此女子の男子と生れ來らざりしことを。」と稱讃せし人なれ。これより客室に入れば、一面に敷き列ねたる「カーペート」に、あるは赤き、あるは白き家具あり。こゝに掲げたるは、この女文豪の父なるネッケル氏にして、その強壯なる容貌中、自から高尚き氣節を備へ、またその夫人即マダムの母は、白き絹の服裝にて、容貌美麗にかつ自然の品位あり。實に淑女の風儀備はりて見ゆ。さて、マダム、ド、スタエルの風采はいかにといふに、かの禮服とも稱すべき低き襟に短き袖つけたる海鼠色の服を裝ひ、嘗て歐洲を動こかしゝ手には、一枝の花を弄びつゝある畫にして、この花枝で夫人が英勇の心膽をして寒からしむるに足る談論に忙はしき間、その手まさぐりにと常に弄べるものなりき。

この室にて、尙目ざましきは、夫人が半身とも稱すべきスタエル男爵の白き鬘を被り、軍服を裝ひたる畫、及びその愛子女等が、いと美はしく柔順なる樣、涼しき眼、艶かなる髮の毛のゆら〳〵と垂れかゝれるなど、皆畫の面てに殘されたり。この閑靜なる僻地に、都人士のたえずも踵を接するは何が故ぞと尋ぬれば、この處こそ、嘗て那翁をして恐怖せしめ、ジュノバのガツフをして、

「かの女は嘗て歐洲の生み出せる最も俊傑なる婦人なり。」と評せしめし婦人の、其驚歎すべき生涯の多部を消せし處にして、この蓋世の大文豪、大雄辯家、大博學者にして剩へ、鉅多の富を有せる夫人にぞ、「嘗て世に生存せし人の中、最俊秀なるものぞこの婦人なる。」てふ評をば、ショーサテタノルも與へたりき。

偉人マダム、ド、スタエルの系統を尋ぬれば、夫人は、千七百十六年四月廿七日、佛國巴里に於て生る。父は路易第十七皇帝の大藏大臣、ジェームス、子ッケル氏にして、その才識は、廣く一世を壓倒するに足り、その著書中には、十五卷の大部なるさへあり、母はスザトと云ひ、スヰス牧師の愛娘にして、美はしき容貌と、ふさはしき教育とさへ備はりたる、獻身的の基督信徒たりしなり。子ッケル氏は若年の時、銀行事業により、鉅多の資產を起しけるが、ジェ子バの共和黨により、「ブールサイユ」朝に於ける辯理公使とはなされたり。

當時佛國は、宛も奢侈浮薄の頂に達し、人民重稅の負擔に苦しみ、路易朝廷も、將に安危の街て立てる有樣なりければ、財政整理の敏腕家をして この危急を救はしむるの要ある時にあたり、子ッケル氏は、推薦されてこの任に當ることゝなりたり。こゝに於て、子ッケル氏二百萬弗の國債を起し、大に財政釐革の實を擧げたり。されば、パリーに於ける子ッケル氏の住居は、實に交際社會に燒點とはなり、加ふるに子ッケル夫人の、優美にして溫厚なる、よく一家の內外を融化せしむるの力ありき。

かの佛國の、泰斗たるギボン氏は、子ッケル夫人の未だ處女なりし頃、深くも眷戀せし一人にて、氏云へらく、「かの女が學問あれども傲らず。さとけれども、知らざるが若きと、快活なる談話、單純なる感情、及び高尙なる風采と、優雅の擧止とは、一見われをして感動せしめ、己知われをして敬慕の念にたえざらしむ。クラシア及びローサースに於ては、われも未來の幸福を心に畫きけるか、さて英國に歸りて後、豫想外なる父が拒絕に、われは殆失望の淵に沈み、孝道と愛情と兩道全ふする能はず。いひ難きの苦痛を忍びつゝ、失戀者とし

て、一生を終ふることゝはなりぬ。」とかくてギボン氏は、生涯獨身の境遇に終り、チツケル夫人に對する友愛の情は、終始不變にありけるとぞ。ざればチツケル氏の客室は、常にギボン氏を初めとして、バツフアン、ヒユーム、ブイドロー、ダレムベードの若き人々の集會所たり、ければ、かゝる二親に養育せられかゝる大家に接近せる孃の、自然才能に富めるは、爭ふべからざる事なりかし。且つ夫人が母は、眞に秩序ある良教師にして、常にその女に授くるに、難き課目の解釋を以てし、假令にも戯嬉に昵ましめず、いと嚴格なる家庭なりげれば、夫人は常に其母よりも父に對せる親密の情多かりきとぞ。そが一例は、ある時母チツケル夫人、先食卓をたちければ、その瞬時前までは、靜肅を装ひし少女は、直ちて其食布を取り、卓を隔てる父の頭上へとそれを擲けつけ、急ぎ父の座に行き、其頸を抱きて接吻しつゝ、父が非難の聲をも出さしめぬまで、その接吻をば續けたり。

孃は幼きより文學の趣味に富み、振分髪のうら若き頃、已に戯曲を物し、そが中には、紙雛を作りてはその脚本にあてゝ、これは王ぞ、これは女王ぞ、と演ずるをもて無上の樂しみとしければ、母夫人はそれをよからぬ事とて制し止めけるが、孃が十二歳の春を迎へければ、母も今はさまでに嚴禁せざりければ、夫より孃は脚本を綴りてはそが朋友をつどへ、おのが客室にて演じ、試むる事すらありたりき。グリムはこの草子を見て、大に歎賞の余り、そが中より、いとも優れし處を拔き出して、歐洲の通信員に頒布することゝはなしたり。かの「ナント勅令撤回及びモンテスキユーの萬法精理に付き、論文を草したるは、孃が僅に十五歳の時なりき。孃はかくも幼少より、腦力過勞の爲め病魔の犯す處となりければ、醫師は孃に勸むるに、新鮮なる外氣と、絶ず日光に浴するの必要とをもつてしければ、孃は大に悦びて、「セント、ウーエン」なる別墅は旦暮散歩することとゝなりければ、母夫人は、孃が教課に、大なる妨げを來したるをいと惜しき事に思ひて、後年孃が名聲の天下に知らるゝにいたり、母夫人いへらく、「孃が學術に

於ける進路が、病魔の爲遮り止められたるこそ口惜しけれ。さなくば、わが孃に期せし望は、かゝる低度にはあらざりけんを。」と云ひけりとぞ。

ネッケル氏の財政革新に對する主段は、恩金の廢止、及奢侈品の課税等にして、これらは貴族社會の反對を引起し、遂に庸暗の君主路易皇帝が、ネッケル氏をして辭職せしむるにいたれり。ネッケル氏の夫人及孃は、かゝる政府の處置に對して、深く痛苦を感じたり。いかにとなれば、夫人及び孃は、共に「夫よ父よと」慈しみ昵じみければ、母にかたみにその愛を偏せられん事を恐れしばかりなりき。

孃は、その父につきいひらく、「結婚の初より死に至るまで、わが父の意中には、母をおきては他の婦人なし。他の權門の人々、多くは、朝に他山の花をめで、夕に舞宴の粹を賞するなんど、多くは、輕浮の情緒を見する習はしなるも、わが父のみは、常に詢々として、其愛の源より出る、たえぬ眞の情をもて、わが母に接し、わが母をいとおしむ其熱愛は、他に比びなきまでなり。」と

されば、ネッケル氏のみまかれるときには夫人打ち歎きて、「嗚呼わが夫の壽命をして、今しばし長からしめ得んには、わが余命を、啻に半年の短きに縮むとも、われは喜んで、わが夫に代らんものを。」とぞいひける。夫より四五年間、ネッケル氏の家族は、旅行をして重に月日を消したり。そはネッケル氏の著せる經濟書の、賣高何十萬部の多きに達せる中にも王に出せる報告書、即ち佛國貨幣の濫費を過にし年月の調査にてらして說明せる書は、非常の賣高なりけるが、これらの一書、及他の通信の爲、氏は佛國を去る四十「リーグ」の地に退去の命を受くることゝはなりたり。この嚴命に接せる孃が落膽は、たとふるに物なく、故鄕戀しき孃をして、左の言を發せしめたり。「われはパリーを愛せり。われは、他國にいかなる華美の生活をせんよりも、僅に百「フランク」の生計にて、パリーに於ける第四層の裏屋に住居せん方こそ願はしけれ。」と。この時、ポーランドの第二世ヨセフ王及ネーブルスの王も、ともにネッケル氏を招待して、相當の地位を與へんとしたれども、

氏は敢て承諾せざりき。孃が人となりは、花も色なく月もはぢなん計の絶世の美貌ならねど その天賦の才能は、よく人の心を奪ふに足り、敢て諂諛の言を用ひざるも、温容優雅のその風姿と、流るゝ若き絶妙なる對話とは、これを語るの人をして、宛も恍惚としてわれを忘るゝに至らしむるものなりき。孃が筆力は、その雄辯に伴ひ、その著書「ルーソー」の如きは、人口に膾炙するにいたれり。かくて英國當時の宰相ピツト、及びスゥヰーデンのフエルセン伯も、孃に婚儀を求めたれども、孃が親愛せるものとては、父の外にはあらざりければ、父の側を去らせじとの約束に應ぜんものゝ外は、婚儀に預るべうも見えざりき。折しもスゥヰーデンよりの使節として來れる男爵スタエル氏は、博學なるが上に交際社會にも第一流ともてはやされ、ガステーペス氏の親友なりけるが、何欠くる處もなき、このネツケル孃と婚儀を結ばんには、いかなる規約にてもなさんとの申入をなしたり。其時、スタエル氏三十七歳、孃は僅に廿歳の春を迎へしのみなりけるが、二親の詞に從ひて孃は婚儀をうべなひたり。かくて、パリーに至り、宮中に參內なしたれば、メリーアントネツト后よりも、並びなき恩遇をうけ、間もなく、父ネツケル氏も赦免をうけて、都へ歸ることゝはなりたり。ネツケル氏の都に歸るや、公債は忽ち騰貴の姿となり、金融界に巨大の影響を來したれば、ネツケル氏崇拜者の悅び大方ならず。直に代議政体は主唱され、これに付ての詔勅も出たれども、君側の小人等はこれに反對し、王に勸めて、又もや同氏を退去せしむる事とはなしたり。しかるに、人民の激昂甚しく、王に迫りてネツケル氏を再都にかへすことゝはなり。當時氏の都に還る有樣は、宛も國王の御通輦とも云はん計り、人民擧つて氏を歡迎せり。この時革命の風潮は、其勢愈すさまじく、人民の一揆は、老弱男女の差別なく、手に〳〵槍を携へて、ブユルサイユ宮殿へと押寄せたり。暴徒は宮殿に至り、近衛兵を殺害し、而して女皇の御座の間近く詰かけ、また宮廷に押寄せて「パン」を請求せり。この時勇健なるマリー、アントネツト后は、小き二皇子の御手を引かせ玉ひ、樓上

に親から出御ましく〱忠節なるラフユートは、跪いて其御手に接吻しまゐらせ、君臣の禮を明かにしたれども、人心の激昂甚しく、毫も沈靜の効なかりき。かくてチツケル氏は勤王の熱衷も、かゝる激流には敵しかたかりければ、コペーに於ける閑靜の地に退隱し、此處に死期まで止まる事とはなりたり。スタエル夫人は、スウヰス大使の夫人として、この亂世に處するに、常に非常の政治的趣味を有し、終始渝らず、父から音信を通じ、而して國事を談ずるをもてこよなき樂しみとはなせり。

（未完）

日本女子の特色（續き）

鹽井ふく子

初雪やあれも人の子樽ひろひ

風流を好むある酒屋の主人、雪の夕べ丁稚を伴にして、碁を圍みに、人の許に行かんとせしを、妻女送り出てゝよみし發句なり。此のマアー初雪の降りて寒い夜に、我子なら伴にはつれて行くまいものを、あれも人の子である、晝間は樽ひろひをして、お得意をまはってあるき、此の寒い夜にまた主人の伴をして出でゝ行く、可愛想な事であると云ひしにて、主人も此の句に感心し、丁稚を止めて、ひとり出て行きたりとなり。

身をつみて人のいたさぞ知られける
戀ひしかりけりこひしかるらん

後柏原天皇のむかし、大内義隆京師に入朝して久しう國に歸へらざりける折り、夫人つく〲と孤燈をうち守りたるあした、義隆が愛妾の許に、衣服品物などおくり、且つねんごろに文になぐさめけるはしにかける歌にして、己れの身をつめつて見て、己れもいたければ初めて人もつめられれば、いたからんと知らるゝものと云ふが、妾も夫を戀しくまちこがれぬれば、御身も定めて戀しく思うであらうと云ひしにて、かゝるなさけを以て、しば〲問ひ、しば〲なぐさめければ、愛妾もそのなさけに感じ、泣きてよろこび、義隆に乞ひて、夫人の膝下にかしづきけるに、夫人ます〲なさけを加へ、ければ愛妾もいよ〲その情けの露にぬれまどひ、は

てはかやうの夫人にこえて、君が寵遇をうけし事のゆゝしさよ、此の上、殿の御國に歸へらせ玉ひ、昔日の如く恩遇を蒙らば、恐らくは天の譴を蒙りなん、願はくは今より尼となり、君と交りを絶ち、昔日の罪を亡ぼさんとて、みどりのかみを剃らんとせしを、夫人おどろき、こは如何なればさやうの事をし玉ふ、我がしたひまゐらする君が、いつくしうし玉ふ人と聞きてぞ、われもなつかしう日來妹とも覺ゆるものを、世を捨てさせて何かせん、その儀ば必ず思ひ止まり、此の後とも、ゆめさやうの心を起し玉はで、姉とも思ひてよとて、なぐさめさとし、のち〳〵も誠のはらからの如くむつみくらせしとなり。己れの欲せざる所人にほどこさゞるはまだ易し、己れの欲する所を以て人にほどこす、夫人また賢婦人なるかな。されはぞ、戰國の世ながら、領國よく治まり、人和し、家さかえ、さえ氷るふぶきの夜半も、此處にはすびつのわたりにぎはしく、うちとけて語る聲、咲あたゝかき心地せられきとなり。

かやうに思ひやりあるが日本女子の性質にして、その最も日本女子の情をあらはして、あはれも露もいと深く覺ゆるは、妓王、佛にして、妓王は白拍子を以て淸盛の妾となり、恩寵を蒙むること三年、こよなき全盛を極めけるが、一朝、佛御前と云ふ白拍子出で來り、無双の聞え都に高く、當時の男子、貴公子をはじめ、いやしきものに至るまで、爭うて之れと遊びけるが、佛思ふやう、『我れ天下にもて遊ばるゝと雖、當時目出度榮えさせ玉ふ平家太政の入道殿へ召されぬことこそ本意なけれ、遊びものゝ習ひ、何かくるしかるべき、推參して見ばやとて、或る時西八條殿へぞ參じたりしに、入道相國初めは大に怒りて、なんてうさやうの遊びものは、人の召にてこそ參るものなれ、左右なう推參するやうやある。その上、神とも云へ、佛とも云へ、妓王があらんずる所へは叶ふまじきぞ、疾う〳〵まかり出でよとぞの玉ひける。佛御前は、すげなう云はれ奉りて、既でに出でんとしけるを、妓王、入道殿に申しけるは、遊びものゝ推參は常の習ひにこそ候へ。その上、年もいまだ幼う候ふなるが、たま〳〵思ひたちて參りて候ふを、すげ

なう仰せられて、かへさせ給はんこそ不憫なれ、何如ばかり恥かしう、片腹いたくも候ふらん。我が立てし道なれば、人の上とも覺えず、假令舞を御らんじ、歌をこそきこしめさずとも、只理をまげて召し返して、御對面ばかり候ひて、かへさせ玉はゞ、ありがたき御情けにこそ」と妓王の强ひて請ひけるに、入道しからばとてはるかに行きたるを、めし返し御らんじ、今日の見參あるまじかりつれども、妓王のたつての願ひ、もだしがたくてかく、呼びかへしぬるぞ、今樣一つ歌ひてとくまかりかへれよと玉ひければ、佛ありがたき思ひして、やがて今樣一つを歌ひ、舞ひをも奏したり、年は、二八髮姿より始めて、見目貌ち世にすぐれ、聲よく、節も上手なりければ、なじかは舞は損ずべき、心も及ばず舞ひすましたりければ、花ぞめの人心、入道やがて心もうつろひたり。佛御前、とは何事に候ふぞや、もとより妾は推參のもの、既に出され參らせしを、妓王御前の申樣によりてこそ召しかへされても候ふなれ、はや〱出ださせ玉へと申しぬれど、入道相國すべてその儀叶ふまじ、但し妓王があるによりて、さやうに憚かるか。其の儀ならば妓王をこそ出ださめとて、佛がおどろき止むるをもきかず、傍若無人の淸盛、とく〱とて妓王を追ひ出したり。妓王は悲しく、あさましく、名殘もをしく覺えぬれど、とく〱との君の仰せ、是非なく



萌え出づるも枯るゝも同じ
野邊の草
いづれか秋にあはではつべき

無常の歌を障子にかき止めて、まかり出て、宿所へかへり、障子の内に仆れ伏して泣くより外の事ぞなき。母や妹これを見て、何事ぞ、如何にしてやと問ひけれど、妓王はとかうの答へも出來ず。具したる女に尋ねて、事

の様子も知りてけり。さるほどに只今まで、妓王がために母の許に毎月送られたる百石百貫も押し止められ、今は佛の縁の者どもぞ始めてたのしみあひける。されど、佛は、ひとりあさましく、くやくしくも推參したりけるよとのみ、己れをかこち、思ひに沈みぬるを、入道妓王へ使者を立て、いかに妓王、その後は何事かある、佛御前のあまりにつれ〴〵げに見ゆるに、參りて今樣をも歌ひ、舞をも奏して、佛をなぐさめよとあるに、妓王は、よゝとばかりに泣き沈みて、とかうの返事にも及ばぬを、淸盛またも使者を立て、必ずまゐるべし、まゐらずば淨海もはらかふ旨ありとの事に、母もなく〳〵すゝめて、出しやりぬ。妓王、妹の妓女と共に西八條にまゐりたるに、日來の所へは入れずして、はるかに下がりたる室におかれける。妓王、いとゞかなしく、涙にかきくれぬるを、佛御前は之れを見て堪へぬ思ひ、我が身切らるゝ心地して、入道に申すやう、あれは如何に、妓王とこそは見まゐらすれ、日來召されぬる所にても候はゞこそ。是れへ召され候へかし、さらずば妾に暇を玉はり玉へ、出でまゐらせんと申しけれども、情けなき淨海、それもきかず、やがて對面して、如何に妓王、その後は何事かある、佛御前があまりにつれ〴〵げに見ゆるに、かくは招ぎしなり、今樣をも歌ひ、舞ひなどもまひて佛をなぐさめよ、如何に妓王、歌はずやとの玉ふに、妓王は、先きだつ涙を袂に押さへ、

佛もむかしは凡夫なり、我れ等も遂には佛なり、いづれも佛性具する身を、隔つるのみこそ悲しけれ

と泣く〳〵奏したりしに、一門の人々をはじめ、ありとある人、涙をこぼしけるが、淸盛もげにとや思ひけん、時にとりては神妙に申したり、舞も見たけれど、今日はまぎるゝ事出で來りぬ。此の後は召さずとも、折り〳〵まゐれよとて暇を玉はりたり。妓王はひたすらに悲しく、遂に世をいとひて尼となり、嵯峨の奧なる山里に柴の庵りをしつらひ、念佛して居たりしに、妹も悲しく思ひ、姉上身をなげば、我れも共にとこそ契りしか。ましてさやうに世に厭はんに誰か劣るべきとて、これも

かざりをおろして尼となれば、母も二人の娘をかくなして、ひとりうき世に止まらんやとて、これも尼となりて、母子三人行ひすましゐるを、佛御前、傳へ聞き、これも憂き世にすまぬ心地して、遂に二人の少女の花のかざりをおとし、みどりの黒髪をもそり、遂に西八條をぬけ出でゝ、三人が行ひすます柴の庵りに尋ね行き、思はぬうきめを見せし事をくりかへしわびて、玆にまことの佛の道に入り、一所に念佛し、遂に恨みもなく、なげきもせず、もろともに行ひすましたりとなり。妓王佛の舞はずして、追ひ歸へされぬる耻かしさを、我が身の上に思ひやりて呼びかへし、佛、また、我が身故に妓王の追れて、ひとり寵を受くるを、かたはらいたくも、あさましくも覺えて、遂に世を嵯峨に思ひ入り、妓王があとをしたひ行き、共に無常をさとりて、なか〳〵にむつましく、世を恨まず、人をかこたず、はらからの如く行ひすましぬ。如何にありがたき女子の情ぞ。日本女子にしてこそ初めて此のあはれのさがを見るなれ。



春川（竹柏會大會兼題）

言のはの花さく川に言の葉の
友舟うかへ遊ふたのしさ　　東久世通禧

青柳のかけをうつして里川の
水の心もはるめきにけり　　土井利剛

藪かけの暗き小川のくらき瀬に
散りては沈むはな椿かな　　本下利玄

春の川水みなきりてたつ波に
花より外の塵なかりけり　　三浦守治

蛇籠ふす川そひ柳枝たれて
釣する綸にはるの風ふく　　上　鳳石

この頃は深山の雪やとけぬらん
かすみて見ゆる春の川水　　山代清三

散る花の流るゝ見れは大井川
若鮎釣るへき時はきにけり　根岸武香

隅田川岸につなける花見船に
老いたる舟子ひとり眠れる　八木太一

川舟の綱引くをのこ岸の上の
柳くゝりつ桃にかくれつ　山崎房吉

棹とめて花の中ゆく筏師の
心に似たりすみ田川面　大木俊

春の雨の遠く煙れるいつみ川
かはつと二つ忘かねつも　森田義郎

里川の笹の小舟のさゝ濁り
ぬるむ汀に散るさくら哉　不波小士郎

青柳の糸打ちなびく川なかに
賤のをのこが馬の背洗ふ　横山碩

氷とけて阿仁の川うち開けゝん
いくはつ筏こきそ下せる　井上公二

ほろ〳〵と椿花散るさと川の
川を渡りて翁あゆつる　關屋祐之

駒止めて水かふ影も長閑なり
花散りうかふ春の川水　早川文敬

底の石見ゆる小川におり立ちて
さてさし居れは櫻散りくる　里井孚秋

里川に影さす梅のちるあたり
あひる三つ四つむれて遊へる　金井宜章

繪卷物のへしか如きいさゝ川
そよ吹く東風に柳花ちる　高橋竹次郎

花見にと汐干狩にと漕き出つる
舟にきはしき春の川つら　澤式

レースすみて人散り行きて大川の
花の夕はえひとり見るわれ　石井敬吉

春風の吹くや小川の水のおもに
いと靜にもさゝ波の立つ　萬木敬二

翁二人ひくをさけつゝ歸りゆく
川添小みちひはり鳴くなり　龜山新一

其舟にわれも乗せなんあけかたの
川瀬こきゆくはるのうた人　高石鳳齋

流れ來し花につとへる針めたか
人まね顏にさくら狩する
高橋行恭

ゆたかにも流るゝ春の川水の
見えわかぬ迄花ちりみたる
山口莊吉

堤こえ田面しつか家浸すてふ
流もはるは長閑けかりける
飯島甲太郎

千々の岩間たきち落ちくる吉野川
なかれ面白し春のゆふはえ
土屋藤吉

佐保姫のかすみの衣ほの〳〵と
たな引き渡るとねの大川
齋藤豐國

水かさむ春の流のあをみとり
川へゆたかに日は暮んとす
細川玄重

雲雀なくの麥畑わけて一ひらの
椿なかるゝ里のなか川
早川喜陞

ちよろ〳〵と小魚走りて水ぬるき
せとの小川に李はなちる
新井千洒

さゝ棹の雫も匂ふすみ田川
花やみなる波や花なる
大島亭

筏舟の流ゝゆるしうなゐ子の
歌ものとけし里の川面
竹柴俊泰

橋を渡るわかき日傘に蝶まひつ
桃さく中を水なかれ行く
相馬御風

のとけさに浮れ〳〵て桂川
月見ゆるまて鮎子くむなり
辻和平

長閑にも流るゝ春の川つらに
いと長き日を暮す釣人
土田道一

行く舟は霞に入りて來る舟は
かすみより出る春の川面
鈴木安五郎

舟歌のこゑのみ洩て聞ゆなり
とねの川つら深くかすみて
宇田川彦太郎

吉野川猶おく深くわけ入らん
堤につゝく花のしら雲
村岡邦彦

さくら咲く谷より出て菜の花の
中を流れゆくはるの川水
遠藤千濱

きのふかゝ萌し汀の新草を
やをらなめゆく春の川水
瀬高濱雄

春なれや細谷川のなかれにも
梢にしらぬさくらをぞ見る　安藤安

鯉の子も來て遊ひける春の川
濁らぬ水はすみよかるらん　關根喜圓

鴨の毛の浮て流るゝ里川の
土橋のくつれもゝの花ちる　和一郎

佐保姫のかすみの衣に一筋の
帯したる春の川なかる　松守久雄

かけ散らぬ松の緑そふちはなす
花の浪よりしら川のみつ　川田篤則

さほ姫の霞の袖のひまもれて
朝日かゝやく春のたま川　齋藤進三

風ありと覺えされとも春河の
あしの若葉にさゝ波そ立つ　久米善平

隅田川かすみ流れてさくら花
またしき程も長閑かりけり　大種泰

流れゆるき門の小川の柳かけ
めたかつたうへり水ねむるらん　佐藤秀信

翅ある神の使のたはむれに
枝ゆするうし花の流れくる　上小澤碧

れんけさく水きわに伏て川下の
菜の花かけの白帆見る哉　今山光二

白雪はいつしか解けて春川の
清きなかれの水瀬なるらん　大木永信

里の子か花つみ添へて笹舟を
かすみに流す春の川つら　高久良鶴

山吹の咲きみたれたる里川の
底に蛙もこゑたてつなり　西升子

つのくめる岸の柳の影とめて
みとり色そふ春の川水　板倉勝子

柳かけ釣する子等か影みえて
夕日長閑けし中川の水　松平岳子

吹くとなき朝の風に花ちりて
錦を寄るたに川のみつ　小幡入重子

舟人も堤の花をなかめつゝ
のとかに通ふ春の川つら　大澤園子

人傳に聞きしのみなる吉野川
春のけしきの見まほしき哉　三宅貞子

さわかしき花の心に引かへて
のとかに澄める春の川水　頭本春子

筏師か掉のしつくも匂ふまて
花ちり浮ふ淀の川水　里井柳枝子

玉川の清き流れに投し東の
菫はつひに我か思ふ人に　松井友子

菜の花の中を流るゝ水ぬるし
春のこゝろになりやしつらん　大村八代子

主やたれ花ちり浮ふ夕川に
小舟のうちの笛竹のこゑ　堀鶴科子

隅田川流てはやき一とせの
春のまとゐに逢ふか嬉しさ　大竹伊勢子

水車ゆるくめくりて里川の
下流の末はかすみあひにけり　佐藤朝惠子

掉もちて今日も行かまし木下川
釣るも釣らぬも花かけにして　村山元子

花の小枝手にせる童かたに乗せて
女から渡る水あさき川　關屋愛子

我影をうつすも樂し菫さく
いさゝ小川に水遊ひして　末廣英子

舟よはふ聲も霞みてさす掉の
音靜なりはるの川水　内田遊歌子

浮草の色も青みておのつから
のとかに見ゆる春の川水　諸井久眞子

三吉野のなつみの河は流さへ
春の心にのとけかりけり　舘脇ます子

ゆく舟もいつしか消て大川の
かすみの中に舟歌の聲　加藤麗子

語りつゝ夕川渡る獅子舞の
したの頭に花ちりみたる　中村文子

ちる花をあやになしつゝ春の川
かは水ゆるう流れてそ行く　佐藤多仁子

いさゝ川ゆるく流るゝあなたこなた
桃の花さきて舞さひかへる　有賀晴子

月朧花もおぼろに影かすみ
水の上くらし春の川つら　久保花子

青柳のかけをみたして里川に
小鮒とらふるさとの子の群　市田豐子

柴つみて舟下りゆく大川の
向ひの岸のさくら花さく　山本芳子

菜のは流れ破れすか笠菫束
ゆひしりほんの鏡川流る　水橋康子

筏師もしはしさす手や止むらん
すみ田の川の花の夕くれ　金井繁子

心ゆく春の河邊やおもふとち
川添つゝみ行きかへりつゝ　吉田靜子

ゆるやかに利根の川水流れつゝ
菜の花十里はるの風ふく　瀬川久可子

花ひらをのせて浮へし笹舟の
ゆく〳〵見送る春のいさゝ川　萩原濱子

舟人もしはし揖をやとゝむらん
花咲きつゝく〳〵春の川つら　池谷久子

汲とらはいかに匂はん岸にさく
梅の下ゆく里川のみつ　根岸公子

春來ゝは心うかれて隅田川
花さくかけに人そ行きかふ　三上常子

隅田川かちときわくる舟の上に
さくらの花のさと散かゝる　南條竹子

利根川の流かすみて舟歌を
をり〳〵送る春の朝風　南條千世子

氷りゐし深山の雪やとけぬらん
岩根浪こす阿賀の川水　遠山直子

降る雪に浮きさそひつる隅田川
花に遊はん時はきにけり　池谷朝子

奥山も春ふけぬらし日にそへて
さくら流るゝ谷川の水　楓學子

末遠く流るゝはては打けふり
かすみに消ゆる春の川つら　酒井すみ子

江戸川の岸への櫻花さけは
花の下かけ人ゆきかへる　清水錦子

花にあふ人をもよそに春の日を
　つりて日暮す人もありけり　夏野華子

さく花の雫や落てなかるらん
　春ゆくかはの水のさやけさ　藤平露子

わか草のかけを流るゝさゝ川の
　水の上にも春は見えけり　島崎いさ子

打けふる柳の糸のほの見えて
　霞に浮ふよとの川舟　小林茂子

咲きつゝく花の姿を水底に
　のこし流るゝ春の川淸し　國枝安子

枝たるゝ柳の糸にゆられつゝ
　靜けき小川さゝ波そたつ　稲垣安子

舟の内に櫻かさして歌ふなり
　夕風ぬるき隅田の川つら　長谷部和子

わたつ海に入る時あらん若草の
　下ゆく流よしほそくとも　佐々木信綱

夜春雨（正式歌會鍋島侯邸）

むつことに夜や更ぬらむ妹とぬる
　閨靜なる春雨の音　東久世通禧

月影のいたく霞むとおもふまに
　雨たりの音聞え初めたる　高崎正風

みたれ碁の其の爭ひも小夜更て
　軒靜なる春の雨かな　蜂須賀茂韶

見し夢は覺て語らふ人もなし
　たゝ春雨の音はかりして　二條基弘

もの音は靜まりはてゝ夜もすから
　寢心のよき春の雨かな　久我建通

寢覺して雫の音を數へつゝ
　枕靜けき夜半の春雨　德川慶喜

夜もすから降る春雨に契りおきし
　明日の花見は思ひたえけり　長谷信篤

小夜更て雨たれの音聞ゆなり
　花見は明日と契り置しを　鍋島直大

木の芽煎て友うち集ふ春の夜の
軒に静けき雨の音かな　岡　榮子

契り置し明日の花見や如何ならむ
心にかゝる夜半の春雨　鶴田菊子

更けぬれとふる春雨のやまぬかな
明日は花見と契りおきしに　津輕承昭

軒の梅の匂ひしめりて玉水の
音も静けき春の夜の雨　松浦　詮

宵月の霞むと見えし軒近く
音静にも春雨のふる　大原重朝

日もすから花くもりすと見し空の
暮るれは雨に成にける哉　長岡護美

霞む夜の雨はわかねと燈火の
光に見ゆる軒の玉水　綾小路有良

咲き出てむ朝の花をおもひ寐の
夢も嬉しき夜半の春雨　竹内惟忠

夕月夜霞むと見しは雲にして
更行軒に春雨そふる　松平乘承

小夜更てもの音たえし閨の戸に
のとけくかゝる春の雨かな　水野忠敬

雨たりの音も聞とほの春雨は
夜半の枕にさはらさりけり　近藤久敬

夜もすから降る春雨の音やみて
静に更し閨の内かな　東儀季熙

朧夜の月はいつしかゝきくもり
まよふ霞の雨になりぬる　芝　葛鎮

寝覺してきけは雨なり長閑なる
朧月夜と思ひしものを　植松有經

そほぬれて妻よふ猫に覺まされし
夢寒からぬ春の雨夜や　小杉榲邨

春雨は音のするまで降りいてぬ
雲のあなたに月は見ゆれど　大口鯛二

さく花のかけにやとりて春の夜の
雨の音きく嵯峨の山里　滋野井實麗

賑しき花見歸りの人たえて
更る大路に春雨そふる　千葉胤明

春雨によい寝しつらむあしかきの
　　隣も人の聲の聞えぬ　　遠山英一

花の上に月は霞みて見えなから
　　庭静にも小雨ふるなり　　加藤[illegible]清

しめやかに音なふ夜半の春雨は
　　花の使の心地こそすれ　　中島歌子

早春鶯

朝な〳〵汲置水はこほれとも
　　ゆふへのとけき鶯の聲　　近藤[illegible]子

鶯のねくらのわたり氷るらむ
　　なくなる聲の寒けなる哉

東京なる子息の許より梅の枝を綿に包みて贈りこしけれは披き見るに一首の歌あり夢にみる千代たに、とありてあとは墨薄くて見えざれは如何にも思ひ居けるに夢のさめければ

東路のうめのたよりとおもひしを
　　きえてあとなき春のよのゆめ

竹柏會第四回親睦會記

石榑千亦

春の女神よ、久方の霞をわけて下界の花の山をや尋ね給ふらん、草の莚にや音づれ給ふらむ、空うらゝかに風静なる朝のさまなり。

かゝるよき日を撰りあてたる我四度目の親睦會を、幸あり光ありて心勇みて、會主の君、夫人の君、御子たちは云はんも更なり、幹事委員の人々は、吾さきにと例の日本橋倶樂部に競ひ集ひて、何くれと事取行ふ。他の見る目も嬉しげなり。まして曇をもて起り、雨をもて次ぎたる始めの會、二度目のまとゐを思ひ起すをや。三度目の去年のまとゐは、僅に霽れしばかりなりしだに、いかに會員の心を動したりけむ。紅葉ぬしの吾は顔に云ひ給ひけむ話を、もどく人絶てなかりし也けり。されどそは曇、雨に思ひうんじたりし心なりしなり。

今日のやうにうるはしくよき日は、未だかつて思ひも寄らざりしに、天つ神の賜物ならじかとさへ思はるゝ

なりけり。

なべての備大方成りたる折、會員は車を連ねて來集ひぬ。あるは、今年の紀念にわかたむと、東久世、黒田、千家、本居、小杉、の諸大人等の、色紙形のぬめの絹に書かせ給ひたる歌、數多かけ並べたる下に、傍にしるし丶番號ど、我取りし鬮の番號と竊に合せ見て、己が幸々を嬉ぶ人、あるは會ごとに馴れたるしんこ細工の老翁が机の前に、ひねり出づるくさ〲の物を見て、人知れずかの梨子よ此魚よと、まづ家苞に算ふらん人、或は水鳥一つ人のよるらんけはひに、岸にはえ上らず、右に左に行きめぐりつ丶遊べる池のまはりを、と行きかく行きて歌思ひすらん人、漸々に數まさりて、此所にも彼所にも樂しげなる聲の殖えゆきたるに、折よしと開會は告げられぬ。

郷園の後を守り給ひ、竹柏會の行末を見そなはします故大人故刀自二方の御寫し畵床の上にかけられたる高樓の廣間にて會は行はれぬ。

植ゑはやしたる竹柏の鉢一つ据ゑられたる卓の前に立ち、會主の君先づ喜びの詞を述べられ、委員の報告形の如く終りて、さて井上文學博士の講話は初りぬ。博士が廣く深き學をもて、西の國の勝れたる女子に就いていと詳らかに話され、人々が拍手の音に送られぬ。次に昌綱ぬし立ちて、會幹の歌會主の歌を披講せらる。緩く少さき春の川、そも遂には海に注ぎて、天を搏つ大波とやならん。今こそあれこの會の末も遂にいさゝ小川にて終るべきにはあらじ、雲を洗ひ星を突かん勢は、笑ひさゞめく此會の中にもこもりゐるなれなど、心の底のいづこにか響くらん心地せらる。

學海翁は來ませり。翁はすぐれたる漢國の女子に就て、面白く物語られぬ。博士のと東西相應していひ合せたらんが如し。たゞ時いたく移りて會員の歌悉く披講するを得ず、翁の物語はた長からざりしのみぞ憾なりける。

階を下りて見れば、狂言師、手品師は演說了らば我が出つべきなりと衣改め、卓を据ゑ、いざと云はば打出すべく、早く太鼓の撥をとれり。文字燒の店には人の來

ぬまを數多作りてかけ並べ、茶店の釜は松風とやらん音たてゝ沸かへり、麥酒店にはコップ、玉の机かと疑はるゝばかりに据ゑ並べ、田樂屋には木の芽の匂ひえならず、團扇の音しきりなり。鮨店、柏餅店、團子店には預れる委員の君たち取々に裝ひませり。那木の小枝に竹柏會と書きたるしるしの畫摺出せる紀念手巾店には堆かく積み上げたり。

手を拍つ音盛に聞ゆるに、又歸り登れば方舟氏の仕舞は始まれり、八幡と田村と二つ曲を舞ひ終へたるに、けに謠曲界の麒麟兒よとめてくつがへりつゝ、人皆下りて下の間の餘興の室に入れば、賑はしき囃子を始めとして、取々に面白く笑ふ聲は家内にみち〳〵ぬ。

寫眞この間にと委員のいふに、男子は右より女は左より進みて、築山の大方を蔽ひぬ。池を隔てたる彼方よりぞ撮すなる。グラスを蔽へる蓋を取れば、やがてとこしへに消せぬ紀念となりぬるを、惡しうはせじと祈る心の色の顯はるゝもあるなるべし。

右に左に別れ散りて、餘興見にゆく人、店に入る人、とゆきかく行き樂しさ織るが如き中に、親しきはいよいよ親しう疎きはたいつまでかあらん、知らざりし人、知らざりし人手携はりて、諸共に笑ひ興するに至る。かくて長々し日の暮るゝこと早きをうらみつゝ、又來む春を契りて己も〳〵心にかゝる雲もなく、夕日を負ひ夕日に向ひて、とり〳〵に家路に向ふらんかし。

時は同じ春四月、しかも花を見ればいつも面白からぬ年なく、鳥をきけばいつも樂しからぬ年なきが如く、一刻を千々の金の價ありといひしは幾百年もかはりなく、ある時は此會の爲に作られたる春にはあらじかとさへ思ひ成りぬる、まこと那木の下蔭たちならしつゝ、心知られむ人々と共に遊び暮らさば、雪凍る冬も夜も、鐵鎔す夏の日も、猶且つ面白く樂しかるべきに、況してこの四つの時の、最もよき時なる春のよき日をや、まことに我竹柏會員よ、春てふ時のあらむ限は、樂しび盡くる期あるべくもあらじかし。

筆のすさび

翠香女史

○税所篤子君はもと都人にて隼人の薩摩藩税所何某に嫁したる也夫に具せられてかの國に下りにけりそれが家なる姑都の女はあだめきて物の役には立まじきを我兒は只其色に惑ひてむかへたらむとのみ思ひとりたればいでやと待むかへて家につくやがてにおことは都女臈にて歌よく讀と聞ぬ此もとつけてみよとて
「鬼婆々なりと人のいふらむ」いかにやといへりければ篤子はさと面赤みたれど取あへず
「佛にもまさる心を知らずして」とつけたりければ姑の心とけて鬼婆々たちまちに佛心となりて中むつましかりけるとかや其よみ歌どもは御垣の下草とてさきつ年版行せられたり

○鵜久子刀自雲の上に召のほされてよりいとゞその聲世に高くひゞきて訪ふ人絶すぞ有けるおのれも久しく交はればある日とふらひたりしに例みる猫の外に又ひとつみなれぬが共に眠りて在ければいづこよりか得たまひつると問にこはやんごとなきおほせあたりに侍りつるを故ありて我にさげ賜はりつるなりといはるさは命婦のお許にてやといへば否とよこは藏人にてこそ候ひつれとこたへられしこそをかしかりしか折しも火桶をもて出たるはしための此回答をきゝてがや／＼と打笑ひていさやさること〳〵しき名には侍らず只斑とこそ呼ばせたまふれとさくじるにぞ二人とも腹いたく成まてなん笑ひける。

○明治十二三年頃の事なりし京都に瓢箪屋と仇名せる奇人在けり其業は髮結職にて其頃京都はまだ官吏の外散髮せし者なかりしかば日毎に臺箱といふ物引提持て顧客の家々の門口より御ぐしよろしと呼はりつゝ三井下村(大丸)島田(夷屋)など云豪商の奧にも出入して自然主人に親しう物いふ程に詩歌の談の出るあれば元來好む道なりしかばとありかゝりなど差いらへするを面白き男と愛せられて詩歌の會席にも曳出さるゝ事あれば始は兎角辭退すれどしひられては左のみも否まず元來頗る伎倆あり今こそ斯賤業はすれ其素性は藩

士などの事故ありて零落せしにもやなど人とへど絶て其素性を明さずされど身分不相應に學力ありて詩哥共によくせしかば後には大店の手代ども此男を師として素讀を學び詩哥の點削を受るも多かりけり家は烏丸椹木町の角に在て店頭には瓢を多くつるして賣買し髪結は内職とす故に人皆瓢簞やとのみ呼て其實名をいふ者なし女兒ふたりもてり姉は長唄三絃又舞妓にも妙を得て既に師匠と成て弟子あまたあり妹は姉に引替て縫針の業にたけ其頃女紅場の教師となりぬ二人ともに美人なるにいやしき家の女兒なれば人皆爭ふて大金を出しても妾にせむと挑めども聽かず親にかけ合へば苟も一家の妻にとあらば承引もせむ女兒を賣て榮華の夢みむとは思はずと云ふ然らば妻にといふも有けれどそは又女兒ら受ひかず只各々かせぎて心易く世を送らむとのみ云おや子揃ひて人柄にもよらぬ奇人にぞ有ける此瓢簞やは未瑕子が村山松根先生許訪ふにゆきゝとも通行する路なりければ一日村山氏にて瓢の噂の出たるついでに彼が上つばらにきゝ得たりしかば心惜きふる

まひ哉いて一度おどろかし試みてむと思ひなりて歸るさ其店に立よりて瓢を買ふに托してとかく語らひ居る程に主出きて是や彼やと取卸してみせなどすしひて序つくり出つゝ其許には家業にも似す風流にものし給ふとかいと珍らかにもおはするかれいかで是に御歌ひとつかきて賜はらばやとて持合せの短冊とう出たればこは何をのたまふぞ定て人違にこそと云を押返して否皆聞て侍り只今村山氏にて御歌をさへみつる物をといへどそは若かりし昔人眞似にさるとせし事も有つれど今は皆忘はてゝ硯さへ戸棚の隅に押籠つ塵に埋もれてなどいたくすまひて事果べくもあらざれはこなたも負じ心つきてやうこそあれと思ひめぐらして其ちり拂ひがてら硯しばし借たまへ始て逢參らせつるしるしに家先ひとつものして御笑ひに供へ奉らむといへば君のかきて賜はるぞならば見苦しくとも塵打拂ひて奉らむとて奥よりもて出たるを見れば桑にて作れる箱は普通の物ながら塵は隅にもあらばこそ硯は今洗ひたるなるべし筆墨ともにいとよきを入たりされはよと思ひつゝ

雲のうへの人にも恥ずなり瓢
　なりにも似ざる君がみやひや
とかきて此返し賜へ〳〵と責たれば今はとて
なりひさごひさぐ軒端は夕貌の花の風流の俤もなし
とぞ書つけたる手さへいと見事なりかく現はし始ては
否まむよしもなしとて彼短冊にかける歌瀧紅葉を
　紅に櫻もみつる吉野山白きや瀧の流なるらむ孝悌と
名さへしるしてけり其後いく程もなく我は東京へ移住
したりしかば彼瓢やいかになりけむしらず。

春のおもひ

宮澤すみれ

○うしろ姿

美を以て一生の花となす女の、途上相知れるが引き遇ふて、注意深き互の眼と眼に、つむりの好み、帯摸様、しごきの色の濃淡より、襦袢の襟いふまでもなし、足の鼻緒のそれ迄も心にとめて、一わたりの應對人眼には、罪なきやう見らるべし、さてこれが一間、二間、三間とはへだつまじきところに等しく見返へる、後すがた、我婉なりや彼艶なりや、まさらばうれし、おとらばつらしの念怖ろしからずや、ショーペンハウエルといへる哲學者の、これをばすさまじう罵りしといふも、強ち理なき事にはあらじ、世の女子達はたいかにかおもひ給ふ。

○春の雲

雲、たかき空より我等が地を見下ろして いかにうつくしとやおもふらん、其紫だちたる春のあけぼのゝ雲は峯の櫻と美をきそふべく、はたうすみどりしたる夕べの雲の行衛よ、汝はおぼろの月をつゝみて抑如何なる夢をか結べる、詩人が天を仰ぐ時、佳人が思ひを寄する時、汝いみじき歌のことばをならべて、彼等を恍惚たらしむるよ、春の雲、うつくしき春の雲、曾てはそがころもに美なる佐保姫をつゝみつらん、下界今この姫を得て人間酔へるばかりなり、夜な〳〵の天色朦朧たるは蓋しねたみの現象ならんか、きかまくほしきは あした夕べそが雲の心にこそ。

學藝

鯛の話

今井金牛

諸孃も御承知の通り、たひは昔から、祝賀の節は、是非なければならぬもので、婚禮の時や、御正月其他芽出度い饗宴には、必ずたひを用ひまする、物の例へにも、腐つてもたい、などゝ云つて、たひは魚類中の最も美味な、最も上等なものになつて居ります、たひと云ふ名を冐して居るものは、澤山にありますが、眞のたひと稱へるものは、まだひ又なるとたひと稱へる、奇麗な色をした魚であります。

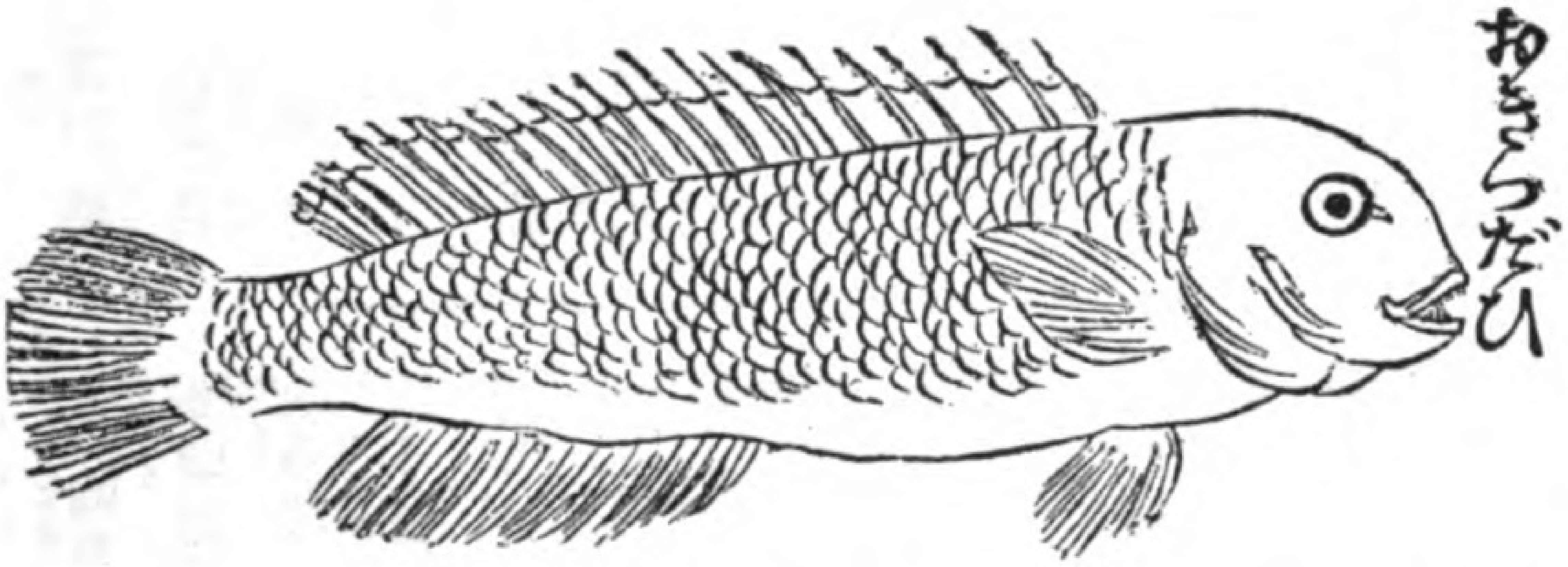
凡てたい科に屬するものは、鰓蓋は全縁を具へ、口中には歯がなく、齶には強大な、種々の歯が生へて居ります、鱗は大きく、後縁に細い歯があつて、前後に背鰭は、相連つて一個となつて居ります、都て沿岸に棲み、暖熱の海に多いのであります。

たいは大なるものでも、身の長け四尺位迄でありまして、四月、即節分後百十日前後か、產卵の期で、八十八や頃には、卵は既に熟して居ります、七月頃になれば、稚魚は一寸八分、九月には一寸五分、十、十一月頃には二寸位になります、此の大さの頃は、かすでだいと云ひます、それより後は、成長が頗る遲く、所謂三年兒と稱するものは、六七寸から八寸位であります、常に沿岸近く棲息し、冬季は稍深い海底の、凹陷せる處、若くは暗礁の間などに潛まり、出てゝ游泳することが少く、離れ〳〵になつて居ります、夫から、春漸く暖温の候に向へば、次第に岸邊の淺處、內海、灣內等に入つて來ます、此の時は多少群をなして游泳し、產卵期になれば其の群が非常に多數になります、此の時は網を以て捕へるのに便利であります、淺海に來る始めは、砂泥の海底に於て食餌を求めますが、產卵期には、多く岩石の處に集まつて放卵し、產卵が了れば、散じて又砂泥の處に於て專ら食を採ります、夏季炎暑の候には、十尋內外の淺い

處に棲息し、冬季は三四十尋の處に多く百尋以上の處を見はすものがあります。

には稀れであります、俗に鯛は節分より淺處に向ひ、八十八やにして淺處に群集し、百二十日にして產卵を終り、夫より漸く深處に歸ると云つて居るのは、事實であります、けれども、幼魚は常に壯魚に比すれば、淺き處に居つて、冬季深處に移るのも亦遲く、淺處に止まつて越年するものもありますから、正しく深淺の移轉をするものは、三年以上のものに限る樣であります。

たいは其棲息の場處に依つて、色澤形狀とも大に異つて居りますが、砂底の處に居るものは、躰が圓滿で短く、色は赤く、味も美であります、けれども、總じて產卵期に近けば、色澤が麗艶となり、銀色の斑點を見はし、皮薄く、肉味は最も佳美でありますが、產卵を了れば、肉瘠せ、皮は厚くなり、色澤醜くして、非常な違ひがあります、又往々躰側に血斑



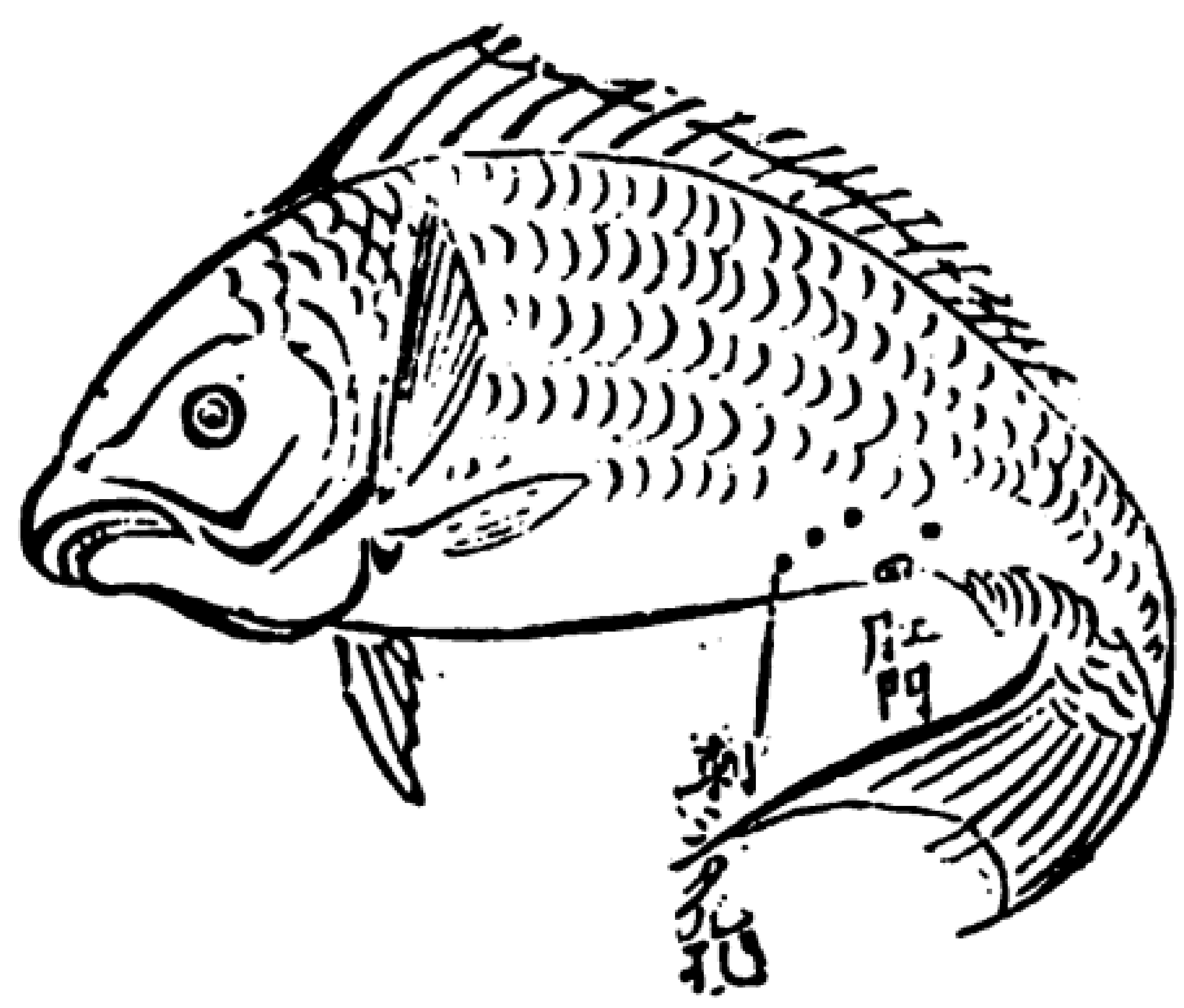
此の種類は日本、支那、朝鮮近海から、北の方は、北海道小樽邊までは棲息する樣であります、臺灣にもありますが、本土で捕れるものよりは、一層色は研麗で、吻頭は黃色を帶び、味は稍劣る樣であります。

たひの有名なのは、播州の明石鯛、藝州鯛、讃岐の金山鯛などであります、此の瀨戶內海に入つて來る鯛は、時期が產卵期であり、又食物も多い處から、味の宜しいのは當然であります、中國の人は、鯛が鳴戶の瀨戶を越へて、金比羅參りに來ると稱へ、之等のたひは、骨に贅があるとか、又は骨が一枚多いとか稱へて居ります。

讃岐沖に浮鯛（又櫻鯛）と稱へて、多くのたひ、が恰かも酒に醉へるが如き狀態で、海面近く浮く處があります、土地の人は、此の處の海底に、酒の湧出する所があつて、たいが其の酒を飲

み、醉ふて斯の如く、浮くのだと云ひます、此の季節になれば、舟に酒などを用意して、其の處に至り、たひの浮くのを待て、攩網で抄ひ捕り、直ぐに夫れを料理して味ふことが出來るから、何れも競ふて出掛ると云ふことであります、先年或る酒好きな人が、此の處へ出掛けて、戲れに詠んだ句に、「いなこゝに、酒の泉があるわいな、浮鯛よりも、わしや沈みたい」とあります、之れは察するに、水壓其の他の關係から、氣胞が瓦斯の爲めに膨脹して、游泳の自由を失ひ、潮流に任せて浮くものかと思はれます。

漁師が鯛を捕獲した時は、針治法と云ふものを行ひます、之れは氣胞に瓦斯が充盈して、腹部膨れ、(俗に之をふけと云ふ)針治法を施して、籞に放たねば、斃るゝのであります、針治法とは、竹の串を以て、魚の腹部から氣胞を刺して、瓦斯を脫出せしむる法でありますが、魚の大小と、ふけの工合とに依つて、其呼吸を謀ることが、餘程六ケ



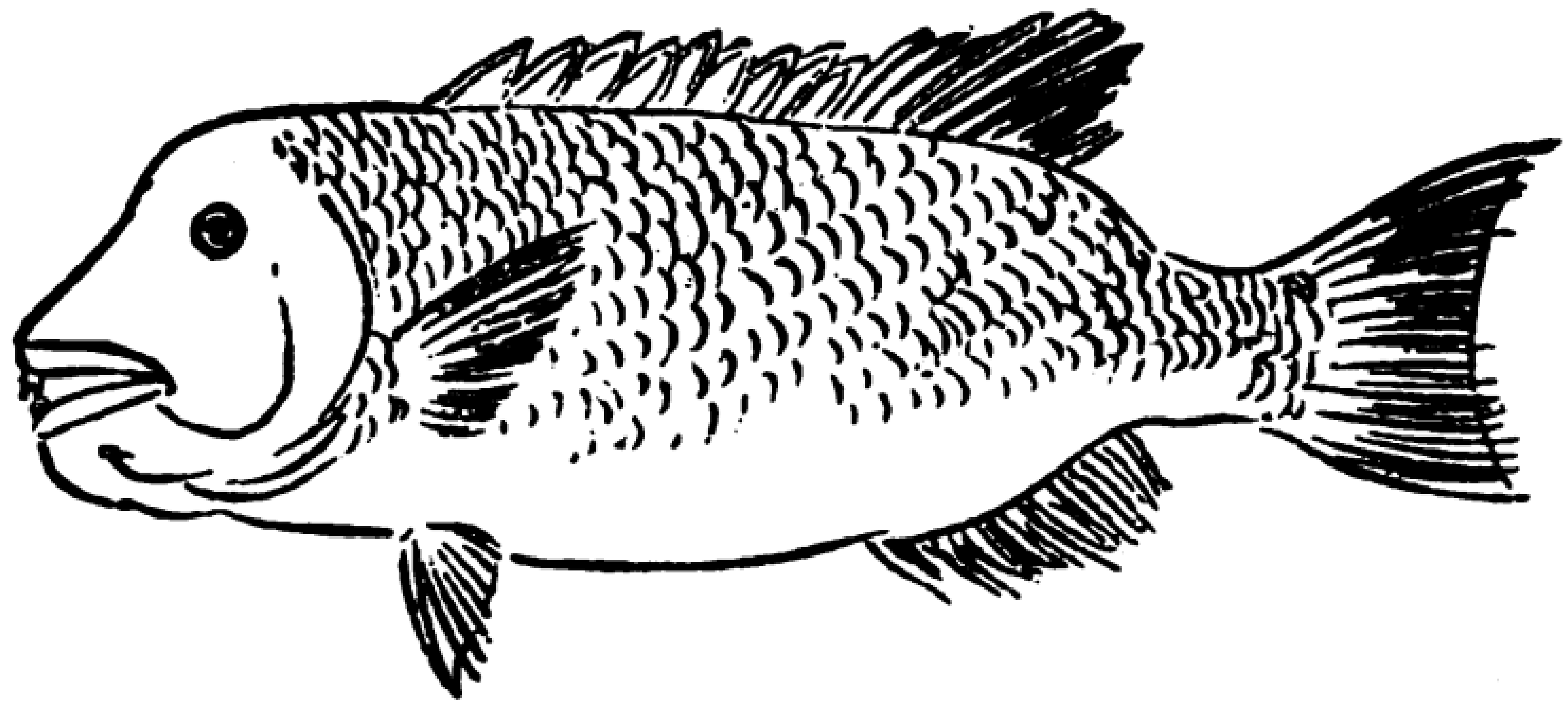
敷いそーであります、なぜなれば、針の刺し工合に依つては、魚を殺してしまうから、充分熟練した者でなければ、出來ません、老熟なものは、針の刺し工合一つで、どれ位の深さの處を游がせると云ふことまでも、自由に致します、例へば、此の魚は、餘り疲勞して居るから、他の强壯な魚と分ける爲めに、底の方を游がせるとか、又はこちらの魚は、水面から一尺位の處を游がせるとか云ふ風に、自由自在に、出來るそーであります。

其の法は、魚を捕獲した時、手早くふけの工合を見計らつて、直ちに用意の竹串を持ち、ふけの重きものは深く刺し、輕きものは淺く、水の中て刺すのであります。ふけの最も重きものは、一回串を刺して瓦斯を出だし、倘一二時間を經て、再び串を刺し、氣胞中の瓦斯を、適宜に脫出せしむれば、魚は活潑に游泳して、死に至ることがありません、若しふけの重いものを一時に、氣胞を刺して、瓦斯を脫出せしむれば、魚は

大抵癒るゝものであります。

針治法を施す竹串は、普通、肛門より、深さ五六分位刺せば、宜しいのであります、又ふけの最も輕いものは、肛門より下部を刺し、ふけの重きものは、肛門より上部の膨脹した處を、刺すのであります、尤もふけが、左右どちらか一方に、偏するときは、其偏膨する處を認めて、刺します、此の法は、何れにしても、串の先きが僅かに、氣胞に達する位の處で、呼吸を謀ることが、肝要だと云ひます。

前に記した浮鯛も、即ち氣胞中に、瓦斯が充ち、即ち、ふけを起したものと思はれます、浮鯛の事に付いては、舊い書物などにも、載せてありますが、大江の匡房の、春を



かんたひ

惜む心を詠めると云ふ歌に、「春來れば、味浮の海の一かたに、浮てふ魚の名こそおしけれ」とあります、之れは即ち櫻鯛のことを云ふたものでありましよう、或る本に、安藝國豊田郡味浮の海では、初夏の頃になれば、多くの鯛が此の處に集まり、水面に浮び傾くこと、誠に酒に醉へるが如く、其の數幾千と云ふを知らず、されども、國禁にて、猥りに之を捕ふることを許さずと、書いてあります、又神功皇后樣が、三韓御征伐の爲め、長門豊浦の津に至り給ふとき、海路この味浮の海に船かゝりし給ひ、船中に御酒宴のと



き、御杯の酒を、海中に注し給ふに、御舟のめぐりに、鯛多く浮び出て、恰かも酒に酔へるが如く傾き、浮いたと云ふとが、日本紀と云ふ書物にも、載せてあります。たひを捕へるには釣、網共に用ひますが、このたいは他の魚と違ひ驚くときは流れに沿ふて走るものでありますから其性質を利用して網獲することが行はれます。

鯛科の内にはれんこだひ又はじろ又はなをれだひ又こだひ又れんこん又きだひ〇ちだひ又ひれこだひ又べにたひ〇くちびだひ又ふゑふきだい〇へだひ又へうだひ又きちぬ〇くろだひ又ちぬ又ちん又けいづ又かいづなどありますがたいの種類でなくしてたひと云ふ名稱を冒して居るものは澤山にあります諸君も御承知でしようが駿河の興津鯛即ちあまだひなどは色も奇麗で味も輕く價も亦高いものでありますが鯛の種類ではありません其の他何だひなど丶稱へるものは非常に澤山ありますが皆違います。

支那の南部沿海地方はたひが非常に澤山ありますから従つて價も廉く餘り上等の人は食用に供せぬそーてあります支那では黄山魚又棘鬣魚など丶も云ひ或は海鯽とも稱へるそーてあります日本では日本紀などに赤女延喜式に平魚など丶書し其の他種々の字を用ひて居ります。

たひは生鮮のまゝ食するのが最も美味でありまするが種々の製法を施したものも亦賞味致します長く貯藏することの出來るものでは採鯛、五色鯛、鯛煎餅、鯛味噌、鯛酢漬等が主なるものであります。

春の自然（下）

藤堂梅軒

春の自然は中々材料が多くあつて、お話すれば、する程、廣く又深くなつて來るです。それだけ其のお話を、上、中、下の三段に分けたところが、迚も説き盡されないのである。しかし、季節が何分にも五月になれば、それ以後に未だ春の自然を説くのは、六月の菖蒲、十日の

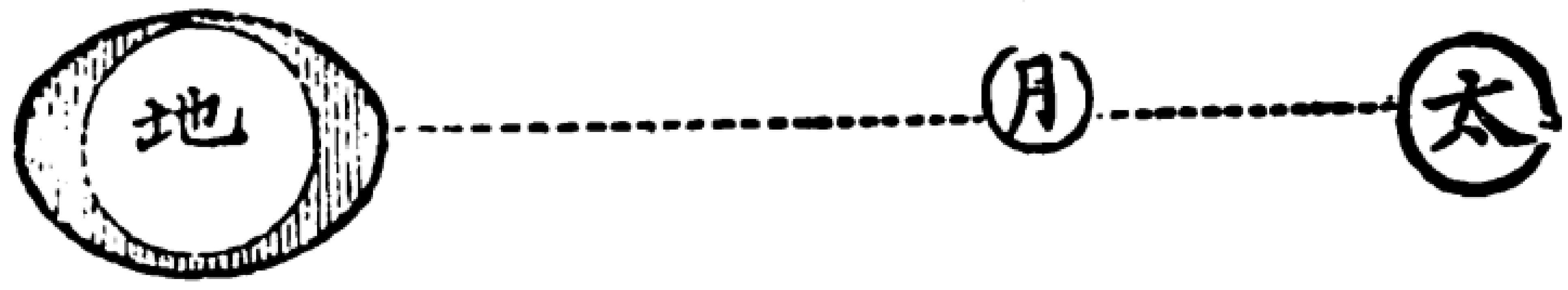
菊を繰り返すよりも、猶口說くなる譯で、是非なく、これて春の自然をザットながら述べ終らうと思ひます。

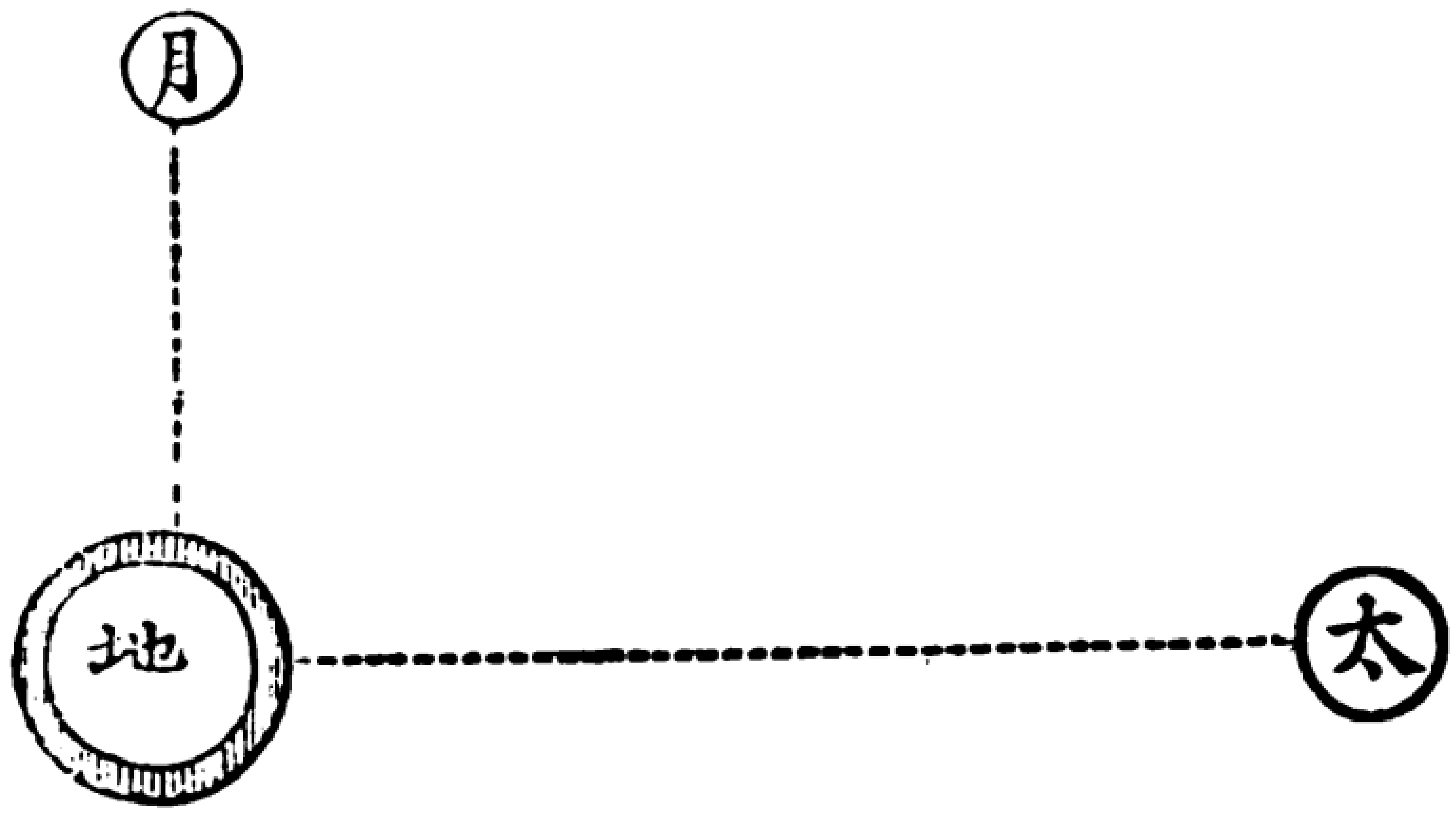
汐干狩

汐干狩、ア、此の春の五月には汐干狩に最上無類の季節である。無數の海產物が活々として居るのみか、人の精神までが、活々として居る此の好時期に、如何で海上の快樂を看過して居られよう。否、快樂は一時のことである、これに依りて心を休め、身を強くするといふに至りては、永遠に其の利益を收めるものといはなければならぬ。イザ、誰れも〳〵行きましよう、此の好時期に、此汐干狩に。先文蛤、文蛤もよし　蛤仔、蛤仔もよろしからう。やどかりは最も動物の研究として面白い、それが蝦の類で、貝殼を借受て、チヨコ〳〵走りゆく樣は、滑稽じみて居ります。其の他べんけいがに、どろかに、へいけがに、まんじうがに、たかのはがになど蟹にも中々種類があります。全體、汐干狩は汐の最も遠く引去ときが、最も面白いので、其引汐が、遠近の差あるは月と太陽との方向に關係して居ます。海水は、月や星や



太陽などの天体に堪へず引きつけられて居るので、中にも月が最も此の世界に近いだけに、引く力も亦最も強くある、その次は太陽の力で、星の如きは極めて僅である。謂はゆる大潮といふのは月と太陽とが、同じ方向に一致した時であります。之に反して小潮といふのは月と太陽とが全く直角の方向になつたときである。そこで此の圖を見ると一つの疑問が起るであらうと思ふ。地球の海水の太陽、月の方向にあるものが引きつけられるのは、有理ではあるが、其の反面にあるものが、どうして正面のようになるかといふことであります。それは、地球も亦幾分か太陽、月の方へ引き寄せられるから、自然に海水ばかりが後の方へ、殘されるのであります。兎に角、汐干狩は大潮が最上です。





春の自然の話は、モー、これで止めましよう。花が充分に咲き盡して、これからは、夏の自然に移るのである。花の大部分は、實は春に咲き盡すのであります。花の研究をなすものは、春を措いては、殘念の思ひをすることがあらう。花の種類は、千萬無量ありて、殊に日本人は花を最も愛する風がある。何日かも話した如く、どんな土臭ひ野翁でも櫻の花を認めては、たゞに看過して去るものはない。少くも足を止め、若くはアヽといふ賞嘆の聲を發するのである。日本人の女子の名に、花に縁あるものが多いだけでも、

日本人の花を愛することを判することが出來よう。先づ、お花の名は、いふも更てある。お梅、お菊、お杉、お藤、おその、お房、かほる、芳子、梅野、菊野、岩藤、小萩、百合子、それから花ではないか、植物の名は澤山ある即ち、お柳、お蔦、お松、お竹など數へれば隨分あります。

そこで、花の形や色艶は樣々であるが、よく〳〵調べると、大躰三樣て、瓣の五枚或は四枚或は若干枚に分れて居るのと、又一つに合して居るのと、萼ともつかず瓣ともつかないものとあります。そこて、其の第一の離瓣花、其の第二を合瓣花、其の第三を無瓣花といはれ、さくらやなたねななどは離瓣花に、あさがほやききようなどの合瓣花に、たで、やなぎ、くは、むぎなどは無瓣花に屬するのであります。

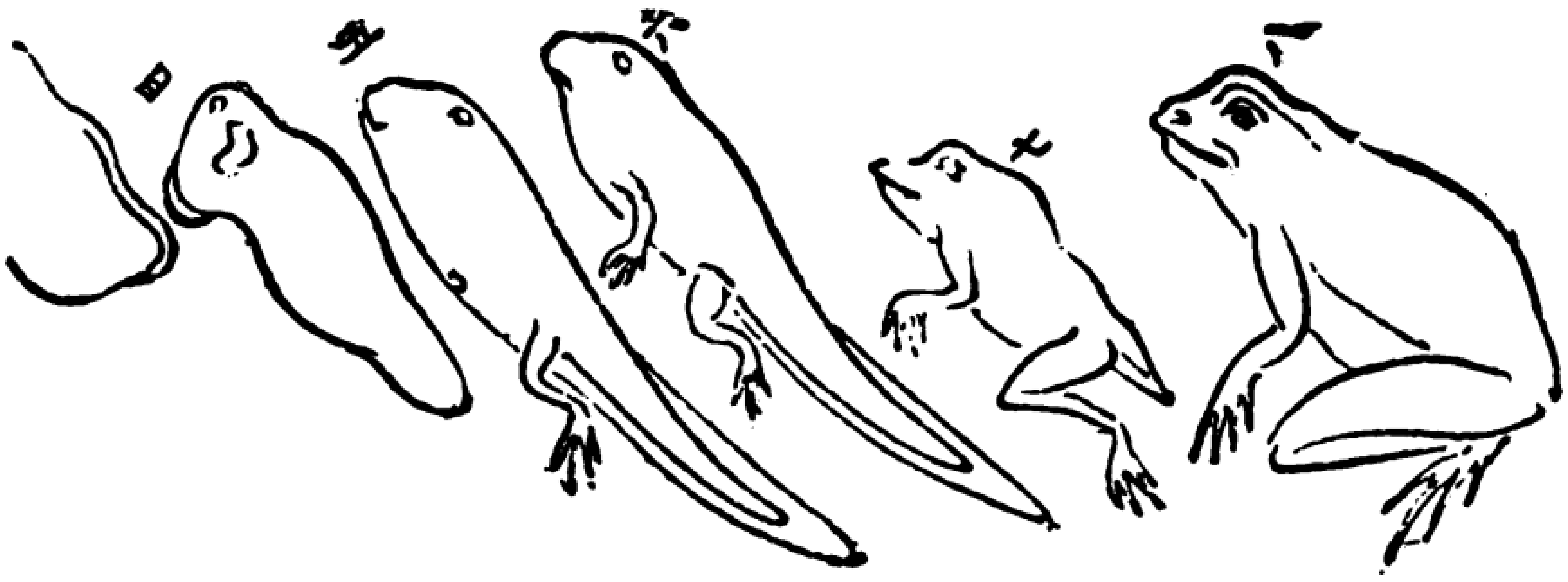
花を生けるには、それ〳〵の秘傳もありますが、私にはチットモ、分かりません、只〻それの莖を成るべく水の中へ撓めて浸けたまゝて、剪る方が善いといふのは理窟があります、何故かといふに、植物の躰とても、之れを顯鏡微に照らすと、皆細小なる胞が無數に集まつて、組織して居るので、若しもそれが空氣中で剪られると、空氣が其の胞の中へ入り込んで水を吸ひ上げる力を失なふよふになるのである。又生花の始は好くても、後にいけなくなることのある塲合に、其の莖の下を更に剪りあらためると、又活々と回復することのあるは、永く水中に沒して居ればだん〳〵腐つて來て、それで生じた物質が右の細胞を塞ぐからであります。又或る塲合に、剪り口を燒いて置くといふことがあるのは、矢張り、其の所を炭にして置けば、チョットは腐らないためであるのです。其の他生花の水に、酒を入れるとか、酢を入れるとか、湯をさし込むとかいひますが、其の理窟は分かりません、追々と知れるでしよう。

水中の動物

春の季節も、モハヤ、これほどにまで進んで來ると、水中の動物も段々と勢を得て來る。此の頃は、古池や水溜りに、蝌斗が魚の子のように活潑に游んで居る。全躰、これは何處から來たものであるか。それは此の

冬の寒さを、石の下や土の中で、蟄居して居た所の蛙の子であることは、誰れも知つて居るであらうが、兎に角暖かになると、其の蟄居して居つた穴から出て雌は、池又は水溜の所で卵を産むのである。我々が水の中に、黒い玉が、寒天のような物で、紐の如く繋がれて居るのを見るとがある。それはひきがへるの卵である。又其の卵が、紐のようにはならないで、粒々塊つて居るのがある。それはとのさまがへるなどの卵である。

サテ、其の卵が孵れば、前圖(一)にある如く、チヨツト南京豆のような形をして、頭の方の前に切れ込のような溝がある。此の溝で以て、當分、寒天質や、或は水中の草などに、吸ひ着いて、身を支へるのであります。次に今少し成長すると、前圖(二)にあるように、吸ひ着く道具の溝が、段々變形して、それから頭の上に小さな眼が、見えるようになり、

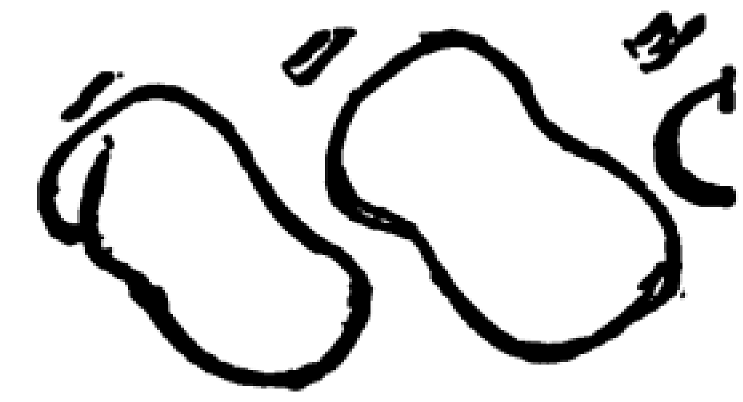


更に尾が後の方に出來かゝつて來る。それから、進んて、(三)のようになれば、頸が愈々括れて、尾が益々著しくなつて來ます。それで(四)にまで達すれば、躰が大分長くなる、それといふも尾が延びたからである。更に頸の兩側に、二つ宛の疣のようなものが見える、これは即ち水中で呼吸すべき鰓で、此のときの姿は、全たく小魚のようです。魚にも無論鰓があります。それから一歩進んで、(五)になれば、其の鰓が、又躰の中へ隱れて了つて、代りに後足が見えて來る。すると、吸ひ着く溝も、消えて了つて、別に其處に小さな口が現れ、尾は更に延びて、丸で魚の長い尾鰭のようになる。そうなると、頸の括れが無なつて、頭と胴とが一つに續いて、全躰が肥つたようになります。今度は(六)のようになると、口は益々完全に、それに前足までが現はれて來る。右の(五)(六)のように成長すれば、モウ、他

物に吸ひ着くことがなくて、活潑に水中を游ぎ回はつて、自由に食物を取ります。其の食物は水草などである。それから(七)のように、尾が短く縮まつて、手足が愈々發達して來ると、モハヤ、水中に、魚のようには生活して居らずに、陸の上へ昇つて來て、小さな虫などを食べる。それが丁度、梅雨の頃であつて、食物は、蚊やうんかのような小い昆蟲である。それから段々成長して、全く尾の跟跡を脫して、(八)のようになります。

蛙の右のように、段々と發生し行樣は、此頃蝌斗を、採つて來て、硝子瓶の中に入れ、そこへ、水草を添へて畜つて置けば、日を經るに從つて、歴々と分かります。チヨツと試して御覽。

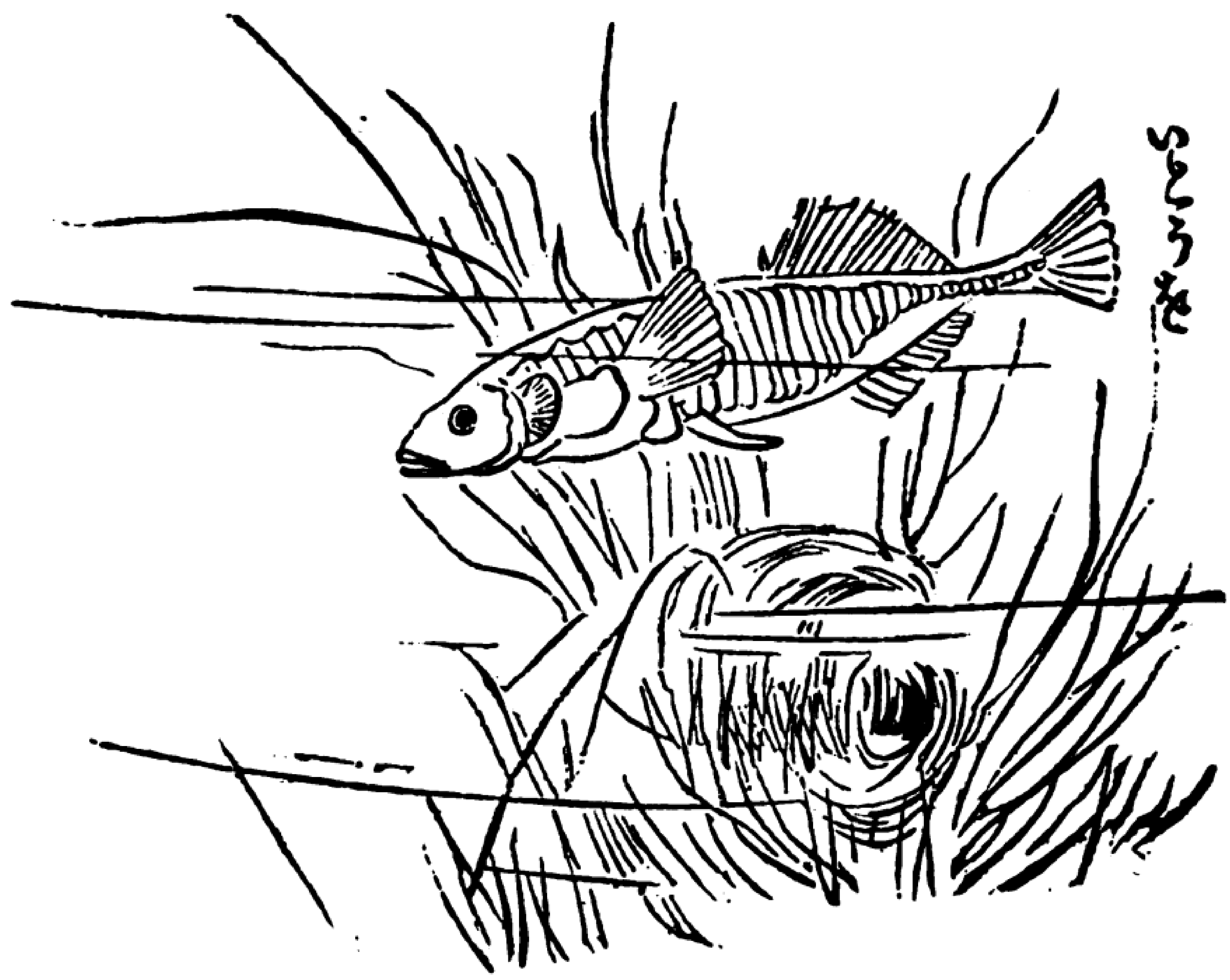
水中動物といへば、此の頃は、川々に鮎の釣が盛んである。何故そうであるかといふに、此の頃は續々鮎の子が海から上つて來るからである。勿論此の頃は鮎は大きくては二寸程ぐらゐてある。それが漸く川上に上りて行つて、充分に成長して、塲合によつては數年も川の中で生活する、そうすると、一尺程の大さに達することがある。六七月頃になると、稍々下流に下つて來て、流れの急な所で、川底の礫の間に卵を産み付けます。



其の卵は凡そ一週間も經てば孵つて、川の増水に從つて海に下つて行く。卵を産んだ親魚も、後に疲れて海に下つて行くが、往々死んで流れて行くものさへがあります。此ういふときには、鮎釣はよろしくない、俗に此んなのをさびあゆといつて、躰の色が靑黑く變つてしまふ。食用しても旨くはありません。

此の頃にも、亦いとうをといふのが川に泝ります。大きさ三寸ほどの靑白い魚で、鋭い棘を背にもつて居る。川の中で卵を産めば、五月に至つて復、海に下つて行く。其の卵を産むときには、雄が先づ、川底の窪を撰んで、其處に草や枯葉を集めて、圓い巣を造る、チロツト小鳥の巣のようで一方に入口が明てある。すると、雌が其の内に入つて、卵を産み、そうして他の一方を破

つて、行つてしまう。そこて、其の巣には、前後の二口のである。となる。其れへ、又他の雌が入り代はり入り代つて來て、卵を產み、サテ、斯うして巣の中が一杯になれば、雄は其れに添うて、護り、若し他の魚でも其の巣を來り襲ふことがあらば、忽ち棘を振り立て、力の限りこれを防ぐ樣、實に勇ましいことてある。其の間殆んど一ヶ月も、此の務をするそうてあります。



鮭や鱒も亦此のように海と川との間に、住所を變るもので、鮭は寒さに向ふと、卵を產まんがために、遠く水源へ泝り、五六月頃に海へ下る。鱒はこれとは逆つて、此の頃から川へ泝つて十一月頃に下る

彼の靜な水底の泥の間に潛んて居る鰻鱺も、亦場所を轉ずるものである。しかし、これは前の諸魚とは反對に、海へ下つて卵を產みます。それは秋の八九月の頃で、專ら雌ばかりてある。雄は決して川に上らないで、生涯海でばかり生活して居る。それで雌は秋に海に下つて、雄に逢ひに行くのてある。其の卵は極めて小いもので、チヨツト人の目に着かない程であるが、其の孵つた子が、既に一二寸ばかりに成長すれば、ムラ〳〵と集まつて川に泝る。其れが丁度此の頃三四月の時節で、我々は川の兩岸のような潮

が急でない所に、其の上り行く所を認める。若し笊で以て受るならば、一時に無數のうなぎの子が取れる。

うなぎは、泥の中に、大人しくして居るようだが、中々そうではない。夜になると泳ぎ出して小魚、魚の卵、貝類、蝦蟹などを襲つて、矢鱈喰ひ荒らす所の横着物であります。そうしてうなぎは卵で子を産まないで、口から親の姿せる子を産むとか、何とか、世の中にいふ人があれど、決してそんなことはない。前にもいつた通りうなぎの卵は、甚小いから人の目に着かないから、そんなにも、誤られたのであらう。口から子を産むといふのは、全くの虚言て、それはうなぎの腸の中に寄生せた蛔虫のような虫が、出るので、それが丁度うなぎのような姿をして居るからである。トンでもない間違ではないか。

段々と春の自然を述べたが、此の次の六月になれば、更に其の下の巻として、これを續ける筈であるから、これでチヨツト切り上げるとしよう。

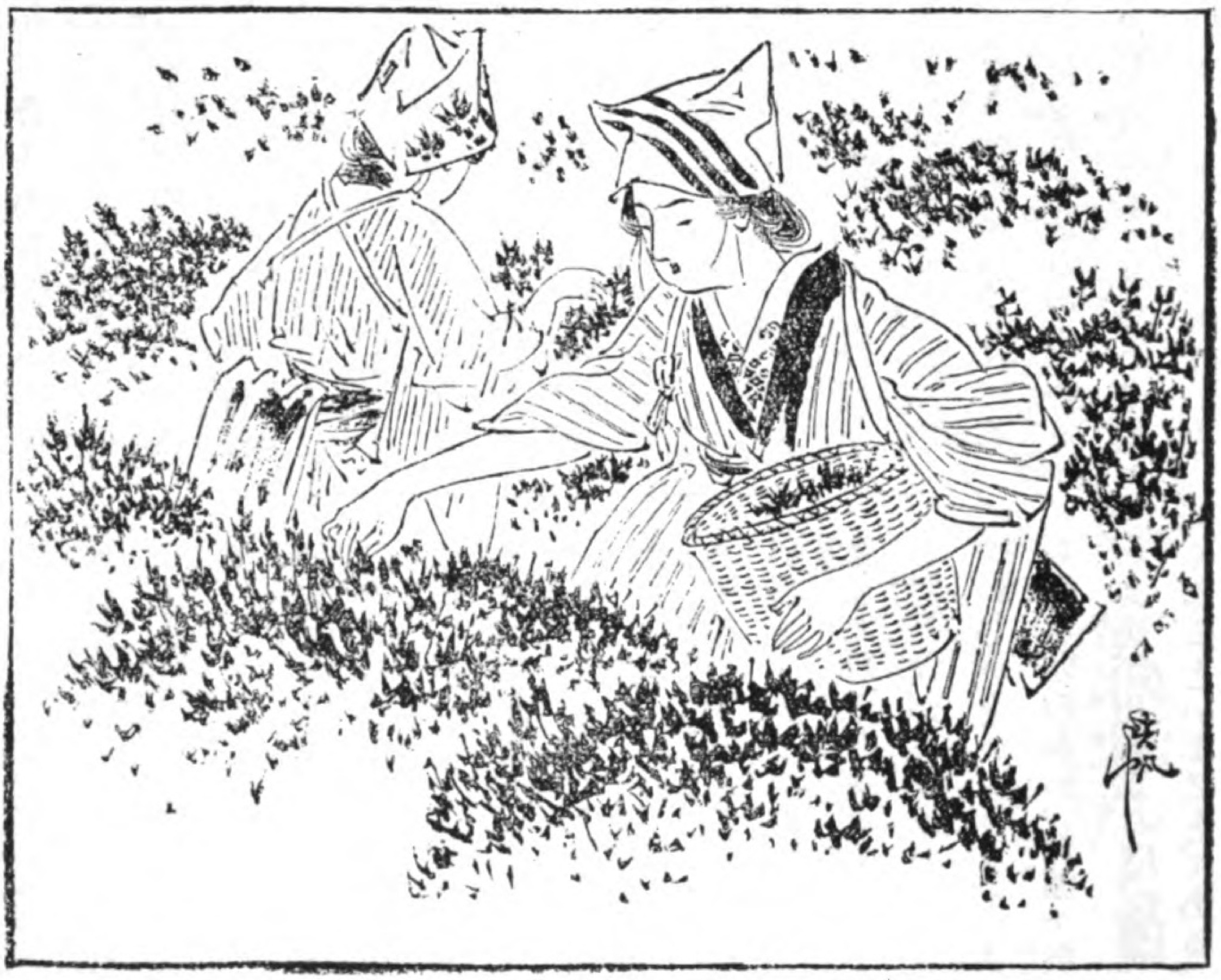
茶と桑

さて、今日此の頃の春の自然で、茶摘、桑摘、それから麥苅などは、人工とはいひながら、實は時節相當に、自然の發達を遂げて、まんまと、我等人間に最大の利を與へつゝあるのであります。よツく考へても御覽、茶摘は以て國産の重要品を、桑摘も亦更にこれに劣らぬ貿易品の材料を供しつゝあり、それに麥苅の麥は、どれだけ國民の口腹を養つて居るかなどを顧へば、一入の研究心を我等に惹き起させるであらう。

そこで、茶摘とはどんなことをするのであるか。今頃は、何處の國でも、茶園のある處には、男、女、又老も幼も、籠を手にし背にして、其の葉を摘み集めるに、中々忙しいのである。しかし、銘々が聲を揃へて、歌ひつゝ働く所なんかは、一入の見物で、亦面白いものです。其の摘み取る葉といつても、品別があつて、其の最も新しい軟かな葉が最上の品で、謂はゆる玉露といふのが、それてある。次には、次の芽が延び出ると、第二番摘を始

め、更に後に第三番摘をするのであるです。所て、茶には玉露の外に一盛、喜撰、川柳などの通常雑用に供するものがあつて、それは最も新しい葉よりも其の次のを摘み取るのである。それから更に次の葉は、謂はゆる晩茶といふのに充てられて、其の質が剛くて澁味が多くある。それだけ又下等の品たるを免れない。

そこで茶には、何品でも皆多少の澁味があるといふことを知つて居るでしよう。それは單寧といふ一種の澁があるからである。澁といへば、五倍子の粉と同じ質



で、鐵質に遇ふと、黒い色を染め出す。鐵漿と五倍子とて、婦人が齒を染めたといふは昔し盛に行はれたもので、今でも猶古老や邊鄙の婦人に、其の風が殘つて居ります。西洋人が始めて日本に來てこれを見たときに驚いたといふが、今日の我々でも何だか心地惡くこれを見るでしよう。そこで茶でも、若し鐵水で煎じようならば、硯面、黒く染まりますから、必ず此のような水を避けねばなりません。

好い茶になると、此の澁が少くて、一種の芳しい香が多くあるといふことは、誰

れも知つて居るでしよう。此の香は、即ち茶の中に含んで居る一種の油で、温かな水に出逢ふと、プーンと揮發してそれが、芳しく我々の鼻を打つのである。晩茶などでは、迚も此のやうな譯には行きません。昔、西洋に此の茶が始めて輸入された時、西洋人は、何でも煎て食べるものだと考へて、鍋に入れて、其のようにしたとさ。スルト、苦くて、迚も咽喉を通しようもなくて、アヽ茶ほど無味いものはないと小言いつたといふ話があります。ドウして、茶を煮ては堪つたものではない、揮發油が皆、揮發し盡して、跡に澁があるばかりになる。晩茶でも出花には、好い香がするものです。

世間では、茶を飲んで、飯の代りにするといふ人もあり又茶は全く滋養の功がないといふ人もある。果して、何れが正しいか、詳には分らぬが、理窟より考へれば、これを飲んで幾分か飢を凌ぐことが出來、又それに茶素といふ所の一種の蛋白質が含まれて居るから、旁々少しばかりの滋養を與へるものと見做しても善いてあらう。但し茶は、これを飲み過せば、安眠が出來ないといふ、それは其の單寧が第一に不消化物であり、且其の揮發油のために、甚く神經を刺激するからであるといひます。女の人などは、最も多くそれで苦しめられる。

茶は品によりて、これを僅に煎じて、それで以て直に香の失せるのと、そうでないのとがある。現に玉露などに於て屢々、そういふことが認められる。これには種々の原因があらうが、一つは其の茶の葉の卷方が多いと少いとに因るであらうと思はれる。多くそれが、卷かれて居るほど、香が永く保たれる譯であります。そこて茶の製法に就いては、一言此處に述べて置く必要がある。先づ摘み取つた葉を釜の中で蒸して柔かにし次にこれを焙爐に移して乾かす、その時に、手で以て葉を揉みながら搔き立てるのである。その方法が中々六つかしいといふことて、素人では、それが旨く卷き付けられないのみか、焙爐で乾かすに不平均があつて、俗にいふ斑が出來る、そうなると茶の固有の香と味とが惡くなるといふことてある。此のようにして焙爐で乾か

された茶は、これを机の上に弘げられて、箸で其のよく巻かれたのと否とを摘み別けられて、そこで茶の品に上下優劣の等差が設けられるのである。

茶を貯へるには、何でも緊く封じて置かねばならん、それは揮發油が揮發して空氣中へ逃げ失せるから、それで我々が大に注意せねばなりません。茶に就いての話は、これで切り上げて、これから桑摘の話に移りましよう。

桑は其の葉を以て養蠶の料にするは、今口說々々しく述べ立てる要がないから



寧ろ他の事を話すてあらう。元來、桑の花は、尋常のとは違つて、雄花と雌花とに分かれて居る。加之に、其の樹が、雄花のみを生ずるものと、雌花ばかりを生ずるものとに分れて居るのです。そうして其の一つの花を見るに、少しも美しいといふ所はない、綠白い瓣のようなものが四枚づゝあつて、それが、一本の軸の周りに群り着いて居る。我々が桑椹といふて居るものは即ち雌花の瓣が後に肉質となつて、それが澤山に群つて居るのである。桑酒といふは、即ち此の實からも製

するが、却つて莖の白皮を燒酒に漬けて醸すのが多いそうであります。しかし此の實も中々實用のあるもので、饑饉年にはこれを以て命を繼いだといふ話があるです。

桑の葉を摘み取る所を見るに、茶摘ほどに賑はしいことはないが、其の葉の形や質に種々雜多の區別あることは、迚も茶の葉の及ぶ所はない。其の種類の多いこと、實に驚くばかりで、殆ど三百種ほどあるといふ。しかし實際は、それほどに種類があるのではなくて、只々幾分かづゝ形が變つて居るだけである。兎に角、これに早、中、晩の三樣があつて、早桑の中で主なる名に、市平、九紋龍、限桑等があり、又中桑の中で、權七、明月、振袖等があり、又晩桑の中で、十文字、大束等があり、又地名によりて、魯桑、八丈桑、琉球桑等の名もあります。隨分、中には面白い名もあるそうである。

紙の話

それから、桑には、未だ効用があります、即ち其の材から煙草盆、火鉢等の道具を造ることある上に、猶其の莖の皮から紙を製することが出來る。紙を製するといへば、誰れもかみの木即ち楮のことを思ひ出すであらう。前圖にもある如く、楮は甚だ桑に似て、只々其の實が圓く、製紙にも最も多く原料とせらるゝものであります、美濃紙や土佐半紙などはこれから製します。それから紙の種類に、雁皮といふのがあるを知つて居るでしよう。これはがんびといふ灌木で、高さ僅に三四尺から一丈までである。淡黃色の花が枝の頂に叢つて咲く。これから又薄樣紙も製せられる。紙の中でも鳥子紙が最上品で、其の質が丈夫で、それに柔であるから、色々の貴い書物、刷物に用ひられる、現に紙幣や辭令には何れも、これを用ふるのである。その紙は即ち三椏といふ植物から製するので、前圖にある如く、其の枝は皆必ず三叉になつて、花は其の頂に一團づゝ垂れて居る、高さ僅に三四尺程の灌木であるです。

さて此等の植物から、どうして紙が造られるか、一口にいへば、莖の皮の纖維を薄く抄くのである。抄くとい

ふのは、どうするのであるかといふに、皮の纖維を、ドロ〳〵に潰して、糊のようにし、それを簀の上に流して水氣を漉し取り、跡に簀の上に薄く扁く殘るものを日に乾してそれで出來るのである。しかしそれでは、どうして眞白になるかといふに、その糊のようにするときに、晒白粉などを混ぜて、晒らせば好い。それで、乾いたものが、どうして丈夫に、其の纖維がバラ〳〵にならないのであるか。それには維ぎを入れるのである、即ち黄蜀葵或はのりの木などから粘液を取りてそれを右の糊に混ぜるのである。それでは、木の莖から皮を採るには、どうするか。それは、一々手で剝ぎ取つて居るようでは、迚も間に合はない、そこで、其の莖を好い程に短く伐つて、一時に澤山を蒸すのである。すると極めて柔に其の皮が剝ぎ取られ易くなる、それでドシ〳〵澤山の仕事が短い時の間に出來る譯であります。

右の様にして製紙の術が釋かれた、今、も一度順序をいへば、先づ莖を程好く伐り、これを蒸して皮を取り、これを搗き碎いて漂し、それに維液を入れて糊のようにし、こゝで始めて簀に漉し乾すのであります。此の法は日本紙の在來のものであるが、今は大仕掛の機械で、瞬く間に木の皮纖維から白い立派な紙を造るようになつて居る。それに、此等の原料たる植物も、一々之を培養して居ては、日々の需要に足るべくもありません。今日では、紙の需要の多いことは、非常なものでチヨツト考へても、日常百般の物事に、紙を使はないものはないといふ程である。されば、此の莫大なる需要を充たすために、藁屑、襤褸などは勿論、松、扁柏などの木材よりも、これを製造する料として居つて、現に富士山の麓にある、富士製紙會社にありては、富士山に產する材木を以て、東京及び各地の新聞などの紙を夥しく製して居るのであります。

（完）

花の吉野山（下）（歴史地理）

文學士　喜田貞吉

吉野宮から尙進むと、稍平な所へ出る。こゝはもと藥師寺といふ寺のあつた所で、寺は今は廢して、敷地は今は畑と成つたが、其近傍に、道の右側に當つて、護良親王の忠臣村上彥四郎義光の墓は、尙殘つて居る。墓の側に碑があつて、忠烈の碑と題し、忠死の事を記してある。義光が始終護良親王に從つて武勇をあらはし、最後に親王の御身換となつて戰死した事は、史上に芳ばしい事蹟である。

尙之から進むと、豐臣太閤が吉野花見の節の、休息所のあつたといふ所から、所謂一目千本といふ所へ出る。こゝは吉野山中でも、一番櫻の多い所で、見渡す限り花が一面にあるので、つい「これは〳〵とばかり」といふ古人の句が、口へ出て來る。明治二十三年とかに、皇后陛下が御登山遊ばされて、御休憩に成つた址も、此所にある。此邊所々で、櫻の枝の杖を賣つて居るが、まさか此の山中の櫻の若木を切り取る樣な、心ない業をするでは無からうとは思ふけれども、何となく忌なものである。もし此れが、果して吉野の櫻を斯く澤山に、每日賣る程切るものとすれば、其殺風景の行爲、極めて惜むべきもので、又他の山から集めて來て、吉野の櫻と云つて賣るものとすれば、之れ人を欺くものと言はねばならぬ。

このすこし先に、橋がある。橋の欄干の擬寶珠には、慶長九年に豐臣秀賴修造のよしか、刻みつけてある。當時大坂城には、秀吉の殘した貲財山の如くて、それを以て至る所の神社佛閣を造營し、遂に斯かる山中に迄も及んだが、最後に方廣寺の大佛を作り、大鐘を鑄るに至つて、遂に德川の張つた網に懸つたのは、誠に氣の毒の極みである。

こゝを過ぎて尙すゝむと、やがて黑門へ出ていよ〳〵吉野町へ入るのである。大橋から黑門の間、關屋の櫻といふ。南朝の時、こゝに關をす之れからの名であるといふ。

吉野町には、むかしは寺院が甚多く、僧兵なども澤山に居た趣で、むかし天武天皇が、髪を削して吉野へ入らせられたといふ事もあり、源義經、護良親王などは、亦皆この地へ隠れたのであつた。それから、延元以後に成つて、南朝の行在所と成り、後醍醐天皇がこゝへ籠らせられたと云ふのも、此地が要害の地である事も一の理由ではあるが、一ツは僧兵がお味方申したからてあつた。當時南朝の行在所と成つたのは、實城寺といふ寺で、藏王道から西北三町ばかりにあつたと云ふ事てあるが、惜い事には、明治の初年に排佛毀釋と云ふ氣風が流行つた際に、廢せられて仕舞つて、南朝四代五十餘年間の玉座の跡は、今は櫻林と成つてしまつた。

この吉野にかくむかし寺院が盛であつたのは何故か。思ふに此地は、南の方遠く山上嶽へ續いて、京都聖護院や、醍醐三寶院などの、修驗道が盛に成つて、山伏が頻りにこの輪組を巡つて役行者の跡を尋ねるといふ事が行はれるより、自然吉野は其入口であるので、盛に成つたものかとも思はれる。今でも、この吉野の町へはいると、何と無く萬事が山伏の臭味を帯びて居る事は、何人も第一に曉る所である。藏王堂の如き、明にそれてある。

實城寺の外に、尚南朝當時に行在所として用ひられたと云ふのは、吉水院て、これは其まゝに今日に殘つて居る。而しこれも、今では寺でなくて、後醍醐天皇を祀つて、吉水神社と成つて居る、こゝは太閤吉野の花見の時にも、宿泊した所ださうであるが、而し、吉水院では、遙か前に義經が籠つた事を以て、最も得意として居る樣てある。賴朝が義經追捕を山僧に責めた下知文などもあつて、全く如何はしいものと思はれるが、それを摺物にまでして參拜者に賣つて居るなどは、恐れ入つた次第である。

山口神社は之からまだ奥の方にある。これはもと勝手大明神と云つたので、此神前て義經の妾靜が舞をまつた、有名な噺がある。

山口神社の前を、左へ八町ばかし行けば、正行の辭世の歌て有名な如意輪堂がある。正行の辭世の歌といふの

は、何人も知つて知る通り、

　返らじとかねて思へば、梓弓
　　無きかづに入る、名をぞとゞむる

といふので、此歌太平記に出て居るが、其外には何にも見えぬ樣である、「或人の曰く、「返らじとかねて思へば」といふは不祥の文句である。返らじとかねて思ふは、決して生還せざるを豫期したるにて、換言すれば必敗を豫期した樣に見える。此時正行は、後村上天皇より、朕は汝を股肱とし頼むなれば生命全く返れよ、と世にも有難い恩命を被つて出陣したので、無論必敗を豫期した譯でもなく、正成が湊川へ出陣した時とは大に趣がちがふ。已に必敗を豫期しないならば、生還せざるを豫期する道理は無いので、返らじとかねて思ふ筈はない。然るにある太平記には、此歌を、

　梓弓、引き返さじと思ふより
　　無きかづに入る名をぞとゞむる

といふ樣に記してある。歌としても此方がよささうてあるが、其意味から云つても、かくあつてこそ正行の忠節が現はれるのである。今度高師直との戰爭は、極めて大事の戰なれば、決して敗走するなどの卑怯未練な事はせぬ、決して引きは返さぬと誓つて、此歌はよんだのである。正行此時後醍醐天皇陵に參拜して、此度の戰が若し難儀に成つたら生きては歸りませぬと、お誓を申上げたので、即ち梓弓引き返さじと誓つたが事實で、何でもかでも、返らじとかねて思つた譯では無かつたのである。果して然らば、世俗に傳り唱へる、「返らじとかねて思へば」の歌は、間違であると言はねばならぬ。それはとも角も、今この如意輪堂には、正行が自身に、鏃で扉へ、此の「返らじと」の歌を彫りつけたのが現存して居る。この扉が實物であるとすれば、即ち實物の證據があるので、歌の眞僞などを、かれこれ論ずるのは餘計な事であるが、而しこの扉そのものも考へねばならぬ物である。或人は、この扉はちと新し過ぎはせぬかと云ふ。或人は、この扉は大事のものであるから、嘗て寺が燒けた時に、これだけは外して除けたのだと云ふが、火急の際に、此の大きな扉を、蝶番も毀さず

にどうして、外したのであるかと云ふ。而しそれ等の疑問は別として、正行が、かの歌を、鏃で扉へ彫りつけたと云ふ事は、一體何にあるか、太平記には、明に壁へ書いたと記してある。其書いたのは、矢張り普通の毛筆であつて、勿論鏃でコツ〳〵呑氣に彫刻したのでは無かつたのである。すでに此歌の事が太平記の外には無く、而も其太平記には、扉でない事に成つて居るとすれば、この扉はどこから出て來たか、伺ひたいものである。殊に水戸家で大日本史を編纂にしたときも、この扉の事は一向知らなんだものと見へる。貝原益軒の「大和めぐり」にも、如意輪寺の他の寶物の事は詳しく書いてあるに拘らず、この扉のある事は何とも云つてない。

如意輪堂の上に、後醍醐天皇の塔尾の山陵がある。其側らに、後龜山天皇の皇子、世泰親王の御墓がある。こゝに參拜して、何人か無量の感に打たれないものがあらう。

吉野山を一通りめぐり終えたなら、飯貝の方へ、一目千本の中の七曲りを下りて、櫻の渡しの方へ出て、多武峯へ廻るもよし、妹脊山といふのを見て、むかしの吉野離宮のあつた、吉野川上の方へ行つて、國栖人のいにしへを尋ねるもよろしからう。

（完）

民法上の妻（法律談）

法學士　永安晉次郎

◎養子緣組の事

夫婦が養子緣組を爲すには、必ず一致して、共にするにあらされば出來ぬことゝてある（第八百四十一條第一項）之は夫婦といふ特別の關係から來たもので、妻は夫の家に入り、夫の家の氏を稱し、夫に從ふべきものであるから、離婚をせさる以上は、夫と分離して他人の養子となることを得ないのは元よりであるが、夫も亦其の姓氏分限は總て妻に及ふべきものであるに、妻と分離して他人の養子となることの出來ないのも當然である、夫れ故配偶者のあるものは、其の配偶者と一緒でなけ

れば、他家に養子となることは出來ないのである。又配偶者あるものが、養子を爲すに付ても、相共にせねばならぬ、養子は夫の養子であつて、妻の養子ではない、或は妻の養子ではあるが、夫の養子ではないといふ如く、夫婦各別に養子を爲すことは出來ないのである、之は我邦舊來の習慣であつて、別段法律に規定する必要はないやうであるが、外國には、夫婦の各別の意見と利益とを有する場合を斟酌して、一家の和熟上配偶者の承諾さへあれば、各別に養子を爲すことを許すものがあるから、疑を避くるため、殊更明文に載せたのである然らば若し此の如き場合に、夫婦の一方が、心神喪失等のために、其意思を表はすことが出來ない　ときはどうか、此の場合にも、夫婦の一致を要するとするときは配偶者あるものは、養子緣組は全く出來ぬことゝなり、非常なる不便が起る、夫れ故、斯樣なるときは、夫婦の一方は双方の名義を以て緣組をなすことが出來ねばならぬ(第八百四十二條)然しながら、夫婦の一方が、他の一方の子を養子となすには、其ものゝ同意さへ　あればよいのである、例は妻の前夫の子を以て養子とするときは、其の養子たるものは、既に妻の子であるから、殊更に夫婦の一致を必要とする理由はないのである

(第八百四十一條第二項)

●夫婦財產制事

我邦の舊慣として、妻は夫と獨立して、公然特別に財產を所有する權利はないのであつて、結婚のとき妻の持ち來つた財產は、悉く夫の所有に歸し、夫は自由に之を處分することを得て、妻の財產として、夫の財產と分離して特別に之を所有するは、唯夫の恩惠的の承認に止まる有樣であつたが、法理上妻といへども、夫と特別に財產を所有することは出來ぬといふ道理はないのである、然しながら、度々いふ通り、夫婦の關係は、一種特別であるから、普通人が二人各々財產を所有して居るとは、大に趣を異にする、從て法律にも、之に關する規則を作る必要がある、民法親族法に、夫婦財產制といふは即ち此の關係を定めたものである、尤も夫婦財產制の

規則に從ふは、夫婦になるとき、各〻其の財產に就て、特別の契約を結ばなかつた場合であつて、別段の契約があれば、元より其の契約を守るべきである、

先づ其の特別の契約を結ばなかつた場合を說明すれば夫婦の財產關係は次の通りである、

婚姻によりて生じたる一切の費用は、夫が之を負擔せねばならぬ、但し妻が戶主であるときは、妻の負擔となる、然しながら、之が爲めに、夫婦は互に扶養の義務があるといふことには、少しも影響は及ぼさないのであるから、若し夫が貧困であつて、到底其の負擔に堪へないければ、妻は之を扶けねばならぬ、妻が女戶主であるとき、入夫が之を扶けるのも亦同樣である(第七百九十八條)

次に妻が婚姻前より持て居る財產、及び婚姻中自分の名義で得たところの財產は、皆妻の特有財產である、自分の名義で得た財產とは、例は妻が營業を爲すことを許さるれば、その營業によりて得たる、一切の利益又は自分に贈與せられたる財產等を、悉皆總稱するのである、然し夫婦の孰れに屬するか明かでない財產があつたときは、法律は夫の財產であると推定する、元より推定であるから、妻の財產であるといふ證據が明かになれは、妻に屬するは勿論である(第八百七條)

さて、斯樣に、夫婦の財產の區別が立つた上で、妻の財產は如何に管理するかといふに、夫が之を管理するを元則となし、若し夫が瘋癲或は白痴などである場合のごとき、妻の財產を管理することが出來ないときは、妻が自ら之を管理するのである(第八百一條)夫れ故、妻は假令戶主であつても、特別の契約又は夫に管理することの出來ない事情のあるときの外は、自分の財產は、いつも夫が管理するのである、夫の此の權利は唯管理權に止まるのであるから、之を處分しやうとするときは、元より妻の同意が必要であることは言ふを待たない、

唯日常普通の家事向のことに付ては、妻は夫の代理人と看做さるゝのである(第八百四條)夫は家に在ることとは少なく、又家に在るものでも、他に爲すべきことが

多いから、家事向のことは、妻が代理人となるは至當のことである。こゝに一寸代理といふことに付て、一言する必要がある、

銀行の話（經濟談）

法學士　克堂主人

銀行の營業

余は前二回に於いて、簡單ながらも銀行の性質、効用及び手形に關して一通りの説明を終へたれば、讀者は銀行の如何なるものなるかは、略ぼ知り得たるならんと信んず、故に之れより進んで、銀行が營むべき業務即ち營業に付きて、少しく説く所あらむ、さて銀行が取扱ふ所の營業は如何といふに、ソは銀行の種類に由りて一定せざるべきも、現今普通の銀行が扱ふ所の營業科目は、之れを主たるものと、從たるものとの二に區分するを得べし、主たるものとは、銀行として必ず爲さゞるべからざる行爲を云ひ、從たるものとは、銀行の種類及び得意の便宜の爲めに爲す所の行爲なり、即ち主たる業務としては、預り金、貸付金、爲替等にして、從たる業務としては、保護預り、代金取立、兩替、證劵及び地金銀賣買等なり。(以前國立銀行の存在せる時は、彼の紙幣發行の如きも業務の一なりしも、今は日本銀行のみ紙幣發行權を有し、普通各種の銀行に在りては、之れを有せざれば、紙幣發行は銀行の業務として論んずべきものにあらず)而して前に記したる營業科目の外、附屬的の業務はなきに非らざるも、又た特權に基くの仕事は之れあるべきも、一般普通の銀行が扱ふべき業務としては、前記の營業科目は其重要なるものなり、されば、以下之れに付きて、その大意を説述せむとす。

◉預金　とは、公衆一般より其餘金を銀行に預け、相當の利子及び其他の利益を收むるものなり、されば、預け主が他日之れを引出たすことあるべきものにして、預り主たる銀行は返濟の義務あるべき性質のものなり、併し乍ら預け主と銀行との約定如何に依りては、預主なればとて氣儘に引出すことを得ず、また銀行にても隨

意は他人の金を左右すること能はざることあるべし、之れ他なし相互の利益を計るが爲めに外ならず、今預り金を種類によりて區別すれば、當座預金、特別當座預金、定期預金、通知預金、振出手形等あり、各個の性質を示せば左の如し、

▲當座預金　又は當座勘定は期限を定めず、預け主の望み次第に、何時たりとも、其全部又は一部を拂ひ戻す約束を以てせるものをいふ、而して此當座預金なるものは、預主のために最も便宜なる預金方法にして、殊に商工業の個人及び會社には、非常の利便を與ふるものなり、たとへば、營業に使用すべき資金其他凡ての收入金を銀行に預け置けば、盜難火災の憂ひなきのみならず、現金の受授に際しても其煩雜を省くことを得べく、即ち入用の節は小切手を利用することを得るなり、其上にまた利息を附せらるるものなれば、各種の預金中最も便宜なるものと云ふべし、此の如く當座預金は、預け主に利便を與ふこと多きものなれば、外國にては此種の預金に利子を附せざるものなれども、我國にては定期よりは低利なれども矢張り利子を付するなり、

▲特別當座預金　は又た小口當座預金とも稱せり、此の預金は當座預金の一種とも見做すべきものにして、其性質上より見れば、貯蓄的の預金なりと云ふべし、然るに貯蓄預り金は、貯蓄銀行に非らざれば取扱ふことを許さゞるものなれば、普通銀行に於ては、特別當座預金其他の名稱を付し、當座預金の一部分に編入して取扱ふなり、此の預り金は五圓以上二千圓以下を限りて預り、矢張り相當の利子を付するものにして、官吏其他役員にして俸給に衣食するものゝ如き、には便利なる預金法なるべし、而して當座預金とは異なりて、引き出だす時に小切手を使用せず、通帳又は受取書を使用するものとす、

▲定期預金　とは豫め一定の期日を定め、其期日に至らざれば拂ひ戻さゞる約束のものなり、その期限は三ヶ月、六ヶ月、一ヶ年の三種に分つて通常とす、利子の割合は期限の長短によりて同じからず、此の預金は、拂ひ戻しに期限あるを以つて、預け主の爲めには聊か不

便なるが如しと雖ども、其代りには當座預金よりは比較的利子高く、又た預り主たる銀行にては、滿期日までの間は、隨意に運用して利益を收むることを得、而して定期豫金にては、當座預金の如く通帳を使用せず、預金證即ち定期預金證書を以つてす、

▲通知預金　は預金を引出だすには、何日前に銀行へ通知すべしとの約束あるものなり、されば、此の預金を引出すには、その引出す日より三日とか五日とか乃至は七日以前に、其引出すべき金額を銀行へ通知し置き、其期日に至りて始めて引出たすものなり、故に銀行にては、引出の通知を受くるまでは、安心して其預金を運用することを得るが故へに、利子の割合は、當座よりは稍々高く定期よりは少しく低きを通例とす、此の預金には、銀行によりて切手通帳を使用するものと、預り證書を使用するものとの二あり、

▲振出手形　は又た預金手形ともいひ、一時の預り金に對して、銀行より預け主へ宛てゝ發行する手形にして、之れに裏書して轉々流用し、又た銀行に對して現金と引換を請求することを得るものなり、

▲別段預金　は一に特別預金と稱し、別に期限を定めず、又た別段の約定あるに非らざれば利子を付せず、入用の節は何時たりとも預り證と引替へに、拂戻すの請求を爲すことを得るものなり、又た銀行にては、名稱の付し難きもの、或は適當の名稱なきものは、悉く此種の預金に編入するを通例とす、たとへば、公債證書賣買代金の一時預り、期限前貸付金の内入金、代金取立濟の預り金等を包含するが如し、

◎貸附金　とは、銀行が得意先其他信用ある者に對して、資金を供給し、相當の利息を收むるものなり、さて貸付金を爲すには、借用金證書を作成せしめ、豫め一二ケ月とか何十日とか一定の期限を定めて貸付くるものなり、而して貸付金の種類には、擔保貸付金、保證貸付金、信用貸付金等を重なるものとす、

▲擔保貸付金　とは貸付金を堅固ならしむる爲め、地所、家屋、商品、地金銀、公債證書、株券等の抵當品を取り置きて、金を貸し出すものを云ふ、されば、若し仕拂

期日に至りて、借主が萬一返濟の義務を怠るときは、銀行に於ては、其先きに取り置きたる抵當品を賣却し、其代金を以つて貸付の元利金に充つることを得るも、尚ほ不足額を生ずるときには、之れを借主に對して請求することを得るものなれば、銀行の爲めには最も安全なる貸付法なりと云ふべし、されども抵當品の如何に由りては、銀行の利害に關すること少なからず、たとへば、株券の如き有價證券は、速かに現金に變更し得るを以て、銀行の爲めには最も可なりとす、商品、土地等は最良の抵當品にあらざるべし、要するに、擔保貸付金所謂抵當貸は最も強固なる貸付法なれば、現今の銀行にては最も多く行はるゝものなり、

▲保證貸付金　とは、借主をして確實なる保證人を立てしめ、若し借主が返金せざるときは、保證人をして代りて返濟せしむる方法の貸付法なり、銀行の側より見れば、抵當に次ぎて堅固なる貸付なりと云ふべし、

▲信用貸付金　とは、抵當もなく保證人もなく、單に借主の信用に對し、即ち對人信用に基きて貸付を爲す方法なり、されば、銀行の爲めには安全の貸付法にあらずと雖、借主の側より見れば、最も便利なる借金方法たるべし、而して又た、銀行の眞義に叶ふものは此の貸付法なるべきか、

斯くの如く貸付金に三種ありと雖も、我が國に於ては未だ信用制度充分に發達せざるを以て、專ら多く行はるゝものは擔保貸付法にして、其他の保證、信用貸付法等は、未だ廣く行はるゝに至らざるが如し、さりながら、信用制度の進歩發達に伴ひて、最も能く行はるゝものは信用貸付法ならざるべからず、何んとなれば信用貸付法の能く行はるゝに至りて、銀行の効用始めて完全なるべければなり、然り而して以上三種の貸付法は其重なるものにして、尚外に左記の種々なる貸付法あるを見る、乞ふ少しく之れを説かむ、

▲期限過貸付金　は約束期日を經過せるにも拘はらず借主より返金せざる貸付金なり、

▲滯貸付金　は借主が約束期限に於て返金の見込なくして、勢ひ訴訟を起すか、或は銀行の損失に歸するの

外なき、即ち死したるに等しき貸金なり、

▲貸越　は一に當座勘定貸ともいひ、銀行が得意先に對して、其預金に超過するも、小切手を用ひて金額を引出す事を得せしむるをいふ尤も貸越には其金額に定めあり又振抵當を差出さしむることもあり利子は普通貸金よりも割合に高し

(此稿未完)

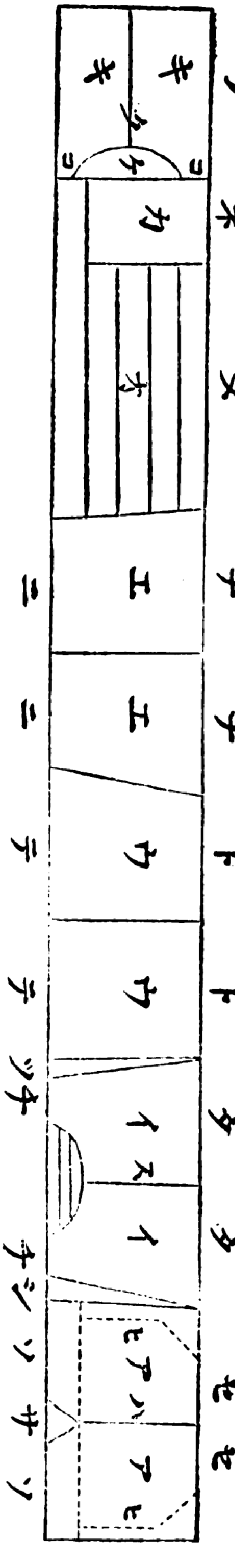
裁縫實習

女子職業學校教員　金子銅子

▲袴の仕立方

裁ちかたは第十九圖の通りでこれは前卷すてに御話し致しましたが猶申ますれば、(ア)後布(イ)後襠(ウ)脇布(エ)奥布(オ)紐(カ)腰切(キ)前襠でございます、積り方も亦前卷に述べましたので重複致しますが念のためこゝでも申しませう、それは腰切、紐、前襠との總尺數を用布の總丈より減じ其殘に三寸八分(この三寸八分は形の總尺)を加へて八分致しますこれが後布(ア)丈即ち第十九圖の(セ)の丈になるのです、(セ)の寸法がわかりましたらば、その切を二枚分とりまして、巾のまゝ丈を二つに折り(ハ)を八寸三分巾にして(サ)の所は斜に三分の形をつけ切りとります、次に紐下の丈をあたります、この丈は紐下の丈よりは二寸一分長めに標をつけ、其所より(ヒ)の巾を三寸二分五厘といたし次に相引をあたりまして、(ヒ)の先と相引とをつぎ合せて標をつけて置きます、(圖中(ヒ)の線より斜の點線がこの標です)、次に(イ)後襠の切を裁ちきります、これは(シ)の所を一寸三分の形をつけて(タ)は(ソ)と同寸法(これは(セ)の寸法即ち後布の丈より三分短きもの)(ス)五寸、(チ)一尺四寸として前申した袴のくり方と同樣に切りとります、次に(ウ)脇布これは(チ)の長さは(セ)と同樣(ト)は(テ)より八分短きものに裁ちます次の(エ)の奥布は(ナ)の長さ(ト)と同寸法(ニ)は(ナ)より八分短きもの(ヌ)は紐の長さで一尺九寸(カ)の腰切六寸、この六寸は三寸づゝに二枚になりまして一枚は換腰の切てござります、それ故こゝは用布が短きときは換腰はとらずに三寸丈腰切としてとればよろしい、次に(キ)の前襠、

丈を一尺六寸に裁ちまして、巾を半分に折り折り目の所即ち圖中の(ク)を一尺四寸といたし(コ)を三分位にのこして、(ク)の所即ち附菱をなるべく格好よく切り取ります、以上申上げただけて表は裁ち終りました、次は裏の裁ち方ですが裏に用ゐます切地が種々ありましてそ



第九拾圖

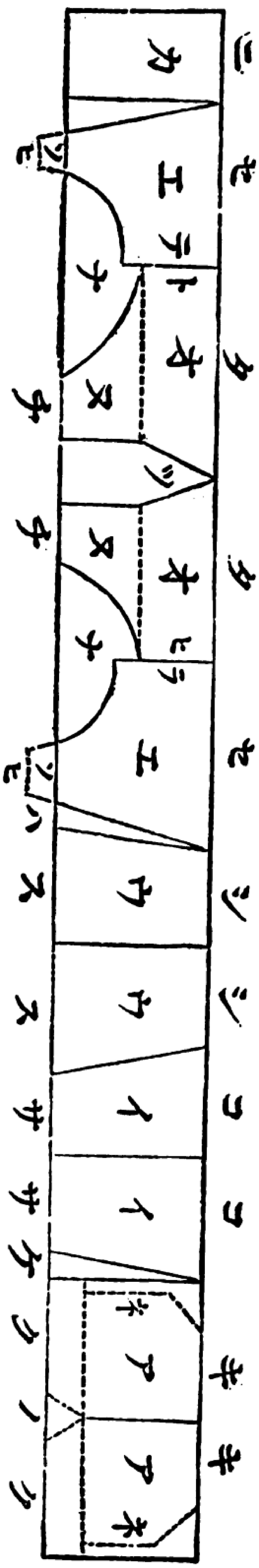
れによりて巾の大小があります故裁ちかたにも種々樣々ございます、裏地の切が表と同樣の巾のものなれば表の後布の丈より五分短きものを裏の後布の丈といたし紐丈を除き腰切も一枚にして積ります、かやうな切地は裁つにも縫ふにも誠に致しよくありますが通常裏

地に用ゐますものは、甲斐絹の類で表地よりは巾が狹くあり、隨つて裁方縫ひ方も込み入ります、が、この方についてお話しを致した方が需用が多からうと存じますからこゝではこの甲斐絹裏の方に就て申上ませう、先づ其積り方から申ますが、此甲斐絹は御承知の通り

巾が九寸三四分位でござりますから表地とは裁ちかたが違ひます、もはや表地の各部分は寸法が出來て居てそれに合せてまゐるのでありますから注意して致さぬとまちがひが起ります、先づ表の後布の丈より五分短きものを裏の後布の丈として之を十倍致し其內より

五寸九分(これは形の總尺)を減じて三寸の腰切丈を加へて用布丈を出します、さて之を裁ちますに就て串ますれば、即ち第廿圖の(ア)後布(イ)脇布(ウ)奥布(エ)後襠(オ)奥布のたしきれ(ヌ)前襠(ナ)後襠のたし切(カ)褄腰となるのです後布の表の寸法とちがふ所は(ノ)の形が一分五厘いたします、こゝの(ソ)の先に圖中の點線はたし切を繼ぎました形です、このたし切の端(ヒ)が一尺四寸になります、(テ)七寸七分位、次に(オ)の切、この切の(タ)は(シ)と同寸法(ツ)は二分づゝの形、(ト)は四寸位(ニ)は三寸といたします、先づこれで裏地の大かたは裁ち終りました、次に

第貳拾圖



づゝ(チ)の所が三寸二分となります、(ク)の形七分(イ)の切の(コ)は(キ)と同様(サ)は(コ)より七分短きものといるします、次は(ウ)の切を裁ちます、この切の(ス)は(サ)と同寸法(シ)は(ス)より七分短きもの次は(エ)の切を裁ちますがこの(セ)は(ク)と同寸法(ハ)は一寸二分位の形、(ソ)は一尺四寸五分と

縫ひかたに致しませう、初めに表の後布と後襠とをとりて繼き合せまして、縫ひ込みは後襠の方にかへします、次に脇布と奥布とをとりまして脇布の短き所と奥布の長き所とを合せて縫ひまして、縫ひ込みは奥布の方にかへします、次に奥布と前襠の長き方とを合せて

縫ひ、縫ひ込みを前褄の方にかへし、左右とも以上の如くして縫ひまして裏を縫ふ方にかゝります、裏の方は初めに後布ど後褄とを繼ぎ合せて縫ひ込みは後褄の方にかへします、次に第二十圖の中の(ッ)の端に(ナ)の切をはぎつけてたし切といたし適宜の形にきります、次には脇布の短き方に奥布の長き方をはぎつけて縫ひ込みは奥布の方にかへします、次に奥布に第二十圖の(オ)の切の(タ)の所をはぎ合せ縫ひ込みを短き方にかへします、左右とも以上の如くはぎ合せます、この裏の各部をこま合せますときは其はぎめの糸の裾口の方はとめずに置きます次には表の繼ぎ合せましたものを下に平に過ぎまして左は左右は右とめい〳〵其表の上によく揃へて裏の繼ぎ合せたものをのせて、裏の裾口を表にそろへて五分位短く切りとります、それより裏の切の裏の方に糊をうすめてつけ(糊をつけるときは極々切りめの端につけます)紙(美濃紙の類)を六分位の巾にきりまして糊のつけてある所に張りつけ、其かわくをまちて表と裏の裾を合せます。

(つゞく)

編物實習

女子職業學校教員　豐原　繁尾子

▲花瓶敷のあみ方

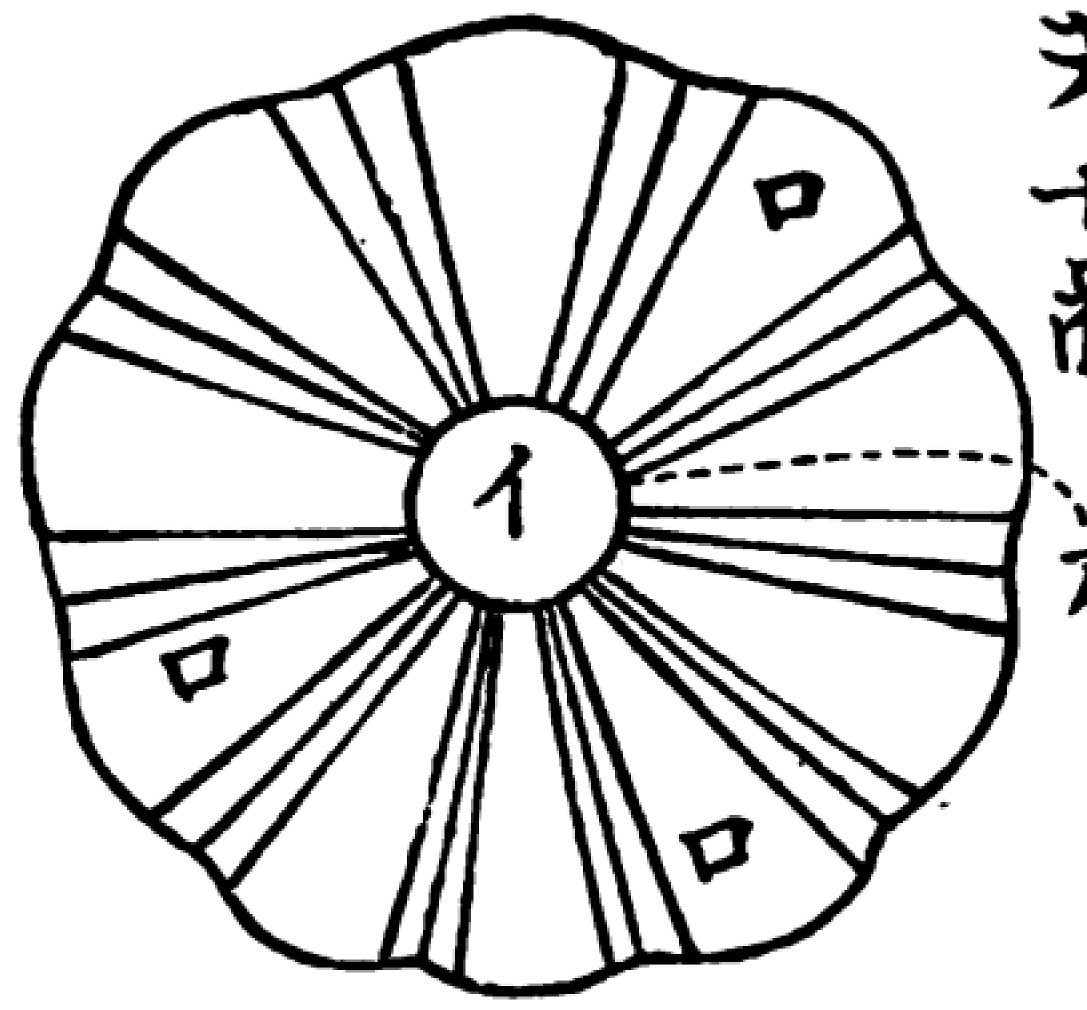
これもやはり、、、ヘーケルを以て編みますので、糸は中細を用ゐます、前に六角形の涎かけを御話し致しましたが、其六角の部を初めに編みました通りに、鎖を五つ編みまして、それを丸くいたし(前に御話し申しました通りに)又鎖を三つ編みまして其丸く致しました中に、、、ヘーケルを入れて糸を引出して長編みを編むことと二十個、次に長編みの上の目を二本ともすくひまして、糸を直に引出しまして、又三つ鎖を編み、長編みの上の目を二本すくひましては、長編みを致してまゐります、しかし此二回目のときからは、伸縮の出來ぬ樣に目を増して編みます、か樣にして編むを五段ばかりいたします、次は三つ鎖を編みまして、前に出來てをる下の目を一つとばして、長編みを一つ所に四つ編み入れます、又すてに出來てをる目を一つとばして、長編み一つを編み

ます、次に又下の出來てをる目を一つとばして、長編み四つを一つ目の所につくります、この樣にして互ちがひに四つと一つとの長編みを編でまゐります、かくして一回いたしますと、四つの長編が一所に出來てをるものが、十八か二十個位出來ます、此側の終になりましたら、鎖の上の目（此側のはしめにあみました鎖の目）にへ、、、ーケルを入れまして、直に糸を引出しこゝに四つの鎖を編みます、次には前に出來てをる長編み四つ一ところに入れてあります、其中央（即ち左右に長編が二つッ、になるのです）に長編みを二つ入れ一つ鎖編みを致し、又其所に長編みを二つ編みます、（つまり長編み四つ一所に出來まして、其中央の鎖編みの所が一寸すきができますのです）次に又鎖一つを編みて、前の側を編むときに出來ました、長編み一つの上の目に長編を一つ編みて、次に鎖編み一つして又前の側を編むときに、四つ長編ができてあります、其中央の所に長編み二つを入れ、鎖一つを編みましては二つ長編みをいたし、又鎖一つを編みましては前に出來てをる

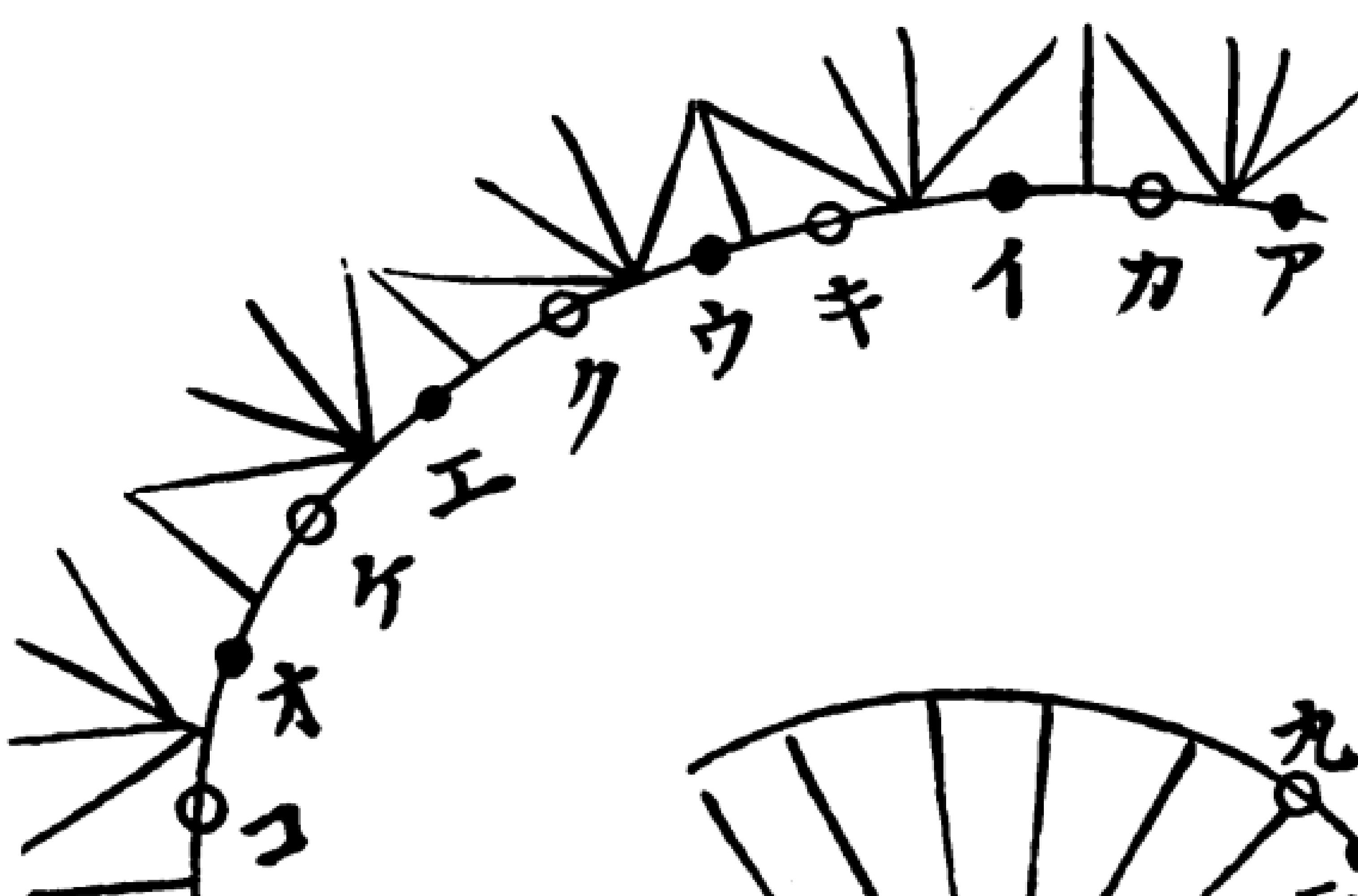
長編み一つの其上に長編み一つをつくります、か樣にしてこゝ一回致しまして、終りには初めの鎖編みの三つ目の目をとりて（此側を編みはしめますときに鎖を四つ編みましたその三つ目にあみつけますからあと一つの鎖編みが殘りますこれが長編の間にはいる鎖になるのです）こゝにへ、、、ーケルを入れ直に糸を引出して四つの鎖を編みます、次には前の側を編みますときに、長編み二つ鎖編み一つ、長編み二つと二つ所に出來てをります、其長編みの二つッ、の中央即ち鎖り編みの所に、此度は長編み三つ編みて鎖一つを編み、又長編み三つを編みます、（即ち長編み三つッ、左右にわかれて其間に鎖編みがはいります）、次に鎖を一つ編みて前の側の長編み一つ出來てをります其上に長編み一つを編み又鎖編みを一つあみて、前の側に出來てをる長編み四つの中央の鎖編みの所に長編み三つを編みて、次に鎖一つを編み、又長編み三つを二つ所に編み入れますから、都合一所に長編み六つ出來まして其中央に鎖が一つはいるのでござります、此側が一回致しましたら

ば次の側も亦この通りに編みます、次の側は又初めに鎖を四つ編みまして、前の側に長編み三つ、鎖編み一つ、長編み三つと出來てをります、其中央の鎖編みの所に長編み四つを入れ、次に鎖編み一つをいたし又同じ所に四つの長編みを致します、都合八つの長編みが同じ所にできて、鎖編みが中央にはいりてをるのです次に鎖一つを編みまして、前の側の長編み一つの上に又長編み一つを入れて順次この樣にしてこゝ一回いたしましたら、又次のがはも此通りに編みます、次のが

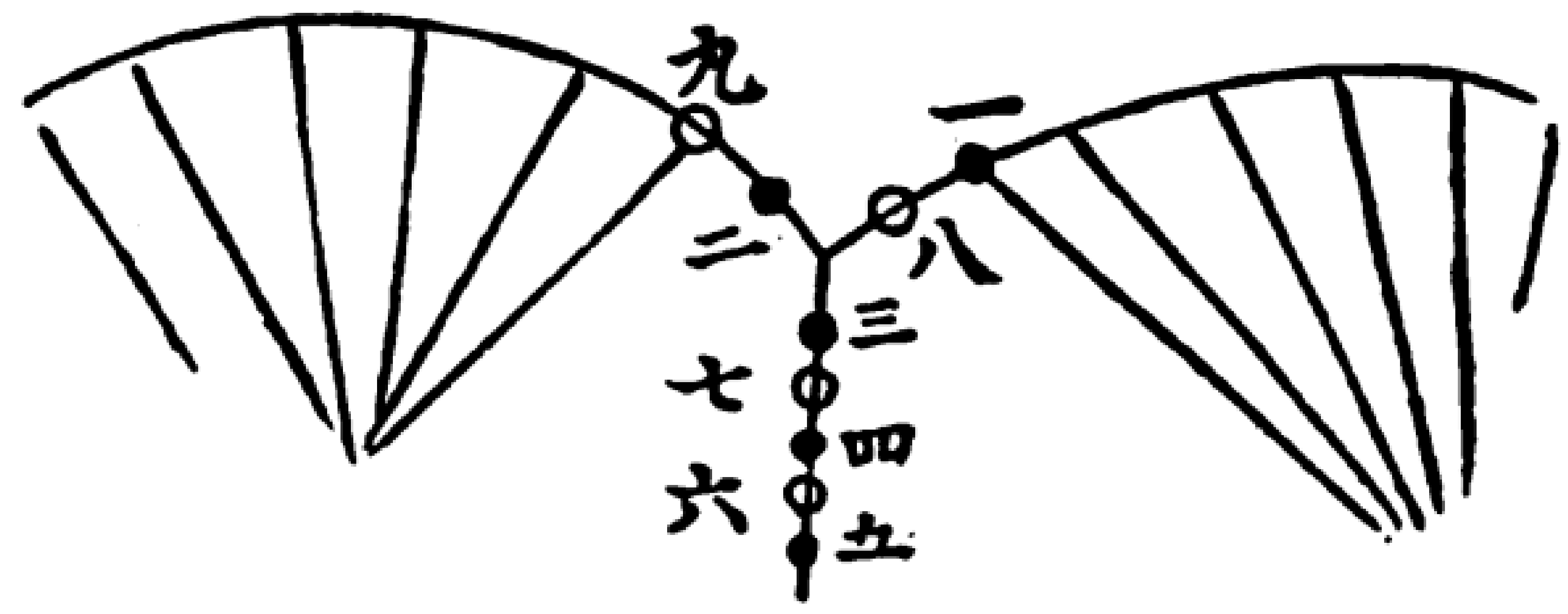
第十圖



第十二圖



第十一圖



はになりますと、又初めに鎖編み四つを編みまして、前に編てあります、其側に長編み四つ鎖編み一つ長編み四つと出來て居りますから、其鎖編みの所に長編み五つを入れ、鎖編み一つを致し、又其所に長編み五つを入れます、都合一つ所に長編み十個を編み入れますのでございます、次に鎖一つを編みまして、又前に編みました其側に長編み一つ出來てをりますから、其上に長編み一つを入れてまゐります、此側が終りましたらば、此次の側も此通りに致します、次の側は又鎖四

つを編みまして前の側の五つの長編と一つの鎖編みと又五つの長編みといふ工合にできてをります、其中央に長編み十二個を入れ鎖編みを一つ致しまして、前の側の長編み一つの所に又長編み一つを編み入れてまゐります、此側が一回編み上りますと第十圖の如き菊の花の様な形で直徑が七寸位になります.(イ)は中央の長編のみにてつくりたる所、(ロ)は長編みの數をまして終りに十二個の長編みの所(ハ)は長編み一つにてなりたちてをる所でございます、大躰の所は出來上りましたから此度は極細の毛糸(此大躰を編みました毛糸と異る色のもの)をとりて飾をつけます、先つ初に十二長編が一とところに出來てをります、其十二めの目即ち終りの目の向ふの一本をとりまして、第十一圖の(一)に帽子編みを一つ編みまして、鎖を十一編み前に出來てをる鎖一つと長編み一つとをとはして、次の鎖編みの所即ち圖中(二)に帽子編みにてとめて、又鎖編み十一を致しまして、直ぐ其そばに出來てをる長編み即ち前の側を編みましたときに長編み一つを編であります所に右の下よりへーケルを入れ(長編みをたてに見て)て帽子編みを致します、此ときは此圓形の中心の方を左にして持ちまして編みます方が致しよくあります.左様致しますと此長編みを横に見て下よりへーケルを入れて編てまゐります、又十一鎖編みを致しては帽子編みを入れること都合三度第十一圖の(三)(四)(五)の如くいたします、又鎖編十一を編みまして其次の長編み(周圍より漸々に中心の方に向ふて編でゆくのです)、の所に前の通りに鎖十一を編みましては帽子編みにてとめ又十一鎖編をいたしましては帽子編みにてとめてゆきます、かやうにしてこゝにも三度やはり(三)(四)(五)の通りにいたします、次に又十一の鎖編みを致しまして次の長編みに移りましてこゝにも前の通りに飾を編みつけます、かやうにして最後の所まで(此花瓶敷の編み初めから長編みのみにて伸縮なく五段ばかり編みました其次の側即ち長編み一つ次に長編み四つ又長編み一つとたがひちがひになりました其側第十圖の(ア)の所)まゐりましたらば又中心を右に周圍を左になる様に持ちな

ほしまして前の糸をきらずに直に鎖を十一を編み前の三度飾が編みつけてあります、其間に帽子編みを一つ入れまた十一の鎖編みをいたして前に編てあります其間に帽子編みにてとめて都合二度飾を入れますので即ち第十一圖の(六)及(七の通りに致します、それ故周圍より中心に向ふてつけてまゐりました飾と此度の飾と向ひ合ひましてつまり長編み一つの所にゆきかへり飾が五度入るわけてござります、かやうにして中心より周圍に向つて順々に飾をつけてまゐりまして外圍の所即はち長編みの終りの所にまゐりましたらば、又十一の鎖編みをいたしまして前にとばしました鎖編み(最も外圍にある長編みをたてにして見ての右の鎖編み)第十一圖の(八)の所に帽子編みにてとめます、次には鎖をまた十一編みまして次の十二の長編みの上の目(第十一圖の九)の向を一本すくひまして帽子編みを致します、又次も同樣に十一の鎖を編みましては次の長編みの上の目の向ふを一本すくひまして帽子編みにてとめます、又十一鎖をあみましては次の長編みの上の目の向ふを一本とりて帽子編みにいたし順次この樣にして十二個の長編みの終りまてまゐりましたら十一の鎖編みをいたして前の側を編むときに出來てをります鎖編み一つ長編み一つをとばして次の鎖編みの所に帽子編みをいたします、又次に十一の鎖編みをして長編に帽子編みにてつけてまゐること第十一圖によりて前に申し述べました通りでございますから他は推して御承知を願ひます、此十一の鎖編みのときにはなるべくゆるく編む樣にいたしませぬと編み上りが美麗く見えませぬからよく／＼注意せねばなりません、殘らず飾りをつけ終りましたらば、糸をきりまして、第十圖の(イ)の外圍即ち長編み四つと長編み一つとたがひちがひに編みました所より中心を手前に持ちまして、四個の長編みが一所にできて居ます其右の目即ち第十二圖の(ア)に帽子編を致しましてそれより十一の鎖編みをいたして第十二圖の(イ)に帽子編にてとめ次は又十一鎖編みをいたして(ウ)に帽子編みをしてつけます、以下(エ)(オ)の黑點の所にあみつけてまゐります、か樣にしてこゝ一回致し

ましたらば、又鎖編みを十一つくりまして、此度は前に帽子編みをいたしてとめてあります其間に十一の鎖編みを致しては第十二圖の(カ)(キ)(ク)(ケ)(コ)と云ふ順序に帽子編みてとめてゆきます、しかし此側の帽子編みにてとめるときは前に出來てをる飾の一度は外側より一度は内側よりとめてたがひちがひにいたします、それ故十一の鎖編が縄の様な工合になるのでございます。先づこれにて編み終りましたから糸の切めや其他の所に注意して糸の切めは毛糸針に通してよくとめて仕上げをいたします。

(つゞく)

挿花のしをり

捻華庵主人

▲破格の格

挿花にもいろ〳〵流派があつて、古流の善いと云ふ人もあれば、遠州に限ると云ふ人もある、青山を賞美するも、池の坊を好くも、それはめい〳〵の好き〳〵で、何れをそれと優り劣りを定むることは出來ぬ。又何流でも何派でも、必ず何處かに一種の特色を備へて居るもので、丁度脂には脂の味があり、汁粉には汁粉の旨味がある様なものである。が私は可成天然を傷けぬ……自然に負かぬ挿し方を一番好いやうに思ふ。

挿花も流派に由りて、種〳〵六かしき規則や格法があつて、中々素人では花を挿すことが出來ぬ。一瓶の花を五行に配當したり、天地人の三才に象つたりする、それも悪くは無かろふ。然し花に限らず凡てのものが、餘り法式になずむ時は活氣を失ふもので、折角の花が死物や作りものに成つては、趣味も風情も無くなつて、装飾にも慰にもすることは出來ぬ。

近頃のやうに挿花の流行することは、近古に例の無い事ださうで、至極結構である。然し唯何となくその挿法が不自然的に傾きはせぬかと思はるゝ、これが如何にも口惜い事である。此前訪問した時には、主人公の手挿と見えて、野梅の折枝が譯も無く古銅の大花瓶に入れて、その不用意の間に云ふにも云へぬ趣が見えて、

すゝろに暗香浮動月黄昏と云ふ景致を連想せしめた、然るに父に昔つれた時には令嬢が挿花のお稽古を始められたと云ふので、うねうねと曲げた桃の花を薄端とか申す式の花瓶に挿されてあるから、お流義はと尋ねると遠州、と云ふとてある。これも悪くは無い。然し前は自然的、後は不自然的。一は雅、一は俗。何となく主人の嗜好趣味が下つた様に思はれた。がこれは未だ私の眼がその妙所を認むることの出來ぬからでもあろふ。

それもこれも人の好き好きて、他の容喙は許さぬ事てあらふが、私の好くのは破格の花！　破格と申しても、草木の出生も、枝葉の陰陽も構は無いで、唯めちやめちやに挿すと云ふのでは無い。破格に格ありて、所謂格に入て格を出づるもので、縦横自在その無作意なるが如き所に、終始草木の出生を失はずして、加之もその花や草の天眞を躍如せしむる様に挿し度いのである。法は不易、姿は流行。その所謂法は出生を尋ぬるの外、別段變つた道は無い、若しありとすれば俗流に媚る駄法と云ふても可いてあろふ。



まあ理窟は暫く措てこの自然的のものが、如何に趣味に富んで居るかと申すことは、同しく卯の花を挿すにしても、之を金仙花などゝ取交えて、二重、三重の花器などに所謂格法的に挿むよりも、床柱に掛けた花籠に、わざとらしからず、どつさりと挿し入れて、その雪の様に眞白な花が、枝もたわむ程咲き満ちて、床の間の半分も掩ひかゝつた風情は實に筆舌の外て、子規の聲でも聞ゆる様てある。

それて私は愈々斯ふ考ふる。挿花の法と申すものは、その草木の出生を尋ねて、陰陽を面白く配置するより外に道は無いと云ふことを。眞に立枝を使い、添に横

枝を使ひ、體や留の邊りには勢の好い花を使ふと云ふのも、矢張りこの自然が主であるからであろふ。
挿花にいろ／＼の流派があるが、彼の文人挿しと云ふものが一番自然に近い、今少し自然的のものは歐風の挿花！。然しそふは云ふもの丶日本流の挿花が惡いと云ふのでは無い、唯同しくば可成自然を失はぬ樣にありたく思ふのである。道に新古も東西も無い。只自然を寫すが、斯道の要粹であろふ。茶道の巨人千利休は

茶の湯とはたゞ湯をわかし茶をたて丶
のむはかりなるものとこそしれ

と云ふて、この道の奥秘を漏した。挿花にも大家があるやふであるから何とか面白い戒もありそふなものである。

局部の風情と全部の風情

嵐山の花や高尾の紅葉を見て、直ちにその全景を瓶頭に寫さうと欲するは誤なりと思ふは否か。如何程佳い景にもせよ、眺めにもせよ、その全局の山水景情を尺にも足らぬ花瓶の内に縮め樣とすることは六かしい、よし爲し得たりとて趣味も餘情も無いであらふ。一部を劃して全景を想はしむる、これが挿法の秘訣である。一枝の櫻も之を瓶頭に挿みて松の小枝を添ふれば自ら嵐山の風色を想ひ起すものて、その嵐山、芳野、或は須磨の松原等を看るもの丶想像にあづくるから餘情もあり餘韻もあるのである。挿花を盆景や箱庭を組み立つる樣に思ふて、山も林も水も作ろふと思ふは、未だ共に斯道を談ずるに足らぬ輩である。

▲過、現、未

過去、現在、未來の三世は何の上にも隨伴する自然の現象であるが、取分け挿花には殊に大切なる事柄である。然るに世間の挿花先生は兎角この邊の事には無頓着なるが多い。流義に依りては、過現未と云ふことを唱へても無い、然しそれも大抵は蓮のみの挿法に留めて、餘の花には餘り語らぬやうである。けれどもそれは疎漏である、沙羅双樹の花が盛者必衰の理を示す計てなく、天地間の草木は櫻でも柳でも桃でも、それよりも、ずつとあどけない姫百合や撫子の樣なものまでも、その花

や葉の上に、この過、現、未を表はさぬものは無い。挿花が若し、自然を寫し天然を傷けぬものでありとすれば、どうかこの三世の移り變りを一瓶の上に挿れ出し度いものである。即ち一瓶の花を三段に分とすれば、梢には蕾勝ちの枝、根べには半開滿開の花を程克く交へ、中部……添の邊りには少しうつろひ方の枝を用ふるなどの用意は、最も大切なる働きであろふ。



當季の花
▲藤花

餘の花と挿け合すこと少く、多くは單獨に挿む、掛花、置生け。何れかと申さば、無論掛け生の方なり。然れども二重、三重の上の段に挿すこともあるなれば、置生けにせずとも限らず。掛、置、何れに拘らず、たゞゝに、しとやかに、垂れもの、本躰を失はぬ様ありたきものなり。

此花の水揚げは、餘の草花のやうにその根本を燒きた

るのみにては萎れ易し。切り口を二つ割にして豆を挾むか、花瓶の内へ水に代へて酒を注ぎ置を要す。挿し方は無論草鉢の姿。此花に取合よき花瓶は、籠花器最も可く、釣舟も半月もそれ〳〵風情ありて面白し。

▲芍薬

花の姿は、行草二躰の内に挿す、眞躰に挿すは稀れなり。眞に蕾を用ひ、躰留に開き半開きを用ふ、内添へは殊に蕾の堅きもの、添も半開が風情なり。花の數五七本を始め十一本乃至十二三本。それより多きは、趣さわがしく卑しげに見ゆ。

紅白交へ挿し又は各別に挿す、紅よりも白が氣品高し。

花器は、籠花器は尤も妙。銅器、陶器も姿に依りては取合ひよし。掛花、置挿。兩様とも差閊へなし。

朝顔の栽培

若溪女史

◎種まき　朝顔の種を蒔く季節は春の彼岸から六月の夏至頃まで〻、早く蒔いたからとて、其割に花が早く咲くものではありません、寧ろ遅いのがよろしいですが、通例穀雨（即ち四月廿日頃）乃至は八十八夜前後（五月一日より五日頃まで）が一番好い季節となつてゐます。丁度其頃東京ならば戸外に稗蒔を賣りあるく時分です。

偖種を下すには鉢蒔、床蒔の二通りありまして、鉢蒔といふのは一と鉢に二粒か多くて三粒を蒔き發芽の後、發育の最も好いものを一本だけ殘して餘は皆拔取ります、尤も鉢の大小によりまして二本位は存して置くこともありますが、是れは商賣人が賣物にする爲で、本統にうつくしい花を咲かせやうとするには、矢張一鉢一本にして置くのがよろしいのであります。そうしませんと折角肥料の効目が薄くて發育の仕方がわるいやうであります、扨又床蒔と申すのは誂へ通りの土をこしらへ、そこへ凡そ一寸位づゝ隔てゝ一時に多くの種を下すのであります。すべて鉢蒔にせよ床蒔にせよ、極く淺く種を下し、一寸指の頭で土をぼちつた位にして

種を土の上に置き其上から細篩で僅かに土を被せる位にして充分です、尤も蒔く日は晴天よりか少し濕り氣のあるやうな時が適當します、されば蒔いた種は通常十日遲くも廿日位すれば芽を出すもので、それも氣候の寒暖によりますが、まづ八十八夜前後に蒔いたものとすれば十二三日もすれば芽を出します、それから苗分に就て一寸申して置きますが一つ鉢に四五粒蒔たのを他の鉢にうつしかへる時、此苗分は天氣のよい夕方に限ります、忘れても雨天にはせぬとです。又種を下すに注意すべきは芽を下に向けて蒔くので上を向けて置くと時として腐るさうです。



○土こしらへ　さて土拵へは普通の肥土例へば田畑の土若しくは溝泥の乾きたるものなど（東京朝顔の名所入谷にては田の土を用ゆ）に砂三分を混じ水脱をよくして植へ其の場所は朝日を除き晝より夕方へかけて日向と風通りのよき所に鉢を置くが宜しい、一躰植物と云ふものは何に限らず其地味によりて伸縮のあるものですが、殊に朝顔はそれがあります、

若し十分の事を申せば翌年用ゆる土は其前年から肥料を用ひて種蒔の時までたくわへて置く位に致せばよろしいが、それは中々手數がかゝりて素人方にては造作でせう、さすればなるべく粘質のない黒土を能く日に晒らして細かい篩をかけ前に申した通り砂か小砂利を少しまぜ合せて用ゆるが宜しい。

何故斯う砂を混ぜるかと申すに、一躰朝顔は水を好むものですけれども其水の流失方がわるいと枝ばかり繁つて美しい花を見る事が少いからです、尤も東京ではあまり砂利を用ひません、入谷の朝顔師は肥土を拵へて日に乾かし、それに植へるのを一般の習慣としてゐます、扨又東京ならば下町のやうな人家の稠密して庭園のない所では屋根で作りて居るものあるが、屋根は乾燥が烈しいから下では水を朝、晝、夕の三度やるのを晝間二度もやらねばならぬ、殊に夜分に下へ卸して地氣を受けさすれば、申分はないが、水をやるには如露にてなるべく葉にかゝらぬやう灌がねばならない、植る鉢の大小は豫め定めることも出來ないが、それに準じて大鉢を用ゐねばなりません。

◎發芽の丹精　何でも此の植物の培養には丹精が入りますが、朝顔を仕立てるにも、相應の丹精がなくてはなりません、まづ大切なのは發芽の時で、それから水を灌ぐには前に申した通り葉にかゝらぬ樣注意せねばならない、若し少しでも濡れると其の葉には斑點がついて汚くなるものです、扨て二葉を生ずる間もなく、其間から更に又芽を出し、又葉も生じて次第に繁茂して來るもので一寸、垣根などを這はせるにしても二葉の出た當座は何ともないやうだが一と雨毎に葉が茂つて來て捨て置くと、いつの間にやら垣根全躰が青々として來るものです。

扨て斯う段々と葉が出、芽が出るのですが三回目までは手を觸れず自然の發育に任かせて置くのがよろしいそこで三回目以上からは葉の本から芽を出した時之を摘み取るのがよろしい。これは徒らに葉が伸びれば蔓澤山になつて隨つて開花の季節に至つて十分の花を見ることが出來ないから、若ひうちにそれを豫防するの

です。
扨てその摘み取る時雙股に出た芽の中、どれか一本太く肥へたのを存して置けば自然にそれが朝顔の幹莖になつて將來うるはしい花をさかせる心髓になるのでありますからこの摘取りは余程注意を要するのであります。

◎肥料と培養　朝顔の肥料は通常油粕又は魚の腸の腐つたものを遣りますが其の實糞尿が一番よろしいと云ふとて有ます、其のやり方は油粕ならば極く細末にして水に混じ（水一升に粕一合位の割）其の溶解するを待ちて後用ふのです、若し十分をいへば明年の肥料は今年の内に作つて置いて後用ゆるのが効能が多いけれども手數がかゝるからまづは發芽の前一ヶ月位に作つて置いて用ひてもよろしい、然し決して生水に油糟を入れてまだ溶けぬうちに與へてはなりません、次に糞尿を與へるのは素人作りには甚だ困難であるけれども、若し與ふるとすれば水の調合油粕と同樣でこれも又一二年ねかして置いたのが生肥よりも効能があります。

それから水灌もなるべく井戸水などよりも雨溜り水か池水がよろしい、決して汲立の硬水を灑いてはなりません。

偖培養に就ては一段と丹精を要するもので世に立派な人物を作らうとおもへば、それだけ家庭の教育に注意をせねばならないのと同じく、僅かな朝顔位なものでも一と夏うるはしい花を眺めやうとするにはこの培養が肝腎決して放擲はなしにして置いて善い花を見ようといふ事は出來ません、一躰朝顔は極々軟弱なもので、初夏の頃の日照りには枝葉共に兎角萎れ勝ちになるものですが、其の萎れたところへ水をやれば即座に活き返つて來る、併し日光に照して萎れしめるのは培養の方法で萎れたのを水で活かし、活したのを又日に當てて萎れさせるのが丹精です、斯樣にして朝、晝、夕の三回水を與へて生氣をつけるのであるが朝は露を受けて濕り勝ちなれば強て灑水の必要もないやうだけれども、こうして置かねば晝前に甚だしく萎れるから天氣

のよい折りなどは殊に朝水を與る必要があります。

又朝顔は蔓の伸びやすいもので之れを放任して置く時には其精力が皆枝葉の方に片寄つて仕舞つて遂にうるはしい花を見るとが出來ないから蔓も葉も好い加減に取り除いて力を花の方に得させるやうにせねばなりません、さてそれを取除くには指爪で取るのがよろしいそしてなるべく日光に中て丶萎れた時にするのを好しとする。

次には雨降の豫防である、雨も少し位降るのは差閊もないがあまり、降りつゞきがすれば雨除をして與るのがよろしい、又烈しい風には勞はつて與らねばならない、それから莟は大抵一所から二つ三つ位出すものですが、これも其儘捨て置く時は花は澤山に咲いても、いづれも小さくなりますから、なるべく摘み取つて唯中の大きいのを殘します、そうすると他の莟の精力が一つに集まつて自然と大輪のものを見る事になりますが尤も澤山の花を見ようと思ふのが主意であるとすればそれにも及びません。

それから又咲いた花についても同様で夜の明方から發いて五六時間は咲いて居るのですが、それも明日の花を樂しまうと思へば今日花を未だ萎まぬうちに摘み取る位にするのが朝顔培養の方法です、扨、それをするには翌朝咲かうとする花の莟を其前夜に見て置て若し其花が小かろうと思へば其莟の大きそうなのを殘してあとのは取去るやうにすれば、翌朝の花はキツト想像したのよりも大輪なのが見られます、すべて朝顔の大輪物を好む人々は決して數多の花をつけずに一夏季中に一本僅かに十二三種位を止めて置くといふ事ですが、尤もこれ等は朝顔の專門の培養家のする事で普通一般素人の慰としてはあまり凝り過ぎた事かも知れません。

（完）



英語實習（朋友間の會話）

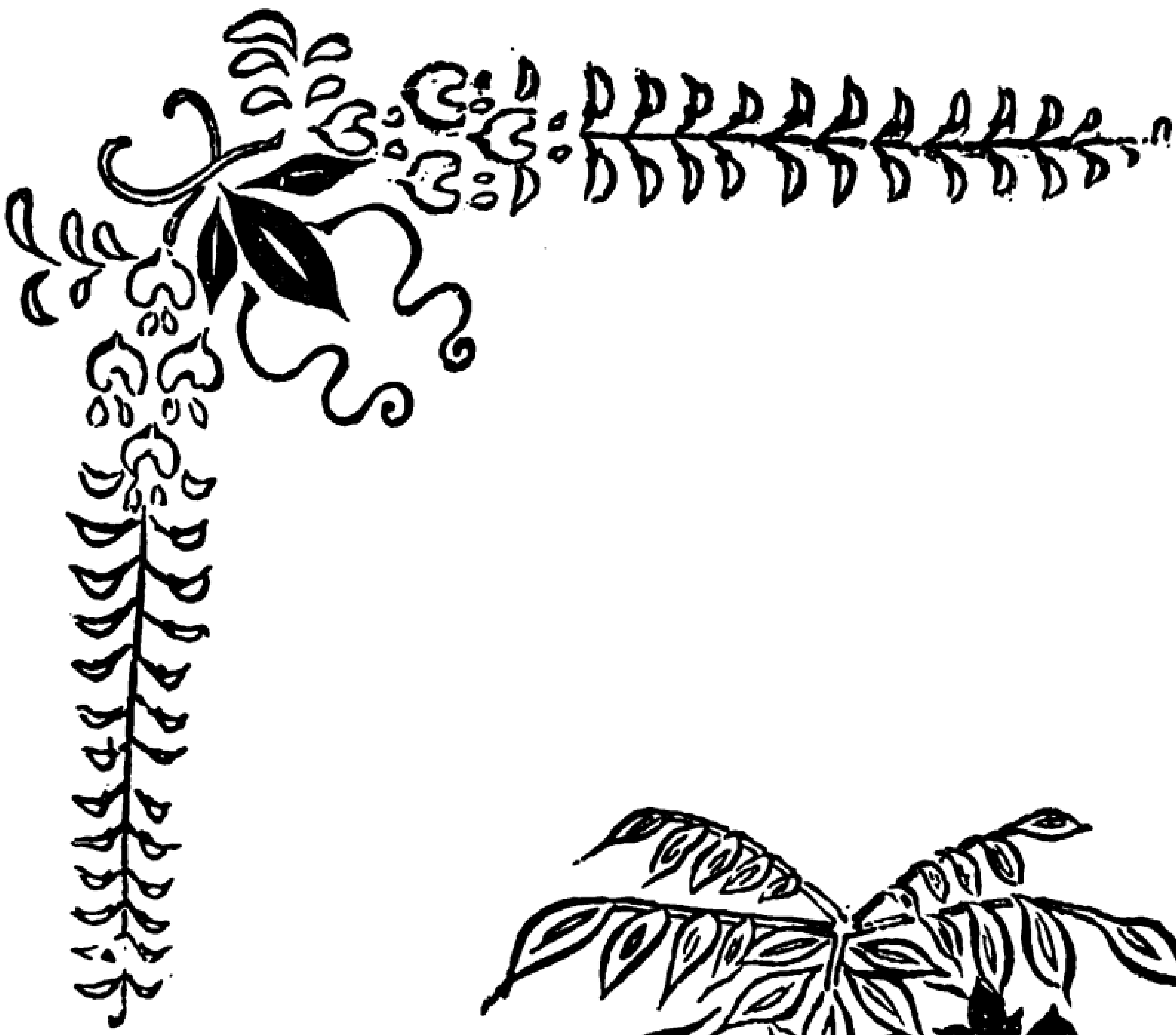
江口良次

O! Is that you Miss Haruko?	おや春子さんでは御座いませんか。
O yes! Miss Asabuki, please excuse my long silence.	あらまあー朝吹樣近頃は御無沙汰致しました。
Where did yon go to-day?	今日はどちらへいらつしやいましたか。
I went to Kameido.	ちよいと龜井戶まで參りました。
Is the wistaria in full blossom now?	藤はもう咲いて居ますか。
Yes, it is just in full blossom.	ゑゝ今が恰度滿開で御坐います。
It is very fine weather lately. Isn't it?	近頃は隨分お天氣か續くようですねー。
Yes, indeed.	はい左樣で御坐います。
We will have the sports next Sunday. Will you come to it please?	此日曜に運動會がありますからどうぞいらつしやつて下さいませんか。
Thank you, I shall be very glad to come.	有り難う御坐います是非伺ひたいと存じます。
At what time will it begin?	何時から始まりますか。
From nine o'clock in the morning.	朝の九時からで御坐います。
What kind of sports will you have?	どんな事がありますか。
We will have a Lown Tenis match, Dancing, Singing, a Tether-ball match and many other things.	「ロンテニス」や舞踏や唱歌や「テザーボール」などいろゝゝの事が澤山あります。
How pleasant it will be!	さぞ面白いことで御坐いましようね。
I shall send you an admission ticket next Saturday.	切符は其前の日に差上げます。

ワイン カツプ	Wine-cup	杯
グラツス	Glass	こつぷ
テー カツプ	Tea-cup	茶碗
ピツチヤー	Pitcher	水差
ポツト	Pot	壺
プレート	Plate	皿
ソウサー	Saucer	小皿
ボツトル	Bottle	徳利
スプーン	Spoon	匙
フオーク	Fork	肉叉
ナイフ	Knife	庖刀
タウエル	Towel	手拭
ハンカチーフ	Handkerchief	はんけち
ブラツシユ	Brush	刷毛
ボツクス	Box	箱
バスケツト	Basket	籠
ペール	Pail	手桶
ラツドル	Ladle	柄杓
バケツト	Bucket	ばけつ
ブランケツト	Blanket	毛布
マツト	Mat	疊
ベツド	Bed	寢臺
クヰルト	Quilt	蒲團
クーシヨン	Cushion	座蒲團
カーペツト	Carpet	段通
マツチエス	Matches	まつち
ストーヴ	Stove	暖爐
フアヤーボツクス	Fire-box	火鉢
トングス	Tongs	火箸
ポーカー	Poker	火掻
シヨヴエル	Shovel	火斗
コール	Coal	石炭
チヤーコール	Charcoal	炭
トバツコ ツレイ	Tobacco-tray	煙草盆
ランタルン	Lantern	提燈
キヤンドル	Candle	蠟燭
ブルーム	Broom	箒
テーブル	Table	卓
デスク	Desk	机
ヅローワー	Drawer	抽斗
チエアー	Chair	椅子
ソーフア	Sofa	長椅子
スツール	Stool	腰掛
ルツキング グラツス	Looking-glass	鏡
ピクチユアー	Picture	繪畫
ホトグラツフ	Photograph	寫眞
ルーム	Room	室
シヨツプ	Shop	店
カウンター	Counter	帳場
ポーチ	Porch	玄關
パーロル	Parlour	應接室
ヅロウイング ルーム	Drawing-room	座敷
ダイニング ルーム	Dining-room	食堂
キツチエン	Kitchen	臺所

刺繡圖案

藤





武村耕靄新案

武村耕靄新案



刺繡圖案　牡丹

講義

漢文評釋

文學士 久保天隨

下岐蘇川記（下）（齋藤拙堂）

蓋始發抵此、爲陸行半日之程、不一餉時而至、其快可知矣、嘗讀盛廣之酈道元所記、誇稱江水迅急之狀、至唐李白述其意云、千里江陵一日還、平生竊疑以爲文人虛談、今過此際、始知其不誣也、但舟甚迅、不能徐翫峽中之勝、爲可恨已、

(訓讀)蓋し、始めて發せしより、此に抵るまで、陸行半日の程たり一餉時ならずして至る、其快知るべし。嘗て、盛廣之・酈道元の記せしところを讀むに、江水迅急の狀を誇稱す。唐の李白に至り、其意を述べて云ふ、千里江陵一日にして還ると。平生竊かに疑ひ、以て文人の虛談と爲す。今此際を過ぎ、始めて其誣ゐざるを知るなり。但し舟甚だ迅く、徐に峽中の勝を翫ぶこと能はず、恨むべきと爲すのみ。

(字解)始發は、この朝伏見を發せしをいふ。抵此は、大山城の見えるわたりまで來りしをいふ。○陸行半日之程、歩けば半日かゝる位といふ義なれば、七八里と見える。○一餉時、一度飯を食ふ間、時の短いのを形容したのである。○盛廣之は、梁代の人で、荆州記といふ記行を書いた。その中に、蜀中、楊子江の上流の、舟行迅速なる樣を寫して、下の如く云つて居る。「朝に白帝を存し、暮に江陵に至る、其間千二百里、飛雲迅鳥と雖も、過ぐる能はざるなり」。○酈道元は、後魏の人で、水經注といふ書を著はした。○江水は、楊子江の上流で、泯江といふ。○李白は有名な詩人、こゝに引き抜いた一句は、「早發白帝城」と題した七言絶句の承句であつて、全詩は下の如くである、「朝ニ辭ス白帝彩雲ノ間、千里ノ江陵一日ニシテ還、兩岸猿聲啼イテ不ス住、輕舟早ク過グ萬里ノ山」。前の盛廣之の文と對照す

れば、一層善く分かる。○文人虚談、文章家の法螺的談話○不誣、僞でない。○不能徐翫峽中之勝、ゆるりと峽中の景色を眺めて行くことが出來ない。

(文義)今朝伏見を出てから、こゝへ來るまで、陸を歩るけば、たしかに半日かゝる位の道程があるそうだが、舟て來たものだから、一度飯を食ふ程の時間もかゝらない。何と早い事てはないか。この一事ても、舟行の愉快極ることが御分りに成りましよう。あるとき、支那の紀行文家といはるゝ盛廣之や、酈道元の書いた文章を讀みましたが、その中に、楊子江上流の水の勢、頗る早いことを、大袈裟に書き立てゝありましたが、唐の李白は、夜郎の貶地から赦されて還るときこゝを舟て下りて、千里江陵一日還といふ句を作りました。平生、心、竊かに疑つて、思ふには世の常の文人といふものは、何事ても針小棒大といふことを、遣らかすから、これも大方法螺であらうと、多寡を括つて居ました。然るに、今、自分て此川を下りて見れば、何も僞でなく、實際に有り得べきことてあるといふことが分りました。かくの如く、舟行の早いのは、實に心持の善いことでありますが、唯だ餘り早いので、ゆるりと峽中の景色を眺めて居ることの出來ぬことのみが、遺憾てありました。

(評論)この一節は、全く虚寫てあつて、支那の江水を引きずり出して、この岐蘇川に對照せしめた上、李白の句を引いて、その法螺でないことが分つたといひ、暗に此川を賞めそやして居ます。これが、文人狡猾の手段と云へば、云ふべきがあるが、純粹な叙事の中に、こんな議論めいた事が交るといふと、波瀾變化といふものが出來て、一段と風情が増して來るといふものてあります。

又三里、抵笠松、鳴鐘方報巳、登憩岸上店、目猶眩、仰見屋椽、動搖不定、瞑坐良久乃止、進鱒脆美媚口、此行跋渉山谷、蔬食彌旬、獲之以解菜飯、巳復入舟、岸愈濶、水愈緩、險阻巳遠、無復可觀、枕籍而臥、風方逆、舟子用力、搰搰甚勞、艪聲喧聒、使人煩冤、午下稍得風便、揚帆復走、未乃睡熟、比醒達於桑名、日尙高、謝遣舟人、登陸而行、至四

●●(訓讀)又三里、笠松に抵る鳴鐘方に巳を報ず、登りて岸上の店に憩ふ。目猶ほ眩す、仰いで屋椽を見るに、動揺定まらず、瞑坐良や久うして、乃ち止む。鱒を進む、脆美口に媚ぶ。此行山谷を跋渉し、蔬食旬に彌る、之を獲て以て菜飯を解く。已にして、復た舟に入る。岸愈よ濶く、水愈よ綏かに、險阻已に遠く、復た覩るべき無し、枕藉して臥す。風方に逆、舟人力を用ひ、搰搰甚だ勞す、艣聲喧聒、人をして煩寃せしむ、午下稍や風便を得、帆を揚げて復た走る。乘乃ち睡熟す、醒むる比桑名に達す。日尚ほ高し。舟人を謝遣し、陸に登りて行き、四日市に至りて宿す。

●●(字解)笠松、驛の名で、美濃の西南隅にある處。○鳴鐘、時を知らす鐘。○報巳、巳は今の午前十時頃。○目猶眩、まだ目が廻はる樣な氣がする。○屋椽、大方天井の横木だろう。○瞑坐良久乃止、目を閉じて、座つて、しばらくしたらやつと直つた。○脆美媚口 肉が和かで、且つ甘く、口に媚ぶる如くである。○蔬食彌旬、野菜ばかりで十日餘も送つた。○解菜飯、これが如何にも和習の俗字で、判明しないが、大方「これで菜飯づくめの苦を逃れた」といふとだろう。しかし、「この肴を得たから、携へて來た菜飯の辨當を開いた」とも取れる。こゝでは、前說に決めて置かう○枕藉而臥、横に成り、ころげ合つて寐る。○搰搰は、櫓を押す音で、ころり／＼といふ響。○喧聒兩字ともかまびすしいといふ義。○煩寃うるさいこと。○午下は午後。

●●(文意)これから、又三里ばかり下ると笠松といふ驛に着いた、その時、鐘が鳴つて、數ふれば巳の刻てある少し早いが 晝飯といふところだから、舟から登つて、岸上の然るべき家へ飛び込んだ。ところが、少々船暈といふ氣味でもあらう、まだ目が廻はる樣な氣がして、仰いで天井の横木を見ると、動いて定まらない程であつたが、目を閉ぢて、座はり、しばらくしたらやつと直つた。その中に、御誂の膳が出來て、持つて來たのを見ると、鱒てあつて、まことに乙な物、味

の善いことは、頬べたも落ちるくらゐ。一體今度の旅は、山の中ばかり跋渉して、碌な物は食へず、野菜ばかりで十日あまりも過ぎたものだから、下司男なら、骨離れがすると云ひそうであつたが、こゝで此肴に御目にかゝつたものだから、先々菜飯づくめの苦を逃れることゝ相成つて、まことに結構な次第である。それで晝飯も濟んだものだから、又ぞろ舟に乘込んだが、兩岸は愈よ濶く、水の流は愈よ緩かで、險阻の處は、遙か後に成つて、最早觀るべき景色もない。そこで、舟の中に横に成り、ころげ合つて臥て居た。折しも、風が逆であつたものだから、船頭が骨を折り、櫓をころり〳〵やらかして、その騒しく聒しいこと、譬ふるに言葉なく、耳ざわりに成つて、うるさくて堪らない。しかし、午後に成つたら、少しく順風になり、帆を揚げて走せ出した。これで善いといふので、皆々すや〳〵と晝寢の夢に入り、その醒めたときには、桑名に着いて居たが、日はまだ高くあつた。そこで、船頭に賃金を與れて、之を還へし、陸に上り、草鞋の紐をしめ堅め、てく〳〵と歩るいて、四日市に着いて後、宿を求めた。

（評論）この一節は、特に論ずべきこともない。それは、最早や文章の中心絶頂といふ處を通り越して終つて、ほんの補筆といふべき處へ來たからである。しかし、舟から上つた後の船路は、徒に書き加へたものでなく、鱒の一條は、遙かに篇首に呼應して居る。その下、水の緩かに成つたことを書いたのは、前の山水怪奇の狀をして、あるか上にも、印象愈よ明瞭ならしめむとする手段である。

自伏見至此、殆爲二日半路、道上行見家家挿菖蒲、彩旗翩然翻風、乘在行旅倥傯渉日、殆忘月日、至是乃知爲端午節、不圖今日舟行、爲弔屈之擧、抑亦奇矣、且舟凌危險、布帆無恙、免爲汨羅之鬼、不亦厚幸乎、蓋天下之至奇至美者、毎在於艱難危險之地、不獨山水之勝也、求之者、比於虎穴探龍頷、危而後有所獲矣、余於是乎有感焉、未可以語千金之子也、姑記之、以示苦學勵行之人、

●(訓讀)伏見より此に至る、殆んど二日半の路程たり。遡上行く〳〵、家家昌蒲を挿み、彩旗翩然として風に翻るを見る。余、行旅に有り、倥偬日を渉り、殆んど月日を忘る、是に至りて乃ち端午の節に屬するを知る。圖らざりき、今日舟行、弔屈の擧を爲さむとは。抑も亦た奇なり。且つ、舟、危險を凌ぎ、布帆恙なく、汨羅の鬼となるを免る、亦た厚幸ならずや。蓋し、天下の至奇至美なる者は、毎に艱難危險の地に在り、獨り山水の勝のみに非ざるなり。之を求むる者は、虎穴に入り龍頷を探るに比す、而して後に獲ることあり。余、是に於てか感あり、未だ以て千金の子に語るべからざるなり、姑らく記し以て苦學勵行の人に示す。

●(字解)二日半路程、二十四五里と見える、○家家挿菖蒲、家ごとの軒端に菖蒲の葉をさしてあること。○彩旗翩然、鯉や幟などの彩しく飜つて居ること。○倥偬渉日、忙しく日を過ぐすこと。○端午舊暦五月五旬の節句のこと。 俳諧歳時記に、下の如く出て居る。「五月五日、端午の節端は初なり、午は古しへ五と通用す、しかるときは、五月初の五日の謂なり。」これは俗に男の節句といつて居る。 その事は和漢三才圖會に、「五月五日 家毎に幟及び甲冑等の兵器を立つ、其刀菖蒲を以て是を飾る、仍て蒲菖刀と號するなり」とあります。しかし、此事は中世から始まつたものと見える、前の歳時記に「相傳ふ、光仁天皇元應元年、蒙古の賊來る、早良親王をして之を討たしむ。親王藤杜の社に禱りて、出陣し給ふ、時に五月五日。忽ち神風吹いて敵船を飄し、立どころに皆敗走す、戰はずして勝ち給へり。この因縁を以て、今に至りて、五月五日の祭、みな兵器を用ふ、民家も又しかり。」と書いてある。これに據ると、神風の一件も、弘安胡元の役ばかりては無いと見える。一體五月の節句は、夏時の邪氣を攘ふ爲てある。だから、荊楚歳時記には「艾をとり、人をつくり、門上にかけて毒氣を攘ふ」とあつて支那の風俗は、今でも其通ださうだ。して見れば、我が邦の古俗、菖蒲を吹くのは、その眞似を

した名殘と見える。○弔屈之擧、五月五日は、支那で屈原の祭日である。戰國の末、楚の三閭の大夫屈原が、汨羅といふ川へ身を投げて死んだが、丁度この日に當つて居るので、文士學者などは、此日に屈原を祭ることに成つて居る。丁度寒食の日に、介子推を祭るのと、趣相似たりと云ふべしだ。○布帆無恙、舟行無事安着といふことだが、李白の詩、布帆無恙掛壯風といふ句から點化したのだろう。○汨羅之鬼、汨羅は五六行前にも述べた通り、屈原の死んだ處、鬼は祀られぬ人。だから、これは水に落ちて死ぬといふこと。○虎穴、虎の棲む穴。○龍頷龍の顋。○千金之子、富貴の家の子。姑、しばらくと訓すべし。

●（文義）伏見から、この四日市まで、殆んど二日半の道程で、二十四五里もあるところだが、一日で驅け通したこと、上に述べた如くであります。こゝへ着いて、道々見ると、家ごとに菖蒲を軒にふき、鯉や幟が立つて居て、ひら／＼と風に飜て居る。同行の輩、久しく旅をして、いそがしげに日を送り、殆んど月日をも忘れて居たが、これを見ると、言はずと知れた端午の節句である。端午といへば、支那では文人學者などが屈原を祭る日だが、この日、我々は丁度舟に乘り期せずして弔屈の擧をなすべくあつたが、まことに不思議な事である。その上、舟は危險を凌ぎ、幸に恙なく、無事安着、水に落ちて死ぬ樣なことの無かつたのは、重ね／＼の大幸である。これに就けても、凡そ天下の至つて奇らしく至て美しい者は、尋常一樣な處にころがつて居るものでは無くて、いつもながら、多少の艱難を冒し、幾分の危險を凌いで後に、得らるべき處に存ずることに定つて居る。何にも山水の風景ばかりで無く、功名富貴とても、寢て居て得らるべきものではありません。何でも、かゝる種類のものは、虎の穴に入り龍の顋をさぐり、九死を出て隨分命を失ひかゝる樣なこともあつて、然る後に、得られるものである。余は（拙堂）は圖らずも、こゝに至りて、深く心に感ぜざるを得ない次第であります。この事は、富貴の家に育つた、お乳母日傘の坊ちやん達

に、御話し申したところて、夏蟲は氷を語るべからずといふ通り、とても御分りになりますまいが、さりとて、折角の感慨を、自ら葬るといふ譯にも行かない。どうか、陋巷に在りて、食ふべき物もなく、それでも苦學して且つ行は勵むといふ樣な人に、示したいものだと思ひます。あゝ、鄉等、たとひ、今、艱難危險、到底堪らへられないと思ふ程な事があつても、落膽してはなりません。天下の至器至美は、必ず此の如くして後に得られるものて、たとへば、此川の奇景も危險な處に限つて存ずる樣な者でありますぞよ。

(評論)この一段は、結尾である。前に五月四日に十三峠を越したとあるから、この日が端午であることは分かり切つて居るが、舟行の危險の爲に、氣も遠くなり、且つ二日半もかゝる處を一日で行き過ぎたものだから、かれこれ、今日の何日たることをうかと忘れた樣な次第と見える。端午から弔屈の擧につゞき、それから汨羅之鬼、それから艱難危險之地、層一層に無味が深くなつて、遂に感慨に入り、語畢りて意は愈よ永しといふ樣な趣がある處は、まことに筆力千金といひたい位であります。(下岐蘇川記終)

詠歌の志をり(一)

文學士 武島羽衣

人誰か心なからむ、心あるもの誰かまた感なからむ。月を見、花を見てあはれと思ひ、めでたしと考ふるは山がつも然かなり、賤の女も然かなり、歌人もまた然かなり。則ち花月に對しての感情を抱くに於ては山がつ賤の女、歌人共に一也。しかも其間になほ賤の女山がつ歌人の別あるは何ぞや。これ一は感あるもこれを言葉にあらはさむ手段をしらず、他は情あれば直にこれを表彰するの伎倆あれば也。則ちこの二者の區別の存ずるところ、實に彼等がその感情をあらはし得るか得ざるかの上にあることを知らざるべからず。如何に事にふれ、折にしたがひて、めでたくおもしろき感情を抱きたらむも、これをあらはさゞれば何のかひかあらむ。あらはし得て始めて人をも

慰め、みづからをも慰め、歌人の名をも得べきにあらずや。

こゝに於てか、知るべし、歌人となるの第一段階はまづ如何にしてわが感情をあらはすべきかを知るなることを。

されど、この如何にしてわが感情をあらはし得べきかを知ることは畢竟これ技術なり、原理にはあらざる也。熟練鍛錬によりて知るべきものにして、たゞに原理法則をのみ聞きて知るべきものにあらざる也。されば多吟し多作し、しば〳〵作り試みて、これを改竄し、添削し、推敲しゆくまに〳〵おのづからその伎倆を得るものとす。歌にありて、學問といふよりも實行といふことの尊きは是故なり。

われ今こゝに諸孃のために詠歌のしをりを示さんとす。されどこまかしき原理をのみならべゆかむはかくの如く非なり。故に實行の側より進みて、疵あり、謬ある歌を捉へ來り、一々これを指摘して以て感情表彰の方法をとかむとするなり。されど理論と實行とは相待たざるべからず、彼等はなほ鳥の兩翼の如し、理論の示すところに從ひて實行し、實行によりて始めて新たなる理論をも發見し得べき也、兩者相並びてはじめて効あり、二者その一をかくべからず、余が誤謬を指摘するかたはら、ところ〳〵言の理路にわたるものあるもこの故とす。また以下の文中（原）とあるは原歌、にして（改）とあるは余の改めたる歌也。さ心得てよ。

（一）

（原）梅の花それとも見えぬ雪のうちに
　　春の色さへうもれけるかな

（改）梅の花それとも見えぬ雪のうちに
　　春のかをりはかくれざりけり

原歌の意味は梅の花に春の雪がふりつもりたるために、それが梅であるといふことも知られぬまでにうづもれて、春の色が全く見えずなりけるよと也。それとも見えぬといふは赤人の歌に

　わぎもこに見せんと思ひし梅の花

〇〇〇〇〇〇〇〇〇
それとも見えず雪のふれゝば

とあるを取れるにて、作者の氣をきかしたるところなるべし。

されど是歌、上の句の意と下の句の意と、おなじことをくりかへしたるまでにて何等のおもしろみなし。上の句のそれとも見えぬといふは春の色のかくれたりといふことならずや、下の句の春の色のかくれたりといふは、則ちそれとも見えざることにあらずや。この意味だけならば上の句か下の句か一つにて足れり。他の一つは用なし。まことにはたらきのなき讀みかたといふべし。

そも〳〵歌はふかき感情を僅少の言語もてあらはすなればなるべく言語を無益にせざるやう、無駄にせざるやう、則ち各の言語が、それ〳〵別々の思想をあらはすやうせざるべからず、しかるにこの歌の如きは言語を半ば無用に歸せしめたり、半ば殺したるものなり。されば改めて、下の句を春のかをりはかくれざりけりとなさば上の句に春の色はかくれてそれとも見えずといふを受けて、しかれどもそのかをりはかくれずして馥郁としてにほふことよといふにて下句働きてきこゆるならずや。

かく上には雪のために色がかくるといひ、下には香はかくれずといふ如く相反對したる思想をならべ對する時は、時として歌の趣をますことあり。古の歌に

春の夜の闇はあやなし梅の花
色こそ見えね香やはかくるゝ

とあるもまたこの方法によりておもしろく聞えたる歌也。

(二)

(原) 春さればまづ咲く梅にあらそひて
花さきいでぬ初雪の空

(改) 春さればひもとく梅にあらそひて
咲きいでにけり雪の初花

原歌の意は春になると、梅の花の咲きいづるによりて、空にても雪の花が、われ劣らじと咲くやうに見ゆると也。この歌前の如く、一首のうちに同じ心の繰りかへ

されたりといふことはなけれど、たゞ下句の言ひざまか拙き也。このまゝにては初雪のふる空に、何か梅のほかの花が咲きたるやうに聞えて、初雪が花の如くに咲くといふ心とは聞きとれず。これ雪を花にたとへたるはよけれど、そのいひあらはしかたの拙きため、そのたとへなるを知らしめざるのみならず、かへりて一首の意を曖昧ならしめたる也。

そも〳〵歌に譬喩、則ちたとへを用ゐて花の如き顔とか、雪の如き花とか、月鎌に似たりとかいふは何のためなるかといふに、物の姿を明瞭にあらはさんとて也。たとへざるよりもひときは明かにその有様を眼前に浮ばせんため也。則ちたゞ美しき顔といはるゝよりも花の如き顔といはるゝ方、その美しき顔といふ考は明かに吾人の心におこるべし。たゞ白き花といはるゝよりも、雪の如き花といはれ、また細き月といはるゝよりも月鎌に似たりといはるゝ方、たしかにその考はいちじるく胸中にうかぶべし。これ譬喩の効益なり。きゝめ也。さればつゆ歌の意味を明瞭にするに効なき比喩を用ゐたらんには、之を用ゐたるかひいづくにかあるか。況んや明瞭にせざるのみならず、却りてこれを曖昧するに於てをや。さる場合にはむしろ始めよりこれを用ゐざるにまされるにしかざる也。是歌の如きはその一例也。

されど、下句を咲き出でにけり雪のはつ花と改むるにいたりて始めて初花といふとは雪にたとへたるなりといふと明かにしられて他の花とまがふことなかるべし。こゝに於て始めて譬喩の正當なる使用法にかなへるなりよく〳〵味ひてさとるべし。

（三）

（原）山々かすみいりあひの
鐘はなりつゝ野の牛は
しづかにあゆみかへりゆく
耕へす人もうちつかれ
やう〳〵去りてわれひとり
たそかれ時にのこりけり
四方そのそめは夕ぐれの

けしきはいとゞ物さびし
たゞ是時にきこゆるは
　とびくる虫の羽のおと
遠き牧場のねやにつく
　羊の鈴のなるひゞき

（改）今日もくれぬといりあひの
　鐘もひゞけば野の牛は
あゆみしつかにかへりゆく
　耕す人もうちつかれ
やう／＼去りてわれひとり
　たそがれ時にのこりけり
四方をのぞめは夕ぐれの
　景色はいともものさびし
たゞこの時にきこゆるは
　とびくる蟲の羽のおと
遠き牧場のねやにつく
　羊の鈴の鳴る音のみ

是歌は明治十九年の頃外山矢田部等の諸博士が新躰詩をおこさんとてみつからたちの詩をあつめて、新躰詩歌となつけて名にいだしたまひける、中に尙今居士が英國詩人グレーといふ人の田舍の寺院にてよめる哀歌といふを譯したるうちの一節也。されば便宜のために左の原詩をかゝぐべし。

The curfew tolls the hnell of parting, day,
The lowing herd wind slowly oer the lea,
The ploughman homeward plods his weory way,
And leaves the world to darkness and to me.
Now fades the glimmering landscape on the sight,
And all the air a solemn stillness holds,
Save where the beetle wheels his droning flight,
And drowsy tinklings lull the distant folds.

まづ始めの缺點は山々かすみといふと也。かすむといふことは霧などのために山や野のぼんやりとして判然見えぬありさまをいふ語なれば、春は勿論、秋にても夏にても冬にてもいつにても用ゐてさしつかへなきやうなれどこの霞むといふとは春に最も多くおこる現象とて、この語も又おほむね春の歌にのみ用ゐられ、またがひて秋や、夏や冬の上に用ゐては何となくふさはしか

らざるやうになり來れり。かく霞といへば直に春、春といへば直に霞といふやうに關係ふかくなれりしより霞みといふ語をきゝては何となう、のどかなるうらゝかなる感はおこれど、物かなしくしめやかなる心はうかばざる也。今この歌はきはめて物かなしく、しめやかにあはれなる景色をのべんとはする也。したがひて、霞みといふ語からすぐ聞えたり、力うすきのみならず、かへりてのどかなるうらゝかなる有樣をうかべて、さびしくかなしき有樣をうち消さんとする傾きあり。これ實に霞むといふ語の使用法をあやまりたるものならずや。まして原詩には霞むといふ意はつゆなきなれば改めて今日もくれぬと打直さばこの難はまぬかるべし。

次は鐘はなりつゝといふ語なり。つゝといふ助辭はわれは讀みつゝ眠るとか、進歩しつゝありとかすべて一物に關する二つの働きを連續しもしくは事物の進行するありさまをあらはす言語にして、かく鐘はなりつゝ野の牛はといふやうにたゞ二つの意味を連續するために用ゐらるゝものにあらず。これつゝの用法をあやまれるもの也。則ち

鐘鳴りつゝあり
鐘鳴りてあり
鐘鳴りて牛かへる

とはいはるれど鐘鳴つゝ牛かへるとはいふべくもあらず。こはなほ

日くれつゝ空くらくなる
花咲きつゝ風吹く

などいはれざると同じ。よく〳〵思ふべし。

次はあゆみかへりゆくといふ語なり。こはあまりにくだくだし。かへりゆくとか、あゆみゆくとかいへば足りなむを、これを重ねてあゆみてかへりてゆくといへる、さも〳〵七五に埋めたるあと見えていとつたなし。されど改めたるやうに、歩みしづかに歸りゆくといはゞ宜しかるべし。何となれば是塲合にはあゆみといふこと名詞となつて足のはこびとか足なみとかいふ心となれば足なみしづかにかへりゆくといふことになりて

重複のふしのなくなれば也。耕へすのへはあまりものなり。すべて動詞はその語尾の變化さへ送假なとして附すればよきものなれば耕すにて宜し。霞すみ、思もひ、考がへなど皆このあやまりあり。次にはいとゞといふ副詞なり。いとゞはいといとの約りたるにていといふより意强し。されば上にいといへる對してます〳〵、甚だしくと意をつよめていふ時に古人より用ゐたり。只突然いとゞと用ゐたるは少きやうに覺ゆ。

雨ふりていとゞさびし雁さへ鳴きわたるにいとゞあはれなり

とやうに用ゐれど、

雨ふりていとゞさびし云々

とやうにはいはぬを常とす。こゝもまたそれなり。さればいとも物さびしとや改むべき。

終りには羊の鈴の鳴るひゞきといふこと也。この鳴るひゞきといふ言少し耳さはりにきこゆ。鳴るねとか鳴るおととかいふが至當なるべし。もしくは鳴る音のひゞきともいふべからむ。鳴るひゞきとはいかゞにか。音がひゞくなり。もしくは音が鳴るなり。ひゞきが鳴るとは異様ならずや。さればこれは改めて羊の鈴の鳴る音のみとなさば可なるべし。かくせば初めのひゞきてのひゞきてと同字をさくるの便もあるべし。久しきあと歌人池袋清風氏のこの歌を長歌に譯されたることあり。參考のため左にかゝげてむ。

あしびきの遠山寺の、入相のかねのひゞきは、かへりこぬ今日のわかれを、告げにけり野末はるかに、うちむれて野飼の牛の、かへりゆく聲もあはれに、きこえつゝ畑をたかやす、賤の男もつかれたりけむ、とりとりに廣き野原を、しづ〳〵と家路さしてぞかへりける、なほ立ちどまり、ながむれば遠山のはも、影きえてくれゆく野邊に、吹く風も靜まりはてゝ、草むらに虫のなく音もきこえつゝ遠き牧場の、ねやにつく羊の鈴の音さへゝ今はかすかになりにけり。

國文學講義

文學士　尾上柴舟

木の花（枕草紙）

梅は濃くも薄くも紅梅、櫻の花びらおほきに、葉いろ濃きが、枝ほそくて咲きたる、藤の花、しなび長く、色よく咲きたる、いとめでたし。」

○梅は、一本に梅のとあり。此方よし、といふ人もあれど從ふに足らず。濃きも、薄きもは、紅の色の深き淺きに就きていふなり。梅には色濃き紅梅もあり、色薄き紅梅もあれども、いづれにもせよ、紅梅はいとめでたしといふ意なり。○櫻の花びらおほきに云々、櫻の瓣の數多くて葉の色の赤み濃くて細き枝に咲きたる、まためでたしといふなり。實に、櫻、ことに、八重櫻の葉赤きは、一重の葉靑きに比すれば、品格大に立ちまさりて、さながら、畫を見るやうなり。○藤の花、しなび長く、藤の花は藤の花はの意、しなび長くは、花房の長く垂れさがりたるをいふ。

○梅の花には、紅白さま〴〵あり。その中、紅には、また、色の深きと、淺きとあり。されど、そのいづれにもせよ、紅梅は、まことに、めでたきものなり。櫻にも、種々あれど、花瓣數多くて、その葉は紅の色濃きが、細き枝に咲きたるが、尤も可し。藤の花は、花房長く垂れ、紫の色いとよく咲きたることによろし。○今にして、此文を讀む。別に、奇とすべきところあらざれども、その當時にありては、淸新なる觀察なりしならむ。殊に、紅梅の如きは、「紅に色をばかへて梅の花香ばこと〴〵ににほはざりける」と貶稱せし歌人もありしに於てをや。

卯の花は、しな劣りて、なにとなけれど、咲くころのをかしう、郭公のかげにかくるらむ、と思ふに、いとをかし。

○品劣りて何となけれど、卯の花は、他の花に比して、下品にて、格別何といふ見どころもなけれども、といふなり。○咲く頃のをかしう、卯の花は、夏のはじめ、花も根に、鳥も故巢にかへりて、綠の蔭しめやかに、

郭公の初音したまたるゝ頃、咲き出づるよりかくはいふ。○郭公のかげにかくるらむ、郭公が卯の花のかげに隠るゝならむ、と想像にいふなり。人麿の歌とて、「なく聲をえやはしのばぬ郭公初卯花のかげにかくれて、」といふがあり。これによりて書きたるにや。

○卯の花は、梅櫻などよりは下品にて、何處といふ見どころもなけれど、咲き出づる時節、まことに趣味あり。郭公も、この花かげに隠るゝならむ、とおもへば、いと〳〵興味多。

祭のかへさに、紫野のわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などに、いとしろう咲きたるこそをかしけれ。

○祭のかへさ、祭りは、賀茂の社の祭なり。此社の祭は、王朝時代には、特に、重きを置かれたれば、祭りといへば、他の社のを云はずして、賀茂の祭りをのみ指すに至れり。四月中の酉の日に行ふ。賀茂の氏人、皆葵の蔓をかくるが例なり。かへさ、はかへるさなり。かへる道なり。賀茂の祭を見ての歸途なり。○紫野、京都の北西の部分にあり。大徳寺などのある邊なり。○あやしの家、賤しき家なり。賤民の宅なり。○おどろなる垣根、荊棘などの繁り亂れたる垣。

○賀茂の祭を見てのかへり道に見れば、紫野のほとり近き賤が家ども、または、荊棘の垣根などに、卯の花の色いと白く咲きたる、まことに、趣きあるものなり。

○常に、深殿にありて、衣冠束帶の事々しきを見馴れたる眼には、賤が垣根の青やかなる中に、白う咲きいでたる卯の花は、げに、いかに珍らしく、をかしかりけむ。

青色のうへに、白きひとへがさねかつぎたる、青朽葉などにかよひて、いとをかし」。

○青色は、麴塵色なり。こゝにては青色の衣をいふ。

○白き單重かつぎたる、青色の上により、こゝまで、卯の花の形容なり。垣根は青く、卯の花、白きが故、打見には麴塵色の衣のうへに、白の單重を着たる如く

思はるゝなり。かつぐは被るなり。○靑朽葉は衣の色合の名、表靑、裏黄なりといふ。○かよひては似通ひてなり。似よりてなり。

○卯の花の垣根に咲きたる樣は、恰も、靑色の衣のうへに、白の單重ねを被たるに似、また、靑朽葉の衣にも似て、いと興あり。

○花の色と、垣根の色との配合より、直ちに、衣服の色合ひを想ひ起したるは、確かに、女なり。但し、冒頭より、此處まで、をかしの語、四ヶ處もあるは、多きに過ぎて、却つて、をかしからぬ心地す。こゝまでは卯花の評なり。

四月のつごもり。五月のついたちなどのころほひ、橘の濃くあをきに、花のいと白く咲きたるに、雨のふりたるつとめてなどは、よになく、心あるさまにをかし。

○つごもり、は月籠の意にて、月末をいふ。今は、すごりなど云ふ。○ついたち、は、月立にて、月初めなり。これは今もいふ。○橘の濃くあをき、は橘の葉につきていへるなり。乃ち、橘の葉の靑色の深きなり。○つとめて、は早朝の意。○よになく心あるさま世に比なく、風流氣のある有樣なり。

○此節以下は、橘を評せるなり。さて四月の月末、五月の月初などの頃、橘の葉の綠の色、濃く深きか上に、花の眞白に咲きたるは美しきに、猶雲の降りかゝりたる早朝などの眺は、ことに、めだなく、世に比類なく、花に風流氣のあるやうに思はれて、いとゞ趣あり。

花の中より、實の黄金の玉かと見えて、いみじく、きはやかに見えたるなど、あさ露にぬれたる櫻にも劣らず。郭公のよそがとさへ思へばにや、猶更に、いふべきにもあらず。

○花の中より云々、花の眞白に咲きたる間より、橘の實の黄色なるが、透きて見ゆるなり。○實の黄金の玉かと見えては、朗詠、廬橘の詩に枝繫二金鈴一春雨ノ後の句あるより、來りしならむ、と古人いへり。又雨のふりたるつとめての句も、春雨後の心ならむ、ともいへり。或は然らむ。○いみじくきはやかに見えた

る、花は白きに實は黄なれば、ただ、はつきりと見えたるなり。○郭公のよすがとさへ思へばにや、よすがは、寄りところなり。ふるくより、郭公は、橘をより處とす、宿りとするよしいへり。萬葉にも、「橘の林を植ゑつほとゝぎすつねに冬まですみわたるがね」古今にも、「宿りせし花橘も枯れなくになど杜鵑聲たえぬらむ」などあり。されば、橘は郭公のより處と思ふ爲めならむ、似るものなく考へらるといふなり。○此節中、見えの語重さねるは妙ならず。

○橘は花ある時、すでに實あるものなるが、其實の眞白き花の間より、黄金の玉かとも見えて、非常に、はつきりと見えたる有様などは、實に、美しく、朝露にしめりたる櫻の花にも劣らず。且、此花は、郭公のよりどころとするものとさへ思ふ爲めならむ、美しきが上に、趣も添ひて、猶々、語にいはれざるほど面白し。

○以上橘なり。花白く葉青きが、雨に霑ひたるは、卯花にてもあるべし。只、實の黄金色なるが透きて見るは、實に、橘の特色なるべし。これを、櫻にも劣らずと賞揚せるは、清少單獨の奇警なる觀察にして決して、他人の企て及ぶところにあらず。

梨の花、よにすさまじく、あやしきものにして、目に近く、はかなき文つけなどだにせず。愛敬おくれたる人の顔など見ては、譬にいふも、げに、其色よりして、愛なく見ゆるを、なきものに

○すさまじく、は、此處には、いやな位の意。あやしきも、怪しく、變な程の意なり。○目に近く、はかなきふみつけなどだにせず。常に目近に植ゑ置くこともなく、また、一寸した、少しの文をも附くることをもなさず。等閑になし置くなり。○愛敬おくれたる、愛嬌の乏しきなり。おくれたるは、比較的にいふ語にて、少なきをいふ。○其色よりして、愛なく見ゆる、梨の花は、色青白きやうなるものなれば、其色からして、すでに、愛敬なく見ゆといふなり。

○梨の花は、世上一般、いやな花、へんな花として、目近にも置かず。少しの文をも附くることだにもせず。

更に、顧る人もなし。しかして、愛嬌の乏しき人の顔などを見れば、梨の花のやうなる顔色なりなど、譬にいふも道理にて、青白き其花の色は、既に、業に、愛らしからず見ゆるものなり。されど支那にては、云ゝ、と次につゞくなり。

もろこしに、限りなきものにて、ふみにもつくるなるを、さりとも、あるやうあらむ、とて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしきにほひこそ心もとなくつきためれ。

○唐土に限りなきもの云ゝ、日本にては、梨の花は、あまり賞美せざれども、支那にては、此上なきめでたきものと定めて、詩などにも作りて歌ふなり。○あるやうあらむ、支那人の、梨の花を賞するは、何か、理由のあることならむ。といふなり。○をかしきにほひこそ心もとなく趣味ある色の、あるかなきかに、つきてあるをいふ。にほひは、色の薄くぼかされたるをいふ。心もとなくは、おぼつかなくなり。

○日本にては賞美せざれど、支那にては、此上なきものとして、詩などにもづくるものなれば、さはいへど、何か、支那人の賞美する理由あるならむと怪みて、よく〳〵心を凝して見るに、花瓣の端の方に、趣ある薄色の、あるか無きかにつきゐたるやうなり。

○此梨花の一節、句節、切目なく、長くつゞきたるが上、愛なく見ゆるを、文にもつくるなるを、の如く、同句形の重なりたるなど、少しく、面白からず。且云ふところも、議論めきてゆかしからず、されど、次の楊貴妃の事ありて、爰に大に活動の態を生ず。

楊貴妃、みかどの御使にあひて、泣きける顔に似せて、梨花一枝春の雨を帯びたり、などいひたるは、おぼろげならじ、と思ふに、猶いみじうめでたき事は、たぐひあらじと覺えたり。」

○楊貴妃云々、楊貴妃、唐の玄宗皇帝の妃國色無双なりき、といふ。安祿山の亂に逢ひて、馬嵬に殺さる。帝歎きに堪へず臨功の道士をして、其魂魄を求めしむ。道士蓬莱に行き、貴妃に逢ひ、帝の消息を通ぜしに貴妃哀泣せりといふ。其時の狀を咏して、白樂天は、其作、長恨歌に玉容寂寞涙欄干、梨花一枝帶ニ春

雨ニッといへり。此詩の句を取りて、此節は成れり。○おぼろげならじ、據りどころなきにはあらじ、不確の事にはあらじの意。

○白樂天が其作長恨歌に、楊貴妃が、玄宗帝の御使に逢ひて、泣きたる顔を形容して、一枝の梨の花の、春の雨に濡るが如し、などいひしは、不確の事ならじ、確かなる據り處あるものよ、と思へば、猶一層、梨の花のめでたき事は、他に比ぶべきものなし、と思はれたり。○此一節あり、紫色の光彩大に加はる。

桐の花、紫に咲きたるは、なほ、をかしきを葉のひろごり、さまうたてあれども、また、異木ともと、ひとしういふべきにあらず。

○紫に咲きたる云々、此頃紫は、ゆるしの色とて、朝廷より許しを得て、始めて、衣服に用ゐるを得たれば、猶、をかしとはいふなり。○うたてあれど、うたては、うたゝなり。惡き方に、心のすゝむをいふ。桐の葉の有樣、なつかしからず、面白からねども、の意なり。

○此處より、桐を云ふ。桐の花は、其色紫にて咲き出てたるが、一層面白きものなるを、其葉は大きくひろごりて、その有樣面白からねども、さりとて、また他の樹と、同列に、一處にいふべきものならず。特に取り出てゝ云ふべき木なり。

もろこしに、ことごとしき名つきたる鳥の、これにしも棲むらむ心ことなり。まして、琴につくりて、さまざまなるねの出でくるなど、をかしとは、世のつねにいふべくやはある。いみじうとこそはめてたけれ。

○ことごとしき名つきたる鳥は、やかましき名のある鳥、乃ち、鳳凰をいふ。鳳凰は、太平の世にはあらはるゝ名鳥にて、梧桐に非ざれば棲まず、竹實にあらざれば食はず、との傳說あれば、此處に、取り出てたるなり。○これにしも棲むらむ、心ことなり、鳳凰の棲むならむ、とおもへば、桐の木は、他の木よりも、自然に、重く考へらるといふなり。心ことなり、は、他の木に對するとは、心持ちの違ふをいふ。○をかしとは、世の常にいふべくやはある、世間普通に、たゞ、を

かしといふのみにては足らず。大に面白し、といふなり。

○桐の木は、支那にては大層なる名のつきたる鳥乃ち、鳳凰の來り捿むならむ、と思へば、自づから、他の木に對するとは、心持ちの違あるなり。況んや、此木は、琴にも製して、種々、おもしろき音の出て來るなど思へば、普通一遍に、をかし、おもしろし、と云ふべきものにはあらず。非常に、めでたく、大に結構なる木なり。

○以上桐なり。花の紫色なるを賞し、鳳凰の來ると、琴となるとを賛し、たるなど、すべて、女子的なり。たゞ、あまりに、賞賛の語多きに過ぎるが如くなるは、うるさき心地す。殊に、最後の句などは、無くてもありぬべし。

木の樣ぞ惡げなれど、あふちの花いとをかし。かれ花さまことに咲きて、かならず、五月五日に逢ふもをかし」。

○木の樣、木の有樣なり。姿なり。○かれ花に、さまことにさきて、かれ花は、枯れ花なり。艶なく、水氣なく、枯れ〳〵の花なるよりいふ。樗の花は、枯れたるやうに、他の花とは、特別に咲きてなり。○五月五日に逢ふ。年々五月五日に此花は咲きてあるなり。此日、人々樗の葉を取りて、惡氣を避くる習慣ありとぞ。逢ふは、擬人していへるなり。

○木の樣態は、惡らしく、面白からねど、樗の花は、甚だ、趣あるものなり。枯れ〳〵の水氣もなき花に咲きて、他の花とは特別なり、而して毎年五月五日には必らず咲きてあるも、また、おもしろし。

○梅よりはじめて、順次、諸花を品隲し、古人の等閑に付したる桐の花などにも及びたる、觀察實に清新なり。處々、たるみたるところあれど、句法概して簡潔取つて、以て、範とすべきの文なり。後世の百花譜の類、皆、此文より來れるものなり。

歷代和歌評釋（五）（古今集の部）

文學士 鹽井雨江

忘れては、夢かとぞ思ふ。思ひきや、
雪ふみわけて、君を見むとは。

○此の歌は、古今集十八の卷にあり。業平朝臣の歌なり。朝臣が小野の里に惟喬親王の庵室を訪ひ奉りし時によめるなり。惟喬親王は文德天皇の第一の皇子にて、かねては皇位にもつがせ給ふべきおん際におはしたるを、我が儘なる藤氏の爲めに妨げられ給ひて、いと面白からず世をおぼしすてられつ、薙髮せられて、此の小野の里に、世を遁れたまひたり。業平朝臣は、其の上此の宮に伺候してまめやかに仕へ奉りしゆかりにて、今も忘れず、をり〳〵御機嫌伺ひに訪ひ奉るなり。比叡の山の麓にて、をりから雪いと深くつもれるを、業平朝臣は、やう〳〵に踏みわけて、訪ひ奉れば、いと淋しくもの悲しきおん住居のさまいふばかりもあらず。見奉るに、思ひ奉るに、悲しさのいとど身にしみて、業平朝臣のよみたまへるなり。

○忘れては。今かゝる山莊に親王を訪ひ奉れるは、現在實際の事實なるを忘れてはといふ事なり。○夢かとぞ思ふ。夢を見て居るにはあらずやと、餘りの悲しさに思ひまどふ意なり。○思ひきや。かねて思うた事であるか、少しも思はざりし事なりといふ事にて、やは例の反語なり。○君。惟喬親王をさしたるなり。

○一首の意は、今此の淋しき山里の庵室に、親王を訪ひ奉れるは、夢を見て居るにあらず。實際の事實なるを、ふと忘れては、これは夢を見て居るにはあらずや自から疑ふワイ。誠に、かねては天位をもつぎ給ふべくおぼえ奉りし御方を、かゝる淋しきみ山の雪を踏み分け來て、かゝるわびしく悲しきおん住居にて見奉らむとは、誠に〳〵思はざる事なりしよ。餘りにも思ひがけぬ事なれば、更に實際の事とは覺えず。夢にはあらずとさとりては、またふとうち忘れては、夢を見て居るにはあらずやと思ふといふ意にて、誠に思ひかけなく

變はりはてたる親王樣の世をなげき悲みたるなり。

○詞すなほにして調切に、誠に親王を二いとほしむ熱情の、限りなくあはれにひゞきたるにあらずや。我れは此の歌を見て、はじめて業平朝臣の人となりを愛しぬ。此の歌をきゝて、業平朝臣の歌を愛しぬ。

白雲の絶えずたなびく嶺にても、
住めば住みぬる世にこそありけれ。

○これも、全集全卷にあり。惟喬親王の御歌なり。

○絶えずたなびく。白雲の常にかゝる意なり。たなびくはなびくに同じ。たは例の語調を助くるに添ふる詞にて、別意なし。○嶺にだに。俗にいふ時は、嶺にても或は嶺でさへといふ意なり。○住めば住みぬる。かく住めば、かやうに住み來たれる世の中なりとなり。末のけれは、俗にワイといふ如き詞にて、感動詞なり。

○一首の意は、白雲の常にかゝる斯くの如き深山の奥にても、かく住む時は、かやうに住みて來たれる世の中てあるワイといふ事にて、世を遁れ、深山の奥に住みなれたまひての御述懐なり。此の親王のおん口より出てたる此の御述懐、感情誠にいふべからざるものあり。都に住み榮えたる當年の藤氏、若し心ありたらむには、誠にかしこさに身を置く方もなき心地したらむを。

いざ此處に我が世はへなむ。菅原や
伏見の里のあれまくもをし。

○これも全集全所にあり。題しらず讀人知らずの歌なり。

○いざ。俗にいふサアーといふ感動詞なり。○我が世。我が一生なり。我が世はへなむとは我が一生は、此處に暮らさむといふ意なり。○菅原や伏見の里。菅原の伏見の里にて、やは感動詞なり。○あれまくもをし。荒れむ事は殘念なりといふ意なり。まくはむの延びたるなり。

○一首の意は、サアー、モー、我が一生は、此の伏見の里の此の宿にて暮らさむ。我が身が此處を出てゝ去なば、此の宿は草のみ深き野となりて荒れてしまうであらう。それも誠に殘念なれば、せめて我が一生は此處

に暮らさむといふ事なり。これは、思ふ人に棄てられたる女子などの、其の人と共に住みたるゆかしき宿なれば、よしや薄情なる其の人は我れすて、いかに住み憂き我が世なりとも、我れはせめてのゆかりの此の家を大切に守りて、我れは獨身にて此の世に住みはてむといふ歌なるべし。誠にやさしく深き人情のこもりてあはれなる歌といふべし。

我が庵は、三輪の山もと、戀ひしくば、
とふらひ來ませ、杉立てる門。

○これも仝集仝所にあり。題しらず讀人しらずの歌なり。

○三輪の山もと。三輪の山の麓なりといふ意なり。三輪の山は大和なり。○戀ひしくば。我れを戀ひしく思はばといふ事なり。○とふらひ來ませ。尋ねてお出でなさいよといふ意なり。○杉立てる門。門に杉の植えてある家なりといふ意なり。

○一首の歌は、我が住む宿は、三輪の山の麓にて、其の門に杉の木の植えてある宿なり。若し我れを戀ひしく思はば、何時にても訪ねて來たまへといふ事なり。

○古今六帖には、此の歌を、三輪の大神の御歌なりとしたれど、さる歌にはあらざるべし。これは、三輪の山麓に隱遁したる人の詠なり。我が思ふ人などにすてられて、浮世のいと厭はしくなるまゝに、三輪の山の麓に閑居して、世外に身を置きたる人の、我れを捨てたる人をなほ我が心には憎みも果てず。我れは思ふ人に見すてられて世の厭はしくなりて、斯く世を捨てられど、我れは、我れを見すてたる君を、決して憎し憎しとは憎みはせじ。今は到底我れを戀ひしく思ひ給ふ事はあらざるべけれども、若し戀ひしく思ひ給ふ事もあらば、此の閑居をたづねて來られよといひたる歌ならむと思ふなり。

○何んといふ事はなけれども、面白くやさしき歌なり。世を厭ひて、世を憎みはてず。世を捨てたる中に、なほ温かなる人情の捨てぬあり。氣高き仙人めきたる中に、また和しき愛敬もこもり、洒落温雅誠に愛すべき歌なり。彼の唐の李白が碧山の閑居の詠に

問君何意棲碧山、笑而不答心自閑、
桃花流水杳然去、有別天地非人間、

とあるに似て、なほこれに勝れる情致あり。李白の此の詩も、第一に面白き所は、浮世を厭ひ俗界をいやしみて、而して、其の言なく、笑つて答へず心自から閑なりとのみいひたる所に、大に詩趣あるなり。若し此處にさる厭ひいやしむ言あらば、飄逸温雅なる詩趣は沒了せらるべきなり。此の三輪の閑居の詠も、世を厭ひて、去りて世外の閑居を求めたる身にて、「戀ひしくはとふらひ來ませ」といひたる心、誠に風流温雅面白きなり。詞のいひまはしも、「我が庵は三輪の山もと」と言ひ、さて「戀ひしくはとふらひ來ませ」と挾み、最後に「杉立てる門」と言ひ添へたるなど、自から調もよく面白きを得たりといふべし。

風吹けば沖つ白浪立つ田山、
　夜半にや君が獨り越ゆらむ。

○これも全集全所にあり。伊勢物語にもありて、有名なる歌なり。大和の國に住みける夫婦の男住みけるが、その男、河内國に密婦をこしらへて、常に通ひ行くやうに成りぬ。されど其の女は、少しも嫉妬吝氣もせずに、一夜良人の例の密婦の許へとて立ち出でたるあとにて、深夜良人の身の上を思ひやりてよめるなり。

○風吹けば沖つ白浪。此の二句は、立つ田山を言ひ出だす序にして、歌の意味の上には關係なし。風ふけば沖つ白波の立つといふ立つを、立田山の位つにいひかけて序とせるなり。立田山は大和と河内との境にあるなり。○立田山。立田山をと見るべし。

○一首の意は、あの恐ろしき立田山を、この淋しき夜半に、我が君は獨り越えて行かるる事なるか。誠に氣づかはしや、お怪我がなければよいがと、良人の身の上を氣づかひたる心なり。

○良人の、あだし女子へ心をうつして、我れを外にして、其の密婦の許へ通ひ行くを、少しも恨み怒りたる氣色なく、反つて良人が夜路の程を心配したる心情、何んたるやさしき女子ぞや。何んたるまめやかに可憐なる心情ぞや。嫉妬吝氣は女子の常とさへ言ひならはせる

世の中に、いかにめづらしくもうるはしき心の女子かな。誠に世の女子の手本とすべく、世の女子の座右の銘とすべき歌にこそ。此の歌を聞きて、此の男も甚く感動して、その身もちをあらためたりといふ。誠にさもありなむ。誰れかは、かゝる歌をきゝて感動せざるものあらむ。

君をおきて、あだし心を、我がもたば、
　末の松山浪も越えなむ。

○これは、古今集二十の卷にあり。東歌の中の陸奥歌の一つなり。

○君をおきて。君を外にしてといふ意なり。○あだし心。他の心にて、他人に心を移すをいへるなり。○末の松山。陸奥にあり。

○一首の意は、いかなる事のあらむとも、私は、御前を外にして、他の人に心を移す事は決して無し。若し私が其のやうな心をもつ事があつたならば、あの末の松山の上を、浪が越ゆるであらう。ソンナ事は、決して世の中に無い筈なり。私も他人に心を移すやうな事は決して無しといふ事にて、これは、我が心は決して變はらじと契りたる歌なり。古の質樸なる誠實なる人情、あどけなく溢れて、誠に可憐なる歌といふべし。

後拾遺集に清原元輔が

　ちぎりきな、かたみに袖をしぼりつゝ
　　末の松山浪越さじとは。



小説

春の別墅

田山花袋

上

洋風の一室には瓦斯の光晝のごとく美く照り輝き、今しも投じたる暖爐の石炭のぷす／＼と樂し氣に音して燃え上れるに、其處に集れる人々はいよ／＼話に心を奪はれて、夜の更け行くのも更に氣に留めぬ樣子である。

『年を老つたお方は好くさういふ世話を爲さりたがつて、雙方の性質の合ふ合はぬなどけ頓着なしに、何でも所にさへ爲て仕舞へば、それで好いと思つて居るが、何うも私達には、危險でとてもそんな事は出來ません。第一結婚と言ふことは人生の大事……』

言ひ懸けたのを皆まで言はせず、

『それは若い人はさう思ふのは無理は有りませんがね……』と言ひさして、微笑みながら、對手の若々しい、美しい、鼻の隆い、眼のきりゝとした、左右の眉の間に言ふに言はれぬ表情の力を備へて居る二十七八の立派なドレスコートの若紳士の顏を見たのは、年の頃もう四十五六歳とも思はれる品の好い顏の美しい若い頃はさぞ貴族仲間の交際界を騷がしたであらうと思はれる刀自である。この刀自は維新の際の功勞によつて新に子爵に陞された元老の夫人で、今でこそその子爵が要路に立つて居らぬから左程交際界にも立てられては居ないが、曾ては子爵の外交の局に當つたのを助けて、鹿鳴館の夜會に各國公使夫人の間に周旋した事もあるといふ、それは中々交際界の女王として尊敬された事もあるので、世話好きの、談話好きの、思遣りの深い、どちからと言へば才はじけの御轉婆といふ側の女であつた。今宵は甥の文學士男爵今津行麿が英國から歸つて來て、じみ／＼話を爲たいと思つて居たその小宴を嬉しく自分の宅に開いたその後なので、宵の中はこの奥

の間にピヤノの音やら、バイオリンの獨奏やら、笛、琴、それは中々賑かで、この牛込の片田舍には滅多に無い程の騷がしさであつた。それも九時過ぎには一人二人と客は歸つて、今はその東向の一室に、洋行歸りの若紳士と子爵夫人と、それから今一人、それは子爵の令息の室で、室家は樞密顧問官西田子爵だといふ、眼の愛くるしい、頰のほつそりとした、輪廓の端然とした二十五六位の縮緬づくめの美しい姿!

『それはさう言ふのも無理は有りません。殊にお前などは西洋で、自由の氣も吸つて來たのだから、左樣思ふのは好く解つて居ます。が、日本の女子の有樣をも考へて見なければなりません。日本の習慣では西洋のやうに男女の交際も自由でなければ、西洋のやうに、心を打明けて語り合ふやうな場合も少ない。從つて性質を知り合ふなどはとても滿足には出來ない事です。……お前なぞに言はせると、これが日本の結婚の惡弊だと言ふかも知れませんが、それはよく爲たもので、その結果は却つて西洋の自由結婚などよりも好いと言ふではないか』

『そんな事が有りますものか、西洋のは假令結果が惡い事があつても、それは互の自由から出た事ですから、これはどうも仕方が無い。とあきらめも付くし、それを改めるのにも夫婦の上に無限の責任が有りますから好いですが、何うも日本のは好かん、互に責任を放棄して、そして結婚して、厭になると、直ぐ離婚して了ふ。一躰一寸の見合などで妻を貰ふといふ輕卒な事は無いのだ。』

『お前はさう言ふけれど、見合で結婚した人達が皆な今幸福で暮らして居るから御覧。宅の弓さん始め:』

傍の弓子夫人はにつと片頰を笑ませた。

『新田の雪さん、岡谷の重さん、梅澤の秀さん……慈光寺の孝さんなどは嫁く時は厭だ厭だと彼程嫌つたのに、今ではあんなにお睦ましい……』

『實際はさうかも知れません。けれど自然の理は決して左樣でない……』

『まア、それは何うでも……』

と不意に弓子夫人は口を開いて、

「行麿さん、それは何うでも、此處に一つ私達が前からあの人ならと思つて居るのがあるのですか、‥‥矢張見合でお貰ひなさるのはお厭！」

と嬌喉一轉。

「さういふ譯でも無いですけれど‥‥」

「それなら、一つ私達の言ふ事を聞いて下さいましな、それはほんに好い娘で、あれならば屹度御氣にも召すだらうと思ふんですがね、お母さん」

「屹度氣に入るに違いないよ」

一座暫く沈默。煖爐の石炭の赤くなつたのがかたりと一ッ下に落ちた。

「何うだね、見合ては厭かね」

と子爵夫人は促したが、更に嫁の方を向いて、

「何と言つたけね、名は？」

「袖子さん！」。

「袖子！」と行麿は不意に空想より覺めたものゝやうに「袖子さん、袖子さんとは好い名ですね。矢張彼れてすか、華族女學校出ですか」

「え、昨年優等で卒業して‥‥」

と弓子夫人は得意氣に答へた。

「華族女學校！華族女學校出にも困りますからナア！」

「何故だえ！」と叔母は息卷きて尋ねる。

「何故つて言つて、私などはこれから大に華族の境遇を脫して、平民的に働かうとして居るのですから、華族女學校出のお姬樣なぞを妻にしても仕方か有ませんから」

「それでは一躰お前は何うしやうと言ふんだね？」

「田舍からでも貰はうと思つて居るんです」

「まア、この人には呆れて了ふよ」と子爵夫人は心から呆れたやうな顏色を爲て、

「田舍の娘など、思つてもゾッとする。東京に居て、東京の娘ばかり見て居ると、田舍の娘の方が天眞て、無垢で好いなどと思ふか知れぬけれど、本當の田舍の娘など何してお前の嫁になど爲る事が出來るものかね。

體の肥つた、姿の惡い、行儀作法などは少しも知らぬ、あゝ思つてもゾツとする！』と前の言葉を繰返して、
『それは何と言つても東京のしつかりした處の娘て無いと……』
『それは左樣ですとも……』
と弓子も言葉を合せた。
『まアそんな事は何うても好いてす』と行麿は少時して、
『何うせ、まだ妻を持たうなぞと思つては居りませんから、また四五年は一人身て自由に羽翼を伸して靑空を飛んて行く積りですから』
『そんな事を言つたッて、人が自由に飛ばせないから駄目てす。お前の年頃になつて、自由に飛びたいなぞと言ふのは、それはつまらぬ考へといふものてす。もう二十七ちやないか。二十七にも爲つて、妻を貰ふのに躊躇するのは、餘り臆病過ぎるてはないか』
『それては少し考へさせて下さい』と叔母の熱心なる勸誘に敵しかねて、行麿は少し退却の色を示した。
『それは考へるのは好いけれど…　その中に私達の折角探し出した美しい小鳥が逃げて了つたら、何うします！』
『逃げるなら、逃がしてお仕舞ひなさい！』と若き男爵は言つたが、其儘椅子を離れて起ち上つた。けれどこれは暇を告けやうとするのては無いので、其儘二三歩室内を輕く歩き出すと共に、深い意味ありげな長大息を吐いて、そして、佗しげに口の中に獨語いた。『結婚！結婚して何に爲る！氣心も知れぬ女と結婚して…』
子爵夫人はじつとこの若い甥の素振に眼を注いて居たが、微笑を含んて、傍なる弓子夫人に言つた。
『お前よく見てお置き！　あれが獨身者の最後の苦痛といふものだから』
若き甥は笑つた。
少時してから、
『それて、その貴下方の見付けた小鳥といふのは……一躰何ういふ風に育てられたのてすか』
と尋ねた。

『何ういふ風つて……それは深窓の奥深く養はれて、學校より外に世の中を見た事も無いといふ秘藏娘だがね。屹度お前には氣に入るに違ひないと思ふのだが：：』

『弓子さんの知つて居る方なのですか』

『え、妾はもうよく……』

『よく知つて居るばかりでは無いよ』と子爵夫人は横より奪ひ取つて、

『實はね、弓子の從妹で、亡くなつた春山子爵の令嬢の事なのですよ』

『春山令嬢？』

『あの子爵の一人娘……』

『はア、さうですか、あの子爵家に娘がありましたかナ？私は餘程以前に春山家に行つて、まだ幼い子供を見たことが有つたが、何うも男の兒のやうに覺えて居ますが』

『いゝえ、娘なのよ』

『寫眞か何か無いですか』

『寫眞！さう、無かつたかしら』と子爵夫人は稍暫時考へて、

『あゝあれは返して了つたから、今、無い』

弓子夫人は不意に、

『貴下は…私の實家の姉を御存じでせう？』

『あの濱田男爵からお出なすつた』

『いゝえ、あの下の兄の……』

『それでは此間亡つた兄樣の令夫人』

『え』

『知つてますとも…私は洋行前によくお目に懸つたが、まだあの頃は兄樣の處に嫁かない前で、それは實に美しかつた！』

『丁度あの姉の若い時に髣髴なのですよ、その春山の嬢樣と言ふのは。ねえ、母樣、母樣は何う思召して？、よく肖てますねえ。』

『本當に髣髴だよ』と子爵夫人は言葉を合せた。

『本當に妾のすらりとした具合といひ、眼のぱつちりした樣子といひ、あれで今少し色が黒いとお前の嫂樣

に髣髴なのだけれど……お前の姉樣とはあれても少し容色は上かと思ふよ。けれどそれは御當人に見て戴く方が何より安心だから、さう爲る事にして……さて、これから相談になるのだが、麼うだえ、行麿、實は、私達はかういふ計畫をして居るのだが、……その春山の未亡人とその娘とは時々逗子の別莊に行くといふから、丁度彼處に眞田男爵の別莊があるのを幸ひに、私は一躰逗子は嫌だけれど、弓子と二人行つて居るから、お前は後から遊びに來るといふ事にして……そして十分見て貰はうと思ふのだが……』

『それは感謝します』と今津行麿は眞面目に答へた。

『けれど、それを實行するにつけて余り深入して足が抜けなくならないやうにして下さい』

『それは大丈夫だから、安心おし、いくら私が舊弊でもお前の好いと思はない結婚の約束を無理に極めるなんといふ事は爲ないから……、見合の結婚は好かんかも知れぬけれど、まア、一度は遣つて見なさい。それでは明日にも實行するやうに爲るから、その積りで居てお呉れ……』

『とう〱降參して、見合の實行とは餘り意氣地が無いナア』と若き男爵は大きな聲にて獨語ちながら、其儘その暖かい一室を出て行つた。

跡には子爵夫人と弓子夫人とが、その樂しき若き二人の緣の糸をつなぎ留むべく、頻りにその謀を帷幄の中に運らすのであつた。

中

故の樞密顧問官春山子爵の未亡人雅子は貴族社會でも評判の美人で、四十五歲の今日でも猶人の眼を惹く程の姿であるが、夫が死んでからといふものは、忘れ形見の今年十八になる令孃と十二になる令息との二人の養育にのみ心を傾けて、それ迄限りなき光彩を放つて居つた交際社會からは全く緣を絕つて了つた。只をり〱上野の音樂學校の大會に娘を伴れての姿を見る事が出來るばかり、誰もその光輝ある佳人の半生を惜まぬ者は無かつたのである。實際秋の穩かな日など、靜かな明かな光線をまともに受けてもうそろ〱美し

くなり始めた令孃の手を執りながら、黒塗の馬車から靜かに降りる處などを見ると、畫家で無い人でも、その美しい一場の趣に撲れて、これをこそ上流社會のまことの美と心から見惚れぬものは恐らくは有るまいと思はれる位。まして、氣の向いた時には、馬車を上野の廣小路邊まで先に遣つて、靜かに上野の公園を散歩するので、世にも美しく睦しい母子は、さながら秋の女神の私語き合ふが如くに、いと微かに其日の音樂の話、ベトオヘンの調の面白かつた事や、シユーベルトの律の言ひ知らず卓れて居つた事や、それから上野の秋の色の深さ淺きなどを餘念なく語り合つて歩いて行くのであつた。殊に色彩の華美ならぬ中におのづからなる美しさを備へた其衣服、歩きやうにも下樣ならぬ婉しさと艶かさとを有せるその態度とは、逢ふ人々の心をときめかして、何處の令夫人かと、その姿の見えなくなる迄見送らぬものは無いといふ。

けれどこの美しい未亡人、若くから獨り世に背いたこの未亡人をしていよ／＼美しからしめるものは實にその清い半生の生活であつた。雅子は別に婦德に關する主義や、道德に關する深い思慮を有つて居るのでは無いが、その姿の美しいやうにその先天的性質が清く美しく高尚であつたので、罪惡、不道德等の行爲を憎むこと甚しく、世の中の罪惡が只の普通の罪惡にとゞまらず、倍にも三倍にも雅子にも恐ろしく厭ふべく感ぜられるので、かれは他の貴族の未亡人によくある例の芝居狂ひなどの醜い行爲を、殆と蛇蝎のやうに恐れ憎んだ。あゝ婉しい心！美しい情！これの完全に發展されたほど、婦德のすぐれたものは何處に有るか。

春山子爵の兄に杉江男爵といふ軍人があつたが、これが非常に世話好きの性質で、弟が死んだ後は、殆ど未亡人の片腕とも言ふべき程に、萬事家事に干繋して與れるので、未亡人もこれを力に、娘の成人くなつて世の中に出る事の出來る迄、子息の學校を卒業して春山の家名を起すまでは、靜かに世を離れて生活しやうと心を決して、多くは都の塵の至らぬ小石川の別墅に住んで居た。

ところが、娘の十八の春を迎へたその二月の下旬に、昔の親しい友今小路子爵夫人から親切なる喜ばしい訪問を受けた。そしてその用事を聞いた時は流石に慈愛深い母の胸はいたく騒いで、何とも言ひやうのない一種の喜悦を胸の底深く感じたのである。

『まだあまりに年が若いものを……まだ十八、十八ではまだ小兒ですものを……』と私語くやうに言つたが、しかもその昔の友のうれしき心を感謝すべく、殆どその術を知らぬばかりに雅子は深く喜んだのであつた。それも道理である。今津男爵と言つては、洋行歸りの立派な學者で、政治上にも將來の希望は花のごとく輝いて居るし、其他門葉といひ、財産といひ、春山家の最愛の一人娘の婿として更に不足が無い若紳士であるから。

早速杉江男爵に相談に及ぶと、男爵も非常に賛成で、今津の子息ならば遣つても不足はないとの同意。それでもかういふ事はよく調べた上でなければ、何か手落が無いとも限らぬと猶念を入れる上に念を入れて、それから色々知己の方々を便つて、婿になる人の性行やら、性質やらを詳しく聞糺す事になつたが、上つて來るのはいつれも好ましい材料ばかり、若い者に似合はぬ眞面目な處があつて、厭味が無くつて、そして此上もなく親切といふ話。其上學問は今の生中の博士連よりも數等増つた力があつて、それで演説も上手、文章も達者これ程卓れた婿は、探して歩いても滅多に無いといふので、それでは當人同士さへ好いと言ふなら、遣つても苦しうないといふ事に話は運んで、いよ〳〵四月の初旬、花の咲く頃、逗子の別莊で見合を爲やうといふ事になつた。

けれど當人同志の氣が合ふか、合はぬか、これは見合を爲た上でなければ分らぬ事である。それなのに、餘り深く踏込んで、後で互に顏を赧らめるやうな事があつては面白くない。殊に娘などといふものは、左樣いふ事を非常に氣にするものであるから、これは一つ、娘にはそれと氣取られぬやう、前から計畫した見合とは見えぬやう、只ゝゆくりなく二人が逢つたと思はせる

やうに爲たい者と慈愛深い母の心はその樣な些細な處まで氣に懸けて、それを先方に言つて遣ると、先方でもそれが宜しう御坐らう、改つて見合を爲るといふものは何うも面白くないとの返事。それでは私の方では四月の一日から娘を伴れて逗子に行つて居りまする程に、五日迄の中に御都合の好い日を見計つて、眞田男爵の別莊に御出で下さい。それを御知らせ下さると、私の方から使を出して御招待申上まする程に……と申し送つた。

一月は間も無く經つて、やがて四月の初旬となつた。逗子は海を南に受けて居るから、花は都より數旬早く、今年は晩いといふのにも拘らず、春山母子の別莊に來た時には既にその庭前の櫻が滿開の趣を呈して、極めて美しく咲亂れて居た。幸にも令孃の袖子はいつもの春の花見とばかり、今回の計畫を露ばかりも氣取つたやうな樣子は見えぬが、猶其上にもその經路を自然らしく見せかける爲めに、未亡人は種々さま〲に心を費して、その一行の來るのを今か〱と待つて居た。すると、三日の午前に今着したといふ報知がある……いよ〱今日の午後といふ相談が定まる。と、春山子爵の別莊と葉山の眞田別莊との間に、左の數回の手紙が往復せられた。

今小路子爵夫人より春山子爵夫人へ

拜啓、折角の御思召何を捨て置き候ふても參上致さでは不相濟候へどもこの前の滊車にて東京より來客有之、此方も手離し難く候間、此度は御待ち被下まじく、失禮の段はいづれ明日にも緩々參上御詫可申上候匆々不一　四月三日午後一時、今小路秀子、春山雅子樣まゐる、

春山子爵夫人より今小路子爵夫人へ

御手紙拜見仕候、御客樣御出にて御手離し兼ね候由もし御差支なく候はゞその御客樣御同道にて御出懸け被下候譯には不參候にや、實は今朝御着と承り、是非御目もじ仕り、いろ〱御話をも承り度樂しみに致し居候折柄、御出懸不被下候ては甚だ殘念に存候まゝ失禮と存じながらかく折返し御願申上候、御客

様は御幾人に候か、是又御知らせ被下度候、匆々不一
四月三日午後一時二十分春山雅子今小路秀子さままゐる、

今小路子爵夫人より春山子爵夫人へ

拜復難有奉存候、客と申し候ても一人而已にて候私共の甥に當り候者にて、男爵今津行麿と申す者にて候へども、此度は失禮仕度、折角の御手紙に對しても重々不相濟候へども實は當人本の一泊の豫定にて參り候爲め仕度なども致し居らず、初對面の席に甚た失禮と存候儘此段不惡御諒察被下度幾重にも願上申候匆々不一四月三日午后一時三十分今小路秀子
春山雅子様まゐる

春山子爵夫人より今小路子爵夫人へ

拜復仕度などは何うにても宜しく候間是非その御客様同道にて御越し被下度、御呼立申上候ても別に御構も無之、家の者の外に軍人の兄一人まゐり居り候ばかり、何も氣の置け候樣なる席にも無之候間是非とゝ御越し被下度待上候、匆々不一、四月三日午后一時四十分春山雅子、今小路秀子さま御もとへ

今小路子爵夫人より春山子爵夫人へ

拜復毎度御心を煩し上げ候段幾重にも御宥し被下度候、折角の思召ゆゑ、御言葉に甘へて、失禮をも顧みず、同道參上致す事に致し候、則ち私し夫と、行麿と、私と三人參上可仕候間宜敷御承知被下度候行麿は近所に一人是非訪問せねばならぬ友人有之候由に候間これは少し後れて四時頃に馬にて參上可致都合に候間是又不惡御承知被下度候、匆々不一四月三日午后二時今小路秀子春山雅子さま御もとへ

この數通の手紙はこの見合の殊更に計畫したものでないといふ事を袖子に知らしめるやうにと企てたものであるから、雅子夫人は勉めてこの手紙を娘に見せるやうにと心を配つた。けれど、娘は一向平氣て、この手紙を見せられても更に氣を留めて見やうとも爲せぬので……。

下

其手紙を氣を留めて見やうとも爲なかつた。けれど

……けれど四時にもう爲らうとする頃になると、少女は獨り席を離れて、庭下駄を輕く指尖に突懸けて、其儘咲亂れて居る櫻の樹立の中へと入つて行つた。櫻の樹立の向ふには一つの小さい池があつて、其處には松の影が美しくその鬱蒼たる影を涵して居るが、それからよぢ〳〵と路は池の縁の松やら櫻やらの間を縫つて、向ふの丘の上へ上へとついて居る。丘の上には風情ある四阿があつて、その四面には櫻の古樹がしだれにしだれて咲滿ちて居る。少女はその四阿を拔けて、それから少しだら〳〵と下りて、山吹の籬の前に足を佇めた。其處からは葉山街道が手に取るやうに分明と見えるので、その廣い路の先には葉山の背後の山が鯨の背のやうに長く延びて、その鬣頭わたりに、美しい海の色が今しも傾き始めた夕日の光に閃々と目眩しく輝いて見える。遠くて、波の打つ音が雷のやうに聞える。

少女はその涼しい眼を見張つて、向ふを見たが、その路には農夫の肥料車と覺しきものが只一つあるはかり其他眼に留るものは何も無い。少女は立上つて、そして前後に二歩三歩緩かな歩調で歩き出したが、視線は依然としてその路に注ぎながら、此度は頻りに耳を欹て始めた。波の音の外に何か懐しい物音が聞えはせぬかと。

少時は何も聞えぬ。

けれど再び視線を其路の上に向けた時には　その山の下に一つの黒い姿が認められたと共に、ある明かな高い馬の蹄の響が乾き切つた堅い路の上に極めてさやかに聞取られた。その蹄の音の確乎と勢の好いのから見ても、その乘手は非常に達者であるといふ事がすぐ解る。少女は莞爾と恥かしげに片頰を笑ませたが、その乘手の姿が次第に明かになつて來ると、慌て丶其身を爛熳と咲き亂れたる花の中に隱し、躍る胸を押へながら、その深い花の絕間から、その人の髣髴を得やうとした。

馬は一散に其路を過ぎ去つた。

袖子は殆と呼吸もせぬ程に身をひそめて、頻りにそれを見守つて居たが、今しも胸には何とも名狀せられ

ぬ一種の嬉しさと樂しさとが潮の如くに込上げて來て我から我を忘るゝやうな心地が爲た。栗毛の三才駒に新形の紺のドレスコートを着た今津男爵の優姿はまだ世馴れぬ釉子の少女心に何んなに美しく見えたであらうか。

長く見送つて懐つかしい其姿の見えなくなるや否、少女はほつと深い太息を吐いた。そして手をその躍る胸の上に當てながら、今其人の過ぎ去つた空しい路を光ある美しい眼でじつとばかり打守つて居たが、ふとその視線を地上に落して、

『あの人が……私の未來の夫！』

と切々に獨語ちた。

しかもその獨語を誰か傍で聞いたものがあるか樣にさつと美しい顔を紅くして、兩手を押當てた儘さも恥し相に低頭いて了つた。て、少時は驚きたる少女の石像のやうに少しも身動きも爲なかつたが、やがてある事を思出したものゝ如く、一散に花の小徑を池の方へと走つて行つた。

彼方では今頻りに娘の姿を探して居る。未來のお婿樣の姿が見えたといふのに、肝心の當人が居ないといふのは如何にも無念極る事と、今小路子爵夫人は殊にこれを口惜しく思つた。

『本當に釉さんは何處に行つて居るのだらう？』と洋館の窓から下を見渡しながら傍の春山子爵夫人に云つた。

『行麿は馬の上がよく似合ひますから、それを嬢樣に見せたいと思つて、態々馬で參るやうにと申置いて參りましたのに、殘念な事を仕ました。見合と申す者は初めが肝心だと申しますのに、彼が參つても釉さんは居ず。本當にこんな殘念な事はありません』

『いえ、そんな事がありますものか……』と春山子爵夫人は笑ひながら答へた。

『實は、釉に少しも氣取られないやうに、やうにとばかり思ひましたものですから……けれど、行麿さんは御立派で入らつしやるから馬の上でなくつても、屹度あれの氣に入るに違ひありません。決してそんな御心

配なさる樣な事は……」
令孃袖子が其姿を室の中に顯はしたのは、猶それから少時經つた後で、其時には客室に既に椅子に凭りかゝつて、かの今津行麿は後見の杉江男爵と頻りに何か話して居た。杉江男爵は一見して、すつかりそれに心醉して了つたので、これならば袖子を吳れても決して不相應な事はないと獨りで心に決めて了つたのであつた。で、その洋食の卓に並べられる前に、袖子は行麿に紹介されたが、若紳士の心を籠めた丁寧なる挨拶に引かへて、令孃は極めて冷淡に、極めて無作法に、傍から見て失禮と思ふ程の會釋を爲たので、行麿は、殊に西洋などで女子の丁寧なる交際をのみ爲つけて來た身の、何だか勝手が違ふやうな氣がして、何うも不思議で仕方が無い。一躰これは何うしたのか。もしや自分が先方の眼を惹くことの出來なかつたのではあるまいか。
かう思つて少女を見る、その美しさは！ レニィの傑作にもこれ程の美しい表情の力を有つて居る少女は無いと思はるゝ位。好もしい眼を低頭き勝に、そり／＼恐々ながら見上ぐる風情、髮は漆のごとく黑く房々と、解きて亂したならば、末は地に着くであらうと思はれるばかり、眉は遠山の黛、額は富士の遠姿、薄く色付きたる頰のあたりより襟首の長く白き、立姿のすらりとしたる、行麿は我知らず恍惚として了つた。
かれは結婚に就いては、確乎たる見解を抱き、日本の制度のあまりに無造作なのには、いつも反對の意見を表はすのである。男女が互に性質の一端をだに知り合はずに、老いたる人々の媒妁の下に、意味なく婚姻して了ふといふ事は、實に危險極る事で、これが爲めに日本の社會には名のみなる夫妻が非常に多い。從つて家庭の上の風波が絕ゆる事が無いといふ有樣である。これは日本の社會の上に第一に改革せねばならぬ事であるとは渠が歸朝以來の意見であつて、從つて自分は深く互の性質を知り合つた女でなければ決して結婚は爲まいと思つて居た　それはかりでは無い、まことの戀といふものは深く知り合つた上でなければ決して成立つ者では無いと堅く心に信じて居た。

然るに……。

渠は今春山令孃に逢つて、果して何んな感情に撲たれたてあらうか、『戀は深く知り合つた上てなくては成立ぬ』といふ確信を今猶守る事が出來るてあらうか。

渠は一見してから心を動かす美がこの世に有らうとは思はなかつた。また多年のおのれの宿論がある一場の景の爲めにかく迄破らるゝ事があらうとは思はなかつた。神秘なのは戀である、戀ほど不可思議なものは無いとその親友の某が感じてかれに語つた事があつた、それを其時は別段深く心にも留めず、寧ろ激した一場の言として却けた居たが、今この逗子の海岸の別莊の一室て、しみ〴〵これを思出さうとは夢にも思ひ懸けなかつた。

まことに不可思議なのは戀である。

恍惚として少時われを忘れて居たが、不圖心付いて見ると、前なる長い卓には既に料理の數々が並べられてあつて、右隣には杉江男爵、左には今小路子爵、前列の中央には今小路子爵夫人、同新夫人、その隣に春山令孃、その隣に春山子爵夫人と各々其席に就いて居て、いろ〳〵と政事上の時事問題やら、外交問題やら、音樂の話やら、文學の話やらが頻りに話柄に上つて居る。杉江男爵から話し懸けらるゝ軍事上の問題を受太刀に聽き流しながら、今津行應は一意その未來の妻となるべき人の方を打守つた。

『この春の音樂會には杉田さんがベトオヘンを奏るつて、聞きましたが、それは本當ですの?』

今小路新夫人は袖子に向つてかう尋ねた。

『え、本當ですつて……杉田さんなら、嘸ぞ面白いてせうつて、元の學校の朋友などは大層待詫ひてよ』

と微笑みながら、

『シューベルトてすと、杉田様には向きませんけれど、ベトオヘンの海の曲でも聞きますと、それは本當に……』と引入られるやうな素振を爲て、

『本當に何たか身がから緊められるやうな氣が爲て……』

『本當てすわ……』

と快活な調子。

窓の上の櫻にふと鶯が一聲さやかに囀り渡つた。

「おゝ好い聲だこと!」

と思はず袖子が言ふと、

「本當に好い聲!」

「何處で鳴いたのですか」

「あの花の中でせうか」

など區々に言葉を合せる。

「田舍は好う御座いますね! 東京などに居りますと、あんな好い聲は滅多には聞かれませんのですけれど……本當に田舍は暢氣で、靜かで、」

と今小路子爵夫人は言つた。

今子路子爵夫人は食事中經驗ある心を以て絶えず春山令孃の擧動に目を着けて居た。けれど、何うもその令孃の素振が思はしくない。一向耻しい樣な樣子も無く、今津男爵の尋ぬる質問にも臆面なく流暢と答へるばかりか、傍に若い紳士が居るかとも言はぬ許りの冷かさ! 何うもこれが氣に懸つて堪らぬので、食事が濟むと、嫁の弓子を片蔭に呼んで、

「お前、一躰何うなのだらう。行麿の方は大層望んで居るやうだけれど、袖さんは何だか一向乘らぬやうては無いかい。何うも私は心配でならないんだが、お前は何う思ふね?」

「左樣ですね」

と弓子も思はしからぬ素振。

「だから、お前ね、何うか、悟られないやうにして、袖さんの氣を引いて見てお呉れな、えゝ、好いかい、頼んだよ」

と言つた。

弓子は年齡こそ少し違つては居るが、華族女學校ではよく知合つて居る間柄なので、其儘二人は庭に出て、花の咲亂れて居る間を手を引き合ふて彼方此方と逍遙ひ歩いた。學校時代の話、試驗の話、音樂の話、など取留めもなく語り合つて、二人は少時池の畔を去らうとも爲なかつた。

一時間程してから、弓子夫人は呼吸を切つて客室の

中へと入つて來たが、急いで子爵夫人の傍に行つて、
「お母さま」と聲低く、「御安心なさいまし、袖さんはそれとは言ひませんけれど、話をして居ますと、何だか非常に嬉しさうな樣子で、いつもに似合ずいそ〳〵して居らつしやるから、‥‥乾度大丈夫だと思ひますわ」

＊　＊　＊　＊　＊　＊

夕の七時の汽車で東京に歸らなければならぬ用事があるので、今津男爵はやがて席を立つて別を告げた。庭から通ずる大門の裡にはその立派な相馬產の三才駒が已に準備を整へて引出されてあるが、その栗毛の色の美しさといひ、その體格の立派さといひ、殊に其の長い尾の亂れは、この馬の凡種ならぬを顯はして居る。

人々と共に送つて出た春山令孃は既に以前からこの馬を知つて居る樣子で、近く寄つて、馴々しげにその鼻頭を撫てながら、一握の春草をその大なる口に入れて遣つたが、最後に長い袖の中から濃紫の菫の花束――これは先程弓子夫人と話しながら池の畔で摘め集めた――を出して、それを笑ひながら惜氣もなく馬に與へた。このやさしい眞心は、馬よりも寧ろその馬の主が嬉しく感謝したに相違ない。

家庭の養鷄　志ある人は每戸必らず少數の飼鷄ありたきものにて一雄五雌を庭前に飼養するものとせば雜穀の遺粒厨下の殘物等を與へて置いても一年七百個の卵即ち十四圓餘の收入を得るものであるから是れを食物として賣り捌いても充分家計の一助ともなり且つ是れを大く言へば上海鷄卵を防遏する點より國家の利益となるのである特に兒童は鷄犬等の小動物を好むものなれば鷄を兒童の所有物となさしめ朝は出校の前に餌水を與へ歸校の後ち卵を集め或は相當の手當をなす抔勉學の餘暇に充分なる快樂を得せしむべく喧嘩樹登り等の惡戲を覺ゆるよりも遙かに家庭娛樂の一端として相當の智識を兒童に與ふる事も出來得るものなれば養鷄程一擧兩得の者はあらざるべし

名家談叢

感化院の話

繼母に就て（一）

感化院長　高瀬眞卿

家庭の教育に關する著書世上既に少なきにあらず然ども多くはこれ一時の理論に過ぎず、抑も家庭の教育に就ては余多年の間實際に就て研究せしも少なからず、余は常に如何にせば小供をして不良に陥ることを免れしむべきやと此問題の爲に少年不良の原因を調査し其原因のまた種々の方面より來るかとを調査して遂に繼母もまた少年をして不良ならしむるの一大原因なるを知れり、本書は則原因調査の材料の一部なりとす。

○繼母必らずしも惡人に非ず

私は繼母といふ事に就て多年考て居りますが、世上では繼母根性といつて繼母といふものは何か意地のわるいもの丶様に申します、昔の小説草紙などにも繼母の意地のはるい話が澤山ありまして京山の女房氣質や馬琴の皿々郷談などにも其話が出て居ます、先づ繼母と云この文字を見ましても慈愛と云ふものが乏しいもの丶様に直ぐ感じますのはどう云もので御坐いませう世間で言ふ通り果して意地のはるいものでありませうか、かならず繼子を邪見に取扱ふものでありませうか、私はこの事に就ていろ／＼取調て見ました、御承知の通り感化院へ這入つて來る少年は割合に繼母の手に掛つた子が多いです、どう云譯で繼母の手に掛つた子が不良になるであらふかと云ふ疑問が起りまして、それから心をつけて取調べて見たので御坐いますが、だん／＼考て見まするど繼母といふものは甚だ割のはるい位置に立つものでありまして、繼母と云ふ位に据つた上は余程すぐれた賢婦人でもその賢能を全ふする事は出來ぬものと存じます況して平々凡々たる婦人では一層不利益なる境界に陥るものと認められます

若い婦人がはしめて懐姙をした時にそのお友達に話した言葉を聞くに妾はこの子が生れても抱いて歩くことはいたしません、若いくせに子供なんか抱て歩くのは

見つともないと思ひます」ト言れた若い婦人の情として左様の事もありませぬ、然るに生れ落ると可愛くて〳〵下へ寝せて置くものいぢらしくなつて抱いて許り居る其の顔を見るのが楽みて子供のニコ〳〵と笑ふ顔を見てはどんな苦勞も忘れて仕舞つて、産ぬ時の心とは天地の相違で自慢さうて抱いて歩きたくなる、これほど子供と云ふものは可愛ものでありませう、これは即ち自分の産だ子に限るのであります、姉の子であらふが妹の子であらふが自分の腹以外の子と云ふものは可愛いと言ふ情は無論あつても自分の産だ子のやうに無性に可愛いと云事は決してないのであります、其れは言ふまでもなく吾血を分けた子で所謂一躰分身でありますから然うあるべき筈で自分の子も他人の子も可愛い情が同一であつては親子と云ふものではない、親疎の隔てのあるを私は當然の事と思ふので御坐います

然るに繼母と云ものは自分の産んだ子でない前妻の産んだ子を吾子として養育をせねばならぬ、即ち他人の子である勿論義理に於ては吾子である夫との關係上吾子に相違ないがそれは人爲的に成立た關係より吾子としたもので、愛情と云ものは義理合より生じた愛情でソレがだん〳〵親密になつて來て他人より見れば眞實の親子のやうに見ゆるが其實は百年たつても千年たつても元の他人と云感情は消滅するものではない、只た外觀の上に甚だ親しく慈みの深いやうに見ゆるものは繼母が夫の手前を兼ねて勉めて繼子を可愛がると次には世間の聞えを憚りて繼子を大事にするとの二つの義務と云ものがあつて常に親密なる形状をなさねばならぬのである、斯云義務上のつとめも自分に子のない間は充分に出來るが自分の子が生れては最早さうはいかぬ第一の義務たる夫への義理合として繼子を愛する事も薄くなつて吾實子を愛する方に情は必す偏くなる夫もソレを無理とはせぬのみならず妻の愛にもひかれ生れた子の愛にも引れて仕舞ふもので、ソコで繼母は第一のおつとめはズーと輕くなると同時に第二の義務と心得えた世間への聞えと云ふことも吾子の愛にかまけ

てまた頓着しない、斯云譯合と云ものは教育ある婦人としてあるましき事なりと論すれば論も立ませうか私は一般の情合として別に怪むに足らぬ事と思ふ

さて繼母が吾子の可愛いために其愛にひかるゝやうになると他人の產だ子はどうしても疎そかになる天然の愛と義理の愛とが平等に行はされる筈はない、それが公平にゆくとしても一方は涙を含むだ眞正の愛、一方は道理に基いた手段的の愛と云ふもので、温度は違つて居る、違ふのが當然でモシ違はぬならその繼母は情を矯めて外觀を裝ふものと言つてよろしい斯うなると前妻の子が必らず「ひがみ」を生して、お母さんは自分の子許り可愛がる私をば疎略にするといふやうになつてもと〳〵懷しい慕はしいと云ふ情が薄いのであるから忽ち繼母を怨むやうになつて、他人の寄り合いつしか疎くなつて仕舞ふ、ソレを父が見て吾子は不心得な奴であるト睨み付るやうになる、此の有樣を奉公人や親戚が見て繼母であるから前妻の子が邪見にされる、ア、彼の子は憫然であるといふやうになり、それを子供にも他より云つに聞せて焚付るから子供はます〳〵繼母に背くやうになるこれが繼子一般の成ゆきと云ものであります。

私は繼母の賢婦人と言ふものを見た事がないのでモシ賢婦人であつたならどうか存じませんがたとへいかほど學問のある婦人でも、どんな賢い婦人でも吾子を愛すと云情合に替りはないと思ふ、その情合のために前申した樣な事情が生ずるのは當然の事としてよいては有ませんか、これを婦人の不心得のやうに言ふのは些と無理であらふと思ふ、我國の教育社會や學者の中には女の性情と云ものをよく研究せずに支那の小學的旋鋒を以て女に情を矯させても婦人の義務をつくさせやうと思ふ者があるこれは言つて行はれない事で出來ない相談と云ものである。

右に申すやうな譯で繼母と申ものは其の位置が甚た不利益なので、繼母その人が惡いのでないのであります繼母は實に割のわるいもの、この位置に立ては必らす親戚よりも世間よりも非難攻撃を受るものと兼て覺悟

をなさらねばならぬのであります、さて然うすれば如何せはよかろふかと言ふに私は別に考がありますが今日は余り長くなりますから次回にお話をする事に致しませう、私は繼母に就ては斯う云事を申してこの話を結びます、繼母と云ものにも多數の人に逢まして、繼母のために繼子が惡くなつたと云其の繼母にも多く逢て話をしましたが、惡い氣立の婦人であると思ふものは繼母十八人に對して二人とはありません

○繼母の位置に就て

不良の原因に就ての調査は已に駒込時代より（駒込時代は本院駒込にありし時を言ふ明治廿一年より同廿六年迄なり）院長はじめ熱心に取調べまして右に關する統計表も出來て居る事でありますが、其中に繼母の子も不良となる原因の一つになつて居る、先年この問題に就て教務課で取調べた處が

○貳百五十九人の不良少年の内に

一實母の手に育ちしもの　百十人
一繼母の手に育ちしもの　百四十九人

と云事實を發見しました、昨年の討論會の時にも其出席者に就て一寸調べて見た處が

出席者十八人の内

一繼母の手にそだちたる者　六人
一實母死して伯母または他人の手にそだちて生育せしもの　四人

斯云事實でありました、此に於て子供と云ものはどうしても實母の手に生育せられねば尋常に正しい發育は出來ぬものであろふかと云疑問が生じたのであります

世間にも澤山ある事實であるが他人の子を養つて之に他より嫁を迎ひて所謂他人養子と云ものに世帶を任す者があるや〻もすると養父母の間に風波を生じやすくして往々葛藤を生ずる、また實の娘に他より聟を迎えて父母と同居する者があるがこれも多くは聟と父母との間に紛紜を生じ其場合には多く娘は聟に同情を表して父母に反對すると云やうな事柄を見る事が多い、要するに養子と云ものは情愛を以て父母に仕えるのではなくして、義務的に他人を父とし母として其の家風に從ふと云に過ぎない、父母もまた慈愛と云ものは表面

の事にして、現に角に彼が吾に仕ふる處の眞實ならん事をのみこれ求むると云、無理なる注文を以て臨むが故に、不滿足の事が先づ多いのである、早く申せば他人同志が約束上眞實の愛情を以て交はると云に過ぎない人爲を以て天然の事を行ふと云もので頗る無理なる注文と言ふものであります

繼母と前妻の子との關係が丁度右の養父母と養子との關係に似て居る、表向は眞實の子に異ならぬやうに裝ふて居ても、内情に立入つて見れば決して眞實の愛情のあるべき筈はない、モシ實の子に異ならずと言ふものあらばソレは僞りに相違ない、眞實の子に異ならずと云が眞實ならば其繼母は必らず實子のない人があらふ、自分の子を產みたるのちに於ても前妻の子の愛が實子に異ならずと言ばソレは自ら欺き他を欺くと云ものである

繼母は悉く薄情の人の如く言ふは大ひなる誤りなり、繼母其人のあしきが爲に繼子が不良になりしと言ふは頗る失當の言なるべし、繼母の人となり如何よりも繼母と云位置が繼子に對して甚だ不利益なるものと言ねばならず、これ其罪を繼母にのみ歸する事の出來ぬ所以て、繼子そのもの丶位置の不孝よりもまた不良の原因を生ずるものと言ねばならぬなり、猶はこの問題に就ては、諸君の御考もありませうと存じますが、自分だけの心付を大略申述て置きます　（教師某氏述）

母親の感化力

潮田千勢子

こは、女子が此頃「母の會」の席上にて述べられたる談話の大要を筆錄したるものなり、

子供といふものは、すべて母親の言語擧動を眞似るものであるから、言はゞ母親は小供の雛形であります、母親は子供の雛形であるからして、其の子供を好くするのも惡しくするのも、之れが雛形次第であるといふても差支はありません、ソーして見ると、母親の責務といふものは非常に重いものであります、之れが證據には、

古來英雄とか、豪傑とか、學者とかいふすぐれた人々が多くは賢母の膝下から出たといふ事でも能く分る、だから、人の母と爲りて子供を養育するには、一言一行、極く細かな事まで謹しみて、何んでも其兒に惡い癖を付けぬやうにと注意するのが肝要であります、未だ物心を知らぬからといふて油斷してはいけません古から申して居る通り、兒童の敎育といふものは、其兒が母の胎内に在る内から始むべきもので、學者が胎内敎育とか申すのは、此の時期に於ける母の心得を言ふのでありませう、母が其姙娠中には、眼に惡色を見ず、耳に惡聲を聞かず、心を穩かにして居らねばなりません、さて子供が生れたとする、其生れたちの赤坊と申すものは、心が有るのやら無いのやら分らぬ程のものでありますかといふに、決してそうではなく直ぐ癖の付き易いものです、たとへば、其の赤坊を抱いてばかり居ると直ぐ抱癖が付いて仕舞うて、暫時も下へは眠ない樣になる、泣く度毎に乳を與へると、直ぐに其癖が付いて、泣たら乳でなければ收らぬ樣になる、また横臥になつて乳を飮ませつけると、他家へ往つた時でも、横臥になつて乳を呑ませなければならぬ樣な事になります、されども、育て方一つに依つては、母親が三時間位家をあけても差支のない樣になりますから、兒を育てるには何んでも母次第であると思ひ、成るべく手數の掛らぬ樣に仕付けることが大切です、其の精神敎育の方も同じ道理で、物心を辨へぬからと云ふ無茶な育て方をしてはなりません、或人が當年三才になる兒を連れて牧師の許へ參り、此の兒を敎育仕樣と思ひまするが、何時頃から始めたら宜敷く候哉と尋ねたらば、牧師が答へて言ふには、惜哉貴女は三年後れましたといはれたそうですが、實に牧師の言の通りでありまして、稚兒には稚兒丈けにそれ相應の手段方法を以て智識を開發して行かねばなりません、たとへば此處に花が咲いたとすれば、之れを大人の眼から見ては、年々歳々花相同じで別にどうと云ふことはありませんが、此の地球に新來の客たる幼兒が見たならば、それは珍らしく不思議に感ずるに相違ありません、鳥が啼くのも、犬の吠えるの

も、雪の降るのも、其他其兒の眼に觸れる事々物々、悉く不思議の種ならぬはなしと申しても差支はありますまい、かゝる塲合に、其兒が片言まじりにでも、言葉の一つも利ける樣に成つて居ると、種々無邪氣な問ひを發するものですが、その時には、母たる者、または乳母たる者は、彼はアヽで是はコウでと子供の得心の行く樣に、丁寧親切に說き明かしてやらねばなりません、それをうるさがつて說明をしてやらぬならば、兒童の智識は停滯してしまつて、都合好く發達を遂げることが出來ないです、

私は子供が大嗜でありまして、幼稚園へ出で、多年兒童敎育に身を委ねて居ましたが、其幼稚園で預つて居る小供の擧動を見ますると、大抵母親とか家庭とか云ふものゝ推量が出來ます、或る時、私が幼稚園で數多の小供に向つて、「鰹節は何處で產出るものですかと申したら、其內の一人が立派に土佐と答へたのがありました、私は此時に此の兒のお母さんは餘程兒童に注意して居らるゝお方ぢや、と思ふて感心して御座いました、また或時、作文の課題に「煙管」といふを出してやッたら、多くの中に斯う云ふのがありました、「煙管は金と竹とで作り人を打つものなり」其の時私は、此兒のお父さんは、必ず酒でも飮んで、常に煙管で此兒のお母さんを打つ樣な事があるのだと思ひました、こう云ふ風に家庭の實際は、深く兒童の腦髓に染まるものでありますから、能く注意せねばなりません、彼の幼年者喫煙禁止法だとか、又は禁酒法案だとか云ふのも、たゞ法律がある計りでは何の役に立ちません、必ず實際に行はれて始めて其効を見るべきものである、そうして此等の事は、何うしても家庭に於て注意しなければ、到底完全に行はれるものでなからうと思ふ、だから幼年者に對する禁酒禁煙法の如きは、家庭に於ける親、殊にも母などに力を借りなければならぬものであらうと考へます、家庭で母が煙草を吹かし父が酒を被りながら、其小供等には煙草も酒も飮むなといふのは酷である、小供を育てるよき仕方ではない、幼年者に煙草や酒を飮ますの害を認めたならば、第一其父母たる御方から先

きに禁酒禁煙なされて、その御小供衆に雛形を示さなければなりません、さなくば折角の法律も根から駄目です、五六年前、婦人矯風會に於て島田三郎さんが話された事がある、それは僕も此迄は多少の酒を飲みましたが、酒量を定めて居つたから、別に精神を錯亂されたこともない、隨て自分一個に取ては未だ酒の弊害を認めないが、當年取つて五歳になる兒と七歳になるのとありますから、此等の兒の誡めの爲めに、僕も今日からは禁酒會員の一人にならうと申されましたが、私は人の親として島田さんの御心掛の好いのには、誠に感心を致しました、されど、惜い事には此の如き良き心掛の親は世の中に少ないのである、試に都下の新聞を見ますると、人間として有るまじき事柄が、毎日三面記事として澤山載つて居りますが、此の三面記事の材料となる樣な人の家庭を取調べて見たならば、大概惡るい家庭に育てられたものであらうと思はる、又た犯罪者の如きも、早く父母に別れた者に多い樣に承つて居ります、それは其筈て、幼き時分より父母の無きものは、決して能く育ち行くものではありません、父母の無い者に教育の途を立てなければなるまいが、苟もそが父とか母とかがあるならば、其の子供達を家庭の中から能く仕込んで、後日立派な人間としなければなるまいと思ひます、之れに一寸人の氣の付かぬ所ですが、裏店の家庭などになりますると、二枚折りの屏風などに、いかゞはしき繪畵などを貼付てあるのを見受けます、こんな事は些細の樣でも、其兒童の精神に及ぼす影響は頗る恐るべきものでありますから、此の如き事も注意しなければならない一つだらうと思ひます云々と、

吳服談（羽織の來歷）（承前）

（三井呉服店意匠部籾山東洲氏）

前號に申上たのは古來より羽織の事に關する大躰の事柄でありますが、是から現時着用召さるゝ羽織のことをお話し申上ましよう

羽織には黑染、色染、小紋染、縞物等がご座ります禮服

としては黑染に限ることになつております、そこで羽織の紋と云ふものは、色變りは格別禮服とすべき黑染には五個所の紋所で御座ります、略しては三個所、それから一個所と云ふのであります、三個所は背に一ツ、背に並んで兩袖に二ツと云ふので、一個所は背に一ツを附るのであります、前に五德紋のことを申上ましたが是れは三個所で即ち背に一ツ、前の乳の處に左右一ツづゝ附るのであります、其れから其紋の大さですが德川時代には鯨の一寸以上から二寸或は三寸位までもあつたそうですが御維新以來段々少さくなつて廿二三年頃は男子の紋の大さが今日の婦人の紋と同じ位で鯨の七八分位になりました二十七八年以來段々德川時代に戻つて今日では鯨の一寸以上、一寸一分二分或は紋の種類に依つては一寸三四分位になつて居ります尤も紋の種類と格好によりて現寸法よりも大きくも見へ、小さくもみへるものであります、例へば丸の附たのは大きく見へ、丸の附かぬ桐とか横木爪とか云ふ樣な紋は割合に小さく見へるものでありますから、染物を誂へる時分には此邊に注意することが肝要であります、男子の羽織の地質は德川時代もそうであつたが、今日では羽二重が一番品格が宜しい、それから鹽瀨羽二重、斜子羽二重又は斜子、紬、奉書紬でありますが中に就て鹽瀨羽二重と云ふものは全躰眞まで染め込みにくひものでありますから見場は宜しふ御座りますが重ひばかりて羽二重の樣に輕ろくして品格のよいのには過ぎまいと思ひます其れだから德川時代より今日になりましても再興して流行の逸品となつたのであります併し前申した通り羽二重では重みがないと云へば、流行てはないが斜子羽二重であらうか、次は斜子、市樂、紬、奉書紬とでありましよう木綿物ではキヤリコ眞岡であります縮緬は華者風流を好まるゝ人或は大家の御隱居但しは御醫者樣か或は何とか云ふ人の召物で禮服用には嬌冶た品である樣に思はれます、元來黑染と云ふものは落付の宜くないものだから春着にし樣と思つたならば其前年の秋頃染めて枯して置くが一番よい樣だ、そうすると上剝がする患はないものであります、黑染は東

京と西京と比較をすると黑の色合が違つて居ります、東京は青味を帶びた黑て、西京は赤味を帶びた黑であります、併し西京でも東京の樣に紺下染にして青味を帶びさせて染上げることが出來ます、西京で最も特色と云ふのは紅下染であります直段は安直くないが下地を紅に染て其上を黑に染めるのであります、此法によりて染上げたものは赤味を眞に帶びて黑く光輝を發するものゆへ日の當る處か但しは夜分燈下の光殊に電氣燈の下に置くときは云ふに云はれぬ光澤を發して上品に見ゆるものであります、何れも其特色があるから一概に其優劣を定めることは出來ません、近來西京の伊藤忠兵衛と云ふ人が九重染と云ふ黑染を發明してましたが是れは西洋の法によりて紅下の樣に赤味を帶びて染上るもので仲々品格のよい色合であつて其くせ直段も紅下の樣に高直ありません

其れから紋なしの縞物ては京糸織、縞市樂、緊市樂、米澤市樂、緊糸織、桑都織、東華織、米澤糸織、節糸織、銘仙、本琉球紬、大島紬、それから澁味を帶びてずつと澄ましたものは結城紬であらふ近來結城紬にも種々な縞柄があつて絣などにも大島紬の樣なものもあります其から木綿では本場結城、金城琉球、紡績大島、紡績絣などであります、縞の羽織に紋を付ける人は意氣筋の人が背に一ツ白糸か茶糸にて一寸縫紋をするので、是は素人向の人にはないものです、其れから無双羽織と云ふて表も裏も同一の地質で胴の處を友禪染に模樣を染め出すのがありますが是れは婦人の羽織の處で御話申ましよう、それから胴裏には今日の流行は時代緞子、此模樣には有職模樣もあり古代模樣もあり土耳古模樣もあり種々な模樣のあるは婦人の丸帶地に色々な模樣のあると違つたことはありません、近來は緞子に繪胴裏と云ふのがあつて肩より胴にかけて立派に花鳥、山水、人物やら、西洋、日本の繪畫とか寫眞とかを其儘織出したものがあります其精巧なことは殆んど筆て描たのてはないかと思ふ樣に濃淡陰影を現出したるものであります、其次は紋綸子てしよう紋綸子は御承知の通り地紋が種々ありまして之れを色染めにしますと地紋が

光つて光澤を顯しますので仲々綺麗なものであります
其れから相變らず甲斐絹で御座ります、甲斐絹は茶、玉蟲、藍、鶸等色々綸子と同じ無地のあるのは勿論縞甲斐絹と云ふて種々なる色糸で翁格子、六彌太格子、或は大小の縞物は申に及ばず辨慶縞、市松等の變り物がありまして艶麗いものも澁味ものもあります、又繪甲斐絹と申まして花鳥山水等を淡泊に織出した物もあります
其れから木綿物の胴裏には綿甲斐絹と云ふものがあります之れは甲斐絹と同じことで色々の無地もあり縞もあり又模樣の附たのもあります
以上御話申上たので男子向の羽織の概略を了りましたから是れから婦人向の羽織のことを申上ましよう
▲婦人の羽織　に付ての御話をしますには先づ其起りから申上ましよう婦人の羽織を着初めたのは今より百五十年餘前延享の比からてあります、八十翁昔がたりと云ふ書物に

延享の比町人の女房ども男の如く長羽織を着、往來せしを見習ひ、よほどの奥方も次第に着る樣に成て、群集の所は一日に二三人程ツ、武士の中にも見懸しに、間もなく町方へ御法度に仰出され候よしにて夫を聞きたまひ今は着るものなし今の世は只賤しきもの丶まねをしたがる去りとはよからぬ人心なり

と書てあります此八十翁昔がたりと題する書物は寛延年間に書たものでありますから夫れから以後婦人が着る樣になつたのでありましよう箇樣に下げすまれてわつた物だから男子の羽織は素襖、直垂の變りとして遂に立派な禮服となつたが婦人の羽織は禮服とならずにぽんの畧服の外用ふることが出來なくなりました其れゆへ紋も定紋を五箇所附なければならぬとか三箇所が宜しいとか云ふ樣なことはなく畢竟は男子の羽織にまねて定紋を附たものであります
夫れから羽織の地質は何が宜しいかと云へば無地物では羽二重、絞羽二重、紋縮緬、縮緬、或は奉書紬などで御座りましよう、併し婦人の羽織て一番多く出來るのは縮緬て次が紋羽二重の樣てす、其れから紋所は五箇所、三箇所、もありますが今日ては一箇所を附ける人は

稀の樣です、其大さは鯨の八分或は八分五厘九分と云ふ位なものです、併し前にも申た通り紋と云ふものは格好に因て大きくも見へ小さくも見へるものでありますから丸のあるのと丸のないのとにより注意をすることが肝要です、そこて黒染は前申た通りですが、色染には年頃によりて種〻あります尤も大概は二十歳以下の令孃向に多いのですから隨て色合も紫、紫根、菫花色、藤色、小豆色、梅鼠、櫻鼠、空色、熨斗目色、等各好む處によりて染めるものです、妙齡向には裾の處や袖下の處へ模樣を染出すものもあります、模樣のことは衣裳の處て精しく御話申積りでありますが先づざつと申上ましよう、羽織だの被布だのと云ふものは曙染にするよりも地落染の方が適當であります、曙染とは上の地色を裾の處て暈し其下に模樣を染出すので、地落染とは下まで同色に染下して其中に模樣を染出す趣向です、其模樣には山水の樣なものより吹寄せとか亂菊とか梅櫻の零れ模樣などが適當であります、被布も同じことで色合でも模樣でも更に相違の點はありません、此羽織或は被布に模樣を染めるのにはよく注意して染めないと其兒の身の丈けが延びたときは下からくり越さなければならぬ、染り越すには模樣を內裏の方までも染めて置かなければなりません、併し其れよりも經濟向を考へれば一層袖下ばかりにして裾の方には模樣を染めない方が利方であります、袖下ばかりにしても寂寥と云ふ程でもありません　（つゞく）

▲蝙蝠傘の持樣と人の性質　人間の性質は日常携ふる杖や蝙蝠傘の持樣にても大概は判斷し得らるべし即ち蝙蝠傘の中央を掴みながら他の迷惑をも顧みず前後に搖かす人は快活、敏捷、輕佻、又は我利〱の人なり、把手の頭を掴み、之を下向にしながら前へ〱と押し出す樣な工合に携ふる者は元氣汪盛の人にして百難を排して前進するの勇氣あり、把手を後ろに向け下向に携ふる者は不確實なる性質の人にして、又た蝙蝠傘を環の如くに振廻しつゝ步行する者は極めて快活にして且善良の性質を有し、他よりは愉快に生活するとを得る人なりと

女學世界懸賞和歌兼題
（〆切五月十五日）

湖邊眺望
麥秋
夢

◎賞品天、地、人、の外秀逸十種に呈す

女學世界懸賞文

▲消息文（二十四字詰二十行限）
▲韻文（二十句限）
▲抒情文（二十四字詰四十行限）
▲叙事文（仝上）

◎〆切　五月二十日
◎披露　六月五日
◎賞品　以上四種中より甲、乙、丙、を選び十二名に呈す

懸賞文規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙撚にて綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界宛とせらるべし▲投書原稿は一切返却せず

才媛詞藻

懸賞課題　文學士　大町桂月先生選評

〔天〕野邊　横濱市戸部町五ノ一五五　長谷川さく子

屍やく煙斜に立つみえて
夕月さむし野邊の一つ家

評　凄涼の氣、人を刺す。

〔地〕仝　青森市大町三上方　一戸たま子

そことなく川の流れの音もして
雲雀なく野の霞む長閑けさ

評　のどかなる光景、眼前に躍動す。

〔人〕春雨　横濱市戸部五ノ一五五　長谷川さく子

雨そゝぐ酒屋かかどの柳蔭
ぬれたる馬の身ゆるぎもせぬ

評　馬は門外の雨に立たせて、馬子は壚邊に濁酒や飲むらむ、一種の光景、清新の趣を見る。

春雨、野邊（秀逸）

尼寺の讀經の聲もかすみ行きて軒の芭蕉に春雨の降る　伊勢　小西露子

嫁入りの一むれ過ぎし菜の花の畑の中みち春雨のふる　岡山　有本秋子

花言はず少女語らず山吹のさきたる門に細き雨ふる　伊勢　細野鈴子

酒買ひて歸る里道日は落ちて松原一里春の雨降る　三重　逢瀬とし子

新らしき奥津城ならぶ古寺に花ちる夕春の雨ふる　相模　吉村こし子

春の日の永き柳の絲いふにけふもひかれて遊ぶ野邊哉　大阪　島君代

そぼ濡て桑つむ少女歸るなり春雨けぶる野邊のほそ道　千葉　米良錦

うなゐ子が吹く麥笛に驚きて胡蝶とびたつ菜畑にして　尾張　鈴木とみゑ

今日もまたそゞろ花野に憧れぬ籬や柳に打まねかれて　大阪　田中俊子

鈴鹿山に歌謡ひてくだり來る馬子の破笠に春の雨ふる　三重　細野幸子

そよとふく風だに厭ふ我宿の花につれなくふる小雨哉　和歌　彦坂信子

春雨にいやましぬるゝ花さげて墓に詣づる孤子あはれ　大阪　田中俊子

君が代は民安かれと御軍をならしの野邊にひゞく筒おと　備前　重松竹子

懸賞文披露

日本婦人（課題）

（第一賞）　北信にて　富士子

うつくしき名、日本婦人、英の詩仙アーノード氏は價高き讃辭を呈して能くこれを世界に示せり、夫れ遠く青空に聳えて白雪深う、丈夫と佳人が心をうつし得て、神州之正氣君知否試見東洋富士峰とよみけんそが下に生れつる日の本の女流、我等は世にほこらんかな。

身を殺して仁を爲せし御方、我、弟橘姫にこれを知る、姫は至誠の御化身、まことに熱愛の女神、世に至高至大の愛を盡し給ひしといふも過言に非らざるべし、かゝるうつくしき死のかばれ、太西洋岸にありしや、

否や。

情と義との戰ひに、凜乎として勝をあげつるは細川氏の室なり、最愛の女子をつめたき刃に伏せて、死すべき時に死せざれば死にまさる恥ありといふ、自害、あはれ怖ろしうもいさぎよき文字、歐米の歷史にまたかゝる類やある、情を抑へて義に殉れり、義とは何、この答や、一朝一夕に盡るなけん、唯影の形に添ふごとく日本の婦人と此の義、相離るべからざるものなり。

ほまれ多きは王朝女流文學者なる哉、幸なる京よ、京の月、京の花、京の霞、悉く纖手にゑがきいだされて最後の勝利を博せり、紫女清姬はいふもをろかや和泉、小式部、赤染右衛門、續々生れいでゝ百花爛漫の春色を呈せり、先きなるは昏寒き秋の夕べ、これは婉なる歷史のおもかげ、花のあけぼのならでやは。

於千代、日本は平民女文學者を代表すべき女性を忘れざりき、遊女高尾、日本は泥中の蓮に比ぶべき女をも生みぬ、清きとは獨り白百合、すみれの花のみならんや。賢こき日本、遂に淀君を見るに至れり、豐太閤の覇業もこの女の爲めに破れり、あわれや秀頼の不運、これ肉慾にあきつる胎内より生れし當然の結果にこそ。西にクレオパトラ、東に淀君、共に英雄の運を左右せし女傑になん。外になほ忘れ能はざる各ヒーロインをあげて暫し其功にひざまづかんとす、宗教を深く信じ給ひし光明皇后、いふは畏怖あれど彌陀の化身をいだき給ひしにはあらぬか。軍の大將神功皇后、日本の光を海外に輝かし給ひぬ、其御よそほひいかに勇ましかりしよ、げに偉大なる御いさほし、悲い哉末の世にてはくりかへし能はざるところなり。賢母としての正行の御母、教育家としての春日の局、一つはあくまでも南朝の帝に忠を盡さしめ、他は德川三代將軍を作れり。山高く水清き日本、衣通姬、小野小町の容色ありつるあやしむには足らじ桃李の粧・芙蓉の眉、唐の楊貴姬がためしもかくてや、我等はスイツルのビューチーを知られどもこゝなる美人にやおとるらん。

一葉一落の人の身に、涙のかゝらぬはあらじ、ことにもあはれたる婦人をあげんに建禮門院の御身の上こそいふもかなしや平家の女流が末路の哀れさ、小督悲し、佛悲しされど四海の波にたゞよひたる御人々の涙にくらぶればいまだなり、痛ましき日本の婦人、涙と遂に相離るべからざるか。

末の世にいたりて、日本は一葉女史樋口夏子を生めり、今や早世してなし、樂界には幸田姉妹ありといふ、博文館、先きに票をつのりて明治女流のすぐれるを知らんとす、擇ばれ給ひしは今世に時めく御方々、ほまれ多き御事よ。

終りに臨み、一言なくてやは、

日本婦人の長所、　義を尊みしこと。
同　其短所、　虚飾に流れ名目を喜びしこと。
同　其特色、　謙遜と貞節を學びしこと。
同　其理想、　嫁しつる家を王國と心得しこと。
同　其信仰、　自ら信ずるも傳導心に乏しきこと。
同　其忍耐、　心に泣いて顔に笑みを作ること。
同　其家居、　幼にして父母、長じては夫、老いては子に従ひしこと。
同　其現在、　戀愛主義に心醉すること。
同　其將來、　愛を去つて富貴につかんとすること。

うつくしき其名、日本の婦人、我が列記せし人の外に無名の貞女、無名の孝子、はにふの小屋に世に知られずして世を終りしが多からん、現世の歷史は紙に限りあれば彼等を記載するところなし、天の御手帳よ、い

かに多く其名ほろびずして書かれつらんか。

評 思想當贍にして文詞婉麗、此題の投稿無慮數十篇中、優に第一位を占むるに足る、序に附話す、今回の應募文は概して陳套の作多かりしを憾む(日東)

(第二賞)

熊本縣玉名郡賢木村　坂口美代

ア、日本婦人!、語るに先ちて胸に充つるものは、彼等の爲めに止め難き可憐の情である、想ふに日本の婦人など可憐の者は他に多くあるまい。江湖の或者は日本婦人の優美淑徳を以て、萬國に語るべきを語つた、成程、日本の婦人は優美なるに相違ない、淑徳を重ずるに相違ない、孰れも萬國に誇るべき長所であらう、是れ併し乍ら小なる長所である、理想なく、趣味なく、高尙なく、信仰なく、觀念なきところから、是等の大なる缺點を補償するに足らぬ、その玆に立ち到つたのは、從來の社會組織も、過分の關係を持つたに相違ない、是を以て男子處世の方針を示し國家の元氣を煥發せしむる如き、偉なる勢力は斷じてない。斯くも勢力なき生ける幽靈に等しき婦人が、社會の輕蔑を受けるは、誠に無理ならぬ次第で、只管に警戒すべき重要の問題である。

と謂つて決してションダークたれと强ゆるのでない、要は唯信仰に篤き高尙の婦女子たれと云ふのだ、信仰に篤き、高尙たかき婦女子が、國家の運命を維持し、男子處世の方針を鼓舞したる適例は、算に昇らぬほと澤山ある、英國の婦人社會は貴族と平民の別なく、一般に海軍士官を鍾愛するので、靑年學生の海軍士官を希望するもの最も多く、英國は爲めに世界無雙の海軍力を以て居る、佛國の婦人社會は陸軍將校を理想とし、陸軍士官を欽慕するの念が篤いので、佛蘭西の靑年子弟は、毅然として志を玆に樹てゝ居る、從て佛蘭西の陸軍力は世界に於て拔群のものである、獨逸の婦人社會は老幼に論なく、總て醫學生を稱賛し、醫術硏究者を歡迎するので、獨國は醫學の發達を以て稱せられて居る、是等は直接ならざるも間接に、婦女子の勢力が、國家社會に及ぼしたる影響である、婦女子の勢力も又驚嘆すべきてなきか、てあるに我邦の婦女子は、野卑なる俳優の粉裝にのみ心魂を碎して、日夕ぞが品隲に忙殺さるゝは、返すぐも淺間しき次第なので、外國婦女子に對し、恥辱を晒すばかりでなく、國家の體面にも關係する由々しき大事である、諸嬢の聰明なる、是れしきの氣合を知らぬ道理がない、唯餘りに樂天に過ぎるのだ、故に浮かるゝ、亂する、婬する、深淵に陷り癈疾となるのだ、若し留意を玆に得たならば、今少しく品位を高め、信仰と觀念とを煥起し理想ある婦女子の團結を形造りて、品性の陶冶に純粹して欲い、圓滿なる婦女子は近き將來に於て發生し、社會の不健康は、婬蕩より純潔に、婦人の潜勢力は千歲に傳へて奕奕すべく、國家の名譽はいよく異彩を放つであらう、自覺せよ婦女子諸君!。

評 こは悲觀的に日本婦人を論んじたるもの、亦た一種の觀察法也、所論少しく過激にわたるの嫌ひもあれど、他のありふれたる套論燒直したるものに優る事萬々也(日東)

(第三賞)

志摩　西川富士子

「我ものと思へば輕し傘の雪」とは實に人情の微を穿ちたる句。自己の想像を以て自己を評する時は誰しもひいき目のあるぞうたてき妾は日本婦

人として我婦人の長短をあげつらはんは亦此範圍を脱すること能ふまじけれど思ふ節々書い付けて大方の批正を請ひまつらむ

一、節操の正しき愛情の濃かなる温良恭謙の徳に富める手藝に巧みなる美術的趣味を有せるなど大によし

一、獨立心の乏しき、交際の拙きひがみ心多きなどわろし

一、家政の處理にたくみなる、清潔を愛することの深きなど特に他國の婦人に優りてうれし

一、自活の難きため百年の苦樂他人に委し一向善き良人を得て一生を安樂に終へんとは我婦人の理想なるべし

一、信仰によりて安心立命するはよけれどあるは不動にあるは稲荷に迷ひ入るもの多きぞかなし

一、家のことども取り賄ひては倦まず撓まず義のためには情を矯めて意思に從はしむ仙臺萩の政岡の如きはよくも我婦人の忍耐の強きを現はし出せるものにぞある

一、育兒の重任より飯饌の衆食物の調理を始め舅姑の奉事、來客の接待家内の掃拭其間には亦各自の職業によりて一家の經濟を補はさるべからず我婦人ほど家にありて繁忙なるはあらざるべし

一、現在の我婦人の位置ほどはかなきはあらじ廣帶紋付となりては因循と譏られ筒袖茶袴となりては生意氣と笑はる婦人の世に處する亦難いかな

一、過去に於る我婦人の位置は決して卑からざりき豪傑の子は必しも豪傑にあらざるも英雄の母は必ず要なりきとの諺は婦人の位置の高きを言ひ現はしたる語なり

一、我婦人の將來の望多し幸多し世人漸く婦人の眞價を認め之が教育の必要を知り且つは婦人の執るべき社會上の職業も多樣となりたれば

評 論理明斷に精透(日東)

（秀逸） 伯耆 船越しげ

終日一室にのみ蟄居して、兎角戸外に出づるを厭ふの風は、現今日本婦人一般の習慣なれども、あまり褒むべきことにはあらず。家事の餘暇を見計ひて外遊を企て、親戚知己を訪問して親交を厚くし、兒女を伴ひて公園に出て、動植物園を尋ね、野に遊び、山に登り、花を眺め、鳥を聽きなどせば、子供に山川の實景を示し、禽獸草木の名稱をも辨へしむる、のみならず又た平日の勞苦を慰藉し、心身の鬱悶を散ずべきよすがともなるべし。折々は知人朋友を招きて質素なる茶會を開き主客共に打ち解けて優美なる談話を交へ、或は歌を詠じ花を挿み、或は歌舞音曲を催すなど亦不可ならず。此等は一見贅澤なるが如き感あれども、是れ全く平常の儉約勤勉の報酬にして、夫の深窓に浮世の取越苦勞をなして、徒らに貴重なる時間を過す者に比して、その有益なること果して幾倍ぞや。我等は一日も早くこれ等の善風の、我が婦人社會に行はれんことを切望するものなり。

評 平凡なるが如くして、却て見るべき所もあり(日東)

（秀逸） 靜岡市 井上よし子

その長所。 夫を夫らしくたてる事、若し夫妻の間女權の方勝る時は其家庭は和合せざるべし、妻の夫に對して一歩を讓れる習慣は誠に眞家庭

なすの基にして波瀾多き一家族を治め得る所以なり。

その短所。　常に柔順なる代りに夫に些の欠點あれば必ず是れを追窮して止まず、邪推深く悋氣し易し。

その特色。　技藝に巧妙なる事、殊に裁縫、編物等手仕事に巧なり、是れは決して他國婦人の企及せんとして及ばざる所なり。

その理想。　健全なる子女を養成して良家庭の模範を作る事。

その信仰。　墓參といふ事頗る重きにおかれ、其宗旨々々の寺を信ずる事、且つ祈願等の事に於て神社を欣慕する事。

その忍耐。　一度思ひ込むや譬へ其身を殺すとも一念凝ては所謂岩をも通す桑の弓にて、是れを仕遂ろといふ氣性あり。

その家居。　蟄居にのみ日を送り家外に浩然の氣を養ふの風なし、是れは是れ日本婦人自からの罪にあらずして社會がいまだ是れを誘導する底の方法を與えざるがためなり。

その現在。　今や女子教育は日を追ふて盛んならとする時、各自活の道を立て、夫の生産力にのみ依頼せざる傾向を呈し來れる樣なり。

その過去。　にあつては夫に事へる道にのみ專一にして起居動作何れもしとやかなり。

その將來。　に至ては頗る疑問なり、欧米に感化され了りて全く西洋臭味になるか或は日本古來の優雅の美風を長へに維持しゆくか、將た和洋折衷の間に於て双方の美風を選ぶ樣になるか、其現象の豫想には頗困難なれども、其服裝に至ては日本固有の小袖羽織といふ事、近き將來に於ては決して變らぬ事と信ず。

評　いま少し智識ありたらばと思へども、是にもあれ、非にもあれ、その言ふ所は明瞭なり(日東)

（秀逸）

廣島市　新　小枝

熟ら吾邦方今の社會狀態を見ては、心あるもの誰かは其道德倫理の頽廢に思ひ到りて、誠に一掬の涙なかるべき。顧みれば擧世兵馬の巷に日も是れ足らざるの頃、流石は巨人なり鬼從容として慈母の功を積ませ玉ひ、其晩年には更らに「百話」をものし玉ひたる福澤翁や。されど其巨人の手になりし「百話」すらも、爾跟未だ乾かざるにあはれ塵埃百尺の下に葬られたるもの丶如く、吾邦文弱淫蕩の風は日に益々荒まむとす。此時に方りて吾ら日本婦人たるものいかんの覺悟を要すべき乎。然り少くとも吾らが家庭の一隅に、おのが理想の片影だにも宿さんとして、あはれ學窓時代の氣性をば呼び覺まし、更らに或は學ぶ所あらむとするの要處はいづこにかあらむ。史家の曰く吾奈良平安朝の文學は直ちに世界文壇に列せしめて遜色なからむと。それこれあるが爲めに、いづれ吾らが愛誦措かざるものは、恐らく此右にいづるものなかるべし。あゝそれ然り吾詩文學や誠に貴むべきも、奈何せむ人皆な眞の鑑賞識あるなく、いつしか讀者自身も亦詩歌管絃の歡樂にふけり、遂には花鳥を難せて當時の名媛たらざるもの稀れならずや。かの明治の才媛として殆んど紅露の二大家にも追接し玉ふもの丶如く賞讚嘖々たる故一葉女史の遺著の如きも亦社會の明鏡として之れを讀むべく、上流男兒の操行を審ては時に有夫姦をも慫慂せるにはあらぬかと疑はしむるのふしもなからずやは、あゝ世の人智と空論と由來人生に寄與するところ幾干ぞ。吾ら只此時に方りて誠心誠意太とも直截明白に勤めざるべからざる處は、斷じて兩朝文學の夢想にあらずして、直ちに一大宗教を信仰し内は家庭の調和を謀り、延ては社會の改善にあらゆる赤誠を獻ぐるにあらむかな。語に所謂己れを愛するものを愛するは何の實賜あらむや、惡人亦然り底の意氣あらんには、

吾此荒穢なる社會も、いつかは春風永遠に馥郁たらむ。

評　才藻婉麗、誦すべし(日東)

抒情文

所感數則

（第一賞）　米澤　山家ゆき子

◎故鄕　錦を著て鄕に歸れと云へ、或は豫言者は故里にて貴ばるゝものにあらずといつれにしても故鄕と云ふは離いものゝ樣に思はれまする、いや決して離いものでない皆我れ等を勵すの言てあつて我等が出世を待つ爲めて、どうかしてヱライ者になる樣に手を開いて歡迎して居るたらう、此親しき故鄕、情睦き故鄕、父母の墳墓ある故鄕、懷しい哉、戀はしい哉、舊友中中は諸所に散して遠くおもかけを止めて居る、雪と漸く消へ失せて春の日のうらゝかなるに威島山の彼方を見れば氣も消々とする樣て、我子等を誘ひば子等は雀躍して喜んて居る、イザ行くべしと草鞋をはきかけてつく〲と考へた、我れも幼き頃、斯くありしかと自分で自分を解する事が出來なくなつた、握飯を携へて我れふりわけ髮の頃遊山した處の松の木を訪ふて見た、今以て彩を變へず綠々し居るを見て、アヽ此輕薄なる世に汝獨り貞操なる哉、變るなよ、變るなよ、此子が後々來る迄も、よしや千年萬年經るとても變るなよ、變るなよ、變へず古木を盛してあつた、山の下には小川あり愛の泉は盡きずして鏡の如き淸きのに寫せば寫る顏と顏、蝦夷長崎や國々に行かしやんした友達は今ま尙ほ丈夫てあらうか、どうだらう、

◎千山萬水　我れ今千山萬水を讀んて故大橋乙羽君を思ふ、君は去年の夏、梅雨の節、谷中の墓地に眠られた、君は此世の千山萬水を探り盡くして、今は彼の世の千山萬水を探りつゝあるか、英魂二び歸らぬてあらう、華藏院乙羽魁文居士今や何處にさまよふ乎、我れ君と鄕里は同じてある一日君が竹馬の友に會ふて其人と成りを聞いて益々君を敬服するのである、其學校生涯の短かつた事、十六七て山形の或る商家へ小僧に行かれた事、寸暇を覗つて書を讀まれた事、丁年の頃商家を退き實家へ歸られたが天才君と樂しませず、青雲の志空く消へんとするを歎き彼の竹馬の友に計られたか友幸に諾し金子若干、衣類幾何を貰ふて夜中脫走せられたと云ふ事だ、上京の上は奇遇なかつたが、後に吾妻東洋堂に矢張小僧となられて、そして店の諸用の傍ら上杉鷹山公の傳を書かれたは初めてでしたらう、君が又小說を好まれて、そして作者てあつた、傳文館に識られて大橋乙羽となられたは二十八年の秋てあつたそうてす、實に君が天才は健筆千言立どころに成つたと云ふ事です、君が我從兄と懇意にして度々書を寄せられた、君又故一葉女史と友誼深かつたそうだ我れは一葉女史を慕ふの餘り君に依て女史が生涯を聞かんものと待ちに待つたる甲斐もなく君も又女史が後を追ふて黃泉に旅立たれた、女史を吊ふたる人、又吊はるゝの人となられた乎、惜しみても尙餘りある、一葉女史、乙羽君、皆憂苦を凌きし人てある、身究して詩成るの言、玆に至つて思ひやらる、兩君假令十萬億度に逝かれたとて其名文は萬古に傳へられて世人は皆同情の淚をこぼして居りまする。

◎花々しからぬ學校　四月發兌の女學世界に學びの窓と云ふ題に宮澤すみれ君の文あり「我れは花々敷學校に學びし者にあらず」と我、又深く同情を寄せまする、彼の花々敷學校に育ち給へし姬達果して花々敷働きを爲し給ふかと云はゝ決してそうも限られません、花々數からぬ學校に在りし人却て花々敷働きをする樣に思はれます、今一ツの例を擧げますれ

ば、金満家に放蕩息子あり貧家に孝子あり又今日の社會を見ますれば上流の奥様よりも比較的寡婦の人や貧家の妻に働きある様です何故天は無情なものでしよう、飽食暖衣は人を惰弱にするの譯でもありますまいが、失敬、

◎中島湘烟女史の生涯を記せられた羽仁もと子君姓名は變はられたか君が故郷は陸奥の國なる乎果してそうであれば我舊友である、君と別れたは十年の昔、夏季休暇の際君も故郷へ我しも故郷へと東台の汽車に乗り出してから刀根の小畑を横に見て那須の荒原に在りし時數多の孤兒等に會ふて憐れを催したるもあつた、當時我れは別れを信夫路に告げた切り二び君と會ふ事は出來なくなつた、君が郷友高橋傳五郎君千島の藻屑となられて始末た、彼の至誠を想ふと同時に君を思ひ出しまする。風の便りに聞きまするに君は報知新聞に得意の筆を揮はれ居ると、我れは嬉しき限りありません、同氣相求むと言ふ如く君は湘烟女史を慕はるゝでしよう、君が氣性は湘烟女史の如し君嘗て政治を憂ひ初めて議會の開けた頃田舎議員の曖昧不活潑を見て憤慨されたを覺へて居る、今や君が健筆を報知新聞に揮はれて社會の目を覺して下されそして願くは第二の湘烟女史となつて下され、

◎宮澤すみれ君、君に一面識なし先頃の春のゆめには感服致しました、君が一葉女史を慕はるゝ如く我れも又故人の作を讀む毎に泣いて居ります、傑作の「にごり江」、「たけくらべ」、「われから」、「十三夜の」如きは既に世人の評あれば申に及びません、成る程「大つごもり」も、「やみ夜」も涙がこぼれまする、又經づくゑの閑様、ゆく雲のお縫、いづれも憐れでありまする、又極短篇でありまするが、「軒もる月」、「うらむらさき」を御覽ぜよ殊にうらむらさきの戀女房のお律が不遇の縁に泣くのを見れば實に女史は同情に厚き人で、そして人情の哲理に通じた人であつた、アゝ女史を想ふの念禁じ難く〱何時も飢へ渇く如く女史を慕ふて居りまする。

評　作者は頗る言文一致に達者である、勉めて止まずんば成功するであらう、筆に巧みなるばかりではなく、言ふ所もあまり幼稚でない、しかし、此の文は、未だ全く冗長と蕪雑の弊を免かれない、作者よろしく其邊に注意せられたい(日東)

落花

(第二賞)　波間花子

徳島市大道一丁目
井關定吉方

きのふまでは、春雨來よりも細ふふりつゞきて、華やかなりし櫻ばな、今は見る影もなく、凋れ散り恨みは地上に印する束の間の、花の命にいとゞ哀れを催して、うつゝに歩むともなく、一すじ逕を辿り、やゝ小高き桃ヶ谷と云へる、奥都城深きうちに分け入りぬ。

踏みしむる若草長のびて、露を含み、裳にひやりと觸るゝも心地惡しういゝ知らぬ草花の香さへ、あやなくてゆく程に小暗く、そゞろ懐寥のきみひし〱と身に迫りぬ。見渡すところ累々たる墳墓つらなりて、幾よ、人の亡魂こゝに眠るにやあらむ。中には紅き花さへ、さま〲にはひ纏りて、たれ吊らふべき人もなしと思はるゝを、見るも今更に心にぶり、暫し憮然として足をとゞめき。

何處よりかいと幽かに、讀經の聲絶え〲なるに、ふと頭を擡げてあたりをうち見やれば、彼方なるひと本山櫻のほとり、まだ新らしき墓前に、うら若き人の姿。知らず〱歩はその方に運ばれて近き灌木の茂みに身を隠しぬ。

丸髷はやゝこわれて、青白き頬に髮のほつれ、みだれかゝり領脚の細き、

さながらに堪えぬたゝづまひの、如何なる痛をもちて、誰をとぶらふらむ。樒、木水仙などを供へ、ほの〴〵と燒香の立ちのぼる煙りをつたひて、をくり名を見れ淨明院居士と明らかに、そのかたへは廿五歳としるせるは此人の夫か。折々小さく顫はるゝ聲音に貴郎と、繰り返さるゝはまさしくその夫なるべし。

あわれ樂しきつきせぬ契りは、昨日の昔となりて、今は遠く泉下を距てゝ、情ひを語らんに由もなく、ありし生前を偲び、今を傷なみ、千々に思ひの亂るゝ風情、またなくいとおしく、己が身にもやがては人の要となりてかゝる憂目やあらむ。噫如何につらく戀しからめやと、悲慨胸に迫りて、あつき涙の頬につたふるを覺えき。

彼方は早や讀經にも え耐てか、袖を蔽ひて潸め〴〵と泣ける悁ましきさま、そが咽ぶ音を聞くさへも腸をちぎらるゝおもい。今將た、こゝろ九泉のあとを追ひ、その夫に逢ひて、怨みを愬ふるか、いよゝ聲はふるひ高ふなりぬ。

已れを習し憎める淋しげな、姿を見てありしが、胸苦しさ限りなく悵然として空を仰げば、ちぎれ〳〵の黝き雲北の方に飛ぶ事しきりに、四邊陰にうす昏らく颶颯と起りて、雨を訪ひ、斜めにしぶきして降り來りぬ。されど墓前の人はくづ折れしまゝ、佚然として身動きもせで、一群の烏空を掠めて鳴きわたり、また一しきりの風と共に、落花霏々として亂れ散りぬ。

評　夫をうしなひ、あとに殘りし一人の佳人、せめてもの慰めに、亡き人の墓を弔ふさまを描き、また文に詩味を帶ぶるはよけれど、作者の文は、いつもあまりに詞ちぎれ〳〵となりて、文だか、新躰詩だかわからぬが如きものあり（日東）

下女の務

埼玉縣秩父郡國神村　倉林孝

ひろき此の世の中のさま〴〵なる生業、悲しく哀れなるも多かめれど妾の生業下女の務こそげに悲しくはかなけれ、諸人の樂しく結ぶ夢の頃、寒風いみしき朝まだき、燈火影に水打碎き汲みたての井水の溫みたよりにて、荒れし手創の痛こらえつゝ朝飯の仕度とゝのふるほどに、古き下女共漸々に起き出てつ火鉢の傍に煙草くゆらしつゝの叱言、口惜しうもすべぞなき、

やがて二階、奥の客起き出づる程に、手鉢の水、床拂、朝飯の膳立などつぎ〳〵忙はしう、目もまはる許りになん、かくて發ち行く客に一息つきつ朝飯すます程もなく、座敷小庭の清め、一一念に念を込むるもそこの隅かしこの庭の汚なしとのゝしり受けしも態度ならむ、昨夜の醉客が破ぶりてし小皿屏風も午前の接伴惡しきが故と叱せらるゝも、かへす言葉もゆるされずたゞ涙をのみぞしぼるなる、

追々と暗れ行く程に客の足しげく、その忙さは朝におさ〳〵變りなし、かくて大概の客眠につきし頃なるも酒好の客の後引き、昨夜の事よ、近邊の郡吏とか三人の客、十二時頃なるも醉しれて猶も酒よ肴と呼びわめく、他の下女共之れに打ち交り賓々と雜曲歌ひ踊るさま見るにえたへず、にげ隱るゝ妾を下女共無理引き立て其座に就かす、見るさへ胸わろき醉とれ腐柿の如き嘔吐き出しつ、聞くもえまわしき言まわらぬ舌にとやかくとたはぶるに、いまはくやしき胸に溢れ强き言葉打ち言ひつけに下れば、後に女中も共のあざけり笑ひ、身も消えんばかりの口惜しさに廊下の上に泣き伏しぬ、折りしも通へる主婦の叱言、あゝかくまでつらきをしのぶが下女の務か、

何處の櫻、あるは月、又は紅葉と人々浮るゝ頃も、その名は人の噂に聞くのみ、つらき務めにかはりなくそれよこれよと忙がしく、靜に今昔懷ふひまさえあらぬなり、あはれ我身の心まで思ひのまゝにはならぬなりこの哀れの身の上をそのまゝに故郷に知らせんには老ひませし父母の如何にかなげき給はん、さらめも心痛ませ給ふ御心にいかでかゝる事知せ奉るにしのびんや、悲しき胸をおししづめ滴る涙に墨すりて、思ひの外に安らけき身は下女の業と、暗き燈火かげに認むる身ぞあはれはかなき、

叙事文

御崎の濱

（第二賞）　姫路　高井歌津子

磯の松吹く明け方の風に、短夜のむすびあへぬ夢破れて、ふしどを出てぬ。いぶせき草の屋に幾多れざめの旅ごゝろ、いとゞ佗しくて、そゞろに濱邊の方へと志しぬ。

山のみどりを吹きおろす朝風、鬢のほつれ毛をあほりて、靜けき濱道をたどる身の心ゆくことゝきはみなし。濱につなげる苫船には、今し船人の夢とおぼしきが、水汲み入れつゝ唄ふ一ふし、靜けき空にひゞきて實に神々しくぞおぼえし。やがて若葉もておほはれし山一つめぐりて、坂をのぼればそは早やも御崎なり。たゞ一人朝早き松並木をさすらひつ、ほろりと落ちし一滴に、急にうなじの冷けきをおぼえければ、ふと見上げたるに、松の葉末につらなける露の珠玉白玉美しく、有明月の影いと淡し。伊和都比賣神社の神前に額づきて旅路の幸ないのりぬれば、神の御鈴の響き濱松風の音に和していともかしこし。

來だまたく明けやらぬ空には、殘んの月をかすめつゝ薄墨色の薄き雲さへ漂へり。眺めやるみんなみの方には小豆島淡く夢のごと横れり。三つ四つ二つほのかに灯のゆらめくは、安らけき夢路よりめやらぬ蜑の苫家にや、島が根ありたり朝霞うすく罩めて、往き來う白帆の影二つ三つ見ゆ、沖なる礙護石あたりには水面低くかすめて、飛びかう鷗どり白く、ひたくと寄せて來る男波女波、白き藻草を汀に殘して又遠きかなたへかへし行くもおもしろや。足もとより遁び出てし小蟹赤蟹追ひゆけば、小さき鋏ふり立てゝやがて松の根に隱れたるいと愛らし。

有明月はやゝに光を失ひて、世はほのくと白み來ぬ。西の方には一すじ二すじ藻鹽たく烟たちのぼり、いづこよりか米とぐ音につれて、賤の女の話聲洩れ來ぬ。立木の一葉一葉は明かになりて、明石海峽のほとり一すじの雲紅をおびぬ。

評　筆致淡々として畫の如し（日東）

首夏の郷

（第三賞）　本所區仲之郷竹町十一番地　宮内千代子

花は根に鳥は古巣に立ちかへりて、青葉の梢日に繁りそひ、葉末にむすぶ露の白玉いとすゞしき世となりぬ、垣の卯花闇にも來む人の、栞となるべく、杜鵑まつたよりともなりぬべし、變りゆく自然の風物に、暦なくしておのづから季節しらるゝ郷こそ、げにすみよかりけれ、

雨少しむちそゝぎ風吹きわたる朝など、ものより歸るさ、過ぎがてゝしばしみれば、背戸のあたり夕日はなやかにさして夢の塩やりの如くなるに、少女の兵かへしたる三人四人、何か語らひくろみゆ、赤きたすき白

き手拭を被りたる少女の、桑つむさまもゆかしく、稍々みのりたる鈴菜もなかし、白く立ちのぼる靄の烟なるべし、牛曳て歸る童、うたうたひつゝ行く錆、やう〳〵たえて、まだ聲なれぬ蛙のなきそめたるなど、只畫のやうなり

かくて世はやう〳〵熱うなりもてゆけば庭より續く門田に、夜は螢のとぶかげのみえそめてうれし。

雨の春

向島　福井露子

十里の長き墨堤も、花の隧道となりてより、往來の人は宛然織るが如く前を流るゝ墨田川、浮ぶ花見の船多く、浮世さま〴〵の活畫は、妾の目にもいとおもしろく映りぬ。

四月も一日とすぎ、二日と暮し、はや六日の日となりぬ、恰も日曜日のことゝて、官吏や、商人や、書生や、勞働者や、ことに言問のほとりは、人の山を築きて、非常を警むる巡査の忙はしきさま、氣の毒におもわれぬ、この日高等商業學校の端艇競爭ありて、人々の赤よ白よ青よと旗ふり呼ぶ聲の轟きは、波を破り岸に響き、長閑に眠る鷗の夢醒めて、とびたつ景など油繪にて彩とりたらん如く、なか〳〵に興ありき。

明くれば七日、天は無情也、露店は泣けり、篠つく雨は音なけれども、あわれ來て見ん人もなく、秋の夕暮それならで、昨日のにきやいに引かへて、今日の淋しさ言はむ方なし、吹く吹くなる風に櫻の花は散り初めぬ、一輪二輪ハラ〳〵と。

されど雨てふ雨の中にて、春の雨ほど詩趣に富める、興味多きはなきぞかし、妾はこの日つれ〴〵の餘り、妾流の歌なりとも詠まんと、墨すり筆とり、弟と共にあれやこれやと思ひ惱まして、漸く四時頃に一句を作りぬ。

しとやかに烟る春雨音たえて
庭の櫻の散るや三ッ四ッ

弟もよみぬ。

聲なく烟る春雨に、　庭の櫻は散り初ぬ、　あわれ無情の春雨よ、
汝を恨みてわが君は、　昔の根長き春の日を、　泣きて暮しぬ春雨よ、
心のあらばやめよ止、　戀しの君を憐れみて、

共にその拙なきを笑ひぬ。

折しも隣りの池田別邸より使の人の參りしと傳へぬ、簾の外に雨に綻び風に揺られ、明日や散らんと盛りの櫻、八重にあられど一枝を、是非に給はれかしと、ア、妾はこの時、げに限りなき宇宙の平和を心の奥に描きぬ。髮にやかざしたまふ、瓶にや挿し給ふと言問へば、使の人は答へぬ、御姫様の寫生の畫をものせられる用なりとか、あわれ御姫様とやらよ、妾が細き胸に秘める愛もて、あらん限りの力を込めて、手折り送りし櫻の一枝、みんごと畫き給ひなば、賤の妾も好む道にしあれば、一目なりとも示し給はれよ、さればソハ妾の身にとりて、世に二つなき幸榮に侍べれば也、長い〳〵と思へる春の光も、はや暮れ近づきて、鳴るや汽笛の一聲は、花咲く橋を渡りきて六時を告げぬ、事なきまゝこゝをものして、尊き本誌の餘白をかり、池田の御姫様とやら、月を脇ける奥はしき、雅眸にふれなんことをこそ、願はしけれ。

評　稚氣ある筆づかひなれど、平易にその書かんと思ふことを書かれたり(日東)

梅

淺草區松葉區四十一
中村熊太郎方　池田よみ

梅こそいとなつかしきものなれ、春に先だちて南の窓に匂ふよ、何がしの庭の老いかゞまりたるも、今は咲きいてぬときくもなつかしく、おのが園の若木なるも、かつほゝゑむをみるなど、いとうれし、曉をおぼえずしていねたる春のあした、まだかた鳴の聲に、目さまさるゝは、いとくちをしう、此の木ゆゑにとかこたるゝもをかし、小牖のすきまもり來りひとりねの枕にかやふは、その香のめでたきのみか、忍び車のきしりさへおもひやらるべし、あはれこの梅、武士の箙にさゝれしこともあり、みやびをの涙もようさしめて、月やあらぬとうたはしめしこともあり夕風のやをら吹き來て、すだれ動かしながら、鶯の聲とともに、琴などひきたらむあたりにかをりくるは、いかにもをかしからぬかは、また人ざとほき谷かげなどに、一本二本にほひ出でたる、こよなうあはれなるものなり、おもへば花のみならずその實さへ、世の用をなし、霜霜をしのぎてそのみさをさへすぐれたるは、またなきものならずや

消息文

古里より都の母の許に

（甲賞）　山口すみ子

筑波の峯の雲に隱るゝ夕の姿、白帆漂ふ霞浦の湖上の眺めを、汽車の窓より見過して一日の旅路安らけく、水戸停車場より車にて大洗の叔父樣許参せつき候へしに、一家の人々驚きつ、そゞろはしきまで喜びまどふに、此方もなつかしさに胸踊り、夢心地にて迎へられ候、まして祖母樣は寸時も側をはなれ給はず、妾の姿を眺めいりてはほゝゑみ給ひて、何かとやさしういたはりくるゝ有難さ、思はず涙おとし參らせ候。あはれ秋うるをすは悲しき時のみかは、妾は眞に涙の味を覺へ侍りぬ。祖母樣はいつもながらすこやかにて、そのかみの面影にちとの衰へ給へしところもなく、只耳のみ遠くなりしと仰られ候。今年六ツになり侍りし從兄妹の花子樣はいたく背丈のびて、いそ〳〵と入り來られしが、伯母樣のこゝへとさし示し給へばにわかにかなたに走り行き、妾を眺めてひたすらに恥ぢろふ樣の愛らしさ、背に泣きむづかりし昔の事どもそれよりそれと語り出し、伯母樣と共に打笑ひ申候。

午後よりは叔父上にともなはれ近き濱邊をそゞろありき致し候。よせてはかへす荒浪に打上げられし小貝拾ひつゝ辿り行けば、亂れてちる浪のしぶきにもすそはいつか露しげく、吹く汐風は身にしみて浪の音のみ高う響き渡る、裏山のくれり松はとこしへに色青々と、しづ枝ほの枝は丈のびて緑いやまし、都に見られぬ四方の影色に候へき。明る日の夕方は同窓の友の誰彼訪ひ來給へしが、大方は丸髷の爽世なれば、早きは可愛き者のおはしますとか、亦くれば應だに故郷を忘れ候はぬに、などかく久しく打絶へ居給へしなど、人々に恨み言いはるゝ隔となさ、昔ながらの心うれしく、一夜は共に語り明し申候。あまり長逗留は心なきに似たれど、伯母の節角と引止め給ふを、無理にも立去り兼候まゝ、猶二三日は逗留いたすべく、よろずは歸宅の折にこそとてまずはかくのみ　かしく

菖蒲にそへて

（乙賞）　埼玉　恩田花枝

梅雨の習ひ軒の玉水のほか音するものなき今日この頃いかにすごさせ給

ふらん承らまほしう候、扨二三年このかた祖父が手すさびにとて、その庭に培養いたせし花あやめ今年もやう〳〵笑み初め候に、祖父はいとよろこびて、君には活花の技に巧みのよし、二三莖まゐらさばや且この頃は御令息の御誕生もありたれば菖蒲の雛千代かけて、いく久しう御祝申したらんにはなど申され候まゝ明日は丁度端午のお節句にも相當り候へば、御令息と二三莖お目にかけまゐらせ候、七十餘齡の老人が手入せし菖蒲に候へば、御愛兒の御ことほきとのみあけくれ眺め給はゞいかにうれしかるべき、就ては御嘯の君が御歌もて御酬ひ給はゞさこそとぞんじまゐらせ候　あなかしこ

遊學せる妹の許に遣はす文

愛媛縣宇摩郡松柏村　石川君子

（丙寅）

花鳥の聲うら〳〵と足引の山邊の里も春めき申候昨日今日異境の空に只一人物學びしたまふ御身はいかに明し暮し給ふらん此方皆々變りなく父上は例の盆栽いぢりに餘念もおはさず母上と妾は御身にとて昨日一と日は綾織のせんさく漸う今日機に上げ候處いと美しきが出來申候やがて來ん試驗の事なう終へたまひなば御ほうびとして送り參らすべく候されど常々も申上候通り試驗の爲めの物學びにおはされば試驗前なりとて俄かに無理なる御勉強などゆめ〳〵なさるまじく候御身の知らせ給へる如く妾の學びやにありける時かりそめながらつゝお有る身なも顧みずひたすら人に後れん事の口惜しくつとめし事の仇となりてみ情け深き父母君を始め御身に泣一方ならぬ心づかひさせ參らせ數々の數へ草は龍の牛なただにつみあへず學びの窓とぢて故郷に歸りし殘り惜しさ扨ては不孝の罪の去り處なさ今思ふも心なかりしふるまひの耻しう候ぞかし、何よりく〳〵御自愛な先きに時々は心合ひし御友どちなどゝ御運動なさるべく〳〵も申進し參らせ候

庭の白梅の香りゆかしく笑みこぼれ申候に殊にめて給ひし御身の去年も今年もいまされば花の心もあはれにおはし候まゝ一ひら文に添へて送り參らせ候　かしこ

色も香も知にし人に送るなり
花の心や嬉しかるらむ

修學中の弟に送りし文

武州小川　中山武子

四方の景色春めきわたり既の夜草の綠なつゝみて一しほのどかに見うけ申候扨も過る日の玉章によれば來る十五日頃より大試驗始まる由試驗前になりしとて急に運動を怠り勉强のみなし給はゞ爲に心力を勞しかへつて、不結果の悲境に落入るやも斗り難く候殊に試驗中は過度に腦力を使へ侍れば隨て消化力弱まるべく候されば滋養ある食物を、ゑらみて召し上り能く睡眠して精神を休め給はゞ何よりの試驗準備と思へ侍り候爲にさとき御身には御承知とは存じ候へ共只そなたを思ふ姉の老婆心より御注意申になむ何卒來に優れて美くしき花手折り給へ錦かざりて歸り給へてよ其折父上妾の喜び何にかたとゑんあゝ妾等、ばらから、は幼くして母上を失なへたるなればよく〳〵注意して身をつゝしみ、かりにも世人に母なく家庭の教育なき者よと後指さゝれぬやう御心がけなさるべく候日々新聞紙上にて見るに學生のさがなき友に交り遂にあらぬ力へ踏へ入る者數ある由山川千里はなるゝ姉の身にとりてはなか〳〵心配に堪へず候其許に限りさる事はあるまじけれど心して惡しき友にな交り給へそ、

父上事常々たけくは、おわすれどはやよろ御人なみに御身の事何くれとなう御安じ遊ばされ候へばなり／＼は安否の御便りあらまほし尙修業に就て御不自由の事など候はゞ事柄に依りてはなるべく父上に聞え上ず兄上と妾にて取り斗らへ申べく候同今後は妾迄申おこさるべく候　大御代の惠の風は都と、ひなもへだてなく、かゝる山深き里も其許のおわせし頃よりはるかに學の道開け申候過ぎし日に生徒製作品展覽會之あり妾友人と參會致し候處何れに上出來にて妾等の耻入り申候午後よりは某先生家庭教育の話其外化學の試驗等之あり盛會にて夕ぐれ頃散會致し候又同窓會にては會員一同にて圖書館を設けあまれく學生の閲覽をゆるし候尙々申上たき事は海山候へ共試驗後御歸りの節と書き殘し候　かしこ

友のもとに

埼玉縣比企郡
大河村　恩田春江

兼て御話申せし出立は明日の朝まだきに相成申候あはれ日頃ははらからも及ばぬめぐみを垂れ給ひ誠の姉もかくやとばかり妾が慕はしの情は日々にいや增さり候ものを會者定離の理に洩れて惜しき袂を別たむといと／＼心細さの限りにこそ明日よりはわが懐かしの寄宿も唯結ぶ夢に見るのみなりと思へば滾々として流るゝ水もあはれを訴ふるが如く蒼々として燃ゆる山も悲の色に包まれたるが如く見るもの聞くもの一として涙の種ならざるはなく異域の空にさすらふ身には只文のみたよりなるを願はくは君よ八重の雲路はいかに隔て候はんもゆめ／＼心をな隔て給ひそ花紅葉の折り／＼には靜けき御地の樣などもらし給ひてよ尙申上げ度とは濱の眞砂の數つきず候へ共拙なき筆の思ふまゝならず明日の調度何くれとなくいそがはしく手わなゝきて心のみあせるもおかしうなむ何れくわしきとどもは彼の東の都につきて後聞え上げんにあしうな思召し給ひそ
先は右御知らせのみ　あなかしこ

田舎の友へ

伊豫國八幡濱町　河崎菊子

一筆御禮申上候先々御館のうち皆々樣御揃ひ遊ばされいよゝ御氣しきうるはしう渡らせられ候御事何よりと御悅び申上參らせ候左樣御座候へば先の日は參上いたし候處久々にて御なつかしき御目もじの嬉しさに青柳の糸ながき春の日もなほ暮れやすきをかこち候ばかり御多忙に入らせられ候をもかへり見ず長々御邪氣いたし候に昔にかはらせ給はぬ御やさしき御言の葉厚き御もてなしに預り如何ばかり／＼難有絶えて久しき姉上に逢ひまゐらせじ悅びもかくやと身に染み御嬉しく候ななほ歸さには存じがけなく結構なる御品いろ／＼頂戴いたし御禮の申上やうもこれなく痛み入申候右御禮にも御厚禮申上候、閑靜なる御館のさま殊に御裏山の松に交れる山櫻の折々風に誘はれて吹雪のやうに散り行き候など西の京なる嵯峨のあたりを思はれ候て一入に忘れかれ候なほまして御嬉しかりしは御人多に入らせられ候にもかゝはらず御親子御夫婦の御中の御むつまじきに御座候げに家庭の和樂ばかり側目にも御嬉しく快きものはこれなくかゝる御樣も偏にどなた樣にも御心がけの御美しき故とひたすら感じ感申候、なほ欲深き御願ひながら先日此地にて御うつし遊ばされしは御子樣方のみにてはなかりし由風のたよりに承り候まゝもし先の日の御やさしきみことば御いつはりに候はずば一葉御惠み賜はり度右御許し給ぎ候はゞ御なつかしき御おもかげ朝な夕なに拜し候歡びいかばかりに候平安々御願ひ申上候いろ／＼申上度候へども又々御伺ひ申上べく先は右

御禮までに　かしこ

書物の借用を乞ふ

和泉國泉南郡
三ヶ山小學校　蓮池かつ

音もしづかにふりくらし候て誠にさびしう困り入り候、御母君さま御血の道など起らせたまはずや、常に此のやうの空をなやましう思し召すよしなれば如何やと御案じ申しあげ參らせ候、私方父こと兎角眼の惱み宜ろしからず、左りとて別段痛みもし候はねど、只何となう物を見るに薄雲のかゝれる樣にて分明とし候はぬ由、外出のかなはぬ上に眼をつかふ事のならぬなれば、一日の長きこと千日のやうにて暮らし詫び候樣子人さまにても御入り下され候はゞ、夫れに紛れて幾分かおもしろげなる素振御座候へど、然らでは一人居間にこもり候て、柱に寄りかゝれるまゝ物だに言はでたゞ欝ぎにふさぎゐ候を、傍より見る身も瘦せるやうに思はれ候、此のほどより少しは慰みにもと存じ、平常は餘り好みもし候はねど、有合の小説など讀み聞かせ候ところ、殊の外氣に入りしと見え氣まゝ評など致しながら、猶々めづらしきを讀み聞かせよとの注文のいで申候、さりながら妾は御存じのとほり、彼のやうのもの頓と不馴れにて、此の頃如何なる面白きもの出でたりとも、又は古きものにて如何なるは名高きにか更に〳〵知り申さず、同じうは父の氣にかなふやうなるを讀み聞かせ申したく、御許さまはもとよりのお好きの上御兄君さま御集めの數もいと多くおはすとうけたまはり、餘りに勝手がましう候へど、務めて叮嚀に拜見致すべく候間、思召にてこれと思ふのを御撰み拜借れがはれ候はゞ、呼く例の昔氣質の父に候へば、成るべく艶ならぬものが願はしく候、御心安だての申條御見ゆるし下されたく。　かしこ。

韻文

虹匂ふ

（天賞）

伯耆　玉緒女史

牧場をこえて虹匂ふ、
榮よ、またゝくゆめのごと、
さあれ笑まひの陰にして、
深きは、默示ほのめけり。

小羊ゆかず首あげて、
さしもに聖きまなざしに、
仰ぐよ韻ひさてはかの、
太虚のはてをや慕ふらむ。
羊よとはにあたゝかき、
胸の柔毛の幸を守れ、
かひなき花は欄こえて
己が馨にし聞えたり。

あゝ恥おほし歐ひくし、
感謝は虹にふさはむや、
たゞ下かげの草がくれ、
寂しきそれよねがひなり。

幽韻

（地賞）

伊勢国宇治中之切町　河原芳子

あゝ人の子のかよわくて憂世の風にふたえれば、
清き想ひの歌聲も鄙のひびきをふくみたり。

花に暗く鳥花を戀ひ水に棲む魚水を戀ふ、
人は自然に生れきて汚れしむ戀ふらんか。

見よや空行く月影の水に映ろを掬ぶこと、
深き神秘をさとりゑぬ爺あはれのおそましや。

あゝ曉の星追ひて露をふむ子の弱足よ、
高き希望の彩雲は遂に汝が手に落ちざらん。』

夕づゝ

（人賞）

埼玉縣比企郡大河村上青山　恩田花枝女史

兄

しごとかへりの黄昏や、山はおほろに包まれて、
ゆめより淡きおに空に、夕べの星は見へそめぬ。

妹

小田の蛙の音をたてゝ、二人を家路に送るなり、
光しづけきともしびの、笑みて吾等を迎なり。

兄

さはさりながら若身(わかみ)の、ゆくて遥にながむれば、
こひのまぼろし空遠く、あやどる光かすかにて。

妹

悲しき事をいふなかれ、世は長へに笑ますとも、
あふげみ空の星のはな、こひの夢路に世を誘ふ。

ばらの花

野州なまゐの里　花子女史

咲くま遅しとまち侘びし、我庭もせのばらの花、
一輪二輪さきぬれど、共に植ゑにし君はなく、
眺むるものはわれ一人、汝れも淋しく思ふらん、
われも淋しく思ふなり、いでや手折りて彼君が、
長へに眠る墓の上に、心ばかりを手向けばや。

一葉集

紫女

浮世の際にたへかれて、しばし愁を忘れんと、
夕風清き水海の、一葉の舟に掉せば。
み空に低く夕雲の、五彩ほのかに匂ひつゝ、
水に光を沈めては、黄金玉よろ波の面。

夕入相の鐘の音の、　餘韻かすかにひびくとき、
涙にたゞよふ百舟は、　夜のとばりにつゝまれぬ。

浮雲遠く消えゆきて、　ゆかりの色の新星の、
すずしきまみをひらくとき、　仰げば空にさとしあり。

あゝ青春の夢に醉ひ、　理想の戀にあくがれて、
エデンの園を慕ひゆき、　涙に心を洗ふかな。

涙に心を洗ひつゝ、　わがふきすさぶ笛の音の、
龍の都に聞えなば、　女神の夢もさめぬらん。

見渡すかぎり露おきて、　やさしく清き月かげに、
みどりにけぶる夜の光り、　眠るが如く見ゆるかな。

萬籟とはに音やみて、　うれしやわれは只獨り、
自然の母のふところに、　ミユースの郎の詩を聞く。

雑文

田舎の半面

新潟　渡部のぶ子

朝早く床をいで青空をながめ自家の田畑を見舞ふ時の心持……

むし暑き夏の夕折柄怪風一陣黒雲を呼び來たり雷霆惡を逞ふし百鬼夜行も斯くはと思はれたるがやがて隈なく晴れ亘たり東の山の端には新月さい出てたる庭の池の邊に湯衣一枚團扇一本垣根にすだく、虫の音きいて萬思を發したる時のこゝち……

夕食をわりて後涼しき椽の邊にねころび其日來りし都の新聞雜誌さては土地のものなど打ひろげ讀み去り讀み來りはてはお鍋お三の末まで呼び集ひ茶を入れ煎豆をかみ且つ語り且つ笑ひどよめいて夜の更くるを知らざる時の如き……

手づから作れるをつみ來り茄子燒胡瓜もみなど調りたるが佳肴美味にあきたる都よりのまろうどの口にいたくかないたりし時……

空すみて月晴れ渡りし夜身を山川の上の欄にもたせ岩に激したる水聲に和して尺八みん笛など吹きすさめる時の心ち……如何ばかり……

東京女學館卒業式答辭

園田峰子

雲井にそびゆるふじの根よりも高く底ひも知ぬわたつ海よりも深き御惠をうけて五年の業を卒へ猶又學びの道をおぎなはむとて此の庭におりたちしは昨日今日と思ひしに年波の流れはよどみなくてはや二年の春秋を過し今日しも玆に卒業證書たまはることゝなりぬわれら數ならぬ身もて斯く盛んなる式のむしろに加はることを得しは唯偏に明らけく治れる御代にあひたる幸を師の君たちの厚き情をかうぶれるによりてなり實にかしこくも嬉しき限りになむ扨も教への業に限りありて今日此の庭を出づるとも今まで受けしみめぐみをいつの世にか忘るべき今よりは波風あらき浮世の海に獨船出する身の心細きを思ふにつけても唯一筋に館長の君のかしこき御諭に隨ひ朝な夕な導き給ひし師の君達の御をしへを揖かぢと頼みいよ／＼行を愼み業を勵み女の道をつくしてむと思ふ一ふしなの

べ興者まつるになむ

清少納言の事

國館　早川貞

清少納言は日本紀を撰みし舎人親王の遠つすゑ清原元輔といひし人の女なり、元輔はいともいみしき歌人にして後撰和歌集をものせし梨壺五人の寄人とて、清少いわけなきほとより、さかしくて七歳にして手をようかき十三歳にして今義経を講し二十歳にして歌人とさへたゝへられたりき、其頃一條天皇の宮定子の御局方御學問をこよなうこのませられ宮仕への官女たちもらなか／＼才女を撰えしものいと多けれと、清少納言は二なうもてはやされ、をり／＼男聖のさかしらことに厭ひ里にまかて居りしときさへも御文なと給はり召させ給ひしとぞ、かくて中宮も御父道隆公薨し給ひし後は道長の權いとも盛にして其女彰子の勢にけおされなる／＼宮に參る人とてもなく中宮にはあけくれ歎き過させ給ひしとはいとおしこしや、かゝるときさへも少納言のみはいとまめ／＼しう朝夕に慰め奉りしこそいとめでたけれ、中宮かくれたまひし後は麗景舍の御もとに宮仕へせしよしなどあれどいとさたかならず、その後いかになりたりけむ、晩年の頃に密ありとのことなれは都にもすみわびて諸國をさすらひたりけむ、いとおほつかなし、其文章のこよなく妙なるは其著はされし枕草子讀むほど千歳の後よけすきらひの女性のとめきし面かけさへげに見つらる、まして當時の世へ深かりけむ、枕草子の中に博士のふることをおほくことの自然に取はと思ひあかりし時の博士を驚かしゝこそいと／＼多くて彼の源氏物語とゝもにもてはやさるゝも實にこそと思はるれ然には清少の才のみたらなるに其父と才となうちすつるもあむめれど、此時代の文學者に品行のきすなきなもそめむはいとかたしやこは時代の罪にこそ、

春の樂

信州　高砂喜代子

春とし云へば見る物聞く音いづれ楽しからぬはあらぬが雪間を分けて若菜摘むこそいみじう興あれ梅咲くあしたに鶯の初音を添ふるもいと嬉しう門の青柳打烟りて霞渡れる夕まぐれいと花やかにさし出でたる朧もせず曇りも果ぬ月影はげにしくものぞなきまして花の上照らす光こそ何とか云はましそゞろ歩も折柄をかしく小夜更てより音もせて降り出でし春雨の明け行くまに／＼晴れ渡ればあかれさす朝日の影の宇ら宇らと緑り色そふ春の野の草葉の露に輝くもいと心地よきにやう／＼春も深くなれば知邊の海に汐干狩こそいと／＼楽しき事なれどかゝる山家に住する身の未だ一度の遊びもせれ野邊に山邊に櫻の花の咲き出づれば玉あひの友打群れつゝ今日は飯綱へ明日は御藥師へとおり立つこそ楽しき中にもまた嬉しう心しとつにあこかれつゝ實に興あるは只櫻なりけれ。山吹の散りて流るゝ里川に春を惜みてなく蛙の音もあはれの中ぞ又えんありていとをかしう末かけて咲く藤浪の若葉の若葉春の名殘を止めいるもいとあわれなり。夏の夕凉秋の紅葉もさもこそあれいとも偽に楽しきはげに春にこそ。

女學世界定期增刊（發行六月十五日）

懸賞文募集

ほとゝぎす

投書〆切五月廿日

才媛詞藻 夏の卷

才媛文學の發達を希望する我女學世界の定期增刊は更に六月十五日を以て夏の卷を發行せんとす。「ほとゝぎす」即ち是なり、編輯上の用意は斬新なる意匠を凝らし有益なる資料を蒐めて大に我女學界に貢献する處あらんと期す、時正に初夏の好季節に會し滿望の新綠目に新たなるの時徐に清婉の想を練り艶麗の筆を揮はれん事を

文種

▲**小說**（文體隨意）二十行二十四字詰ニテ紙數十枚マデ

▲**和歌**（題 新樹 ほとゝぎす）端書ニ一題一首ノ事

▲**新體詩**（題隨意）二十句限

▲**抒情文**（題隨意）十行二十四字詰ニテ紙數二枚限リ

▲**敍事文**（題隨意）二十行二十四字詰ニテ紙數二枚限リ

▲**消息文**（候文言文隨意）二十行二十四字詰ニテ紙數一枚限リ

賞品

特賞　金拾圓　壹名
　　　金五圓　壹名
甲賞　金參圓（圖書切符）　五名
乙賞　金貳圓　仝　六名
丙賞　金壹圓　仝　拾名
秀逸　金五十錢　仝　二十名

注意

▲特賞は小說の優等者に限る
▲和歌の高點は乙賞以下にて別に相當の賞品を呈す
▲小說原稿は紙捻にて綴る事
▲各種規定の紙數に超過するものは一切採用せず
▲封筒には必ず「ほとゝぎす」と附記すべし

雜報

房州小湊 誕生寺御會式

日蓮宗開宗六百五十年忌に際し池上、身延、其他各本山連合大會を催ふしそれ〳〵運動もある由なるが、爰に又同本山の一なる房州小湊の誕生寺に於ては四月十五日より五月廿九日まで四十日間本尊の開帳會式を執行し寶物の展覽等あり抑も小湊の誕生寺といふは高祖日蓮上人誕生の靈跡にして日蓮宗四本山の一なるが、其地海濱に僻するを以て由來參詣人少く、隨て其の名も身延、池上ほどには高からざれども、何樣高祖上人出誕の域なれば伽藍堂塔の壯嚴なる、舊趾遺跡の幽邃にして物古りたる六百五十年前開山草創の由來を知るに足るべき靈場なり。本堂は十四間四面の大堂宇にして結構壯麗を極め、境內の廣さ三千餘坪、三面幽邃の山を負ひ、東南の一方巍然たる山門に通ずる所ろ小湊灣に臨み、山光水色の佳絶なる眞に仙境と稱すべし、附近又靈場、奇跡多く殺生禁斷鯛の浦の如き又其一なり。東京より參詣する人は本所停車場より千葉驛を經て大原に至り。それより馬車乃至人力車を備へば其日の中に達するを得べし、途中の沿道の景勝を擧ぐれば、大東驛附近に大東岬の奇勝（避暑好適地）あり、大原驛に八幡岬（海水浴場）あり、それより誕生寺に至る間、興津、部原、等の名勝あり、沿道至る所の兀聿たる山に沿ひ渺茫たる海に面し巉岩沙洲相交はり風景の變化を爲せり。右につき房總鐵道會社は開帳執行中本所大原間滊車賃の割引をなし、又沿道各旅店は參詣者の便宜を圖り諸事丁寧親切を盡せり。猶總房海岸一帶の海水浴地の詳細は次號に紹介すべし。

◉成女學校卒業式

麴町區下二番町なる同校は去月二十九日其の第二回卒業證書授與式を執行せり、式場は同校內の運動場を以て充て、午後零時三十分開會、まづ生徒一同君が代を歌ひ、證書の授與了るや校長吉村寅太郎氏の式辭あり、卒業生總代田中とよ子の謝辭、杉山わかな子の送別の辭に次で來賓の演說あり、それより卒業生及生徒諸子の對話、理科實驗、箏の合奏、唱歌等數番あり、畢つて生徒成績品展覽、茶菓の接待あり、當日來賓並びに生徒父兄等の參觀せしもの無慮三百餘名さしも狹からぬ同校運

勸場も立錐の地なき程の盛況なり、卒業生の姓名左の如し

本科

萩原ちか
小川ゆき
白井とら
田中とよ
下妻よし

技藝科

齋藤春香

特別撰科

小山田八千代
後藤せい
本田つる
網見てつ
長山かう

●東京女學館卒業式

麴町區霞ヶ關(虎の門)なる女學館は去月三十一日を以て卒書證書授與式を執行せり、當日來賓の重なるものは澁澤男爵、神田男爵　岡田十五銀行頭取夫妻櫻井理科大學教授其他貴紳貴女三百餘人、式は君が代の唱歌を以て始まり、證書授與了ッて館　長土方伯の告辭あり、卒業生總代園田峯子、牧倭文子の答辭、林つた子の送別の辭あり、次で澁澤男の演説あり、それより卒業生諸子の英語對話、洋琴連彈、英語諳誦等數番あり了つて來賓一同階上休憩所に於て茶菓の饗應ありたり、右卒業生の性名を列記すれば

東京　服部のぶ
鹿兒島　園田みれ
東京　丸木みつ
和歌山　岡田しづ
東京　大倉きく
岐阜　長瀬じつ

以上六名高等科卒業

北海道　稲川あき
長崎　服部つろ
福井　林ちか
東京　星野つれ
東京　大倉みや
北海道　大島ゆき
愛媛　亀岡千鶴
東京　吉村こう
東京　玉川きぬ
岡山　中村君代
東京　猪場なか
新潟　上野とみ
高知　葛目かつ
東京　前田きく
栃木　小泉きよ
東京　鄭沾龍
佐賀　木下觀
東京　瀬戸しづ
東京　伊藤かよ
東京　林きく
群馬　新田とし
鹿兒島　本田つつ
岩手　大森はろ
埼玉　加藤はな
東京　吉田ふみ
鹿兒島　高橋よし
京京　圖師あい
東京　中村とよ
熊本　中島ふさ
東京　隈川よれ
長崎　牧倭文女
東京　福原いう
北海道　後藤りつ
福島　酒井ろく
東京　森田ひて

以上三十五名普通本科卒業

長野　任藤巳八
愛媛　門田きぬ
東京　堀口とう
東京　田中しげ

東京　竹内えい
北海道　大浦えい
佐賀　山村きよえ
兵庫　三木かよ
兵庫　森木雪枝
滋賀　田村せつ
埼玉　久保村たけ
廣島　山田いく
東京　宮田みつ
鹿兒島　末弘てい

以上十四名普通選科卒業

◉女子大學創立紀念式　小石川高田豐川町なる日本女子大學にては去月二十日午前九時より創立紀念式及附屬高等女學校生徒卒業證書授與式を擧行したり先づ成瀨同校長より今回の卒業生八十餘名に卒業證書を授與し畢て同校長の卒業生に對する告示演說千家東京府知事差支に付き中野小石川區長の祝詞代讀、卒業生の答辭、生徒總代の祝辭成瀨校長の來賓に對する挨拶等あり次で大隈伯は創立委員長として一場の演說を爲し澁澤男會計監督の經過を報告し次て辻新次、岡部子爵、江原素六氏等の演說、麻生學監の報告あり正午來賓に午餐を供し同校生徒の唱歌あり午後二時頃散會したり當日來會者は一千餘名。

◉竹柏會春季大會　歌人佐々木信綱氏の竹柏會は、例年の如く春季懇親會を去月十四日日本橋倶樂部に開きたり、會する者數百名內過半は婦人なりしが大方は江湖著名の士にして、開會の辭に次て文學博士井上哲次郎氏の女子と文藝と題する演說あり、續いて依田學海翁は支那の女丈夫の傳を演說し次に印東昌綱氏の兼題披露あり、渡邊方舟子の仕舞あり、餘興として手品、狂言を下座敷にものし、さて庭上の彼方に少年音樂隊の奏樂あり、例の如く紀念ハンケチ店、しんこ屋、文字燒屋を設け、大塚楠緒子女史の率ゐたる女隊が麥酒、田樂、團子等を來賓に勸め進酬にして黃昏に及びぬ。

◉松山松操會　同會は愛媛縣松山市女子有志の團躰にして明治三十一年十二月四日の創立に成り目下會員數三百八十七名の多きに登り會の目的とする處ろは共同一致女德の砥礪を圖るにありて每月一回事務所たる愛媛高等女學校內に常集會を開き地方諸名家の講話を請ひ會員の智識啓發に資する等有益なる婦人の團躰なり。

◉加納子爵夫人の篤志　麹町區番町の二葉幼稚園は貧民の子弟を集め慈善教育を主とする處なるが、子爵加納久宜夫人は特に此園に同情を寄せ何かと世話しおれるおん自らは子爵亡兒の百ケ日の忌日にしもおはせしこと[illegible]迄。善の心を兼ね幼兒に一日の快遊を與へんとて去月上旬の事なりき一日此可憐なる幼稚生五十名を大森の自邸に招き集へ邸內に於て種々の遊戲を催さしめ晝餐後は

大森の海岸に汐干狩を催ふしたれば無邪氣なる幼兒は生れて始めての事なれば喜色滿面に溢れ獲物を携へ監督者に連れられ汽車にて歸京したりとぞ。

◉京橋看護婦會　京橋區西紺屋町八番地なる同會は去二十八年の組織にかゝり爾來『寸志看護』の下に天災又は窮困の不幸者には寸志を以て看護に出張し去二十九年三陸沿海の海嘯、三十二年日鐵線荒川汽車墜落事件の如き會主山本里子始め數名の看護婦同地へ出張し親しく罹災者を救護しそれ〴〵謝狀を受領したるが尙將來共其主意を社會に廣めん希望なりと。

◉帝國女學會の創立　今回小杉文學博士、井上頼圀、三輪田眞佐子等の諸氏評議員となり帝國女學會なるものを創立したり其の主意は女子教育完成の補助を期するにありて自宅獨習者の爲に毎月一回大學部講義錄を發行し修了會員には其の志望に依り卒業試驗を行ひたる上一定の人員を限り本會貸費生として高等の學校に入學せしめ又地方より出京する者の爲め修學上の監督を爲し其他學事諸般の相談に應ずる計畫なりと。

◉女學生のベースボール　女子大學にては豫てより體育に意を注ぎ同校並に附屬高等女學校に於ける體操は何れも學生の性質と身躰の強弱に其々適應せしめ且つ興味あるものを撰びて之れを實行し居れるが同校體操教師白井規矩郎氏は種々考案の末今回ベースボールに改良を加へて其の位置を五角とし相互の距離を短かくし之れを大學生徒に試みづゝあるが成蹟頗るよろしき由にて本月同校設立紀念會の節には餘興旁々此改良ベースボールを行ふ筈なりとか尙先頃報じ置きたる同校生徒の蹴鞠は本月下旬より實行するやに聞く。

◉獨逸の女子中等教育　獨逸の女子教育に就きて文部省最近の調査に依るに其中等教育に關する學校數及び全數生徒左の如し

▲普魯西王國			
公立高等女學校	二〇六	其生徒	四四、九三五
公立中等女學校	九二	同	二八、七〇二
私立高等及中等女學校	六四七	同	五七、九四二
▲バイエルン王國			
高等女學校	一二七	其全生徒	一三、三三六
▲ザクセン王國			
市立高等女學校	二	其全生徒	八一〇
外に私立三四十校あり			
▲ウユルテンベルヒ王國			
市立高等女學校	九	其生徒	一、八五三
私立高等女學校	二	同	六一〇

◉小蘋女史　女流書家として其名夙に世に知らるゝ野口小蘋女史は小松宮岩倉公の邸に出入し名門女流女史

の教を仰ぐ者少なからざりしが此程常宮昌子内親王周宮房子内親王の繪畫御教授掛りを命ぜられたり。

◉婦人共立育兒會　近衞公爵、鍋島、黑田兩侯爵各夫人、毛利公爵、一條公爵、前田侯爵各母堂外貴婦人四十五名の發起に係る同會は會長鍋島侯爵夫人以下の連名を以て法人の認可を出願中なりしが去月十七日内務大臣より民法第三十四條に依り之れが許可を與へられたり。

◉府立高等女學校　淺草七軒町に新築すべき第一高等女學校は目下敷地の地均中なるが八月までには工事を落成すべき見積なりといふ校舍は普通教室十五個特別教室五個を設け全校六百人の生徒を收容するに足るべき設備を爲す筈なりといへば現在生徒の外更に三百五十人の生徒を入學せしめ得べし猶ほ麻布鳥居坂に假設したる第三高等女學校は昨今入學試驗の執行中なるが應試者非常に夥しく僅に其半ばを收容するに過ぎざるべしとの事なり。

◉英米公使の女子大學參觀　英國公使マクドナルド米公使バックの兩氏は何れも夫人同伴にて去月十四日午後一時より小石川女子大學校を參觀したり同校にては豫て其案内に接しわりたるを以て委員長大隈伯を始め委員、澁澤榮一、蜂須賀、西園寺の兩侯爵、三井三郎助、加納治五郎の諸氏も參校し公使等は成瀨校長の案内にて英語教授法及日本禮法其他二三の體操を見寄宿舍を參觀し夫より講堂に於て米公使は先づ近時日本女子教育の進歩せるを賞讃し歐米に於ける女子教育の發達に就て一場の演說を爲し終りて同校家政學部生徒の庖丁に成れる料理の饗應を受けたり。

◉女學生の監督寄宿所　近來地方より都下に女學生の遊學するもの追々增加するにも拘はらず下宿所なきを憂ひ久しく教育界に從事せる和田靜輔氏女學生の寄宿所を設けて嚴重に監督する計畫なりと云ふ。

◉婚姻上の奇習　スカンヂヴイアに於る結婚には珍らしき習慣あり、即ち新夫たるべき人は新婦たるべき人に一部の聖書を重もなるものとし、其他數多き贈物を與ふるとなるが其中には必ず一羽の禽鳥あるを常とす而して此贈物を受けたる新婦が返禮として新夫に贈與する物品は何なるやと云ふに單に一枚ノ肌着に過ぎざる由なるが新夫は此肌着を結婚式の當日と死後に着用し其他は如何なる事情起るも生存中は決して着用することなしと云ふ。

◉女子大學校附自活生　日本女子大學校及附屬高等

女學校にては先日英公使マクドナルド夫妻米公使ベック夫妻ヒユース孃を始め各貴夫人を招待し生徒が調理せるものにて午餐を饗應したる由序でながら同校自活生の事を記さんに大學部及高等女學校部の寄宿舍九寮あり寮に婢一人若しくは二人ありて二十七名の寄宿生を世話す大學部奥宮春子、赤羽蝶子、高等女學部の石岡ノブ井子等は即ち其寮婢にて中には今學期より牛乳配達をなさんとする者進藤ミツ子等數人あり又通學生の中には通學の歸途一二の家に立寄りて其處の子供を敎授し得る所を以て學費の幾分に充つるもあり稍資力ありて商店を構へ文房具等を鬻ぎて自活勉學するもあり。

◉●●●●●●藤と牡丹と薔薇　此程來の暖氣のため各所の躑躅は我後れじと咲競ひ互ひに妍を爭ふさま眼も覺る許なり加之ならず植込のなかには小米櫻も咲きこぼれ山吹もはや散りかゝりて今は軈て盡なんとする氣色なれば春と夏とに踏跨がりて二俣になりたる藤の花も後れじとてや俄かに蕾を催ほし既に芝公園辨天の池の汀なるも清水谷公園大久保公の碑の傍らなるも皆ぼつ〱と咲出たり龜井戸天神境内のも花房長く延びて由緣の色を染出たれば田圃の菫げんげなどを摘みながら同所に足を運ぶものあり左れど見頃は本月五六日頃にあるべしとの事なり又牡丹は各所の植木屋にて仕上中にて最早大方蕾ふくだみたれば先月末頃より咲き出るもあり又薔薇は先頃の霜にて多少害を蒙ぶりたる模樣あり。

◉●●●●●●●東宮妃殿下の御着帶　妃殿下には昨年九月御姙娠あり同十一月内々の御着帶の御儀あらせられしが其後御健勝に渡らせ玉ひ本月十五日午前九時青山東宮御所にて御吉例の御着帶式を行はせらるゝ由にて當日は前例に據らせられ御近親鷹司公夫妻より御帶を進め奉つり參賀の人々に御祝酒を賜る筈なりと

◉●●●●●●●端午節句の際物類　祝物の中稍目新らしきものを擧ぐれば巾五寸長さ一尺五寸許りの足附の青籠に小鯛、海老、蛤、蠑螺等を詰めたるもの凡そ七十錢より二圓前後、又重函形、瓢形或は舟形、千鳥形等の玻璃製の器へ活きたる鯉、緋鯉等を入れ凡そ卅五六錢より六七十錢の價にて子供の喜ぶは之に上越すものあらじ又普通の貝類は籠詰は十七八錢より二十五六錢のもの手頃にて賣行きよく金花糖及び打物の菓子にて魚介又は人物などを製したるは相變らず顧客多し是等は上等玻璃器に躰裁よく詰たるが二圓を限とし以下十五錢位にてあり其他酒類飮具類は別に新趣向も見えねば茲には略く

●夏向家具の市況　家具中竹製籐造の品最も時節に適するより其一二を擧げんに二三年來内外人に好評を得るに致りしは竹製の寢臺なり膏抜きの青竹又は埼玉産の黒竹にて長さ一間巾二尺七八寸に編上げ首脚の兩方を高くし臺脚は一尺以上一尺五六寸にして中央は臺灣産のタゴにて張詰めたれば身體に觸れて剛からず代價は七圓より十圓位なり又竹の衝立も煤竹及び黒竹にて屏風形に製せしもの體裁よく衣桁代りに便なるが凡そ二圓以上五圓迄なり夫れより前裁などの涼臺に近來大流行の竹製椽臺は半間物七八十錢より一間物一圓五六十錢なり是等の竹細工は外見美にして且つ清潔なれば宮内省及び各外國公使館等よりも注文ありといふ

●蚊帳の相場　蚊帳の新相場は眞麻四六にて丈五尺五寸のもの六圓四十六錢、六尺のもの七圓五十錢五六にて十圓二三十錢、紡績麻は四六にて三圓以上四圓五六十錢止り此分最も流行にて本麻を壓する勢ひあり、又木綿蚊帳は五六にて八十錢以上、六八にて一圓二三十錢、八十にて二圓位の取引なるが、母衣蚊帳其他は別段の差もなきよし

●豚料理の紹介　奈原原沖縄縣知事は先達て多くの人々を芝浦の見晴し亭に招待して豚料理の饗應をなしたり、是は沖縄縣が豚肉製造所を設け盛んに内地に輸出せんとの計畫ありて其爲めに諸種の料理法を廣く吹聽したる次第なりとぞ、牛肉の高價にして日常の食料に供しがたき我國にては豚の料理法を研究して盛んに之を食ふこと尤も然るべしと考へらる、其席の献立の大略左の如し

▲吸物、足蹠、大根輪切▲ゼリ煮、豚頭、麝香草、胡椒、丁子▲豚似吐、胃腸、肝、肺、腎、椎茸、木茸▲冷豚、チサ、蕪三ツ葉、鶏卵、酢▲鹽豚、豌豆、麥粉▲東坡燒、▲豚足の甘煮、人參、豆、葱、里芋▲ロース豚の腸詰、ホツレン草、チナシワド、ウデ玉子▲耳の酢味噌▲琉球蒸豚▲内臓の酢漬▲煽揚▲豚油天ぷら、▲朝鮮燒豚▲豚飯、豚肉、竹の子、椎茸



女學世界第貳卷第七號記事要目

(六月五日發行)

其他家政實務、衛生、育兒、裁縫、編物等例により材料豊富

毎月一回五日發行

定價表

一冊(紙數二百八頁)…金二十錢
四冊(三ヶ月分)……前金七十五錢
八冊(半ヶ年分)……前金一圓四十五錢
十六冊(一ヶ年分)……前金二圓八十錢
內(定刊數……十二冊 增刊四囘…三、六、九、十一月價格同一)

郵稅 一冊 二錢

廣告料

二十四字詰一行、半頁廿二行、一頁六十四行

	一行	半頁	一頁
特等			割引 三十三圓
一等	四十三錢	十三圓七十六錢	割引 二十七圓
二等	三十五錢	十一圓二十錢	割引 二十二圓
三等	三十錢	九圓六十錢	割引 十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢郵券相添へ申込あれ。

不許複製

明治三十五年五月五日發行 第貳卷第六號

編輯人 松原岩五郎
發行人 大橋新太郎
印刷人 石川金太郎
印刷所 株式合社秀英舍 東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

發行所 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

電話本局 三百三番 千十八番 二千六百二十番

○博文館發行中等教育教科書及參考書

尋常中學校 高等女學校 商業學校 補習學校

著者	書名	冊數	裝釘	正價	郵稅
文學博士萩野由之君著	中等教育 日本歷史	全壹冊	洋裝上製	正價金壹圓廿錢	小包四百匁
文學博士萩野由之君著	中等教育 日本歷史要解	全壹冊	洋裝上製	正價金五十錢	郵稅金六錢
内藤耻叟君校閲 大宮宗司君校註	校註神皇正統記	全壹冊	洋裝並綴	正價金二十五錢	郵稅金六錢
中村秋香君著	校訂 吉野拾遺詳解	全壹冊	洋裝並綴	正價金二十五錢	郵稅金四錢
文學士木寺柳次郎君著	中等教育 東洋歷史	全壹冊	洋裝上製	正價金八十錢	郵稅金十二錢
文學士木寺柳次郎君著	中等教育 西洋歷史	全壹冊	洋裝上製	正價金七十錢	郵稅金十二錢
	萬國史標 十八史畧評註	全七冊	和裝上綴	正價金壹圓廿錢	郵稅金二十錢
理學士佐藤傳藏君著	中等教育 地理學教科書	全貳冊	背皮洋裝	正價金壹圓	郵稅金十八錢
學習院教授峯是三郎君著	中等教育 新編地文學	全壹冊	洋裝並綴	正價金五十錢	郵稅金八錢
理學士佐藤傳藏君著	中等教育 日本地圖	全壹冊	洋裝上綴	正價金四十五錢	郵稅金八錢
理學士佐藤傳藏君著	中等教育 萬國地圖	全壹冊	洋裝上綴	正價金六十錢	郵稅金八錢
農學博士稻垣乙丙君著	校訂 農學入門	全壹冊	和裝並綴	正價金三十五錢	郵稅金八錢
農學博士稻垣乙丙君著	增訂 農學入門 卷之一	全壹冊	和裝並綴	正價金十一錢	郵稅金四錢
農學博士稻垣乙丙君著	增訂 農學入門 卷之二	全壹冊	和裝並綴	正價金十二錢	郵稅金四錢
農學博士稻垣乙丙君著	增訂 農學入門 卷之三	全壹冊	和裝並綴	正價金十五錢	郵稅金四錢
農學博士横井時敬君著	農業讀本	全貳冊	和裝並綴	正價金二十八錢	郵稅金八錢
農學博士稻垣乙丙君著	初等作物通論	全壹冊	洋裝上製	正價金五十錢	郵稅金八錢

著者	書名	冊數・装丁	正價	郵税
農學博士稲垣乙丙君著	●農學楷梯	全壹冊洋裝上製	正價金七十五錢	郵税金十錢
農學士伊藤悌藏君著	●農學講習全書	全壹冊洋裝並製	正價金四十五錢	郵税金八錢
農學士大內健君著	●中等教育農學通論	全壹冊洋裝上製	正價金九十錢	郵税金十錢
農學博士稲垣乙丙君著	●村落學校補習科用農業算術	全壹冊洋裝並製	正價金八錢	郵税金二錢
保田安政君著	●商業讀本	全參冊洋裝並製	正價金卅九錢	郵税金十八錢
松尾哲太郎君著	●器械設計製圖學初步	全壹冊洋裝上製	正價金六十錢	郵税金四錢
理學士眞島利行君著	●中等教育理化示教	全壹冊洋裝上製	正價金四十錢	郵税金八錢
工學士鳥居炁夫君著	●中等教育有機化學	全壹冊洋裝上製	正價金三十五錢	郵税金八錢
理學士林鶴一君著	●初等平面三角法教科書	全壹冊洋裝並製	正價金四十錢	郵税金四錢
理學士谷田部梅吉君著	●中等教育平面幾何學	全壹冊洋裝上製	正價金二十五錢	郵税金四錢
理學士鮫島晋君著	●普通教育算術教科書	全貳冊和裝並製	正價金五十錢	郵税金十二錢
東京女學館講師西田敬止君著	●帝國女子修身鑑	全四冊和裝並製	正價金五十六錢	郵税金八錢
峯是三郎君著	●中等教育應用心理學	全壹冊洋裝上製	正價金五十錢	郵税金八錢
下田歌子女史著	●家政學	全貳冊和裝並製	正價金六十錢	郵税金十二錢
落合直文君著	●中等教育日本文典	全壹冊洋裝上製	正價金六十錢	郵税金十錢
落合直文君著	●中等教育文法教科書	全壹冊洋裝上製	正價金四十五錢	郵税金八錢
落合直文君著	●中等教育國文軌範	全壹冊洋裝並製	正價金二十五錢	郵税金六錢
文學士大町桂月・文學士白河鯉洋君編	●帝國漢文讀本	全五冊洋裝並製	正價金壹圓七拾錢	郵税金三十錢
石川辰之助君著	●初等英文典教科書	全壹冊洋裝上製	正價金四十錢	郵税金四錢
石川辰之助君著	●初等英語會話教科書	全壹冊洋裝上製	正價金四十錢	郵税金六錢
津田梅子女史著	●イングリッシュ、ストリーズ	全壹冊洋裝上製	正價金三十五錢	郵税金四錢
櫻井彦太郎君著	●フェーマース、ストリーズ	全壹冊洋裝上製	正價金三十五錢	郵税金四錢

博文館編輯局校訂	ナショナル第一讀本	全壹冊	洋裝上製	正價金十五錢	郵稅金四錢
博文館編輯局校訂	ナショナル第二讀本	全壹冊	洋裝上製	正價金二十四錢	郵稅金六錢
博文館編輯局校訂	ナショナル第三讀本	全壹冊	洋裝上製	正價金三十錢	郵稅金六錢
博文館編輯局校訂	ロングマンス第一讀本	全壹冊	洋裝上製	正價金二十五錢	郵稅金四錢
博文館編輯局校訂	ロングマンス第二讀本	全壹冊	洋裝上製	正價金三十五錢	郵稅金六錢
博文館編輯局校訂	ロングマンス第三讀本	全壹冊	洋裝上製	正價金四十錢	郵稅金六錢
文學博士萩野由之君著	大日本通史	上卷	洋裝背皮	正價金壹圓五拾錢	小包送四百匁
法學博士有賀長雄君著	增訂帝國史畧	全壹冊	洋裝上製	正價金壹圓五拾錢	小包送四百匁
落合小中村兩先生合著	新撰日本外史	全壹冊	洋裝上製	正價金壹圓貳拾錢	小包送四百匁
文學博士萩野由之君著	日本歷史評林	全貳冊	洋裝並製	正價金壹圓貳拾錢	郵稅金四十錢
文學士木寺柳次郎君著	日本歷史	全壹冊	洋裝並製	正價金三十五錢	郵稅金八錢
松井柏軒君著	新撰大日本帝國史	全壹冊	洋裝並製	正價金四十錢	郵稅金十二錢
足立栗園君著	通俗日本歷史	全壹冊	洋裝並製	正價金二十五錢	郵稅金八錢
增田于信君著	新撰日本小歷史	全壹冊	洋裝並製	正價金十五錢	郵稅金六錢
學橋大鄉穆君著	明治新刻日本政記	全拾冊	和裝上製	正價金壹圓六拾錢	小包送四百匁
坪谷善四郎君著	通俗明治歷史	全壹冊	洋裝並製	正價金二十五錢	郵稅金三錢
落合小中村萩野先生	水鏡大鏡	全壹冊	洋裝並製	正價金二十五錢	郵稅金三錢
落合小中村萩野先生	增鏡	全壹冊	洋裝並製	正價金二十五錢	郵稅金三錢
落合小中村萩野先生	榮花物語	全參冊	洋裝並製	正價金七十五錢	郵稅金九錢
落合小中村萩野先生	平家物語	全壹冊	洋裝並製	正價金二十五錢	郵稅金三錢
落合小中村萩野先生	保元平治物語	全壹冊	洋裝並製	正價金二十五錢	郵稅金三錢
落合小中村萩野先生	太平記	全參冊	洋裝並製	正價金七十五錢	郵稅金九錢

(後付の三)

著者	書名	冊數	上製	並製
文學士吉國藤吉君著	西洋歴史	全壹冊洋裝	正價五十錢 郵稅十錢	正價三十五錢 郵稅八錢
松平康國君著	世界近世史	全壹冊洋裝	正價五十錢 郵稅十錢	正價三十五錢 郵稅八錢
高山博士外十一學士述	太陽紀念發行 十九世紀	全壹冊洋裝	正價五十錢 郵稅十錢	正價三十五錢 郵稅八錢
文學博士高山林次郎君著	世界文明史	全壹冊洋裝	正價五十錢 郵稅十錢	正價三十五錢 郵稅八錢
河上清君著	通俗獨逸歴史	全壹冊洋裝		正價金三十錢 郵稅金八錢
文學士白河次郎君著	支那文明史	全壹冊洋裝	正價五十錢 郵稅十錢	正價三十五錢 郵稅八錢
	標註 春秋左氏傳校本	全拾五冊和裝	正價金貳圓廿錢 郵稅小包送六百匁	
理學士佐藤傳藏君著	日本新地理	全壹冊洋裝	正價五十錢 郵稅十錢	正價三十五錢 郵稅八錢
大和田建樹君著	通俗日本地理	全壹冊洋裝		正價金三十錢 郵稅金八錢
理學士佐藤傳藏君著	萬國新地理	全壹冊洋裝	正價五十錢 郵稅十錢	正價三十五錢 郵稅八錢
理學士佐藤傳藏君著	地質學	全壹冊洋裝	正價五十錢 郵稅十錢	正價三十五錢 郵稅八錢
橫井博士外七學士著	農學大全	全壹冊洋裝	正價金貳圓五拾錢 小包送六百匁	
農學士恩田鐵彌君著	農學汎論	全壹冊洋裝	正價五十錢 郵稅十錢	正價三十五錢 郵稅八錢
農學博士橫井時敬君著	農業汎論	全壹冊洋裝		正價金拾五錢 郵稅金六錢
農學士池田昇三君著	農業須知	全壹冊洋裝		正價金拾五錢 郵稅金六錢
茅原茂君著	農業大意	全壹冊洋裝		正價金二十五錢 郵稅金六錢
農學博士橫井時敬君著	農業經濟學	全壹冊洋裝	正價五十錢 郵稅十錢	正價三十五錢 郵稅八錢
農學士今岡常次郎君著	農業經濟編	全壹冊洋裝		正價金十五錢 郵稅金六錢
農學士西村榮十郎君著	農用器具學	全壹冊洋裝	正價五十錢 郵稅十錢	正價三十五錢 郵稅八錢
農學博士稻垣乙丙君著	植物營養論	全壹冊洋裝	正價五十錢 郵稅十錢	正價三十五錢 郵稅八錢
農學士佐々木祐太郎君著	氣候及土壤論	全壹冊洋裝	正價五十錢 郵稅十錢	正價三十五錢 郵稅八錢
農學士中村鼎君著	土地改良論	全壹冊洋裝	正價五十錢 郵稅十錢	正價三十五錢 郵稅八錢

農學士木下義直君著	●肥料學	全壹冊洋裝	上製 正價五十錢 郵稅四十錢　並製 正價三十五錢 郵稅八錢
農學學士原熙君著	●肥料篇	全壹冊洋裝	並製 正價金十五錢郵稅金六錢
農學士井上正賀君著	●黴菌學	全壹冊洋裝	上製 正價五十錢 郵稅十錢　並製 正價三十五錢 郵稅八錢
農學士石坂橘樹君著	●農政學	全壹冊洋裝	上製 正價五十錢 郵稅十錢　並製 正價三十五錢 郵稅八錢
農學士井上正賀君著	●農藝化學	全壹冊洋裝	上製 正價五十錢 郵稅十錢　並製 正價三十五錢 郵稅八錢
農學士上野英三郎君 農學士有働眞夫君著	●土地改良論	全壹冊洋裝	上製 正價五十錢 郵稅十錢　並製 正價三十五錢 郵稅八錢
農學博士横井時敬君著	●栽培汎論	全壹冊洋裝	上製 正價五十錢 郵稅十錢　並製 正價三十五錢 郵稅八錢
農學士田中節三郎君著	●栽培各論	全壹冊洋裝	上製 正價五十錢 郵稅十錢　並製 正價三十五錢 郵稅八錢
農學士堀尾鐵作君著	●栽培篇	全壹冊洋裝	並製 正價金十五錢郵稅金六錢
農學士高田鑑三君著	●作物篇	全壹冊洋裝	並製 正價金十五錢郵稅金六錢
農學士楠原正三君著	●米麥栽培書	全壹冊洋裝	並製 正價金二十錢郵稅金四錢
農學士楠原正三君著	●米麥篇	全壹冊洋裝	並製 正價金十五錢郵稅金六錢
福羽逸人君著	●蔬菜栽培法	全壹冊洋裝	並製 正價金七十二錢郵稅金十二錢
農學士小島銀吉君著	●作物病害篇	全壹冊洋裝	並製 正價金十五錢郵稅金六錢
農學士恩田鐵彌君著	●排水乾田稻作改良法	全壹冊洋裝	並製 正價金三十五錢郵稅金六錢
農學士井上正賀君著	●日用化學	全壹冊洋裝	上製 正價五十錢 郵稅十錢　並製 正價三十五錢 郵稅八錢
農學士高見長恒君著	●畜産汎論	全壹冊洋裝	上製 正價五十錢 郵稅十錢　並製 正價三十五錢 郵稅八錢
農學士田口晋君著	●畜産各論	全壹冊洋裝	並製 正價、金三十錢郵稅金六錢
三谷徹 池田榮太郎君著	●蠶業通論	全壹冊洋裝	並製 正價金十五錢郵稅金六錢
林學士奥田貞衛君著	●森林學	全壹冊洋裝	上製 正價五十錢 郵稅十錢　並製 正價三十五錢 郵稅八錢
林學士鈴木審三君著	●林業篇	全壹冊洋裝	並製 正價金十五錢郵稅金六錢
林學博士本多靜六君著	●提要造林學	全壹冊洋裝	上製 正價五十錢 郵稅十錢　並製 正價三十五錢 郵稅八錢

著者	書名	冊數・装幀	上製	並製
林學士臼杵永次郎君著	●造林篇	全壹冊洋裝		並製正價金十五錢郵稅金六錢
林學士新島善道君著	●森林保護學	全壹冊洋裝	上製正價五十錢郵稅十錢	並製正價三十五錢郵稅八錢
礒山鐘三君著	●商業實踐法	全壹冊洋裝	上製正價金七十五錢郵稅金十四錢	
法學士清水泰吉君著	●商業經濟學	全壹冊洋裝	上製正價五十錢郵稅十錢	並製正價三十五錢郵稅八錢
森一兵君著	●商業大意	全壹冊洋裝		並製正價金二十五錢郵稅金六錢
天城安政君著	●商業教科書	全壹冊洋裝		並製正價金四十五錢郵稅金十錢
六條隆吉君著	●中等教育世界商業史	全壹冊洋裝		並製正價金三十錢郵稅金八錢
法學士永井惟直君著	●商工地理學	全壹冊洋裝	上製正價五十錢郵稅十錢	並製正價三十五錢郵稅八錢
高橋邦次郎君著	●通俗商業簿記	全壹冊洋裝		並製正價金二十五錢郵稅金八錢
山本邦之助君著	●新式商業簿記全書	全壹冊洋裝		並製正價金四十錢郵稅金八錢
增井增次郎君著	●銀行實踐法	全壹冊洋裝		並製正價金六十錢郵稅金十錢
篠川興澄君著	●通俗銀行簿記	全壹冊洋裝		並製正價金二十五錢郵稅金八錢
高橋邦次郎君著	●通俗會社簿記	全壹冊洋裝		並製正價金二十五錢郵稅金八錢
法學士桐生政次君著	●世界商工業史	全壹冊洋裝	上製正價六十五錢郵稅十錢	並製正價五十錢郵稅八錢
法學士增野禮助君著	●國際貿易論	全壹冊洋裝	上製正價六十錢郵稅十錢	並製正價四十五錢郵稅八錢
商業學士飯田旗郎君著	●商業汎論	全壹冊洋裝	上製正價六十錢郵稅十錢	並製正價四十五錢郵稅八錢
法學士池袋秀太郎君著	●經濟汎論	全壹冊洋裝	上製正價五十錢郵稅十錢	並製正價三十五錢郵稅八錢
秦山育次郎君著	●通俗經濟汎論	全壹冊洋裝		並製正價金二十五錢郵稅金八錢
法學士井上辰九郎君著	●經濟原論	全壹冊洋裝	上製正價金壹圓廿錢郵稅金十六錢	
法學博士天野爲之君譯	●經濟學研究法	全壹冊洋裝	上製正價金壹圓郵稅金十八錢	
柏原文太郎君著	●國民銀行論	全壹冊洋裝	上製正價金壹圓郵稅金十六錢	
法學士田野莊平君著	●共同海損法	全壹冊洋裝	上製正價金壹圓廿錢郵稅金十錢	

工學士市川俊雄君著 ●工業叢書 水及油 全壹冊洋裝 上製 正價金五十錢 郵稅金八錢

工學士蜂屋貞興君著 ●工業叢書 應用化學 全壹冊洋裝 上製 正價五十錢 郵稅十錢 並製 正價三十五錢 郵稅八錢

工學士内藤游 工學士藤井光藏 君合著 ●分析化學 全壹冊洋裝 上製 正價五十錢 郵稅十錢 並製 正價三十五錢 郵稅八錢

工學士重見道之君著 ●應用機械學 全壹冊洋裝 上製 正價五十錢 郵稅十錢 並製 正價三十五錢 郵稅八錢

工學士松永新之助君著 ●工業大意 全壹冊洋裝 並製 正價金二十五錢 郵稅金六錢

黑田政憲君著 ●工業叢書 陶器製造化學 全壹冊洋裝 上製 正價金六十錢 郵稅金八錢

工學士村瀨英一君著 ●工業叢書 構造強弱學 全壹冊洋裝 上製 正價金六十錢 郵稅金六錢

藤野修吉君外二名共著 ●通俗理化一斑 全壹冊洋裝 並製 正價金三十錢 郵稅金八錢

理學士眞島利行君著 ●無機化學 全壹冊洋裝 上製 正價五十錢 郵稅十錢 並製 正價三十五錢 郵稅八錢

理學士龜高德平君著 ●有機化學 全壹冊洋裝 上製 正價五十錢 郵稅十錢 並製 正價三十五錢 郵稅八錢

理學士飯塚啓君著 ●植物學新論 全壹冊洋裝 上製 正價五十錢 郵稅十錢 並製 正價三十五錢 郵稅八錢

理學士安田篤君著 ●植物學汎論 全壹冊洋裝 上製 正價金一圓五十錢 郵稅金十六錢

川村守義君著 ●通俗動物學 全壹冊洋裝 並製 正價金三十錢 郵稅金八錢

理學士須藤傳次郎君著 ●星學 全壹冊洋裝 上製 正價五十錢 郵稅十錢 並製 正價三十五錢 郵稅八錢

理學士岡田武松君著 ●近世氣象學 全壹冊洋裝 上製 正價五十錢 郵稅十錢 並製 正價三十五錢 郵稅八錢

理學士高木貞治君著 ●新撰算術 全壹冊洋裝 上製 正價五十錢 郵稅十錢 並製 正價三十五錢 郵稅八錢

理學士高木貞治君著 ●新撰代數學 全壹冊洋裝 上製 正價五十錢 郵稅十錢 並製 正價三十五錢 郵稅八錢

理學士林鶴一君著 ●新撰幾何學 全壹冊洋裝 上製 正價五十錢 郵稅十錢 並製 正價三十五錢 郵稅八錢

理學士松村定次郎君著 ●新撰三角法 全壹冊洋裝 上製 正價五十錢 郵稅十錢 並製 正價三十五錢 郵稅八錢

理學士松村定次郎君著 ●新撰微分積分學 全壹冊洋裝 上製 正價五十錢 郵稅十錢 並製 正價三十五錢 郵稅八錢

理學士松村定次郎君著 ●新撰解析幾何學 全壹冊洋裝 上製 正價五十錢 郵稅十錢 並製 正價三十五錢 郵稅八錢

文學士岡田正美君著 ●解說批評 日本文典 全貳冊洋裝 上製 正價五十錢 郵稅十錢 並製 正價三十五錢 郵稅八錢

（添付の七）

著者	書名	冊數	價格	郵稅
大和田建樹君著	日本大文學史	全五冊洋裝	並製 正價金貳圓	郵稅金四十錢
大和田建樹君著	和文學史	全壹冊洋裝	並製 正價金四十五錢	郵稅金八錢
文學博士坪內雄藏君著	英文學史	全壹冊洋裝	上製 正價金貳圓	郵稅小包四百匁
文學士笹川臨風君著	支那文學史	全壹冊洋裝	上製 正價金五十錢 郵稅金十錢 並制 正價金三十五錢	郵稅金八錢
國學院編纂	名文評釋	全壹冊洋裝	並製 正價金五十錢	郵稅金十錢
文學博士萩野由之君註	標註枕草紙	全貳冊洋裝	並製 正價金六十錢	郵稅金十二錢
佐々木信綱君校註	校註土佐日記	全壹冊洋裝	並製 正價金十錢	郵稅金二錢
佐々木信綱君校註	校註竹取物語	全壹冊洋裝	並製 正價金十錢	郵稅金二錢
佐々木信綱君校註	校註伊勢物語	全壹冊洋裝	並製 正價金十二錢	郵稅金四錢
大和田建樹君著	中學教育刪定徒然草	全壹冊洋裝	並製 正價金十八錢	郵稅金四錢
大和田建樹君著	古文讀本	全六冊和裝	並製 正價金一圓六十錢	郵稅金廿四錢
下田歌子女史著	家事要訣	全壹冊和裝	並製 正價金三十五錢	郵稅金八錢
岸上操君著	家政案內	全壹冊洋裝	並製 正價金二十五錢	郵稅金八錢
寒澤振作君著	家政の栞	全壹冊洋裝	並製 正價金二十錢	郵稅金六錢
坪谷善四郎君著	日本女禮式大全	全壹冊洋裝	上製 正價金七十五錢 郵稅金十六錢 特製 正價金壹圓	小包料四百匁
中島義弌君著	新撰小學女禮式	全壹冊洋裝	並製 正價金二十五錢	郵稅金六錢
大和田建樹君著 巖谷一君書	明治書翰文	全壹冊和裝	並製 正價金三十錢	郵稅金四錢
大和田建樹君著 小野鵞堂君書	明治女子書翰文	全壹冊和裝	並製 正價金四十錢	郵稅金四錢
橘千蔭翁書	烏丸帖	全壹冊和裝	並製 正價金三十五錢	郵稅金四錢
橘千蔭翁書	假名習字帖 新百人一首	全壹冊和裝	並製 正價金三十錢	郵稅金四錢
吉田晩稼君書	楷書千字文	全壹冊和裝	並製 正價金三十八錢	郵稅金四錢
下田歌子女史著	女子用文習字帖	全二冊和裝	並製 正價金八十錢	郵稅金八錢

(大谷製本)

女學世界
毎月壹回五日發行
第貳卷第六號
(明治參拾參年貳月廿五日第參種郵便物認可)
(明治參拾五年九月五日發行)

東京秀英舍印刷

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界 明治期復刻版⑪
明治35年4月（第2巻第5号）、5月（第2巻第6号）

2006年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円＋税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　ジャパン リアルティ スーパービジョン株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-2957-X　C3321